

忠義の騎士の新たなる人生

ビーハイブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二度目の生でも忠義を果たせなかった騎士は慟哭の叫びと共に聖杯に帰るはずだった。

しかし運命の悪戯か騎士は英霊ではなく人として新たな世界で二度目の生を受ける。

人として生きることを決めた忠義の騎士は新しい世界でどのような運命を辿るのだろうか・・・

目次

無印編

零れ落ちた雫 | 1

英霊の目覚め | 3

ステータス（無印） | 11

月下の対峙 | 13

再度の接触 | 22

出会い、そして邂逅 | 33

次元の守護者 | 44

騎士の生き様 | 60

海上の決戦 | 72

決着と急転 | 83

狭間の中へ | 97

奇跡の残骸 | 110

A's編

ステータス（A's） | 127

深夜の開戦 | 129

守護騎士と英霊 | 139

思い出は慟哭の中に | 154

狂いし歯車 | 167

狂気と安寧 | 181

魔槍と凶獣 | 196

番外編：新しい家族 | 207

蒼天の死闘 | 215

敗北の先へ | 224

解き放たれし湖光	234
英霊の力	245
悲劇の槍 前編	256
悲劇の槍 中編	266
悲劇の槍 後編	280
終わりの始まり	294
集いし英霊	308
絶望と救済	321
幸福な夢の中で	335
覚醒する両雄	344
闇を裂く光	353
痛みの記憶	361
目覚めし聖剣	369
後一度だけ起こった奇跡	374
リメイクします。	380

無印編

零れ落ちた雫

二度目の生の最期は絶望と共に終わった。

今度こそ忠義を貫きたいと、たつた一つ懐いた祈りさえ踏みにじられた。

何がいけなかったのだろうか。

聖己に科した誓なのか。理解してくれなかった主君なのか。我が身に宿るこの消えない呪いのせいなのか。

それとも己自身だったのだろうか。

聖杯なんて要らなかった。

かつて果たせなかった主への忠節と勝利を捧げる名誉を求めただけだった。

生前と同じように騎士として戦って死ぬ事も許されず、同じように主の手によつて最期を迎える。

なんとという皮肉だろうか。ここまで不運ではもはや晒う事しかできない。

——もし三度の生があつたなら、騎士としてではなく民として生きてみようか。

そんなことを考えながら聖杯の泥の中で思考の海に沈んでいく。

揺れる 揺れる

聖杯という名の黒く穢れた願望機は騎士の心を呪いの泥の中に沈めていく。

後悔、憎悪、悲壮……騎士の心に渦巻く負の想いは泥に抗わず流されるままだった。

どれだけそうしていただろうか。永遠に続くと思われた時間は唐突に終わりを告げる。

煌く黄金の輝きと叫びが闇を切り裂き、騎士の心を捕らえていた穢れた泥の檻から解き放つ。

穢れた泥は虚ろな騎士に器を与え、黄金の強い輝きがその穢れを消し去る。

英霊の力を溜めていた聖杯から放たれた魔力は世界の壁を壊し、その身体を次元の狭間を越えた新しい世界に飛ばす。

偶然起きた小さな奇跡は騎士を人とし、三度の生を与えた。

「俺は……」

優しい木漏れ日の中、忠義の騎士・デイルムツド・オデイナは目覚めを迎えた。

英霊の目覚め

目覚めたデイルムツドは混乱していた。

「ここは……俺は一体……？」

自分がここにいる原因を思い出そうと記憶を探る。

セイバーと戦いの最中に主に令呪によって自害させられ、慟哭を上げながら聖杯の中に飲み込まれた。

しかしそこから先の記憶がなく、再び死んだはずの己が何故ここにいるのか全くわからない。

周りを見渡す。最初はアインツベルンの森かとも思ったが魔力を感じないのでおそらくは違うだろう。

そして自身を取り巻くように地面に刺さっていた物に気が付いた。

聖杯戦争で自らの心臓を貫いた紅い長槍と己が砕き失われた黄色の短槍・・・破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇だった。

それだけではなく、ランサーとして呼ばれ失っていた二本の剣、大なる激情と小なる激情の姿もある。

立ち上がり破魔の紅薔薇を掴んで引き抜くと違和感を感じた。

「槍が長い……？」

使い慣れたはずの紅い槍がイメージよりも長い。それだけではなく座っていた時には気が付かなかったが周りの木々が大きい。そして身体を見るとその違和感の正体がわかった。

「この姿は……」

驚いたデイルムツドは確認するために傍を流れる川の水面に自身の姿を映すとそこには少年の頃の己の姿があった。

「身体が小さく……いや、戻っているのか？」

元々高くない魔力も水面に映る姿・・・生まれてから十年ほど経った時のものとなっている。破魔の紅薔薇を振るうと筋力も戻っているようだ。

魔力で補助すれば問題なく扱えるが間合いも変わっているので慣らさなければならぬだろう。

「霊体化できない……受肉しているのか？」

受肉したことで、マスターからの魔力供給無しでこの世に留まる事ができるようになったが喜んでいられるばかりではいられない。

破魔の紅薔薇を振るった時にわかったのだが、肉体の退化と共に下がった自身の魔力のせいか、宝具の能力も大きく失われている。

おそらくは肉体が全盛期に戻れば自身の能力も宝具の力も戻るだろうが、そんな事よりもデイルムツドは二度目の生で果たせなかった願いに想いを馳せる。

「我が主はご無事なのだろうか……」

新たな主君、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトに想いを馳せる。騎士の誇りを奪われたと、最期は己を蝕む激しい憎悪にのまませの言葉をぶつけてしまった。

「我が主よ……どうかご無事で……」

主の期待を裏切った自分にはあの方を責める資格などない。

再び静寂を取り戻した心で、今はその存在を認識できない主の無事を祈った。

「とりあえずはこの地について調べなければな」

肉体は霊体化できないが4つの宝具は不可視にする事が可能だったので宝具と気配を隠し、森の中を進む。

途中に大きな屋敷もあったが、情報収集するならば街の方がいいだろうと判断し通り過ぎた。

しかしデイルムツドは街に出ることに不安もあった。それはわが身に宿る忌まわしき呪い……頬にあるホクロによる魅了の力を持つ『愛の黒子』がどのような影響を与えてしまうかにあった。

力を失い威力は落ちているとはいえ、御することの出来ないこの力が街でどのような影響を及ぼすかわからない。

この力により二度も破滅しているデイルムツドとしては無視できない問題である。

「何もなければいいのだが……」

一抹の不安を抱えながら、街に出たのだった。

「ふう……」

昼間目覚めた森の中に戻ったデイルムツドが彼にしては珍しくため息をついた。

疲れた。それはもう尋常ではないほどに。

結論から言えば問題はなかったのだが、『愛の黒子』の力は残念ながら消えてはいなかった。

商店街で通りすぎる女性全てにその効果を発揮したが、異常なまでに優しくされた程度で済んだ。

全ステータスダウンによる影響がこの身の幼さ故かはわからないが、グラニアやソラウ様の時のような事態は起きなかった。

犬を餌付けするかのようには物をプレゼントされ、手ぶらで街に来たはずなのに今デイルムツドの手には大量の食料や衣服、果てはそれらを仕舞うカバンまで持っていた。

最後にどこから来たのかと聞かれた時に、思わず「一人、旅をしている」と答えたら多くの女性に養子にされると言われ連れて行かれそうになったので慌てて逃げ出した。

それはもうフィンからグラニアと共に逃げる時くらいの必死さで。

ただ、聞けば何でも答えてもらえたので、この街……いや世界の事は知ることが出来た。

まず、ここは日本でありこの街は海鳴市ということ。そしてデイルムツドが二度目の生を生き、死を迎えた地である冬木市が存在していないことがわかった。

年は己が戦った第四次聖杯戦争の頃より十年ほど先のものであるようだがそれほど差異は感じなかった。

霊脈は感じず、昼間の様子から冬木のように殆どの者が魔力を持っていないのがわかる。

しかし、街中の所々に強力な魔力を感じるので、隠されているだけで魔術は存在するのだろう。

これらの事からデイルムツドはここが己の生きた世界と限りなく

近いが異なる世界であると……つまり俺は我が主ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが仰っていた魔術の極地である平行世界の移動を行ってしまったのだと判断した。

「信じられないが……認めるしかなさそうだな……」

もう暗くなつた空を見上げ、デイルムツドはため息をついた。

『聞こえますか……僕の声が聞こえますか……』

その時、直接脳に声が響いた。念話……つまり魔術を行使する者がいるということだ。

それと同時に感じたのは戦闘の気配……それもただの戦いではなく、魔力が込められている。

先ほどの切羽詰まった声……声色からして、おそらく今のデイルムツドと同じ年頃の者だろう。

「騎士として助けられないわけには行くまいっ!!」

迷うことなくデイルムツドは駆け出した。

全盛期の力を出せないとはいえ、それでも並みの人間以上の脚力を持って駆け、辿り着くと市街地で魔獣が杖を持った少女に襲い掛かっているところだった。

「穿て、破魔の紅薔薇!!」

飛び出したデイルムツド突き出した紅の長槍が魔獣の身体に突き刺さり、咆哮を上げながら後退する。

「やはり威力が落ちている……!」

貫いてわかつたがあれは魔力で形成された物体であることがわかつた。

しかし、本来であれば刃が触れた対象の魔力的効果を触れている間だけとはいえ完全に無効化することができる破魔の紅薔薇。

その一撃を受けたはずの魔獣は、かなりのダメージを負っているようだが消滅せず、そこに存在したままだ。

「無事か?」

黄の短槍も現界させ、目の前の魔獣に槍を突きつけながら後ろにい

る少女に尋ねる。

「あ……ありがとうございますっ！」

フェレットを抱えた少女が礼を言った。その声は先ほどの念話のものとは違う。

「あなたは……」

すると今度は念話の主の声が聞こえた……少女が抱えたフェレットから。

「……なるほど。念話を飛ばしていたのは君の使い魔か」

「ぼっ！……僕は使い魔じゃ……」

何かを言いかけた使い魔を無視し、魔獣に向けて駆け出す。

「貫け、必滅の黄薔薇!!」

今度は対象に治癒不能の呪いを掛ける黄の短槍を繰り出す。単調な動きしかしない魔獣は今のデイルムツドでも余裕で対処できる。

紅槍に貫かれ、弱った身体に必滅の黄薔薇による呪いを受けた魔獣に抵抗する力など無く、破魔の紅薔薇によってその身を守ることすら許されないまま青い宝石を残して消えていった。

「これが原因か……」

残された宝石が強力な魔力を放っていた。

その魔力はA+と言ったところだろうか。Bランク宝具である破魔の紅薔薇で破壊できるかはわからないが放置する訳にはいかなないと紅槍を振り上げる。

「まっ……待ってくださいー！」

破壊しようとしたら使い魔が慌てた声を上げ、駆け寄ってきた少女が呪文のような言葉を紡ぐと、青い宝石が杖の中に消えていった。

「封印したのか?」

「はい。僕はこれを集めるためにこの世界に来たんです」

「……この世界という事は他の世界もあるということか?」

彼(?)に聞けば今の状況がわかるかもしれない魔術の知識を持つ者に出会えたとは我が身にしては幸運だ。

「あなたは管理局の人ではないのですか?」

「管理局?……この世界とやらには今日来たばかりのようだな。目覚

めたらここにいたのだ」

周囲の惨状が酷いので、落ち着いた場所に移って話をすることにした。

「私は高町なのは。家族とか友達には、なのはって呼ばれてるよ」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノが名前です」

「我が名はデイルムツド・オディナだ」

公園に辿り着くと二人（？）に自己紹介された。

真名を伝えていいのか迷ったが、異世界の生物と幼い少女が英霊の名を知っているとは思えなかつたので正直に答えた。

ユーノと名乗ったフレットによるとデイルムツドのような異世界から自分の意思と関係なく飛ばされた者を次元漂流者と呼ぶと言った。

A+相当の魔力を持つ青い宝石……ジュエルシードと呼ばれる魔石は彼が発掘作業の指揮を取っていた遺跡から発掘された物で

輸送中に起きた原因不明の事故によって二十一個すべてがここ海鳴市近辺に落ちてしまった。

ジュエルシードには『願いを叶える』力があるが、単体で暴走し、使用者を求めて危害を加えてしまう危険な代物であり、

責任を感じた彼は独力で全て回収しようとするも、暴走したジュエルシードは手に負えず、負傷し襲われていた所をなのはと名乗った少女に助けられたらしい。

(願いを叶える……まるで聖杯のようだ)

暴走の危険はあるが、あの程度のものであるならば7人の英霊の魂をかけた殺し合いをしなければならぬ聖杯よりは安全に感じるが、魔力を持たない民にとっては充分な脅威である。

「今日はもう遅い。君達を家まで送り届けよう。案内は任せたぞ」

「ありがとう、デイルムツド君」

「気にするな。これくらいは当然だ」

初めて呼ばれた呼び名に強烈な違和感を感じながらもそれを表情に出さないようにしながら夜道を歩く。

なのは家の前に着くと男女が待っていた。話を聞いていると彼女の兄と姉のようだ。

「デイルムツド君、送ってくれてありがとう……」

説教が終わり、謝ったなのはが振り返ると先ほどまでいたはずのデイルムツドの姿は無かった。

「あ……あれ？」

「なのはを送った後すぐに気配を消して去って行ったよ」

慌てて姿を探すなのはに恭也が教えた。彼の實力を持ってしても神話の英霊の姿を追う事はできなかった。

「お礼をしたかったんだけどなあ……」

今日この世界に来たばかりだと言っていたので、色々助けになりたいと思っていたなのははがっかりとうな垂れた。

「あの者……かなりの武人であったな」

再び森に戻ったデイルムツドが呟く。

一目見た瞬間、彼が人間としてはかなりの域に達していることを見抜いており、武で劣ると思っていないが余計な接触は避けたほうがいいと判断した。

姉の方に挨拶をしなかったのは、魅了の呪いがかかってしまわないようにと気が付く前に去ろうと思ったからだ。

「ジュエルシードか……」

今見つかっているのは彼が回収した物と先ほどの分で二つだと言っていた。

残り十九個もあのような危険な物が放置されている。下手をすればキャスターの起こした惨劇に劣らない被害を及ぼすかも知れないものを放置する事はできない。

「彼には悪いが、そのような危険な物は破壊した方がいいだろうな」

しかし、封印する力を持たないデイルムツドがあれを止めるには、破壊するか封印可能な者に頼るしかない。

破壊するにしても弱体化した己がそれが可能であるという保障はなく、仮に宝具の性能を最大限に引き出せるようになったとしても、刃の触れている間だけしか魔力を無効にできない破魔の紅薔薇がジュエルシードを砕けるとは限らない。

もしジュエルシード本体が破魔の紅薔薇で砕けないほど物理的な防御力が高ければ破壊することは不可能だろう。そして何よりも

「予想以上に身体が動かないな……」

先ほどの交戦時は現在のデイルムツドがどれだけ弱くなっているかを実感させるには充分であった。

低下した筋力は、槍を振るう分の筋力は問題ないが、打ち合いになれば確実に影響を与える。

子供の身では耐久も下がり、己の武器である敏捷も低下し、魔力に至っては最低レベルにまで落ちており、宝具無しではあの化け物に対処できないだろう。

この世界の恩恵なのか幸運のステータスだけは上がっていることを実感できる。

スキルも心眼以外は下がっている。魅了の呪いが低下しているのは喜ばしいが。

暴走したジュエルシードの化身を倒すことはできても本体を破壊できなければ意味が無い。まずは鍛錬し自身の能力を戻す必要がある。

「しばらくは鍛錬とこの街以外の地理を把握することに努めるか……」

そう決意し、眠りに落ちる。

デイルムツドの第97管理外世界『地球』に來た最初の一日はこうして幕を閉じた。

ステータス（無印）

- ・ 真名：デイルムツド・オディナ
- ・ 身長：145cm / 体重：42kg
- ・ 属性：秩序・中庸
- ・ イメージカラー：翡翠色
- ・ 特技：アウトドア料理、接客対応
- ・ 好きなもの：友情、仁義 / 苦手なもの：恋する乙女、嫉妬深い男
- ・ 天敵：???
- ・ 筋力：C
- ・ 耐久：D
- ・ 敏捷：A
- ・ 魔力：E
- ・ 幸運：C
- ・ 宝具：B
- ・ 固有スキル
- ・ 対魔力：D
- ・ 心眼（真）：B
- ・ 愛の黒子：E
- ・ 宝具

デイルムツドの有する4つの宝具。

破壊されてもデイルムツドの魔力によって再生可能だが魔力のランクで修復時間が変化する。

ランクEであれば一週間で復活する。

・ 破魔の紅薔薇

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2〜4 最大捕捉：1人
刃が触れた対象の魔力的効果を打ち消す紅の長槍。

デイルムツドのパラメーターダウンによってシールドを貫通することは出来るが完全に中和することはできない。

・ 必滅の黄薔薇

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2〜3 最大捕捉：1人

この槍に傷付けられた者に治癒不能の呪いをかける黄の短槍。
デイルムツドのパラメーターダウンによって呪いは1日で解除される。

・大なる激情^{モラルタ}

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：1人

大怒の意を持つマナナーン・マックリール神の剣。

真名解放を行うことで全てを破壊する一太刀を放つ。物理、魔術と問わず、堅牢な守りでもそれを無視して破壊できるが、複数の防御を重ねられた場合は第一層のみしか突破できない。

デイルムツドのパラメーターダウンによって現在は真名解放不能。

・小なる激情^{ベガルト}

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：1人

小怒の意を持つマナナーン・マックリール神の剣。

真名解放している間、一度だけ受けたダメージを倍にして返すことが出来るが、発動後にベガルダは破壊される。

デイルムツドのパラメーターダウンの影響を受けていない。

月下の対峙

深夜、暗い山道を走る少年の姿があった。

昼間学校から帰ってきた彼はテストの成績が悪かったせいで親に怒られてしまい、思わず家を飛び出した。

飛び出したはいいが意地を張ってしまい、すぐに戻れなくなった少年には行く当ても無く、特に何も考えずに山の中に入ってしまった。

探検気分で奥に進んだ少年は道に迷ってしまい、入ったのは昼間だったのに日が暮れる前に山から出ることができず、辺りが暗くなっ
てしまったのだ。

最初は心細さを必死で堪えていたが、完全に辺りが闇に包まれ、野
犬の咆哮が聞こえた瞬間、耐え切れずに泣き出してしまった。

それでも家に帰れることを信じて歩き続けた少年は月の光が差し
込む広場に出る。

そこには化け物がいた。

月の光の中でもわかる不気味な色をした触手が蠢いている。

まるで彼が良く食べる蛸のようにも見えるが少年以上の大きさを
持った蛸などいるはずがないだろう。

逃げなければいけないとわかっていたが、恐怖で足が竦んで動けな
い。

どれくらいそうしていたらだろうか。ふと蠢いていた触手が一瞬、ピ
タリと動きを止める。

そして触手が正面の赤い部分を少年の方に向けた。

目が——合った気がした。

「うわあああつ!!」

その瞬間、恐怖の鎖が千切れ、少年は山の中を駆け出した。

あれからずっと走っているが、いつまでたっても後ろから何か
迫ってくる気配と引きずるような音が消えない。

もう自分がどこを走っているのかわからなかった。

「あっ！」

永遠に続くかと思っていた逃走劇は唐突に終わりを告げる。

足をもつれさせた少年が木の根に足を引っ掛けて転倒してしまっ
たのだ。

立ち上がろうとしたが足を挫いてしまったのか、起き上がれない。
すると背後で大きな音がした。

振り返ってはいけなと思うても身体は言うことを聞かず、ゆっく
りと背後を見た。

異形が目の前にいた。

「う……うわああっ!!」

足の痛みも忘れて駆け出そうとしたがそれより早く伸びた触手が
少年を捕らえた。

その直後、空から放たれた真紅の閃光が魔物を貫いた。

「なんとか間に合ったか」

その光の正体が紅い槍だと気が付き、空から現れた黄色い槍を持つ
男の子の姿を見た瞬間、安心した少年は意識を手放した。

「まるでキャスターの海魔のようだな」

紅と黄の槍を携えた少年……デイルムツド・オディナが苦虫を噛み潰したような顔で目の前の異形を睨む。

破魔の紅薔薇で刺し貫かれ、断末魔の叫びを上げる異形の姿は聖杯戦争でキャスターが呼び出した海魔とそっくりである。

それがよりにもよって子供を狙っていたのだからイヤでもあの外道を思い起こさせ、それがデイルムツドを苛立たせた。

「ジュエルシード……破壊させてもらおうぞっ！」

紅槍と黄槍を投擲し、異形に突き刺して動きを止めたデイルムツドが二振りの剣をその手に呼び出す。

大なる激情と小なる激情

養父アングスから授かった神の剣を振るい、敵を切り裂く。

四つの宝具の餌食となった異形がその姿を崩し、青い宝石を残して消え去った。

「やはりこの身の丈であれば剣の方が扱いやすいな」

なのはと別れたデイルムツドは、ユーノが気が付いていないジュエルシードがああ街以外にあるかもしれない可能性を考え、ここ一週間ほど周辺の市街を散策していた。

しかしなかなか見つからず、一度最初の森に戻ろうとここを通りかかった時、偶然ジュエルシードの気配を感じた。そして駆けつけると、子供が襲われていたのだ。

破魔の紅薔薇以外を仕舞い、その刃先をジュエルシードに向ける。

直後、右から殺気を感じ、破魔の紅薔薇を両手で持って構えると衝撃が走った。

「そいつをどうしようってんだいっ！」

視線を向けるとオレンジの髪をした女性がこちらを睨んでいる。

彼女に破魔の紅薔薇をへし折る勢いで殴られ、踏ん張りが効かずに先ほどの場所から一メートルほど押し出されていた。

「悪用する気は無い。ただ破壊しようとしただけだ」

「そんなことさせる訳にはいかないよっ！」

再度殴りかかってきた相手の攻撃を大なる激情で受け流し、破魔の紅薔薇で斬る。

相手が後退した隙を狙い、地面に落ちたままのジュエルシールドの元に向かい、紅槍の切っ先でジュエルシールドを弾き上げ、それを左の指先で摘み取った。

「悪用しようとしていたのは貴様の方か・・・悪いことは言わん。素直に下がれ」

「それを渡すなら素直に下がってやる！」

目の前に現れた襲撃者に紅槍の切っ先を向けながら、左手のジュエルシールドをポケットに仕舞った。

奪われないようにと咄嗟に掴み取ったが、いつ再び暴走するかわからない魔石を持ったまま戦うのは避けたい。

破魔の紅薔薇で表面の魔力を打ち消し、自身の対魔力で押さえ込んでいるおかげで沈静化してるとはいえ安心できない。

「今の手合わせでわかっただろう。貴様ではこのデイルムツドを倒す事はできない」

先ほどから殺気を飛ばしてくる女を軽く挑発する。

鎧のような物はなく、露出の多い衣服を着ており、マントを羽織ってはいるが身を守る効果はなさそうだ。

何より目を引くのは挑発した瞬間に現れたオレンジの髪の上から生えている獣の耳で、それが彼女が人ではないことを物語っている。

魅了の影響を一切受けている様子が無いのでおそらく魔力を持っているのだろう。

女が跳躍し、再度攻撃を仕掛けてくる。

パワーは凄まじく、今のデイルムツドを上回っている。しかしその動きに技量は無く、単調な力押しなので届かない。

大振りの攻撃をかわし。後ろに回りこんだデイルムツドが死角から攻撃を繰り出す。

「くっ………シールド！」

獣のような反射神経でこちらの攻撃に反応した女の目の前に魔方

陣が浮かび上がった。

魔方阵は攻撃を繰り出す前に展開されており、女は攻撃を回避する気配無く、シールドに手をかざしている。

「穿て……………」

アルフの判断は間違っていないなかった。堅牢なシールドは見事に展開が間に合っており、防いでカウンターを叩き込めば大きなダメージをディルムツドに与えられる。

「破魔の……………」

唯一の誤算は、その手に握られていたのが、血のように紅い長槍であつたことだけだ。

「紅薔薇ツ!!」

放たれた一撃は目の前のシールドを通り過ぎ、その切っ先が女左肩に吸い込まれ鮮血が飛び散る。

「そん……………なっ……………!」

信じられないと目を見開きながら女が後ろに飛び、距離を取る。

雌雄は決した。彼女の左腕は今の一撃で完全に使い物にならなくなり、ディルムツドはここまで手傷の一つも負っていない。

「一つ問おう。何故これを狙う?」

「あの子が……………大事なご主人様が必要としているからさっ!!」

左肩の激痛を堪えながら女が叫ぶ。その目には今だ闘志が宿っており、まだ諦めてはいなかった。

そして咄嗟に後ろに飛ぶと、先ほどまでいた地面が迸る雷撃で大きくえぐられた。

「……………アルフッ!」

彼女を庇うように金髪の少女がアルフと呼ばれた女とディルムツドの間に降り立った。

「フェイト……………ゴメン……………!」

「ううん。大丈夫だよ」

フェイトと呼ばれた少女がアルフに優しい笑顔を向け、手のひらを傷口にかざすと風穴となっていた左肩の傷が埋まり出血が止まるが、応急処置程度の効果しかないのか左腕はまだ使えないようだ。

「貴様がこれが必要としている者か……何故このような民に危害を加える物を求める？」

アルフとフェイト。こちらを睨む二人の少女に尋ねる。

「必要だからっ……バルディッシュユ！」

それだけ告げるとフェイトが手に持った杖を鎌に変化させて突進してくる。

「フィオナの騎士を侮るな」

デイルムツドは冷静に対処し、こちらに迫ってくる金色の刃に破魔の紅薔薇の切っ先を当てると魔力の刃は霧散した。

それにより不意打ちするため接近したフェイトの方が驚かされることになり、振るわれた左手の大なる激情を慌てて杖の柄で防ぐ。

「くそっ……なんなんだいその槍……！」

あらゆる魔術を消し去り、シールドすら容易く貫通する紅槍に二人が翻弄される。

魔術師としては優秀な二人だが、その力の源である魔力を打ち消されてしまうせいとその能力を發揮できず、紅槍の攻撃を魔術障壁で防ぐことができない事を知ってしまったせいで迂闊に踏み込むことすらできなかつた。

「我が破魔の紅薔薇の前に臆したか。それではこのデイルムツドに勝つことなどできんぞ」

デイルムツドは力を失っている。

リーチの変化や能力の制限。全てのステータスは落ち、魔力に至っては正面にいるフェイトの足元にすら及ばない。

しかしそんなのは彼にとってはほんの些細な事である。

基礎の能力では劣るはずのデイルムツドが二人を相手に圧倒する事が出来るのは経験と覚悟の差だ。

破魔の紅薔薇は確かに強力な宝具だが絶対の物ではない。

それを当てる技量、扱う技術。間合いを読み、敵の動きを読む心眼。

それらを有するからこそ、デイルムツド・オディナは英霊足る器を持ち、ここまでの力を發揮できる。

「強い……」

中距離の攻撃もアルフの援護も通じず、得意の近接戦闘も全く通じない。

すでにフェイト達には目の前に悠然と立つ少年から勝利を得ることとは不可能だと理解していた。

「でも……引くわけには行かない……!」

それでもフェイトは立ち向かう。諦める訳にはいかないのだから。「母さんの為に……!それを手に入れなきゃいけないんだっ!!」

己の全力を持って目の前の槍騎士に突撃し、鎌を上から振り下ろす。

「ようやく理由を言ったな」

フェイトの本心を聞き、満足気な笑みを浮かべたデイルムツドが紅槍を上に向けて振り上げる。

キインツ!!と金属同士がぶつかり合う音が静寂になった山に響き渡る。

「フェイト……と言ったか。どうやらこの勝負、俺の勝ちだな」

手から弾かれた杖が地面に突き刺さり、喉元に槍を突きつけられて、フェイトは自分の敗北を悟った。

「最後に一つ、尋ねよう。フェイト、貴様はこの魔石を御する事ができるのか」

ジュエルシードを取り出し問いかける。

「ならばフェイト、これを渡しても構わないが……俺と手を組まないか?」

フェイトが頷くのを確認したデイルムツドがそう切り出した。

「……どういふつもりだい?」

アルフが警戒心を隠さず、こちらの腹を探ろうとしてくる。

「そう警戒するな。俺がこの魔石を破壊しようとしているのはこれ以外の手段を持たないからだ」

大なる激情と破魔の紅薔薇を仕舞い、丸腰になって敵意の無いことを伝える。

先ほど初めてジュエルシードを掴んだ時、今の破魔の紅薔薇では『破壊できない』事を感じ取った。

そうなればこれを放置する訳に行かない以上、封印可能な者に頼る必要がある。

なのでフェイトが現れた時、勝つのではなく彼女にこれを渡しても大丈夫かどうかをその真意を聞いて判断しようとした。

「その母君がこの魔石を如何様に使うかは知らんが・・・少なくとも貴様という人間がこれを悪用する事はないと判断した」

いずれはその真意を知り、危険であれば阻止すべきであるが、今は彼女達を信用したかった。

「俺の目的はこの魔石が暴走して民を巻き込まないように処理することだ。封印できるならば破壊の必要はない」

何故なら、理由を尋ねた時のアルフの瞳には覚えがあったからだ。それはフィンに、ケイネス殿に対し己が向けていた物。絶対の忠誠・・・己の全てを賭けてでも主の為に尽くす。という強い信念が籠った眼だ。

それに気が付いていたデイルムツドは、次に現れた主であるフェイトの瞳を見た。

彼女がアルフを見るその眼は、全てが変わったあの日まではフィンが己に向け、ケイネス殿が一度も向けてくれなかった物だった。

主に忠義を尽くし、主から信を得る・・・デイルムツドが渴望し得られなかった関係が目の前にあった。

「さてどうするかねフェイト。俺は君の判断を尊重しよう」

デイルムツドの言葉を信じ協力関係を結んでジュエルシードを受け取るか。信賴せず敵対して目の前のジュエルシードを逃すか。

考えるまでもなく前者であろう。戦力としては申し分なく、正々堂々と闘う彼が裏切る男には見えない。

「協力を・・・お願いします」

「承知した」

差し出された手を握り返し、先ほど手に入れたジュエルシードを地面に置いた。

フエイトが弾かれて地面に刺さっていたバルディッシュと呼ばれる武器を抜き取り、杖の先をジュエルシードに向ける。

「ロストロギア、ジュエルシード。シリアルⅡ……印」

《Yes sir.》

眩い金色の閃光が現れ、ジュエルシードを飲み込み、光が消えた時そこにあつたのは膨大な魔力の奔流を感じない静かな宝石だった。

「見事なものだ」

なのはの時もそうだが、あれほどの魔力を持つ物をこのような年の少女が容易く封印するとは。

魔術の知識はないが、これが凄いことではあるのはデイルムツドでもわかる。

「これで封印は完了しました」

《Captured.》

バルディッシュの声と共にジュエルシードは金色に輝く球体の中に飲み込まれていった。

封印を終え、互いを気遣い寄り添う主従の姿をデイルムツドが見つめていた。

俺はまた……仕えるべき主を見つけ、今度こそ忠義を尽くすという我が本懐を成し遂げられるのだろうか。

月夜の中、二度も全てを失った騎士はその光景を黙って見つめていた。

再度の接触

「改めまして……私はフェイト・テストロツサつて言います」

「フェイトの使い魔のアルフだよ」

「敬語など使わなくていいさ。我が名はディルムツド・オディナ。君達の世界で言う次元漂流者という者らしい」

ジュエルシードの封印が終わり、先ほど助けた気絶したままの少年を街の交番の前に送り届けた三人は向かい合って名乗りあっていた。

この世の法則から外れ、英霊の座に送られたディルムツドは精霊に近く信仰されるべき存在だが、彼は己を高位な者ではなく、一介の騎士であると考えている。

生前が王であれば敬意を示さねば怒るかもしれないが、少なくとも彼にそんなつもりは無いので今の年齢に対して適切な言葉で接してくれる事を望んだ。

現在彼らがいるのは彼女の拠点であるマンションの一室だ。

なお、英霊であることや肉体が退行していることなどは話がややこしくなるので伝えていない。

「次元漂流者……誰かからそれを聞いたのかい？」

「ああ。一週間ほど前に出会ったジュエルシードを回収している者に聞いた……今はどうしているかはわからないがな」

それを聞いた二人が息を呑む。探索者の存在は二人にとっては看過できない。

「フェレットの姿をした使い魔と白衣の魔術師の少女だ。少女の方は俺と出会った時に契約したとの事だが……内包する魔力は凄まじいものであった」

なのはの様子を思い出す。完全に素人……フェイトと違って近接戦の才は無さそうであったが、内包する魔力だけ見れば騎士王に匹敵する。

「先ほども言ったが、基本的に俺は直接彼らとの交戦に介入はしない。俺の目的はあくまでジュエルシードの封印だ」

「うん・・・わかってる」

フェイトと協力を結んだデイルムツドだったが、基本的には中立の立場である。

責任を取って全て回収したいというユーノの気持ちも理解できず、母の為にジュエルシードを回収するフェイトの想いもわかるからだ。

なので暴走したジュエルシードの沈静化には協力するが、ユーノ達から奪う行為には協力しないという事にした。

その事は先ほど封印を行った時に伝えていた。

フェイト達としてはデイルムツドに探索者の相手を頼み、その間にジュエルシードの回収に専念できるのが望ましいものの、無理を言っただけで敵対され妨害されるよりはいいので渋々といったところだが受け入れた。

「ただ、アルフの傷が癒えるまでは俺が代わりにフェイトのサポートに徹しよう」

「それだけでも・・・凄く助かる」

「すまないね。しばらくはまともに動かせそうじゃなさそうだねえ……」

「気にするな。敵対していたとは言え、俺の槍で受けた傷だしな」

フェイト側に付いたのは二人の間に忠義の理想の姿を見たのもあるが、破魔の紅薔薇の一撃を受けたアルフでは彼女を戦闘で支える事が厳しいだろうと言う考えもあったからだ。

「にしてもあの紅い槍はなんなんだい？障壁どころか魔力弾すら消しちゃまうなんて……」

「対魔の紅槍『破魔の紅薔薇』。刃先に触れている間、あらゆる魔術を完全に消し去る。障壁や魔力による肉体強化を無視して攻撃を通すことができる。万能ではないが、我が切り札の一つだ」

一見無敵の宝具に見えるが、あくまで刃の触れている間だけしかその効力を発揮しないので防御には殆ど使えない。

放たれた魔弾を消せたのはデイルムツドの槍捌きでの的確に魔力を纏めていた核を打ち消して霧散させたからであって高出力の魔力の

奔流に対しては無力と言ってもいい。

「一つ……つて事はまだ他にあるってことかい？」

「容易く見せてやる気はないがな。もし見たいのであれば俺から引きずり出してみろ」

切り札たる己の必殺の宝具達は見せてやるほど安くはない。

「デイルムツド」

先ほどから会話に参加していなかったフェイトが口を開く。その様子から何かを決心し、頼もうとしている気配を感じた。

「なんだ？」

「私に……接近戦を教えてくれないかな……？」

ほうと……デイルムツドが呟く。予想していなかった提案だが、断る理由もなかった。

デイルムツドは知らなかったが二人がこの地に下りてからまだ1日しか経っていない。

初めての交戦、しかもジュエルシードを賭けた負けられない戦いである。なのに二人がかりで挑んだにも関わらず、彼に傷一つ与えられなかったという事実は、これからの戦いで自分が戦えるのかと、彼女に大きな不安を与えてしまったのだ。

「強くならなくちゃ……母さんの願いを叶えられないから」

勿論、彼の実力が群を抜いていただけで、フェイトが弱い訳ではない。

むしろこの歳でこれだけの才能を発揮すれば稀代の天才と言っても過言ではない。

「今日はもう遅い……明日から鍛錬に付き合おう。俺の方から昼頃に迎えに行く」

そう言っ立ち上がり、玄関へ向かう。男があまり長居しては安心して休めないだろう。

「そういうええあんたってどこで寝泊りしているんだい？」

アルフが何の気なしに尋ねる。一週間以上前にこの世界に飛ばされたと言っていたので気になったのだ。

単独でジュエルシードを探していたとも言っていたし、先ほどの会

話から誰かと共に行動している様子も無い。

いくら常人離れの強さを持っていても、高い魔力も財力も無い子供が簡単に生きていけるほど世の中は甘くない。

「山の中だ」

特に隠すことでもないのであっさりと答えた。

「山の・・・」

「中あ?!一週間もかい?!」

「この森は環境がいいようだな。水も旨いし食える物も多い。水が澄んでいるから水浴びも気持ちがいいぞ?」

生前の時代ほどでは無いが生活するには全く問題がない環境だった。

この世界で目覚めた時に着ていた服は、前の世界からの手向けなのかEランク魔術礼装になっており、魔力を流せば汚れは消えるし、微かな防御能力と自己修復機能・・・この世界でいうバリアジャケットのような物になっていた。

見た目は聖杯戦争の時の服を今のサイズに合わせた物なので全く違和感無く着ることができた。

「街に行つて・・・宿を探そうとか思わなかったの・・・?」

「いや・・・街に行くと少々問題があつてな・・・人里離れた場所の方が安全だったのだ」

「はあ?」

アルフが何を言っているんだという表情でデイルムツドを見る。

彼ほどの人間が隠れなければいけないほど街が危険だとは到底思えないからだ。

「・・・武では切り抜けられない事もあるのさ」

「えつと・・・よくわからないけど・・・大変だったね?」

フェイトの励ましの言葉を聞きながら、一週間前の出来事に思いを馳せた。

最初は街の中で止まれる場所を探そうとは思ったのだ。なのとは会話した後だったせいでデイルムツドは失念していた。

己の道を狂わせる忌まわしき呪いの存在を。

大変だった。

まるで亡者のようにデイルムツドを自宅に泊めようとする女性の群れからアサシンの固有スキルほどではないが、武人として使える域の気配遮断を使って逃げた。

この世界に来てから二度も逃げることになったが、こればかりはやむを得ないだろう。

「大変じゃないのかい？」

「隠れ住むのは慣れてるのでな。それほどでもないさ」

猪が出てきた時はさすがに焦った。猪としてのサイズは普通なのだが今のデイルムツドが小さいので彼の目にはまるで大きな魔猪に見えてしまい、また討たれるのかと思ったほどだ。

ちなみに今回は破魔の紅薔薇と大なる激情で猪を討ち取った。同じ過ちを繰り返す訳には行かない。

「あの・・・行く場所が無いなら一緒にここで住まない？」

フェイトの言葉を聞いて思わず右の黒子を触ってしまったが、彼女には影響を与えている様子は無い。

「それならわざわざ合流する必要もないし、普段からいい護衛になりそうだしねえ」

つまりは彼女達の本心、善意で言ってくれているのだろうが男が女性の住まいに泊まるというのは抵抗がある。

「・・・デイルムツド、お願いここに一緒にいて・・・」

「ぐっ・・・!!」

お願い。そう言われてしまったては断ることは出来ない。

デイルムツドの聖誓^{ゲツシュ}・・・神の加護を得るために自らに課した制約は『女性の頼みを断らない』事だからだ。

敵の女性の頼みを聞く訳には行かないが、味方の言葉であるならそれを拒否する訳にはいかない。

勿論、二人とも聖誓のことなど知らない。

これから色々と教わったり協力してもらおうというのに自分達は部

屋で休んで彼を山の中に置いて行くというのが申し訳なかったからお願いする形で言ったのだが、それが見事にデイルムツドの弱点を突いた。

「……なら泊まらせてもらおうか……」

死して異なる世界に飛ばされても、己に課した聖誓を無視できる男ではなく、結局はその願いを引き受けたのだった。

翌日。

デイルムツドが最初に目覚めた森の中でフェイトがバルディッシュを、デイルムツドが大なる激情と小なる激情を持って対峙していた。

アルフは狼形態になって自室で待機している。最初は驚いたが応そのそちらが本来の姿らしい。

「遠慮はいらん……殺す気がかかってこい」

「……行きますっ!」

《Scythe form Setup.》

デイルムツドの声に応え、フェイトが鎌に変形させたバルディッシュを持って駆け、彼の足元を薙ぐように大きな刃を振るう。

それを接近してきたフェイトに向けて跳躍してかわし、同時に右手に持った剣で彼女の右上腕を斬るように真横に一閃する。

「二度死んだな。隙が大き過ぎる……射撃魔法も合わせてみる」

剣の樋の一撃を浴びたフェイトが弾き飛ばされる。

バリアジャケットのおかげで折れたりはいないが、痛みで腕が痺れている。

「くっ……バルディッシュッ!」

《Device form.》

後退しながらデバイスフォームに変形し、彼女の周りに複数の発射体が現れる。

「フォトンランサー・マルチショット！」

《Photon lancer Multishot.》

「速いが・・・そのやり方では当たらんぞ？」

周囲の球体から放たれた槍のような魔力弾をかわし、一気に接近して喉元に切っ先を突きつけた。

「技を個々に使っても意味が無い。射撃と斬撃を組み合わせ、隙を作って大技を叩き込め」

フェイトの動きにはまだ技術は感じ取れないが、才能は感じ取れる。

彼女に足りない物は単純に実戦経験・・・戦場で生きていけば研ぎ澄まされていく直感や心眼と言った物が未熟であった。

「次はそれを意識して動け・・・行くぞ・・・?!」

「・・・この反応・・・！」

再度剣を構えようとした時、感じた気配に二人が一斉に反応する。近くでジュエルシードが発動したようだ。

同時に一週間前に感じた懐かしい魔力も接近してきているがフェイトはそちらには気が付いていないらしい。

「(思ったより早い接触だな・・・)」

そんなことを考えながらジュエルシードの元にたどり着くと巨大なネコがいた。

ジュエルシードには願いを叶える力がある。おそらくはあの猫が大きくなりたいと願った結果であろう。

「破魔の紅薔薇では殺してしまうな。ここはフェイトに任せるぞ・・・俺は待機している」

「・・・わかった」

無用な殺生をする必要は無いだろう。こちらに向かってくる者との戦いを静観するために気配を消した。

突然デイルムツドが気配を消したことに驚いたフェイトであったが、自分がやることは決まっている。

「バルディッシュ。フォトランサー」

《Photon lancer.》

目の前にいる巨大なネコに杖を向け、杖の先に収束した光が電撃の雨となり放たれ、攻撃を受けたネコが悲鳴を上げる。

このまま気絶させジュエルシードを回収しようと再度フォトランサーを放つ。しかし、そこに現れた少女が障壁を張ってネコを守った。

「魔導師……?」

白いバリアジャケットを纏った少女が放たれたネコの上に乗って攻撃からを守ろうと構えている。なのでバランスを崩すために足元に魔力弾を撃ち込んだ。

「う……うわ……うわあっ?!」

少女は一瞬落ちそうになったが、慌てて飛行魔法で体勢を建て直し地面に降りてこちらに対して杖を構えている。

ファイトは接近し、彼女の傍の木の枝に乗って対峙する。

「フェレットの使い魔と白衣の魔術師……ロストロギアの探索者か」
『そうだ、まずは一人で相手してみる。あちらの使い魔が手を出してきたら援護してやる』

傍で姿を隠しているデイルムツドが念話を送ってきた。正面からの一騎打ちを邪魔しない限りは介入するつもりは無いようだ。

『わかった』

《Scythe form Setup.》

デイルムツドの声に答え、バルディッシュを斧に変形させる。

「申し訳ないけど……いただいでいきます」

バルディッシュを構えて少女に向けて突進し、先程の鍛錬の時のように足元を狙った斬撃を振るう。

「あっ……!」

《Evasion. Flier fin.》

その攻撃を少女は空を飛ぶことで回避されるが、わかっていたので

問題ない。

《Arc Saber》

上空に逃げた相手に向け、すかさず魔力の刃を放った。

《Protection》

飛来する魔力刃を障壁で防ぎ、魔術師に当たる前に爆発を起こす。術者本人よりも早く反応し最適な行動を行うとは

かなり優秀なインテリジェントデバイスのようだ。

(けれど・・・)

今の攻撃を防がれるのも予想通り。爆発の衝撃で発生した煙で目くらまししている間に接近し、上空に脱出した少女に鎌を振り下ろす。

少女も辛うじて杖でその一撃を防ぐが、流れは完全にフェイトの方にある。射撃と斬撃の組み合わせ。先程学んだことを生かした攻撃だ。

「なんで・・・なんで急にこんな・・・！」

目の前の少女がこちらを見つめながら問いかける。

「答えても・・・たぶん、意味が無い」

フェイトの返答を合図に組み合っていた二人が同時に距離を取った。

《Device form. Photon lancer
Get set.》

《Shooting mode. Divine buster
stand by.》

二人がデバイスを射撃形態に変化し、互いに突き付け合う。

おそらくは自分と同じ年だろう。強い意志を持った・・・それでいて優しげな瞳がこちらを見ている。

互いに牽制し、いつでも必殺の一撃を撃てるように構えていたが、視界の端でジュエルシールドで巨大化していたネコがうめき声と上げて身動きした時、目の前の少女がこちらに気を取られ、目を離した。

「・・・・・・・・ごめんね・・・」

その一瞬を逃すつもりはなく、フェイトは小さな声で呟いて光の槍

を放った。

爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされる少女が地面に激突する直前、使
い魔法が魔法で衝撃を吸収して優しく地面に着地させた。

《Sealing form. Set up.》

それを確認したフェイトはジュエルシードの宿ったネコの元へ行
き、封印を施して回収した。

それからしばらく倒れている少女を見つめていたが、踵を返し、静
かにその場を後にした。

「初陣としては見事だったぞ」

しばらく歩いているとティルムツドが姿を現した。

「なんで・・・気配を消してたの？」

「迂闊にこちらの戦力を晒す必要な無い。それに二人の実力を見てお
きたかったしな」

他のも何か考えがあつての行動に思えたが、目の前にいる少年の考
えを理解できなかった。

同じ歳のはずなのに、どこか戦いに慣れた雰囲気を感じさせる少年
の心を把握するには時間や信頼だけではなく、機微を読む武人の嗅覚
もまだまだ未熟である。

「彼女の名前・・・知っておきたいか？」

自分の前を歩いていたティルムツドが振り返り、唐突にそう尋ねて
きた。

先程の白い魔導師・・・一週間前の時点で少なくとも2つのジュエ
ルシードを持っているらしく、相手も。

「・・・必要ないよ。私には・・・関係ないから」

ジュエルシードを狙う倒すべき敵。私にとってそれ以上の相手で
はない。

「そうか・・・まあいずれ、彼女の方から名乗りを上げるかも知れん
な・・・それに、彼女ならば君の——」

最後の方は伝えるつもりがなかったのかその言葉を聞き取ること
ができなかった。

なんて言ったのか聞き返したが、ティルムツドはそれを何でもない

と微笑んで誤魔化した。

「さて、今日は活躍したフェイトを労わなければな。今日は自然の中でバーベキューでもしよう」

「えっ?」

「そうはいくまい。アルフに聞いたが、まともに食事をしていないのだろうか?」

左肩を刺されたせいで最初は警戒心剥き出しのアルフだったが、デイルムツドの紳士的な対応が良かったのか出会ってから自宅に帰るまでの間には仲良くなっていた。

実は魅了の黒子が微弱に影響し、その効果でデイルムツドに向けていた敵愾心がわずかに削がれたからなのだが、それはアルフどころかデイルムツド本人すら気が付いていない事であった。

「栄養を取らねばいざと言う時に力を出せんぞ。こう見えてもアウトドア料理は得意でな・・・念のための人払いの魔術は任せるぞ」

その後、材料を買うために向かった街で、フェイトはデイルムツドが恐れていた『危険』という物に巻き込まれ、その身で体験するのだが、彼のおかげでその日のバーベキューの材料費は一切かからなかった。

そして、久しぶりの楽しい食事に幸せな気持ちになったフェイトは、デイルムツドに感謝の思いを感じるのであった。

出合い、そして邂逅

なのはとフェイトとの戦いから数日後。デイルムツドは街にある図書館に来ていた。

先日街中で女性が集まってきた原因をフェイトに尋ねられ、生まれながらに魅了の呪いがかかっている事と、そのせいで色々大変な目にあつたことなどを話すと、解決の手段を行ってくれた。

ジュエルシードの封印を応用した封印処置を黒子に直接施すことでその効力を抑えることができたのだ。

ただし、この呪い自身がデイルムツドと深く結びついているので魅了の呪いだけを封じることができず、デイルムツドの能力にまで大幅に制限をかけてしまう。

緊急事態に備えて任意で解除できるが、再度封印する場合はフェイトかアルフに頼まなければならず、顔の右側に文様が浮かび上がってしまうので顔の右半分には包帯を巻くことになった。

幼い少年の顔に包帯が巻かれ、『輝く貌』と呼ばれるほどの美しい顔が包帯の無い方から見えているので違う意味で注目を浴びているのだが、それでも街中を歩いても大変な目に合わなくていいのはありがたい、久々の平穏を堪能していた。

「これか……」

図書館でデイルムツドが手にしたのはケルト神話・・・特にアイルランドに関する書物だ。

彼がこの本を探していたのは、この世界に英霊、デイルムツド・オデイナの逸話が残っているのかを確認するためだった。

少し探してみると、その名前はあつた。フィオナ騎士団の中でも勇敢で心が広い騎士・・・そして己のゲツシュにより主君を裏切り、最期は主に見殺しにされて命を落とす。そこにはデイルムツドが誰よりも知っている真実が記されていた。

(……俺は)

この世界でも生きていたことを確認し、同時に感じるのはただ後悔

だった。己の生き方には後悔はなく、主であるフィン・マックールに對しては恨みなど感じてはいない。

デイルムツドが死した後、フィンは王に裏切られ、騎士団と運命を共にした。もし己が生きていれば、友であったオスカも・・・主も死なずに済んだのではないだろうかと思ってしまう。

「ん……………」

過去の悔恨の想いに耽っていたデイルムツドだったが、ふと視界の先に車椅子の少女を捉えた。

「……………届かへん……………」

どうやら上の方の本を取ろうとしているようだが、車椅子の身では届かずに困っているようだ。図書館の職員はその姿に気付いておらず、周りの人間は無視を決め込んでいる。

「この本でいいか？」

困っている女性を放置する事など己の誓いに反する。すぐさま駆け寄り、目当ての本と思わしき物を取って渡した。

そして、顔の半分を覆う包帯に驚いた様子の少女と目が合った。

「どうもありがとうございます。わたしの名前は八神はやてって言います」

少し変わった発音で少女がお礼を言ってきた。

「我が……………俺はデイルムツド・オディナだ。敬語は使わなくていいぞ。言い直したのは先日フェイトとアルフに指摘されたからだ。」

——二人曰く、なんか時代がかった言い方でもものすごく変。との事である。

「デイルムツドってケ……………ルト神話の登場人物の名前やね？」

「君は詳しいようだな。偶然似たのか、もしくは親が好きだったのかもしれんな」

「本を読むのが好きやねん……………というかそれしかできることが無くてな……………」

そのケルト神話の英雄本人です。など言える訳がないので適当に

誤魔化しておいた。

仮に言ったとしても目の前の少女が信じる訳がなく、おそらく頭のおかしい人間として見られるだけであろう。

「はやてでええよ。代わりにわたしはデイル君って呼ばせてもらわ」

「了解した、はやて。俺もそれで構わない」

普通に女性と会話できることをフェイトに感謝しつつ、デイルムツドは目の前の少女と話す。

「聞いたら悪いかもしれんねんけど……顔は怪我でもしたん？」

「そんなところだ。とは言え、痕になったりする傷ではないがな」

「そらよかった。デイル君かっこいいのに傷残ったら勿体無いもんな」

「そういうはやても可愛らしいと思うが？ 将来は美人になるな」

夕暮れの図書館で夕日を浴びながら朗らかに会話する美少年と美少女。

車椅子と顔の包帯と言う痛みの象徴がその美しさを際立たせており、その姿を見た周りの人間は本などそっちのけで二人を見ている。「ところでもうこんな時間だが……家族は心配していたりはしないのか？」

しばらく会話していたが、彼女を迎えに来る気配も無く、はやて自身も誰かを待っている様子が無かったので気になった。

「わたしは家族がおらへんねん。だからそういうのは大丈夫や」

話を聞くと、小さい頃に身寄りを失い、現在は父親の友人から援助を受けながら一人で暮らしているとの事だった。

学校には足の障害のため休学しており、今は通っていないらしい。辛いことを聞いてしまったと思ったが、はやてに特に気落ちした様子は見えない。

おそらく家族を失った悲しみは乗り越え、今は孤独であることの寂しさを感じているといった所であろう。

「そういうデイル君は大丈夫なん？」

「同居人がいるが、今は出かけているので問題ないさ」

現在フェイトとアルフはジュエルシードの気配を追って今朝から温泉地に向かった。

フェイトの魔力供給を受けたアルフの傷は癒え、戦える状態に戻っている。

もう少し様子を見てもよさそうだったがリハビリを兼ねたいとの事なので戦線に戻らせた。

「なので俺も今日は家に誰もいない」

デイルムツドも同行するかと聞かれたが、調べたい事があり、無理になのは達との接触する機会を作る必要もない。

何より、あんたがいなくても問題が無いつてことを見せてやるよと意気込んでいたアルフの様子もあったので断った。

「ほんなら今日はうちでご飯食べていかへん？」

フェイトは大丈夫だろうが、なのはの方は無事で済むのかと考えていると、はやてがそう言った。

「……そうだな。ならば同伴させてもらおう」

車椅子が大変なのはケイネス殿の様子で理解している。障害を抱えたこんな幼い少女が一人で暮らすのは大変で、何より寂しいのだろう。

「ほんなら買い物にいこっか！今日は腕によりをかけて作るでー！」

「それは楽しみだな。期待させて貰おう」

意気込んでいるはやての車椅子を押しながらデイルムツドの表情にも笑みが浮かんでいた。

聖杯戦争の時には感じるこの出来なかつた穏やかで微笑ましい気持ちになりながら、二人して商店街へ向かった。

その後、はやてと二人だけの夕食を終えて夜遅くまで話をし、また逢う約束をしたデイルムツドが家に戻るとフェイトとアルフが戻っていた。

暴走したジュエルシードを回収し、なのは達からも一つ手に入れたように現在は4つになった。

どんなもんだと笑顔で言うアルフの顔を見ながら、もしかしたらはやてとフェイトは気が合う友達になれるのではないかと思うデイルムツドであった。

「大体この辺りだと思っただけ……大まかな位置しかわからないんだ」

「確かにここは気配が多すぎる。簡単には見つからないだろうな」

はやてと出会ってから数日後の深夜。フェイト、アルフ、デイルムツドの姿は高層ビルの上にあった。

フェイトの探査魔法で姿ジュエルシードの位置を調べ、その回収のために

「ちよつと乱暴だけど……周囲に魔力流を打ち込んで、強制発動させるしかないね」

「民に被害を及ぼす方法であるならば止めさせてもらおうぞ？」

破魔の紅薔薇をアルフに。大なる激情をフェイトに。その切っ先を向けながら尋ねる。

最近はい互いに信頼してきているが、その協定を破るならば容赦はない。

「結界は向こうさんが張るだろうし問題無いだろうさ」

アルフが言う向こうさんと言うのは下にいるなのは達の事だ。

あちらはフェイトに気が付いておらず、デイルムツドがこちらに付いているなど夢にも思っていないだろう。

デイルムツドは刃を下ろしたのを了承の合図と受け取り、アルフがフェイトの代わりに魔力流を打ち込んだ。

その影響で雷鳴が鳴り響き出すと、なのは達もフェイトが近くに居ることに気が付いたのだろう。結界が展開し、外界と断絶される。

「バルディッシュュッ！」

《sealing form. set up.》

フェイトの声でバルディッシュュが封印用の形態に変化する。最初はデイルムツドが知る魔術とは全く違う機械の杖に驚きもしたが、慣れという物は恐ろしい者で、現在ではバルディッシュュを一個人として見ている。

魔力流の影響で発動したジュエルシードの煌々とした輝きに向けてフェイトの金色の光の矢が放たれる。

それと同時に放たれた桜色の魔力光がジュエルシードに激突し、せめぎ合った。

「ジュエルシードッ！シリアルXIX・・・封印ッ！」

互いの魔力がぶつかり合い、強烈な光を放つ。光が収まると、封印されたジュエルシードが静かに佇んでいた。

「俺はここで待機している」

「うん・・・見ててね」

「サクツとあたしとフェイトが片付けてやるよっ！」

ジュエルシードを手に入れるため、フェイトとアルフが飛び出していった。

アルフの傷が癒えた時、三人はデイルムツドをなのは達に対する必殺の切り札としてギリギリまで隠す事にした。

そして、今まで結果的に直接的な戦力として動けなかった侘びにと、デイルムツドは万が一の時に援護する役割を担うことになっている。

万が一の時・・・つまり、フェイト達に危機が訪れた時や捕まりかけた時に離脱の援護を行うという事だ。

デイルムツドの支援が後ろにあるという安心感によるものなのか、戦いに挑む二人には以前のような切迫した空気を感じない。

「二人の一騎打ち・・・このデイルムツド・オダイナが見届けさせてもらおう」

デイルムツドと別れたフェイトは白い魔導師と対峙し、アルフはユーノの相手をしている。

「こないだは自己紹介できなかったけど。私なのは、高町なのは」
ジュエルシードの目の前で互いに見つめあう中、なのはが唐突に自己紹介を始めた。

《scythe form. set up.》

その言葉を見せず、フェイトがバルディッシュを構え、斬りかかる。屋上で予想通りだと微笑んでいるデイルムツドには気が付いていない。

バルディッシュの攻撃を以前のようには上空に飛んで回避するが、ここからの動きは以前とは大きく変わっていた。

一番顕著な変化は魔法の制御だ。魔力を収束してから放つまでの速度が段違いに上がっており、一撃一撃が必殺の威力を持つ砲撃を連続して放つ。

速さを武器とするフェイトでも全てを回避するのは困難であり、時にはシールドで防ぎながら射撃で応戦するがなのはは膨大な魔力で構成した堅牢なシールドでそれを防ぐ。

近接戦ではデイルムツドから師事を受けているフェイトが上だが、なのははその攻撃をデバイスの補助を使って高速回避し背後を取って攻撃する。

「フェイトちゃんっ!!」

放たれた砲撃を障壁で防いだフェイトになのはが呼びかけた。その声は人の気配が無くなったビルに木霊し、大きく反響してデイルムツドの元にも届く。

「話し合うだけじゃ・・・言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど・・・!話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!!」

フェイトに向けて放たれた言葉だったが、それは屋上に居るデイルムツドの心に大きく響いた。

聖杯戦争の時、主であるケイネス・エルメロイ・アーチボルトが己

の想いを理解してくれないことを嘆いた。どれだけ主君に聖杯を捧げただけだと伝えても、彼は決して信じず、己を道具としてしか見ていなかった。

だが果たしてそれは主だけだったのだろうか。俺は主を個人としてではなく忠義を尽くすただの器としてしか見ていなかったのではないだろうか。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ探し物だから。ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で・・・ユーノ君はそれを元通りに集めなおさないといけないから。私はそのお手伝いで——」

なのはののように・・・彼女が今フェイトに向き合っているように：彼の人格や思想と向き合おうとしていれば、違う結末もあったのではないだろうか。

「これが私の理由！お願い！どうしてフェイトちゃんはジュエルシードを集めているのか教えて！」

「私は・・・」

「フェイト！答えなくていい！あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

なのはの想いに揺れ、答えようとしたフェイトだったがアルフの言葉で自らの目的を思い出し、宙に浮かぶジュエルシードに突進した、なのはもそれに反応し、ほぼ同時にたどり着き、二人のデバイスがジュエルシードを挟むようにぶつかった。

そして二人のデバイスに亀裂が走り、ジュエルシードの封印が解けた。

「駄目だ・・・！ジュエルシードが・・・」

「レイジングハートツ!!」

ユーノが叫ぶが、互いのデバイスが大きく損傷しており、暴走状態のジュエルシードを封印処置することができず、

絶望的な状況になのはとユーノの声に絶望の色が宿る。

衝撃が辺りを揺らし、魔力の奔流が周囲を吹き飛ばそうとした瞬間

「穿て、破魔の紅薔薇!!」

上空から放たれた真紅の長槍がジュエルシールドに直撃し、暴走する魔力が一瞬で霧散した。

「フェイトッ！やれっ!!」

破魔の紅薔薇を持ったデイルムツドが叫ぶ、爆発は止めたが、封印を行った訳ではない。

バルデイツシユを待機状態に戻したフェイトが駆け、ジュエルシールドを掴むと同時にデイルムツドが離れた。

「生まれ……生まれ……生まれ……!!」

両手からあふれ出そうとする魔力の奔流でフェイトの掌の皮膚が切れる。それでもジュエルシールドを離さず握り続けると、その願いに呼応したのか光が消え、沈静化した。

「フェイトッ！」

それを確認して安心したのか魔力を使い切ったフェイトが意識を失って倒れそうになったので慌てて支える。

「すまん、アルフ。姿を晒した」

「いや、最高のタイミングさ。むしろ出てこなかったら後で噛み付いてたね」

もし破魔の紅薔薇を使わなくてもフェイトはデバイス無しでの封印を行っていただろう。そうすればどうなっていたかなど考えたくない。

「デイルムツド君……?」

「なんで……」

案の定、デイルムツドの姿を見た二人が驚愕していた。

自分達を助け、久しぶりに再会した相手が敵と親しげに話しているば仕方が無いだろう。

「アルフ、フェイトを連れて先に行け。俺は少し足止めしてから戻る」
「わかった！感謝するよ！」

人型に戻ったアルフにフェイトを預け、二人の姿が見えなくなるのを確認すると、破魔の紅薔薇と大なる激情の切っ先を二人に向けた。

「さてせっかくの再会だが……すまんがそういう訳でな……二人が逃げ切るまでお相手願おうか？」

「どうして僕達の敵になったんですか！」

ユーノが沈痛な声で叫ぶ。あの日以降姿を消したデイルムツドのことを二人とも気にかけていたのだ。

「敵……と言う訳ではないさ。むしろなのはと同じ、ジュエルシードの暴走を止めたい側……仲間と言ってもいい」

「だったらどうして……！」

なのはの問いに答える義理はないが、先程の彼女の言葉を聞いた以上、互いを理解するためにも答えたほうがいいだろう。

「一つはあの二人に俺の理想を見た事……もう一つは……これはフェイトにも言っていないのだが、単純に彼女を放っておけんかったのさ」

最初に出会った夜。母親の為だと叫ぶ彼女のか悲しげな瞳を見て、そう思ったのだ。

「フェイトちゃんは何でジュエルシードを……」

「答えてもいいが……それはお前が自らフェイトから聞くことに意味がある……おそらく彼女の心を救えるのは、なのは……君だけだ」

「え……？」

その言葉を聞いたなのはが動きを止めた。

「さて、そろそろ逃げ切った頃だろう。なのは、どうかフェイトを頼む」

そして彼女達が何かを言う前にデイルムツドは気配を消して、暗闇の中に姿を消したのであった。

「怪我は大丈夫か？」

なのは達を撒いたデイルムツドが部屋に戻るとアルフがフェイトの掌の傷を治療していた。

「大丈夫。平気だよ」

無理に笑顔を作ってそう言うフェイトの掌は見ていて痛々しかった。

「明日は報告に、母さんの所に行くんだ」

「フェイトの母君の？ならば俺は周辺の散策をしておこう」

フェイトの住んでいた家は、次元を隔てた所にあるらしい。そんな所に素性のわからないデイルムツドが乗り込んで向こうに悪いだろう。

「デイルムツド！一緒に来てもいい……いや一緒に来てくれ！」

何より親子水入らずの空気に割り込むのはが申し訳ないと思ってそう言ったのだがそれをアルフが必死な様子で拒絶する。

「……わかった。同行しよう」

アルフの真剣な剣幕に不吉な気配を感じたので、デイルムツドが頷いた。

翌日になってその判断が正しかった事を身をもって知るのであった。

次元の守護者

膨大な魔力の弾丸をかくぐり、時には紅槍で払いながらデイルムツドが一気に接近していく。

なのはの物とは比べ物にならない高密度の障壁が展開されているが、そんな物デイルムツドには関係ない。

「穿て……破魔の紅薔薇……!!」

目の前の相手に向け、必殺の一撃を叩き込んだ。

「デイルムツド！止めてっ!!」

フェイトの叫びにその手を直前で止める。

シールドを透過し、喉元に突き突きつけられた紅槍を見て、ようやく目の前の女……フェイトの母であるプレシア・テスタロッサが動きを止めた。

何故このような事になってしまったのだろうか。

喉元に槍を突きつけられながらも、無表情にこちらを見下すプレシアを睨みながらデイルムツドは怒りを隠そうとはしていなかった。

『時の庭園』？』

「うん。そこで母さんとアルフと一緒に住んでいるんだ」

家を出る時、母親の事を話すフェイトはとても嬉しそうで、そんな見るのは久々であった。名前はプレシア・テスタロッサというらしい。

反対にアルフの様子は暗い。彼女によるとフェイトの母は『厳しい』ようで今回の報告も出来れば行かせたくないらしい。

「この短期間でジュエルシードを四つもゲットしたんだし、怒られることは無いと思うけれどね……」

「むしろ賞賛されるほどであろう。これほどの物、手に入れるだけで

も困難だ」

しかも、なのは達と競い合いながら、デイルムツドがいなければそれを二人で成そうとしていたのである。

そうして時の庭園と呼ばれる地に辿り着き、話をするためとフェイトが母親の元に向かう…….そこまでは良かった。

重く閉ざされた扉も向こうでフェイトの苦痛の叫びが聞こえるまでは。

「……なんだ?!」

後で紹介すると言われ、アルフと二人で待っていたデイルムツドが異常に気が付き、立ち上がる。

「いつもああなんだ……フェイトに厳しく当たって……あたしは助けてあげることができない……ッ!」

その言葉を聞き、ようやくアルフの言う『厳しい』の意味を理解した。

デイルムツドの時代と今は大きく違っはいるが、こんな叫びを上げる事になるのは今も昔も関係なく、常識の範囲を超えている。

「アルフッ! 魔力を貸してくれ!」
「デイルムツド? 何をするんだい?」

目の前の扉は硬く閉ざされており、子供になったデイルムツドの力では開くことができない。

さらにこの扉には魔力衝撃だけではなく、物理的にも硬度で、破魔の紅薔薇だけでは破壊不可能である。

「最大の一撃でこの扉を破壊する。アルフは俺に魔力を注ぎながら、破魔の紅薔薇の刃を扉に押し付けておいてくれ」

アルフに破魔の紅薔薇を渡し、大なる激情を取り出して構えた。
今は自分の力では解放できない大なる激情だが、辺りには高密度の

魔力が漂っている。それに加え、アルフの魔力の補助を受ければ可能かもしれない。

「真名……解放……ッ!! 大なる激情 《モラルタ》ッ!!」

デイルムツドの叫びに呼応し、膨大な魔力を吸収した神の剣が神々しく輝く。

それを一気に振り下ろすとあらゆる防壁の第一層のみを破壊する大なる激情によって最小の衝撃で扉を破壊した。

強引な真名解放により大なる激情が碎け散った。再生するまでの一週間は切り札の一つを失った状態だが今はそんなことはどうでもいい。

アルフから破魔の紅薔薇を受け取り、室内に入ると、そこには魔力の紐のような物で両手を吊るされているフェイトと鞭を持った女がいた。

それを見たデイルムツドが女に飛びかかる。そうしてそうして冒頭の状態に戻る。

「お前はなんだい？」

フェイトが目の前にいる限り、自分が殺されないとわかっているからだろう。

命を奪おうとしている紅槍を前にしてもプレシアは微動だにせず、デイルムツドを冷たく見下ろしている。

「フィオナ騎士団、デイルムツド・オディナ。今はフェイトと共に行動を共にしている」

「あらあら、ずいぶんと可愛らしい騎士さんね。それでそこのお姫様を助けに来たってところかしら？」

「そういう訳だ。フェイトは連れて帰らせても貰うぞ」

答えを聞かず、破魔の紅薔薇の切っ先でフェイトを戒める縄を斬り、解放する。

「ふん……好きにしなさい。フェイト、次は母さんの期待を裏切らないでね……」

そうしてプレシアがフェイトの答えも聞く前に姿を消した。

「デイルムツド……」

「大丈夫か？とりあえず話はここを出てからだ」

弱っているフェイトをいわゆるお姫様抱っこ形で連れ、破壊した

扉から出るとそこではアルフが待っていた。

「フェイトツ！」

「アル……フ……」

駆け寄ってくるアルフと優しく見つめてくるデイルムツドの姿に安心したフェイトが意識を手放した。

「フェイト……ごめん……ごめんよ……」

項垂れているアルフと共に三人の拠点である自宅に戻ったのであった。

「駄目だ（よ）」

自宅に戻りすぐに目覚めたフェイトの言葉をデイルムツドとアルフが却下した。

「そんな身体ではいずれ倒れる。今は休んで体力を万全にしろ」

「そうだよっ！今日くらい休んだっていいじゃないか！」

デイルムツドに言われて食事は前よりも摂るようになったが、その分を消してしまうほど身体を酷使している。特にここ数日間、負担を考えて訓練を取り止めざるを得ないほどだ。

「だけど……！ジュエルシードを手に入れて帰ってきたら……きつと母さんも笑ってくれる……また昔みたいに優しい母さんに戻ってくれる……だから！」

いつもは口数が少ないフェイトにしては珍しく、力強い口調で懇願する。

気絶させてでも休ませるべきかと思っただが、そんなことをすれば目が覚めた時にデイルムツドやアルフの目を逃れてジュエルシードを探しに行きかねない。

「わかった……ただし俺かアルフが危険だと判断したら素直に撤退しろ。それだけは約束してくれ」

「それでいいよ……」

二人でフオローすれば最悪の事態にはならないだろう。やむを得ない判断だが、フェイトの意思を尊重する選択を選んだ。

破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇を取り出し、背に構える。大なる激情を失っているのは正直痛いがそれぐらいで弱音を吐くわけには行かない。

「そういえばその黄色い槍は久々に見たね。どんな力があるんだい？」

アルフが黄色い呪槍を見て尋ねてくる。そういえば二人の前で必滅の黄薔薇を見せたのは最初に会った時以来である。

危険な能力であるので対人戦闘が多かったので意図的に封じていた。

「それは明かせんな。破魔の紅薔薇よりも厄介な能力とだけ言っておこう」

「バリア無視の攻撃より厄介って想像つかないんだけど……」

顔を引きつらせながらアルフが言う。破魔の紅薔薇の一撃を受けた者としては信じられないのだろう。

「行こう……二人とも」

そんな二人にバリアジャケットを纏ったフェイトが声を掛ける。

その声には母の為にといい強い思い込められていた。

「あいよっー」

「承知した」

その後ろに付き従う二人の姿はまるで主君に従う騎士のようであった。

「感じるね。あたしにもわかる」

「うん……もうすぐ発動する子が……近くにいる」

夕暮れの中、三人はそこでジュエルシールドが発動する気配を感じ

取っていた。

「今までと違って、俺でもその気配を明確に感じ取れるな……」

今までは発動中の物しか知覚できていなかったデイルムツドであったが、今回はすでにその気配を漂わせている。

おそらくはそれだけ強力であるということだろう。

「改めて言うが……俺が引けと言ったならば必ず引け。殿しんがりは俺は務める」

「……うん。ごめんね、デイルムツド」

「気にするな。女性に優しくするのは我が聖誓ゲッシュユだ」

「げっしゅ？なんだいそれ？」

アルフがデイルムツドに尋ねる。

「俺の国での誓いさ。己に一つ制約を課す事で神の加護を得ることが出来る」

「神様って……曖昧な物を信じてるんだね？」

「今……この世界ではそうかも知れんが俺の世界では確かに存在していた。」

実際に四つの宝具を与えてくれた養父が神の一柱であった。

聖杯戦争の時、全盛期の状態でも特出した能力を持たないデイルムツドが強大な力を持った古今東西の英霊達に立ち向かえたのは、養父の宝具のおかげである。

クラスの制限によって破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇しか使えなかったが、それでもセイバーやバーサーカー相手に有利に立ち回ることができた。

「というかその誓いって……絶対に身を滅ぼすよ？」

呆れた声のアルフに、知っている。とだけ答えておいた。

後悔はしていないが実際破滅を迎えたのは事実として受け入れなければならぬだろう。

「というかそれならなんで最初は素直にジュエルシールドをくれなかったのさ？」

「あの時点では敵であつたらう？女性だからと言って無条件に頼みを受ける訳じゃないさ」

逆に言えば味方であれば無条件に受けるということでもある。

二人は、聖誓のことを聞いて彼が一緒の家に暮らす事を受けたのだという事に気が付いた。

その事をフェイトが問おうとした時、近くで眩い光の柱と魔力の奔流が発生した。

「さて……フェイトの為にもう少し休んでおきたかったが……行くぞ」

背にある二槍を両手に構え、駆け出した。アルフとフェイトもその後が続く。

ジユエルシードの発動した公園にたどり着くとそこでは巨大な樹の魔物が蠢いていた。

すでに周囲にはユーノが張った結界（フェイト曰く認識をズラす効果がある）が発動し、なのはが杖を構えている。

先制するために後ろからフェイトが魔力弾の雨を放つが、樹も魔物が障壁を展開してそれを防いだ。

「障壁を張るとは……今までの物とは違うようだな」
「まあ、こつちにはディルムツドがいるから関係ないね」

確かに障壁を無視して攻撃できる破魔の紅薔薇は、あの魔物の守りという意味がない。

「そうだな……と言いたいが……ここは俺よりあちらと合わせた攻撃を行ったほうがいいな」

そうやって空中で杖を構えているなのはに視線を向ける。
対人戦においては絶大な威力を発揮する破魔の紅薔薇だが、あそこ

まで巨大な相手では突破しても紅槍でのダメージは殆ど無いだろう。
「なのは！フェイト！俺が引き付けている間に砲撃を同時に撃ち込め

！」
ディルムツドが叫び、駆け出した。当たれば人間を一撃で押し潰す

ような巨大な根の攻撃を容易く回避しながら接近する。
「必滅の黄薔薇ッ！」

障壁を展開してこない所まで一気に接近し、鞭のようにしなる巨大な根を元から黄槍で切断する。

元が命ある樹であるからか、治癒不能は発動し、切断された部位は元に戻らない。

今度は破魔の紅薔薇を魔物の眉間付近に投擲する。それは障壁の輝きを無視して魔物を貫き、その叫びが木霊する。

「あの紅い槍……障壁を無視して……この前のジュエルシードの暴走も……もしかして……！」

ユーノが以前の暴走を止めた時の様子と今の攻撃を照らし合わせ、紅槍の特性を見抜いたようだ。

しかし単純に再生が遅いだけだったのか、それとも予想すらできなかったのか、黄槍の能力には気が付いていない。

「道は開いたぞ！二人とも！やれっ！」

すぐに離脱して紅槍を回収したデイルムツドが振り返って叫ぶ。

「撃ち抜いて——デイベイン！」

「貫け豪雷！」

それに呼応するかのように、二人のデバイスの先に魔力が収束していった。

《Buster!》

《Thunder smasher!》

そしてほぼ同時に、十歳の少女が扱う力とは思えない強大な魔力が魔物に向けて放たれ、断末魔の叫びを上げながらその輪郭を崩し、ジュエルシードを残して消え去った。

「ジュエルシード、シリアルVII！」

「封印！」

二人が同時に封印を施し、辺りに静寂が訪れる。

デイルムツドが紅槍と黄槍を背に戻した。封印は手伝い、ジュエルシードの奪い合いには参加しない。デイルムツドはこの位置を動くつもりが無いからだ。

「私は……フェイトちゃんと話をしたいだけなんだ」

なのはがフェイトに思いを伝えようとしている。

フェイトはそれを拒絶するようにバルディッシュを構え直した。

「私が勝ったら……ただの甘ったれた子じゃないってわかったら……」

お話。聞いてくれる？」

それを聞いたフェイトが頷いたのを確認したデイルムツド達とユーノは一步下がり、戦いの行方を見守る。

共に譲れない信念を持ち、ジュエルシードを巡って対峙する二人の少女がぶつかり合う直前――

「ストップだ！……ここでの戦闘は危険すぎる！」

突如前触れ無く現れた者がその道を阻んでいた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情をきかせてもらおうか」

今のデイルムツドよりも小柄で、なのは達と同じくらい背丈の少年だった。まだ幼いがなのはとフェイトの動きを同時に抑える事ができるとはかなりの実力を持っているのがわかる。

とはいえ、関心しているばかりではない。デイルムツドとしては彼の行動は不快であった。

「このまま戦闘行為を続けるならっ……?!」

地面に三人が降りた瞬間、魔力弾の雨がクロノと名乗った乱入者の少年を襲うが、少年はそれをシールドで防いだ。隣にいたアルフが跳躍し攻撃を放ったのだ。

「フェイト！撤退するよっ！離れてっ!!」

アルフが続けて放った魔力弾が周囲に着弾し、煙幕となり三人の視界を覆い隠す。

しかしフェイトは撤退の約束を無視し、ジュエルシードを確保しようとして飛び出す、そこを乱入者に撃たれ墜落してしまった。

「フェイトー！」

アルフが間に合い、地面にぶつかる前に受け止めるが、その隙を見逃す気はないのだろう。少年の杖が魔力を収束しており、放たれよう

としていた。

「少年、隙だらけだぞ?」

「くっ?!」

こちらも黙ってフェイトがやられるのを見ている訳には行かない。一声かけてから黄槍を突き出すと、鍛えているのだろう。しつかり反応してシールドで防いだ。

「ほう……いい反応だ。まだ未熟な所はあるようだがな」

反応できていなければ黄槍で一日動けなくしてやろうと思ったのだが、若いながらすでにセンスはあるようだ。

「フェイト、素直に引くと約束したしただろう……アルフ、フェイトを任せた」

「デイルムツド……」

「ちゃんと戻っておいでよっ!」

二人の気配が遠のいたを確認したデイルムツドが二槍を構え直し、目の前の少年に向き直る。

「さて突然割り込んで一騎打ちを邪魔するとは……少々無粋ではないかな?」

「君は何者だ。彼女達の仲間か?」

「正々堂々の勝負を汚した者に名乗る名はない。さてクロノと言ったかな? ここで散らすには勿体ない才を持つていそうだ……殺しはしないが二人が逃げ切るまで少し付き合っ貰おうか?」

「ふざけるなっ!」

格下扱いされたことが気に食わなかったのだろう。クロノが即座に魔力を収束し攻撃に移る。

「遅い」

「っ速い?!」

それが放たれるよりも速くデイルムツドが接近し、紅槍を突き出す。

クロノも即座にシールドを展開し、その攻撃を防ぎながら反撃しようとしていた。

「初撃はサービスだ。次はないぞ?」

「何っ?!」

攻撃をわざと逸らすと喉元に向けられていた切っ先がずれ、シールドを無視して通り抜けた紅槍がクロノの頬を切り裂いた。

「シールドを……!」

距離を取ったクロノの頬から紅い血が流れている。格下扱いされて感情が怒りに揺れていたが、デイルムツドが持つ武器の脅威に冷静さを取り戻していく。

「やっぱり……魔力を打ち消している!」

「ほう……やはりユーノは気が付いていたか?」

目の前で起こった現象で自分の推理が正しかったと判断しているユーノに賞賛を込めて答えを返す。

「それはなんだ……? ロストロギアか……?」

裂かれた頬を押さえながらクロノが詰問してくる。流れる血の量から、けして浅くはない傷のはずだが、それに動じる様子はない。

「ロストロギア……ジュエルシールドのような物をそう呼ぶのだったか? 生憎だが、我が宝具はそのような物ではない」

槍を振るって刃先に付いた血を払うと破魔の紅薔薇を突きつけ、必滅の黄薔薇を背に戻した。

「貴様が何者かは興味ないが……騎士の前で勝負を汚した罪は償って貰おうか?」

引くわけにはいかないクロノが、飛び出して来たデイルムツドとぶつかり合った。

次元空間航行艦船『アースラ』の中は、地上で発生した異常事態に動揺が走っていた。

画面ではクロノが逃げた少女の味方と思われる少年と交戦し、一方的に押されている。アースラの者は全員クロノの実力を理解し信頼しており、その彼が圧倒され、追い込まれているということが信じら

れなかった。

「あの槍の情報は？」

アースラの艦長であり、クロノの母親であるリンディ・ハラオウン提督は打開策を見つげるために情報を調べていた。

しかし、シールドを無視する武器など管理局に取っても前代未聞であり、管理局の過去のデータには該当する者がいない。

恐ろしいのは先ほどからあの少年は本気を出していない。つまり彼が本気を出せば、いつでもクロノの命を奪える状態である。

「艦長！」

内心で焦りつつも表面上で冷静さを保っていたリンディに、管制官であるエイミィ・リミエツタが声を掛ける。

「何かわかったの？」

その声に他のオペレーター達も振り返る。

「現地も物である可能性を考え、第97管理外世界『地球』の文献から該当する情報を探してみたんです。そこに伝わる御伽噺……ケルト神話にあの少年と共通する物を発見しました」

「御伽噺？」

それと今の状況がなんの関係があるのかと全員が同じことを思い、不審な目を向けてきたが、エイミィはそれを無視して話を続ける。

「はい。私も最初は流しそうになったのですが、そこにある名前が先程逃走した使い魔の言っていたものと同じなのです」

画面にエイミィが調べたデータが表示される。

「フィオナ騎士団 《輝く貌》 デイルムツド・オディナ……」

魔を打ち消す紅槍と治癒不能の呪いを掛ける黄槍、二振りの剣を持つ騎士。

彼の右目下の泣き黒子は、生まれながらに宿った魅了の呪いで、女性を狂わせる絶世の美男子と書かれている。

「魔を打ち消す紅槍……信じられないけど一致する所は多いわね……」

戦闘中の様子を拡大すると彼の右目下には泣き黒子があった。

伝説の英雄が蘇って襲ってきている……滑稽無糖だがそれを信じ

させる条件が揃い過ぎている。

「……待つて！ 彼の左手の槍は……！」

もしこれが真実であるならば、今クロノを斬りつけようとしている彼の左手の黄色い短槍の正体は——

「治癒不能の呪いを掛ける黄槍……！ 黄色い槍に当たっちゃ駄目ーっ!!」

それに気が付いたエイミイが叫んだ。

「なかなかやるな。少年」

「クロノだ……！」

バリアジャケットは所々破れ、目に見えて疲労しているクロノに対し、デイルムツドは全くの無傷である。

「デイルムツド君……！」

「なのは、手を出すなら俺は本気を出すぞ？」

本気を出す。つまりは命を奪う気で行くということだ。そう言われてしまえば彼女は手を出せない。デイルムツドの目的はフェイトの離脱までの時間稼ぎであり、彼を倒す気はない。

「とはいえ……フェイトもそろそろ逃げ切っただろう。俺を素直に逃がす気はないかな？」

「それをこちらが受けても……っ！」

「だろ？ 君の目は諦めていない。最初は無粋な輩だと思ったが……非礼を詫びよう」

そうして背に戻していた必滅の黄薔薇を左手で構える。

彼には申し訳ないが追ってこられたら厄介なので、一日は動けないようにしておかねばならない。

「次の一撃で仕舞いにする」

「こちららも犯罪者を逃がす気はない……捕まえさせてもらうぞ！」

確かにあちらからすれば悪はこちらなのかも知れない。しかし、フエイトの為にもここで捕まる訳には行かなかった。

クロノの魔力が溜まるのを待ち、その間に訪れる静寂。魔力が溜まると同時にクロノが駆け出した。絶対に外さない零距离で当てるつもりなのだろう。

(防御は無意味……ならば……!)

どういう仕組みかはわからないが、あの紅槍には防御は意味がない。ならば防御の魔力を加速に回し、右肩を貫かれてでも左手に集めた魔力を叩き込むことに費やすのがいいと判断したクロノが接近する。

「ふっ……」

防御する気のないクロノを見てデイルムツドが笑みを浮かべ、左手の黄槍を突き出し、二人が交差する直前――

『黄色い槍に当たっちゃ駄目ーっ!!』

念話で響いた幼馴染の叫びに、クロノは考えるより前に反射的に攻撃を当てることを諦め、回避に徹した。

「くっ……!」

それでも神速の槍を避け切ることは叶わず、バリアジャケットの紅槍で斬られて破れていた部分から肌を裂かれてしまう。

「本能で危険を察したのか……見事な反応だった……が、終わりだ」
「なんだと……?」

右肩を押さえながら膝を付くクロノの前で紅槍と黄槍を消した。自分の右肩を治そうと治癒魔法と思われるものをクロノが掛け、それでデイルムツドの言った意味を理解した。

「傷が……治らない……?」

「与えた傷に治癒不能の呪いを掛ける呪槍……必滅の黄薔薇。本来は永遠に治らんが今は力が落ちている。一日経てば呪いが解けるだろ

う」

『申し訳ありませんが、今解いてもらわなければ困ります』

背を向けて立ち去ろうとした時、空中に現れた魔方陣に女性の顔が浮かんだ。そこにいるクロノの仲間だろうか。

「すまないが俺自身では解くことはできません。必滅の黄薔薇を破壊すれば解けるが……この状況で切り札を破壊することはできませんのでな。諦めて欲しい」

勿論、彼の命を奪いたくはない。元より後で破壊するつもりであった。

『フィオナの騎士とはずいぶんと冷たいのですね？デイルムツド・オデynaさん？』

「いずれ気づくと思ったが……必滅の黄薔薇の破壊だが、こちらの条件を飲むならば応じよう」

『……その条件とは？』

クロノの出血量では一日持たない。なので絶対に必滅の黄薔薇を破壊する必要がある。

その為にある程度の条件は受けざるを得ないと相手は思っているはずだ。

「そう警戒するな。数日……いや、少なくとも一週間。フェイト達に手を出すな。それを受けるのなら黄槍を破壊しよう」

最初からクロノの背後にいる者から転移魔法を使えないデイルムツドが逃げ切れるとは思っておらず、必滅の黄薔薇で攻撃し、その能力をあえて教えたのは、クロノの後ろにいる者を引きずり出すためであった。

『……わかりました。お受け致します』

その言葉を聞いたデイルムツドが必滅の黄薔薇を再度取り出し、彼女の目の前で破壊する。

「これで必滅の黄薔薇の呪いは消えた。後は治癒魔法で治すことができるだろう」

『ありがとうございます。こちらは一週間は彼女に手出しを致しません。ついでにこちらで事情を説明していただきたいですがよろしい

ですか?』

「最初からそのつもりであろう………いいだろう。こちらも色々
聞きたいのでな」

相手がこちらの提案を受けた以上、しばらくはフェイトも回復に努
めるところができるはずだ。

傍にアルフがいれば問題は無いだろう。もし彼らが約束を違えれ
ば容赦するつもりはない。

回復を終えて立ち上がっていたクロノの方を振り返る。

「さて……そちらの拠点に案内してもらおうか?」

騎士の生き様

「凄いな。俺の知る魔術とは全く違う。この世界には驚かされてばかりだ」

「……僕からすれば君の武器の方が驚きだよ」

「にやはは……」

ボロボロのバリアジャケットのまま歩くクロノが関心するデイルムツドを睨み、後ろにいるなのはがそれを苦笑いしながら見ている。

あの後、デイルムツド、なのは、ユーノの三人はクロノによってアースラに連れて来られていた。

素直に事実上の降伏勧告に従ったのは、逃げて二人に合流するのは困難であると思つたのと、ここの者達にある『交渉』を行うためであった。

「俺には魔術の才能はないからな。宝具……武器でそれを補わなければならぬのさ」

「魔術以外に君に勝つてる物なんてないよ……」

「謙遜するな……今回は俺が有利な状況だった。そちらの有利な舞台であれば俺に勝ち目は無い」

それは冗談でもなく、対魔力も低く、結界宝具も持たないデイルムツドがでは遠距離から大火力の砲撃を連続で浴びれば耐える事はできない。

デイルムツドの宝具は一对一の近接戦であれば強力な効果を発揮するが、それ以外の状況ではその力を発揮しづらいのだ。

「さて、いつまでもその格好では窮屈だろうしバリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

「あ……そうですね……それじゃあ」

デイルムツドに対する棘のある物言いとは違い、なのはに対しては優しい声で声を掛ける。

先ほどまで緊張した様子のなのはが安心したのか、前かがみで恐々と云つた様子からいつもの雰囲気に戻り、バリアジャケットを解除した。

「君も、元の姿に戻っていいんじゃないか？」

「ああ、そうですね。ずっとこの姿だったから忘れていました。」

と言ったクロノの視線の先にいるのは足元を歩いていた使い魔・ユーノだった。

疑問に思っているデイルムッドとなのはの様子に気が付かないまま、ユーノが目を瞑ると彼の周りが光だした。

「ふえ?!」

光が収まった時、そこにいたのはなのはと同じ歳くらいの少年がいた。代わりにフェレットの姿が無いということはつまりはそういうことなのだろう。

アルフで慣れていたので特に驚きはしなかった。どうやら彼も人型にもなれたようだ。

「ふう……なのははこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

目の前の少年……ユーノがそう言うと、硬直していたなのはの絶叫が廊下に響き当たった。

「落ち着けなのは。同じ使い魔のアルフだって人型になるだろう？おそらくあれと同じだ」

「だから僕は使い魔じゃありませんって!!こっちが本来の姿ですよ?!」

「何っ?!……人間だったのか……!」

「本当に使い魔だと思ってたんですか?!……えーっと……なのはとは最初に出会った時はこの姿だったよね？」

同意を求めようになのはに問いかけるユーノだったが、当の彼女は勢いよく首を振っている。

運命共同体のパートナーの間にはどうやら見解の相違があったよううで二人とも動揺していた。

「二人とも、艦長を待たせているので話は後でしてくれないか？」

黙って聞いていたクロノが会話を切り上げるように伝え、二人ともそれで落ち着いたのか黙ってクロノの後を付いていった。

「艦長。来てもらいました」

付いて行った先の扉が開くとそこには先ほど通信を送ってきた女

性の姿があった。

「お疲れ様。まあ三人とも、どうぞどうぞ、楽にして？」

機械的な場所に似合わない純和風の部屋で待っていた彼女は、先ほどの凜とした雰囲気はどこに行ったのか、打って変わった朗らかさで迎えたのだった。

「なるほど……そうですか。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

「はい……それで僕が回収しようとして……」

この艦の艦長でありクロノの母親……リンディ・ハラオウンはなのは達からこれまでの事情を聞き、頷いた。

デイルムツドの話は後ほど話すことになっており、今は先に二人がこれまでの経緯を話していたのだ。

「あの……ロストロギアって何なんですか？」

ふと、なのはが気になっていた事を尋ねる。デイルムツドの詳細な情報を知っている訳ではないので話に耳を傾けた。

次元空間の中に存在する無数の世界の中には、自らの文明によって滅びを迎えた世界の技術の遺産が残り、それが他の世界に流れ出てしまっていることがある。

それらは使用法は不明だが下手すれば世界どころか次元を歪ませてしまう程の物らしい。

「それらを総称してロストロギアというのよ」

「デイルムツド君の持っているあの槍もそのロストロギアなの？」

黙って話を聞いていると、なのはに話を振られた。

「それとは異なるな。宝具は『物質化した奇跡』だ。今は破壊されカタチを失っても俺が存在する限りは再びその手に戻ってくる……時間がかかるがな」

あまり理解している様子はなさそうだったがクロノとリンディの

方は意味を理解していた様子だった。

「じゃあそのついでに今度はデイルムツドさんのお話を聞かせてもらいましようか？」

リンデイがお茶に角砂糖を入れながら今度はデイルムツドの事情を尋ねてきた。

隣でなのはが引きつった顔をしているのでおそらくはあの飲み方は異常なのだろう。

「漠然としているな。何が聞きたい？」

「色々あるけれど……そうねまずはあなたの正体かしら？」

予想に反して、いきなり核心を突いてきた。現状を伝えるためにも己の身の上を語る事に問題は無い。しかし隣にいるのはやユーノに聖杯戦争の事を話すのは憚られた。

「気分が良い話ではないのだが……なのはが退出した後ではいけないだろうか？」

「私が聞いちやいけないの？」

話して貰えないのかとなのはがデイルムツドを見ながら尋ねてきた。

相手のことを知り、分かり合おうとする彼女だからこそ、聞きたいと思っているのだろう。その意思を汲んで話を聞かせることにした。

「俺の以前いた世界はここと殆ど変わらない地球だった。この世界と異なる魔術が存在していたという違いはあったが」

そしてそこにはあらゆる願いを叶える奇跡の器が存在していた。

「それはどんな願いでも叶える願望機……『聖杯』と呼ばれている」

「ジュエルシードと似ているんだね」

「全く違うな。ジュエルシードの方がずっといい……その聖杯を巡り、七人の魔術師がマスターとなり、それぞれが伝説の英雄をサーヴァントとして召喚して殺し合う。そして勝ち残った者だけが聖杯を手に行うことができる聖杯戦争が行われていた」

殺し合いと聞いてなのはやユーノが息を呑むのが聞こえた。まだ幼い彼女達には信じられない世界なのだろう。

「それが君の正体と何の関係が……」

黙って話を聞いていたクロノが唐突に語られ始めた話に疑問を持つ。それとデイルムツドの関係性が理解できていない。

「そこにケルト神話の英雄『デイルムツド・オディナ』もその殺し合いに呼び出された。ってことかしら」

己の正体に気が付いているリンディだけがその意味に気が付いていた。

別次元の世界の一介の騎士に気が付くとは思わなかったが、なんらかの情報を知る手段があったのだろう。

「正確には英霊の情報から作られた分身だが。俺は槍兵……ランサーとして戦いに参加した。情けないことに無様にも早い段階で脱落したがな」

どのような結末を迎えたかは言わなかったのは、あまりにも無念な最期だったので出来ることなら教えたくはない。

デイルムツドが命を落としたのが信じられないという表情をしているクロノ達には申し訳ないがこればかりは黙秘させてもらおう。

「命を落とした俺は聖杯の中へと消えるはずだったのだが……気が付けばこの世界にいた。理由は俺にもわからん」

その後目覚めてなのはと出会ったこと。別れて別行動している間にフェイト達とジュエルシードを巡って戦い、共同戦線を張っていたことなどを話した。

そして『交渉』を行うためにもフェイトの現状、母親の虐待、ジュエルシードを集めているのは母親の命令であり、フェイトも母に認めてもらったためであることを教えた。

「さて、素直にそちらの要求に応じてここに来たのは交渉したいと思っただからだ」

「交渉？」

隣ではフェイトの苦しい現状を知ったなのはが泣きそうにも怒っているようにも見える様子になっていたが、話を続行する。

「先程クロノが言っていたが……俺が犯罪者であるならばフェイトもそのような扱いになるのだろうか？」

「残念ながらそうね。貴方が言った事情や子供である事など考慮する

から……それほど重い罪にはならないはずだけど」

「どうやら減刑は可能であるようだが、確実に罪を無くすのは難しいらしい。それならばここに来た意味はあっただろう。」

「フェイトの無罪の約束をしてほしい。こちらが提示するのは事件解決までの協力。それで足りないのであれば、彼女の代わりに罪を受けよう……無論、俺の罪と合わせてな」

「フェイトと共に行動している間、久しぶりに……聖杯戦争の時には一度も感じる事が出来なかった安らぎを感じることができた。」

「彼女には恩がある。そして俺はそれを返したいと思っている」

「彼女はそんな気は無かっただろうが、共に日常を過ごしている間は騎士としてではなく、人として生きる事ができた。」

「彼女を救いたい。リンデイ・ハラオウン殿。我が槍をその為に使用せたいだけないだろうか？」

「彼女の苦しみや痛みを知った。だからこそ彼女には幸せになってもらいたいと思った。」

「わかりました。貴方の協力を受け入れましょう」

「ならば君が笑えるように、騎士となって己の全てを賭けて君を救おう。」

「民間協力者であったなのは達は、これ以上この件に関わらずそれぞれの日常に戻っても良いそうさだ。」

「しかし、すぐにそれを納得できない二人は一度家に戻って、今後どうするか考え結論を出すという事となったのだ」

「まあ、戻ってくるだろうな」

「……貴方もそう思いますか？」

「急に余所余所しくなったクロノがなぜか敬語で話してきた。デイ

ルムツドの顔にはクロノ特製の魅了封じの術が掛けられている。

フェイトの物より優れているようで、包帯で隠さなければならぬところは変わらないが能力の低下が彼女の物より大きくないという点がある。

「敬語は好まん。それともやはり俺の事が気にいらんか？」

「そうではな……そうじゃなくて、英雄って呼ばれる人物だと知ったらこう……」

現在デイルムツドはクロノと共にブリッジに向かっている。

協力者として認められ、フェイトの減刑を条件にしているので逃げることは無いだろうというリンディの判断でクロノと一緒にであれば艦内を自由に動いていいということになった。

「俺はそんな称えられる人間ではないさ。むしろこちらが敬語を使つたほうが良いのではないか？」

彼の役職である執務官とは事件捜査や法の執行の権利、現場人員への指揮権を与えられた者の事で、優秀な人間の中でも一部しかかなれないものらしい。

クロノはすでに三年のキャリアを持ち、組織の上層部からの信頼も厚いと先程リンディが熱く語っていた。

「それだけは止めてくれ」

懇願されたので互いに普通に喋る事になった。ちなみに先程教えてもらったのだが彼は14歳なのはよりも年上だったらしい。

クロノと行動を共にさせたのはおそらくリンディはデイルムツドを完全に信用しておらず、監視の為に付けているのだろう。

ブリッジに向かう途中の廊下で立ち止まり、立ち止まってこちらを振り返るクロノに対し頭を下げた。

「クロノ・ハラオウン、これまでの非礼を改めて詫びさせてくれ。貴公は勇敢な男だった」

クロノは圧倒的な能力差にも怯まず立ち向かい、黄檜の呪いを受けても尚、死へ恐怖に飲まれなかった。その強さにデイルムツドは本心から敬意を表し、それを行動で伝える。

「い……いや、そんな褒められると……というか頭を上げてくれ」

若くして執務官となったクロノを妬む者は多いが、逆にこんな風に賞賛され敬意を示されたことが無かったため、クロノは戸惑っていた。

「君と違い、武しか誇れる物がない男だが……背中を預けてもらえれば嬉しい」

「あ……ああー！こちらこそよろしく頼む！」

主には恵まれないが、生前は友が多く、慕う者が多かったのはこういうところがあつたからなのだろう。

最初は気に入らないところも正直あつたが、強く、礼節を重んじ、自分を尊重してくれると言った今までに無いタイプの人間にクロノはすっかり信頼を寄せていた。

デイルムツドがブリッジに入って来た時、クロノのことで文句でも言おうと思っていたクルー達は、クロノのそんな様子に戸惑い、虚を突かれた。

しかし、自分を驕らないデイルムツドの謙虚さはやがてクルー達に受け入れられ、数時間後には彼を仲間として歓迎されたのだった。

デイルムツド・オディナ。主の為に尽くす男であるが、主がいない時の方が輝いていた。

「私の……せいだ……！」

夕方の戦いから数時間が経過し辺りが暗くなった頃、傷だらけの身体をソファに横たえながら、フェイトは激しい後悔に襲われていた。

デイルムツドに追っ手を抑えてもらったおかげで管理局の追撃を受けることなく、連続した転移魔法を使ったことで探知魔法を

撒くことができた二人は満身創痍であったが拠点であるマンションの一室に戻ることができた。

「ちゃんと……デイルムツドの言った通りに下がっていれば……!」

しかし、あれからどれだけ待っても彼は戻って来ず、探査魔法を使っても彼の気配を探知することが出来なかった。

彼が裏切るとも、二人を捨ててどこかに行くとも思えない。つまりは捕まったか、もしくは最悪の場合……。

「大丈夫だよフェイト!デイルムツドがやられる訳無いさ!」

最悪の結末を想像して顔を青くしているフェイトにアルフが励ましの言葉をかける。アルフにはあの堅牢な扉を壊して

あの鬼ババアからフェイトを救い出してくれた男が負けるとは思えなかった。

優れた洞察眼(彼曰く心眼というらしい)を持つデイルムツドは周辺にばら撒かれていたサーチャーの存在に気がついていたのだろう。

「早く……ジュエルシードを集めに行かないと……デイルムツドの行動を無駄にしちゃう……」

もしも一緒に逃げることでできていれば……と思ってしまう。

おそらく彼は転移魔法を使えない自分ではその眼から逃げられないと悟ったのだろう。

合流することでフェイトの居場所を探知されることを警戒し、単独で逃走したか投降したといった所だとアルフは考えている。

「だめだよ!あいつはそんな風にフェイトが苦しむのを望むわけがない!3日でいい……お願いだから今は身体を休めて……!」

ボロボロの身体で、それでも無理をしようとするフェイトをアルフが必死に止めた。

——フェイトを任せた

別れ際にデイルムツドが言った言葉を思い出す。

きつとあれはあの場から逃がすことだけではなく、フェイトのフォーも任せるといふ事だったのだろう。あの時点でデイルムツドは

この可能性を覚悟していたのかもしれない。

だから改めて誓おう。

「あたしは必ずフェイトを守るから……！どんな事からも……絶対に！」

それがあたしの聖誓だ。ゲッシュ

「凄いやゝ。どっちもAAAクラスの魔導師だよ！」

エイミー・リミアツタが画面の中で戦う二人を見て感嘆の声を上げ、その映像を共に見ていたデイルムツドとクロノも二人の強さを改めて実感していた。

クロノの幼馴染である彼女はデイルムツドが最初ブリッジに入った時は非情に険悪な様子だったが、

彼がそれを気にしていない所か、いつの間にか友人になっていたのを見て、彼女も怒りを収めてくれた。

「最大発揮値はクロノ君のを上回っちゃってるね」

「魔法は魔力値だけの大きさじゃないだろ」

自分は二人には負けていないと拗ねるクロノは歳相応で微笑ましかった。

ちなみにデイルムツドの正体を見つけたのは彼女だそうで、この世界には若くて才能を持つ者が多い気がする。

「あ、艦長！」

三人で映像を眺めていると扉が開き、リンデイが入ってきた。

「……………確かに、凄い子達ね」

大出力の砲撃を放つ二人を見て、リンデイが呟いた。

「これだけの魔力がロストロギアに注ぎ込まれば……次元震が起きるのも領ける」

「次元震？」

「さっきなのはさん達という時に説明したロストロギアの暴走によって起きる災害の事よ」

疑問を浮かべたデイルムツドにリンデイが解説してくれた。

以前二人のデバイスを損傷させるほどのダメージを与えたジュエルシードの暴走は、二人の魔力が注ぎ込まれたことによる影響だったらしい。

「あのことがあったから僕達は二人の戦闘を止めたんだ……君からすれば一騎打ちを邪魔したようにしか見えなかったんだらうけど」

あの時は破魔の紅薔薇によって無力してしまったのでわからなかったが想像していた状況より危険だったらしい。

「そうだったか……すまなかったな。どうやら俺はジュエルシードという物を軽視し過ぎていたようだ……その時から俺の存在は知られていたのか？」

監視の気配を全く感じられなかったというのは騎士としては致命的である。

「君の存在はわかっていた……ここまで実力差があると思ってなかったけど」

「というかあの時点で破魔の紅薔薇……だっけ？あの槍の能力に気が付かなかつたのは失敗だったねー」

アハハと笑うエイミイの頭をクロノが叩いた。膨大な知識を持つ彼らでも破魔の紅薔薇の特性をすぐに見抜く事はできなかったのだらう。

『失礼します……ってデイルムツドさんその顔どうしたんですか?!』

クロノとエイミイのじゃれ合いをリンデイと共に微笑ましく見守っていると画面にフレット……もといユーノの姿が映った。

「気にするな。生まれながらの少々厄介な呪いを抑える措置だ」

『呪い……命に関わるもの……とかですか?』

「…そうだな…そんなようなものだが今すぐどうこうといったものではない…筈だ。後、敬語はいい」

実際にこれが原因で二回死んでいるのであながち間違っではないな
い。

デイルムツドの逸話を知っている三人が苦笑いを浮かべ、それを
ユーノが不思議そうに見ていた。

『わかりま…わかったよ。それでリンデイさん。これからの事なの
ですが…』

デイルムツドとクロノの予想通り、やはりなのは達は協力の意思を
示してきた。

『僕はともかく、なのはの魔力はそちらにとって有効な戦力だと思っ
ます』

フェイトとの戦いやジュエルシードの回収。

自分達がいた方が便利であると。そう言われてしまえばリンデイ
達も断ることができないし、管理局という組織としてもここで彼女を
手放したくはないだろう。

そうして、リンデイは身柄を一時的に管理局に委ねる事と、指示に
従うことを条件にその提案を受け入れたのだった。

海上の決戦

「これより本艦全クルーの任務はロストログア、ジュエルシードの回収になります。今回は特例措置として結界魔導師のユーノ・スクライアさん、現地の魔導師の高町なのはさん……次元漂流者のデイルムツド・オディナさん……以上三名が臨時局員の扱いで事態に当たってくれることになりました」

「よろしくお願いします!」

「及ばずながら力を貸そう」

三日後、なのは達は手続きを終え、正式に管理局の協力者として扱われることになった。

デイルムツドに関しては次元漂流者であり、最初は状況を理解していなかったせいで

妨害を行っただけでこちらに敵対する意思は無く、その実力を見込んで協力を依頼した……という形で無理矢理組み込む事となった。

勿論事件後に何らかの処置は下されるだろうが、それまでは身柄は保証されることだった。

緊張している二人と落ち着いた様子のデイルムツドが紹介されてそれに答える。

会議の最後に、クロノになのはが微笑みかけてそれに彼が赤面し、それを見たユーノが気に入らないという顔をしており、それを見た周りのクルーが微笑ましい気分になる終始穏やかな会議であった。

今後はアースラの方でジュエルシードを探索し、場所が判明次第なのは達が現地に向かうことになっている。

「何かわかったか?」

会議が終わりなのは達が封印に向かっている間、デイルムツドとクロノとエイミイはフェイトの事を調べていた。

「デイルムツドが会ったという人物……プレシアという名前で間違い

ないか？」

「ああ。フェイトがそう言うってから間違いはない」

クロノの問いかけに頷く。時の庭園に向かった時フェイトが言っていたので間違いはない。

「だいぶ前に姿を消した大魔導師に同じ名がある。その人物もプレシア・テストアロッサという」

「テストアロッサ……同一の人物と見ていいだろうか？」

「偽名という可能性もある。断定はできない」

以前デイルムツドが行ったあの地に行ければすべて解決できるかも知れないが、その術も手順もわからずそれはできなかった。

「どんな人だったの？」

「ミッドチルダの中央都市で魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして追放された人物だ」

もし同一人物であればそれほどの人物がジュエルシードを欲する理由はなんなのだろうか。

「それよりもさつきこの子にこっちが補足したジュエルシードを1つ取られちゃったんだけど……」

「約束まで後4日ある。俺は君達と友でありたいし、協力して行きたいと思っっている」

「だよねえ……」

約束を違えるなら敵となるということを改めて伝える。あれから三日ほどは特に動きを見せなかったフェイトだったが、今朝から行動を再開したらしい。

ジュエルシード集めを急ぐフェイトが三日姿を現さなかったのはアルフが止めてくれたからなのだろう。

「さて、せっかく時間があるのでな……少し鍛錬してくる」

「わかった。何かあったら呼ぶよ」

そう言うってモニタールームから退出する。正式な協力者となったことである程度の自由が認められたのだ。

「万全では無いから動けなかった……など言い訳にならんからな」

一日でも早く、本来の力を取り戻そうとデイルムツドは訓練室に向かったのだった。

「……………」のような心地よい疲労感は久しいな……………」

数時間後、鍛錬を終えたデイルムツドがシャワールームで息を吐いた。

サーヴァントとして召喚された時は全盛期の姿であり、死を迎え、英霊となった時点でこれ以上の成長の可能性がなかったため鍛錬など行っていないかった。

あの時は力の消費を抑える為、普段は霊体化し戦う時だけ全力を尽くすと言ったスタンスであったので、戦い以外で疲労を感じるのは本当に久しぶりだった。

「だが今は成長しているのを感じるな……………」

動けば動くほどそれが力になつているのを感じる。それが己が人であるという実感を与えてくれた。もしかしたら聖杯戦争など夢であったのではないかと思ってしまう程に。

鏡に映った己の姿を見つめる。

そこにいるのはフィオナ騎士団の勇敢な騎士ではなく幼さを残した少年だった。それは間違いなく、デイルムツドの幼き日の姿である。

——唯一つ胸に穿たれた傷痕を除いて

それは聖杯戦争の時、令呪によって強制され自らの破魔の紅薔薇で刺し貫いた時の傷である。あの戦いが現実であった事を事実として認識させ、その傷痕はまるで死に際に憎悪に飲まれた己への戒めにも思えた。

「忘れたりしないさ……………」

もう二度と同じ過ちは犯さない。三度同じ事が起きるくらいであ

るならば、再びこの傷痕に槍を突き立てよう。

そう覚悟を決め、身体を拭いて服を纏ってシャワールームから出る。小腹が空いたのでそのまま食堂へと向かった。

「帰っていたか、なのは、ユーノ」

「あ、デイルムツド君」

「ついさっきね」

食堂に着くと、そこには二人の姿があった。今日二人が捜しに行つたのはフェイトが今朝手に入れたジュエルシードである。

「ご苦労だったな。隣、失礼するぞ」

「うん、どうぞ」

食事を受け取り、わかりやすく凹んでいる二人と同じテーブルにつく。

「さて、せっかくの機会だ。聞きたいことがあつたんだろう？」

「にやはは……気が、付いてたんだ」

「さすがにあれだけ見られていればな……何から聞きたい？」

何度かこちらを見ているなのはの視線を感じていたのだが、彼女達がジュエルシードの回収に行ったり、デイルムツドがクロノやエイミィに捕まったりしていたので話す機会が無かったのだ。

「最初は……デイルムツド君の事かな？」

「俺の事はあの時、リンディ殿に伝えた事が全てだが？」

日本における彼の知名度は低い。神話の英雄であると言われても彼女にとつては実感がわかないのだろう。以前図書館で出会ったはやてのように知っている方が珍しいくらいだ。

「昔の凄い人だつて言うのは聞いたけど……そうじゃなくて、前の世界で戦つたつて言う話が聞きたいの」

どうやらそちらではなく、サーヴァントとしての生き方が知りたいらしい。

「そうだな……」

最初は躊躇ったが二人に語る事にした。主に信じられず、騎士としても散れなかつた絶望の生を。

「二度目の生では俺は忠義と愛を秤に掛け、愛に生きる道を選んでし

まった。その結果、主君に見捨てられ命を落としたが……その生き方に後悔はない」

「その主さんを怒ったり憎んだりはしなかったの？」

「むしろ恨まれる事をしたのは俺だ。俺が恨むことは無い」

主に忠義を果たせなかったがグラニアを幸せにすることはできた。それを否定する事はこの三度の生涯の間、永劫に訪れないだろう。

「だがもし二度目の生があつたのなら……今度は忠義に生きようと思っていた」

そしてその機会は訪れる。

聖杯戦争。ランサーとなり新たな主君の元でその願いを果たそうとした。

「英霊がサーヴァントとなるには何かしらの願いを持っているのだが、俺は『主君に勝利と聖杯を届ける』という事自体が願いだった」「デイルムツド自身には願いは無かつたって事？」

「我ながら無欲な物だと思うがな……ただそれだけが願いだった」

しかしデイルムツドの願いは虚しく悲劇は繰り返される。

「細かな説明は省くが、俺のマスターは少々特殊でな。主と婚約者の二人で一人のマスターとして参加した」

「それって……もしかして」

「運命とは何とも残酷な物だった。我が身の呪いは再び同じ状況を生み出し、同じ結果を引き起こすことになる」

「そんな……」

呪いは再び主君の想い人を誑かす。どれだけ誇りを唱え、忠義を尽くそうとしても、彼は己を信じることは無かつた。

「そして最期はまた主に見捨てられ、俺は散った」

やはり最期だけは言葉を濁させて貰ったが全て語り終えた。

「最期には絶望しか感じられなかったが……なのは。君の言葉で悩みが晴れた」

「え？ 私の……言葉？」

『話さないと、言葉にしないと伝わらないこともある』。君がフェイトに言った言葉だ。俺ももつと主と向き合っていれば……死は避け

られなかったとしても分かり合う事ができたかもしれない」

幼い少女の純粋な言葉はデイルムツドにとっては天啓であった。「だからなのは、フェイトと向き合って欲しい。彼女の悲しみを、苦しみ。彼女自身から聞いて、君の思いを伝えてやれ。そうすればきつと……フェイトは救われるはずだからな」

もつとも言わなくてもそうするだろうがなと言って、食べ終えた食器を持って立ち上がる。

「後、俺は敬われるのは慣れていない。変に意識せず対等に接してくれる方がありがたい」

慣れない事をして少々気恥ずかしかったので振り返らずに食堂から出て行った。

なんは達と話してから一週間……つまりデイルムツドがアースラ所属となつてから十日後。突如発生した異常事態にアースラには動揺が走っていた。

「何してんのあの子達?!」

最初に異常を感知したのはジュエルシードを探知していたエイミイだった。突如発生した魔力流にそれに呼応するように発動した六個のジュエルシード。

「海中にあるジュエルシードを全部纏めて強制発動させるなんて……!!」

「このままでは街に被害が出るぞ……!!」

暴走したジュエルシードの魔力が旋風を巻き起こし、海流を巻き込んで六つの水竜巻となっていた。

映像の中で、それを引き起こしたフェイトが封印しようとする隙を狙っているが回避するのが精一杯でそれぞれどころではなさそうだ。

デイルムツドが人民への被害を徹底的に嫌っていた事を誰よりも知っているはずなのにこのような無茶をしなければならぬ程、二人は……特にフェイトは追い詰められていたのだろう。

「デイルムツド君の紅い槍で…」

「すまないが無理だ……！破魔の紅薔薇の効果範囲は刃先のみ。あの規模では……」

あの吹き荒れる竜巻のどの部分にあるかわからないジュエルシードを的確に狙って撃つことなど不可能に近い。

その前に飛行能力を持たないデイルムツドではあの場所にたどり着くことさえ叶わないだろう。

「フエイトちゃんっ!!」

警報を聞いて駆けつけたのはとユーノがブリッジに駆け込んできた。

「あのっ！私急いで現場に行きます！」

「その必要はないよ。放っておけば自滅する。その後には捕獲すればいい」

「私達は常に最善の選択をしないとイケないの。残酷に見えるかもしれないけれどこれが現実よ」

水竜巻を必死でかわすフエイトの姿を見てなのはが出撃を進言するが、クロノがそれを却下し、

「すぐるような眼でクロノの隣にいたデイルムツドを見る。」

「リンディ殿の指揮下にいる以上、それに異議を唱えるなどできまい」「そんな！デイルムツド君はフエイトちゃんを見捨てるの?!」

はつきりと言い放つデイルムツドになのはが裏切られたと抗議の声を上げるが、ポタリとデイルムツドの掌から何かが零れ落ちたのに気が付いたなのはがそれを見て絶句した。

「どうしようもあるまい……！今はどうすることも……！」

爪が食い込むほど握り締められた彼の掌から血が滴り落ち、床を濡らしていたのだ。

目の前の被害を止めることも、苦しむフエイトも見ていることしか出来ないことを誰よりも悔しがっていると悟った。

やるせない想いを抑えていたデイルムツドは、突如ゲートが起動した音に反応し振り返る。

「ごめんなさい！高町なのは、指示を無視して勝手な行動を取ります

「あの子と…お話ししないといけないから！」

「僕も行きます！すみません！処罰は後で受けますから!!」

ユーノが独断で起動したゲートから二人が飛び出して行った。どうやら気付かれないように念話でやり取りして合わせたらしい。

「ふっ…。話をしなければ…。か。リンディ殿、少しよろしいか？」

啞然とするブリッジ一同の中でデイルムツドが一人笑みを浮かべていた。画面の中ではユーノとアルフが協力し鎖を呼び出して竜巻を抑えている。

「俺も出る。出陣の許可を」

直接は何もできないが、援護くらいしてやらなければならない。

「くっ……い！」

ユーノはアルフと協力し、鎖で水竜巻を抑えていたが、引き千切ろうと暴れる勢いに振り払われないようにするのが必死だった。

「守りながらじゃ…。キツイ…。ね！」

ジエエルシードから発生したエネルギーの余波が、二人を襲い、

それらを辛うじてシールドで防いでいたが一瞬でも意識を鎖から離すと水竜巻に身体を持っていかれそうになり、最小限のシールドしか展開できない。

そこに先程よりも威力の高いエネルギーが襲い掛かり、防げないと判断した二人が鎖を一度解除しようとした。

「解くなっ！」

その瞬間上空から聞きなれた声が聞こえ、解除しようとした鎖を再び強く握り直す。

エネルギー波が二人を襲う直前、鎖の上に器用に着地した男が紅い槍を振るってそれを消し去った。

「守りは引き受ける！お前たちはあれを抑えることだけに集中しろ！」

鎖を足場代わりにしたデイルムツドが破魔の紅薔薇を振るい、二人

を余波から守る。

「デイルムツド！ やっぱり無事だったんだね?!」

「そちらも息災で何より…と言いたいが、積もる話はこれが終わった後だ！」

ユーノとアルフの鎖の間を何度も飛びながら、飛来する攻撃を全て叩き落としていく。

「俺にできるのはここまでだ。フェイト！　なのは！　こちらは気にせず全力を注ぎ込め！」

デイルムツドの視線の先ではそれぞれが桜色と金色の巨大な魔方阵を展開した二人の姿があった。

「サンダー……!!」

「デイベイイイーン！」

フェイトの周囲に雷光が集い、なのはの杖の先には桜色の輝きが収束していき。

「レイジ——!!」

「バスタ——!!」

二つの極光が同時に解き放たれた。

約束された勝利の剣に劣らぬ眩い輝きが辺りを飲み込み、暴威を振るっていたジュエルシードの力を封じ込める。

「ユーノ。命の恩人だよ君は……」

「あはは……二人とも本当にこっち気にしないで撃ったね……」

鎖に乗っていたデイルムツドも一緒に吹き飛ばされて海の藻屑になり掛けたが、ユーノが鎖で捕まえてくれたので辛うじてそれは免れた。

余波で降り注いでいた海水の雨が降る中、雲の切れ間から光が差し込んで二人の少女を照らす。

「友達に……なりたくないんだ」

そんな中、なのはがフェイトに想いを告げる。

穏やかさを取り戻した空気の中で、ようやく届いた彼女の言葉の結果をこの場にいる全員が見守っている。

——しかしその時間は

『ユーノ！ デイルムツド！ 気を付けろ！ 次元干渉攻撃が来るっ
!!』

クロノの念話が静寂を破り、突如上空から降り注いだ紫の豪雷が
フェイトを貫いたことで終わりを告げた。

「フェイトちゃんっ?!」

「フェイトオオオツ!!」

衝撃で吹き飛ばされたなのはとアルフの叫びが響き渡り、人型に
戻ったアルフがフェイトに向かって飛び出す。

雷鳴が響き渡る中、上空を見上げたデイルムツドは気が付いた。

空中に漂うジュエルシードを巡って、フェイトを救出したアルフと
念話の直後に転移してきたクロノが奪い合っているその向こうで、体
勢を崩したなのはの真上に魔力の光が集っていた事に。

「ユーノ！ 俺をなのはの二元に投げろ！」

「は…は…は…!!」

突然の怒鳴り声にユーノが反射的に鎖で捕まえていたデイルムツ
ドを勢いをつけて投擲する。

フェイトへの魔力譲渡と大出力の砲撃を使ったなには殆ど魔
力は残っていない。そんな状態であるの攻撃を受ければ先ほどのフェ
イトと同じように無事ではすまないだろう。

なのはを守るため、上空に飛び出したデイルムツドが槍を振るう
と、魔を払う紅槍と正体不明の紫電の光が激突する。

「くそっ…!!」

しかし先ほどユーノとアルフを守る為に酷使していた破魔の紅
薔薇はその強力な雷を防ぎきる事が出来なかった。

「デイルムツド君っ?!」

——刹那の激突の後、紅い薔薇が散り、同時に紫電がデイルムツ

ドを貫き意識を奪った

決着と急転

「全く無茶をするな！ 君は！」

「弁明の余地も無いな」

あの後、意識を取り戻したのは、丸々1日経った医務室のベッドの上であつた。

「なのはとフェイト達はどうか？」

「彼女達は逃走。なのはは君が守って無事だ……二人とも心配していたから後で無事なのを見せてあげなよ」

「そうさせてもらう」

現在は一時帰宅を許可され、なのはの両親に近況を報告する為という事でリンデイも艦にいないらしい。もともと、本当の事は言えないので虚偽を伝えなければいけないのだろうが。

「しかし……あの攻撃を受けてこの程度で済むとは思わなかったな」

「充分大怪我だった。ユーノが頑張って治療したからその程度なだけでね」

そのおかげで後遺症は残らず、少し休めば問題なく戦うことはできるとのことだ。破魔の紅薔薇が破壊された事以外は問題はない。

「あの紅い槍はこれからの戦いに必要な物だったというのに……」

「破魔の紅薔薇が無くともやりようはある。宝具だけが俺の取り柄ではないさ」

先日修復を終えた必滅の黄薔薇や大なる激情のように直すことは可能だが、対魔術師に絶大な効果を持つ槍が使えなくなったのは痛い。がそれで戦えなくなるわけではない。

「君の強さはわかつていさ。ただあれはこの世界で唯一『魔導師を殺せる力を持った』槍と言っているいい代物だ」

「命を奪うだけなら必滅の黄薔薇の方が有効だろうか？」

「理屈の上では、というだけで本当にできるかわからないが、あの紅い槍でリンカーコアごと刺せば魔導師生命を絶つ事ができる可能性が

ある」

「リンカーコア？」

初めて聞く言葉に首を傾げる。クロノの説明によるとディルムツドの世界にとつての魔術回路のような魔法を使うための器官であり、魔導師の力の源であるそうだ。

ある程度の損傷であれば時間経過やリハビリでも修復されるらしいが、治るまではまともに魔法を扱えなくなってしまふ。

しかし、刃先に触れている間あらゆる魔力的効果を消す破魔の紅薔薇は再生機能も停止させ、リンカーコアの修復作用を狂わせて永遠に回復できなくする事ができる可能性があるらしい。

「つまり暴走した次元犯罪者を死なさずに永久的に無力化できるということだ」

あくまで仮定であり、実際にできるかはわからないが本局にディルムツドのデータを送った結果、その可能性があるという推測が提示されたらしい。

「話はわかった。が、俺がそれを実行することは無い」

「騎士として認められないということか？」

「それもあるが……それは語るの今は止めておこう」

魔術という己の全てを奪われたケイネス殿の姿。アレを間近に見ていた己には同じ目を他の者に味あわせるなどできない。

「まあ『最悪の時』にはって話で強制するつもりはない。僕もこんなことさせたくないからね」

「その話が上がったという事はその『最悪の時』があるかもしれないからと言う事か？」

「流石に察がいいね。君が出会ったプレシア・テストロッサはこちらの記録の人物本人であることは間違いない。君を落とした雷の魔力波動も本局の登録データと一致した」

クロノがデバイスを操作してディスプレイを呼び出す。そこにはプレシア・テストロッサの略歴が表示されていた。

彼女は二十六年前に個人的に行った違法実験を行い、暴走事故を起こした彼女は地方に飛ばされた。それから数年間は技術開発に携わ

りその後行方を眩ませたらしい。

「二十六年…フェイトは十歳ほどだろう？ 行方不明になってから産んだということか？」

「その可能性が高い。他の情報はまだ集まっていないから今は何とも言えないけど……」

「クロノ君大変！ ……とデイルムツド君目が覚めたんだ。良かった」

二人で思案していると医務室の扉が開き、エイミーが駆け込んできた。

「おかげでな……それでどうかしたのか？」

「デイルムツド君も動けるなら一緒に来た方がいいかも」

エイミーに促され、少々痛むのを堪えてブリッジに向かった。

「アルフ……」

「さつきユーノ君から連絡があつてね、なのはちゃんの友達の家には保護されていたの」

ブリッジのディスプレイに映っていたのは包帯を巻かれて檻に入られたアルフの姿だった。

『デイルムツドさん！ 目が覚めたんだね！』

『デイルムツド君！ よかった…』

デイルムツドの声に気が付き、なのは達から念話が届く。

「すまないなのは、心配をかけたな」

『ううん！ 私こそデイルムツド君のおかげで怪我しないでよかったから……』

「ユーノも話は聞いた。おかげで助かった……感謝するぞ」

『そんな！ 僕が何も考えずに投げたせいでもあるんだし……』

「騎士として女性を守るのは当然の事。それにユーノがいなければ怪我を負ったのは俺ではなくなのはだったかも知れない」

2人とも目覚めないデイルムツドの事がずっと気がかりだっただろう。

安堵の声を上げる2人に申し訳ない気持ちになりながら、モニターに映るもう一人の人物に視線を向ける。

『デイルムツド……無事だったんだね』

「先程まで寝ていたがな……何があった？」

常にフェイトと共にいるアルフが一人、それに目に見える程の負傷を追っている。ただ事ではない事態があったのは明確だ。

『デイルムツドがやられた後……あたしはジュエルシードを回収してあの鬼ババアの所に逃げたんだ』

「プレシアの……時の庭園にか」

管理局から逃れるのにはあの場所が一番だったのだろう。

「あいつ……フェイトをあんな目に合わせただけじゃなく、帰ってきたあの子にまた……！」

デイルムツドの情報からフェイトの状況を聞かされていたなのは達とアースラの者にはその様子で何をされた理解できた。

母親が娘に対する態度としてはあまりに異常なその行動に、ある者は口を押さえ、ある者は拳を握る。

『お願いだ……！ フェイトを助けてやってくれ……！』

「無論だ。彼女を救うことを我が槍に誓おう」

苦しげに頼むアルフの願いに答えるデイルムツドの宣誓に異を唱える者は一人もいなかった。

「プレシア・テスタロッサを捕縛する。君には明日の朝、なのはと一緒にアースラに来てもらうよ」

『わかったよ』

アルフがアースラに下る事を了承した。

「フェイトがなのはがアースラから離れていることを気が付いていないとは思えん。おそらく合流する前に一度接触してくるだろう」

「おそらくね。だからなのは、もしもそれまでにフェイトと接触したならば——」

『うん。大丈夫』

フェイトを倒して捕まえる。クロノがその言葉を言う前になのはが意思を示す。

『私はフェイトちゃんを助けたい。フェイトちゃんが悲しんでると私も悲しい……それに友達になりたいって返事を貰ってないから』

だから戦う。全身全霊で戦い思いをぶつけ、そして救うと少女が答えた。

「そうか」

それを聞いたデイルムツドはただそれだけ呟いた。

——全く、敵わないな

素直にそう思った。戦闘能力という意味ではなく、心が、意思が、信念が……誰かの為に全力を賭けるといふ気持ちである。

だが悔しいという想いは無く、ただ純粋に賛辞を抱かされてしまった。

「目標、出現しました！」

早朝、監視を行っていたアースラのクルーの声でブリッジに緊張が走った。

「本当に君が言ったタイミングで来たな」

「根拠も無く言ったりしないさ」

予想したタイミングで現れたフェイトの姿を捉えたモニターを見てデイルムツドとクロノが呟く。

優しいか彼女がなのはの家族を巻き込むはずがなく、接触してくるのはおそらくこのタイミングしかないと考えたのだ。

「さて昨日の『賭け』は俺の勝ちだな」

「この事件が終わったら守るさ。その前にちゃんと君のやるべき事を果たしてくれよ」

「わかっているさ」

あの後二人で取り決めた『賭け』に勝ったデイルムツドがクロノと話ながら転送装置に入る。

リンデイの命によりこれから二人が対峙しているところに向かい、

フェイトへの投降の呼びかけとそれが失敗した時の備えを任されていた。

ゲートが開き、身体が光に包まれる。

次の瞬間には、なのはとフェイトの間……ちょうど三人で線を結ぶと正三角形の形になる位置に現れた。

「ディルムツド……」

「こうしてゆっくり話すのは久しいな、フェイト」

電柱の上で佇む少女を見つめながらも左手に必滅の黄薔薇、右手には大いなる激情と変則的な組み合わせの獲物呼び出して構える。

無論戦う気はないが、今は敵だということを明確にする為の行動だ。

「俺の投降と協力を条件として君の無罪は保障されている。だからフェイト、素直にこちらに降れ」

「ありがとう……だけどそれはできないよ。私はあの人の娘だから。母さんの為に……ジュエルシードを手に入れないと」

予想通りの回答が返ってきた。

「交渉は決裂か、ならば仕方ない。実力行使で行かせてもらうぞ」

形式上の降伏勧告を終えるとディルムツドが下がり、代わりになのはが前に踏み出す。

元よりこれを彼女が受けるとは思っておらず、元からこうするつもりであった。

「フェイトちゃん」

なのはが戦闘体制に入りながらフェイトと向き合う。これまで何度も向き合おうとし、そのたびにすれ違った二人がようやくぶつかり合う時が来た。

「賭けよう！お互いが持つてる、全部のジュエルシードを！」

《Put out.》

お互いのデバイスがジュエルシードを吐き出し、二人の少女の周りに青き宝石が現れる。

「このディルムツド。今度こそ、この一騎撃ちを見届けさせてもらう」
そして辺りに沈黙が降り、黄槍が空を切りながら回る音だけが響

く。少女達は立会人が戦いの火蓋を落とすのを静かに待っている。

——キーン！

「始めよう！最初で最後の本気の勝負を!!」

——必滅の黄薔薇の刃が地面を打ち鳴らし、その音を合図に二人の少女が大空に飛翔した

上空で二人のデバイスが激突すると、衝撃が魔力を帯びて拡散しながらお互いの身体を弾き飛ばす。純粹な力は互角のようだ。

《Divine Shooter》

「シュー——トッ!!」

なのはの周囲に魔力のスフィアが数個展開され、そこから連射性の優れた魔力弾が同時に放たれた。

自動追尾とバリア貫通効果を有するこの攻撃は全方位への自在な攻撃により死角を無くしており、機動力の低さというなのはの弱点を補っている。

《Photon Lancer》

「ファイヤツ!!」

対するフェイトの周りにも同じく魔力のスフィアが展開され、攻撃が放たれる。

誘導性能はないがこちらは弾速が速く、後出しでも先手を取ることが出来る。機動力の高く隙が少ないフェイトにとっては死角という弱点が少ないので非常に相性がいい。

両者の魔法が激突し爆発する。

爆煙からフェイトが飛び出す瞬間を狙っていたなのは誘導弾が襲い掛かるが、それを鎌状に変化させたバルディッシュで斬り伏せて接近する。

「っ?!」

《Round Shield》

元より格闘に優れ、さらには短期間であるがディルムッドから接近戦の手ほどきを受けていた話を聞いていたなのはは応戦するのではなく、守るという選択を取った。

金色の魔力刃を桜色の障壁で防ぎながら、なのはが先程落とされていなかった魔力弾を誘導してフェイトの背後から狙う。

それにすぐさま反応したフェイトは振り返りながら防御するがその隙を突いたなのはは上空に飛翔していた。

「やああああああつ!!」

なのはを見失ったフェイトに向け、加速魔法を使い急降下し、レイジングハートに魔力を込めて叩きつける。

「くっ……!!」

咄嗟にそれをフェイトがバルディッシュに魔力を込めて防ぐと、反発し合ったエネルギーが爆発し、眩い光が二人を包み込んだ。

《Scythe Slash》

光の中でフェイトが背後に回り込み、斬撃を放つがそれをなのはが加速魔法で紙一重でかわし、金色の刃は彼女のリボンを裂く程度であった。

「あっ?!」

しかしなのはが回避することを読んでいたフェイトは彼女が離脱する方向に設置していた魔力弾を射出した。

「攻撃を組み合わせ本命を当てる……教えたことは身に付いていたようだな」

「どっちの味方なのさ! 感心してる場合じゃないでしょっ?!」

「さすがフェイト!」

攻撃は障壁で防がれてしまったがその動きにディルムッドは賛辞を送り、ユーノがそれに突っ込んだ。

二人とも常軌を逸した魔力量ではあるが、その戦い方は大きく異なる。

機動力は低いが堅牢な防御と大火力を有する固定砲台と呼ぶべき後衛型の魔導師であるのには対し、防御力の低いが高機動力からの一撃離脱と広範囲魔法を得意とする前衛型の魔導師であるフェイト。お互いに得意な距離と戦い方は真逆であるが、攻防が目まぐるしく入れ替わる事で、一騎打ちの状態であるのにも関わらず互いの優劣が瞬時に切り替わっていた。

金色の雷光が大気を揺らし、桜色の閃光が辺りを飲み込む。

二人の天才の互いの譲れない信念を賭けた激突はこの戦いを見届けている観客達を魅了する。

しかし、いくら膨大な魔力を有していてもそれは無限ではない。魔力弾の乱発、ギリギリの攻防は疲労を蓄積させていく。

疲労に肩を上下させる二人が距離を取りお互いを睨み合う。

そして数秒の静寂の後——戦いは終演に向けて動き出した。

「アルカス・クルタス・エイギアス……」

最初に動き出したのはフェイトだった。彼女の口から紡がれる呪文に呼応し、魔法陣が辺りに展開され、膨大な魔力の奔流が発生する。

フォトンランサー・フアランクシフト——30発以上のフォトンファイアから同時に放たれる魔力弾を一転集中して目標に叩き込むフェイトの必殺の一撃である。

「疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ……」

アルフ以外はその威力を知らなかったが収束している魔力の勢いからその威力は充分伝わってきており、なのはは回避しようとしたがそれは叶わなかった。

ライトニングバインド——触れたものを拘束する不可視の設置型の捕縛トラップがなのはの両腕を捕らえていたからだ。

「マズイ……！ フェイト本気だ！」

「なのはっ！ 今助けにつ！」

飛び出そうとしたユーノだったが、目の前に突き出された刃に足を止める。

「邪魔は認めんぞ」

大いなる激情を下ろしたデイルムツドが鋭い視線をユーノに向ける。

刀身はすでにこちらに向けられていないのにも関わらず、その眼光に足が地面に縫い付けられたように動けなくなった。

「デイルムツド！ フェイトのあの技は本当にマズイんだよ！」

「それでもだ。この勝負は勝利が目的ではない。互いの全力を出す事に意義がある」

勿論なのはが勝つのが一番理想的な結果であるが、過程を蔑ろにしては意味がない。

互いの全てを出し切る一世一代の大勝負。それを第三者が介入し邪魔すれば、これまでの二人のぶつかり合いが全て無駄になってしまふ。

「それに、なのはを信じてやれ。あの眼はまだ諦めていないぞ？」

そう言うデイルムツドの視線の先を見ると、フェイトを力強い視線で見つめるなのはの姿があった。

「邪魔はさせせん。両者共に想いの全てをぶつけ合うがいい」

「ありがとう！ デイルムツド君っ！」

なのはのその言葉を聞き、ユーノとアルフもこの戦いを見届ける覚悟を決めた。

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル！ フォトンランサー・フアランク スシフト……！」

そしてフェイトの術は完成する。彼女の周りを漂う電撃を纏った38基のスファイア全てが放電し、一体が雷に包まれていた。

「撃ち碎け！ ファイヤ——!!!」

号令と共にそれら全てが一斉に発射される。それら全てが動けないのはを正確に襲い、その姿を飲み込んだ。

「なのは——!!!」

「フェイトツ!!」

「ほう……」

その惨状に叫び声を上げる二人とは異なりデイルムツドが感嘆の声を上げた。

「たははは……撃ち終わると、バインドつてのも解けちゃうんだね」

爆煙が晴れるとそこにいたのは無傷でその場に佇むなのはの姿があった。デイルムツドの眼は、砲撃が当たる直前、バインドが解けたなのはが障壁を展開する瞬間を捕らえていたのだ。

——無傷で済むとは思っていなかったのだが……

「せいぜい致命傷を避ける程度であると思っていたが、平然としているなのはの姿に驚きを隠せない。

「今度は……こっちの番だよ!!」

《Divine Buster》

「っ!!」

間髪入れず桜色の魔力が収束され放たれた。

それを止めようとフェイトも魔力を収束した攻撃を放つがなのはの砲撃はそれを飲み込み、速度を落とさずに迫る。

直撃を避けられないと判断したフェイトが全力で障壁を展開し防ぐ中、デイルムツドは信じられない光景を見てしまった。

「受けて見て……デイバインバスターのバリエーションツ!!」

《Starlight Breaker》

先日のジュエルシードの封印の際、二人の砲撃を見て約束された勝利の剣に劣らないと評した。ただしそれは二人の魔力を合わせての威力であり、単体では流石にそこまでの力は無い。

そう——思っていたのだが……

「約束された勝利の剣と同等の力はあるな……」

「一応聞くけど……それってどれくらいの威力?」

「……アースラより巨大な魔獣を一撃で葬り去る程であったな」

それを聞いたアルフが飛び出そうとしたのをデイルムツドが押さえ込み、彼女をユーノがバインドで拘束した。

「アルフ、落ち着け。手を出せば全てが無駄になる」
「どうかあの間にいったら無事じゃすまないよ！」

「離してくれ！ フェイトが死んじまうだろ?!」

強固な魔力の鎖を引きちぎって飛び出そうとしているアルフを落ち着けようとするが、全く効果がない。

「これが私の全力全開ツ!! スターライト——」

そんなやり取りの間も、魔力が収束していく。

フェイトは先ほどのなのはと同じようにバインドで両手足を固定されており、直撃は避けられそうになかった。

「クロノから聞いたが、なのは達の魔法には非殺傷設定というのがあるのだろう。ならば大丈夫さ………おそらくな」

「フェイトオオオオオオッ?!」

ボソリと最後に呟いたデイルムツドの不吉な言葉を聞き、アルフが叫んだ。

「ブレイカ——!!」

そんなアルフの叫びをかき消すように必殺の一撃がフェイトに向けて莫大な魔力が放たれた。

真下に向けて放たれた桜色の極光はフェイトを飲み込み、大気を震わせ海面に直撃して水飛沫を吹き上げる。

それが収まると、魔力を出し切って疲弊したなのはと、意識を失って落ちていくフェイトの姿があった。

「終わったな。アルフ、フェイトを回収するから手伝ってくれ」

「わ……わかったよ」

一度宝具を仕舞い、拘束を解除したアルフに跨って墜落していくフェイトの元に駆ける。海面に激突する前に掴むことができた。

「……デイル……ムツド」

「よく頑張ったな。今はゆっくり休め」

フェイトが母に言って貰いたかっただろう言葉を代わりに伝えた。

そこにフラフラになりながらもなのはが近づいてくる。いくら本気を出すと言ってもやり過ぎてあったことは自覚しているのだろう。

「フェイトちゃん……大丈夫？」

「うん……」

《Put out.》

主の敗北と判断したバルディッシュがジュエルシードを排出し、それを見届けたフェイトが今度こそ意識を手放した。

バリアジャケットに損傷はあるが身体に怪我はない。とはいえ、過労や栄養不足によって体調は良くなかったのだろう。そこにあれだけの攻撃を受けたので限界が来た。といった様子である。

「見事でしたな高町殿。このディルムツド、かの騎士王と相対したよ
うな想いです」

「なんでそんなに余所余所しいの?!」

子供が放つ物とは思えない一撃に対して賛辞と畏怖を込めて言葉を贈る。

あれはおそらく非殺傷でなければ全盛期の己でも一撃でも消し飛ばせるだろう。

「……さて、そろそろ来るか。高町殿、急ぎジュエルシードの回収を」
「無視しないでよっ?! どうかお願いだから敬語止めて!」

叫ぶ高町殿の声をスルーして上空を見上げる。

ここに来たのはこの後の動きに対するフォローを任されていたからであつた。

『ディルムツド! 次元攻撃が来る!』

上空から紫電の一撃が降り注ぎ、抱えていたフェイトに向けて襲い掛かる。

「二度目は無い!」

即座に大なる激情と小なる激情を展開し交差させる。

破魔の紅薔薇は破壊された一撃だが、対の宝具はそれを受け切りディルムツドとフェイトを守った。

しかし余波を相殺しきれず、バルディッシュがダメージを受け、その間にフェイトの所持していたジュエルシードが虚空に消える。

「ちっ! 奪われたか…エイミィ! まだか?!」

『ディルムツド君への攻撃から座標割り出し成功! 全員アースラに

転送するね！』

可能であればジュエルシールドも回収しておきたかったが、位置を特定できただけでも十分な成果と言っていいたいだろう。

居場所さえわかれば、直接奪還に向かえば問題はない。わざと初撃を受けた甲斐があつただろう。

転移魔法の光に包まれながらデイルムツドは腕の中で眠る少女を強く抱えていた。

狭間の中へ

医務室で簡易的な治療を施し、意識を取り戻したフェイトを連れ、デイルムツド達はブリッジに入った。

「第二小隊突入成功！」

「第一小隊！ 侵入開始します！」

ブリッジのモニターにはサーチャーからの映像が映っており、プレシア逮捕のために突入した武装した部隊が以前デイルムツドが完全に破壊した門から続々と時の庭園内部に入っていく姿が映っている。フェイトがここに来たのは本人の意思だ。

母親が捕らえられるのは仕方が無い。それでもその現実から目を背けず、それを見届け、共に償いをして行きたい。

そんな彼女の意思を高町ど……なのはが尊重し、別室のモニタールームで監視を行っていたクロノに頼んで連れて来る許可を出してもらったのだ。

『目標、発見しました！ これより投降を呼びかけます』

サーチャーが玉座の間を映し出し、そこに悠然と座るプレシアを映し出していた。

何十人と武装した魔術師……この世界では魔導師と呼ぶらしい……を前にしても全く動じることなく、自らを捕らえに来た者達の姿が目に入っていないかのようであった。

魔導師達がプレシアを包囲して行く中、一部の者が周辺の散策を行っているとプレシアの背後にあった扉の存在に気が付き、その中に入っていた。

その瞬間プレシアの様子が急変し、その姿が消えた。

「転移魔法?!」

『私のアリシアに……近づかないで!!』

直後、狂ったような叫びが扉の中から聞こえ、中に入った者達が玉座の間へと弾き飛ばされた。

「エイミィ！ 局員達を送還して！」

『はいっ！』

おそらく非殺傷設定を解除しているのだろう。雷撃で負傷した隊員を治療するためにアースラに転送されていく。

プレシアをあそこまで豹変させる『アリシア』とは何であるのか。残った武装隊の人間がサーチャーを操作し、通路の先を映し出す。

「えっ……」

その映し出されたモノを見てフェイトが驚きの声を上げる。

「フェイト……ちゃん？」

培養液の入った巨大なガラスの中にいたのは隣にいるはずのフェイトであった。

残った武装隊の者がプレシアに向けて攻撃を放つが彼女に当たる直前に空間が歪み、全てかき消された。

『……うるさいわね』

「危ないっ！防いでっ!!」

映像の中でプレシアがかざした手の中に光が収束するのを見たりンデイが叫ぶ。

玉座の間一帯まで降り注ぐ紫電を防ごうと全員が一斉に障壁を展開したが相殺しきれず、雷撃が止んだ後には全員が倒れていた。

即座にエイミィが全員を回収し、破壊されなかった数個のサーチャーからの映像と音だけがその場から伝わってくる。

『たった九個でたどり着けるかわからないけど、時間がないわね……だからもう終わりにするわ……この子の身代わりの人形を娘扱いするのはね……』

「……えっ？」

信じられない言葉を聞いたフェイトの体が硬直する。

娘の代わりの人形……培養液の中に浮かぶ少女をいとおしげに見つめながら呟くプレシアが誰の事を言っているのか、わかりたくなくとも理解させられてしまった。

『聞いてるかしら？ フェイト、あなたのことよ。アリシアの記憶をあげたのに見ただけのただのお人形……』

そんなフェイトにプレシアは容赦なく冷たい言葉を叩きつけていく。

「……あの子は何者なんだ？」

「二十六年前の事故でね……プレシアは実の娘……アリシア・テストタロツサを亡くしているの」

培養液の中の少女を見ながら尋ねるデイルムツドに答えたのは別室にいたエイミイだった。

語られたのはプレシアが失踪前に人造生命の生成と死者蘇生の秘術を研究していたこと……そのプロジェクトに付けられた開発コードの名がプロジェクトF……フェイトであったという真実だった。

『よく調べたわね。だけど……ちつとも上手く行かなくて出来上がったのは全く別の欠陥品……』

「止めてっ!!」

残酷な真実を告げる狂気に囚われた女の言葉を止めようとなのはの叫ぶ。

『あなたはアリシアが蘇るまでの私が慰みにするだけの出来損ないの偽物……』

しかしプレシアのその叫びは止まらない。今すぐこの映像を消してやりたいが、そうしてしまえばプレシアの行動がわからなくなってしまう。

『後ね……ずっとあなたに言っておきたい言葉があったの……』

そして、辛うじて堪えていたフェイトに向けて、ついに致命的な一言を告げる。

『あなたを作ってからずっとね……憎くて憎くて……大嫌いだっただのよっ！　もう用済みだからどこへなりとも勝手に消えなさい！』

母に笑って貰いたい。その想いを胸にここまで頑張ってきたフェイトは自身の存在を母に……母親だと思っていた女に根本から否定された。

「フェイトちゃんっ!!」

信じられない現実を拒絶するように呆然自失となって崩れ落ちるフェイトを倒れる前にデイルムツドが支えた。

『ところで……小さな騎士さんも傍にいるんでしょう？　その人形を守るとか言ってたけど……ショックで言葉を失ったのかしら？』

「貴様のような下種と語らう口を……このデイルムツドは持ち合わせ
ていない」

嘲るような口調で話しかけてきたプレシアにデイルムツドはただ
一言を返した。

「貴様が娘を愛しているのはわかった。その為に己が全てを賭けよう
としているのな。しかし……」

かつて己も愛に生きた。故にプレシアがアリシアを本当に愛して
いるのがわかるデイルムツドにその想いを否定するつもりなどない。

「その為に人の道を踏み外し、命を弄ぶ外道に成り果てるなど断じて
許さぬ！」

デイルムツドが抑えきれない怒りを込め、プレシアの全てを否定し
ながら睨みつけた瞬間。強烈な威圧感がデイルムツドから放たれ、ブ
リッジにいた者達を震え上がらせる。

今まで親しみやすさを感じさせていただけの少年の物とは思えな
い圧倒的な存在感はデイルムツドが人を超えた頂に辿り着いた者で
あったことを明確に伝えた。

(……なんだいこの、感覚……)

純粋な威圧感とは異なる何かを獣の本能で感じたアルフだったが、
その正体は理解できなかった。

『……っ?! だったらどうするって言うのかしら?』

怒気が伝わったのか、一瞬反応したプレシアだったが、すぐに表情
を戻し、デイルムツドに問いかける。

「貴様を討つ……と言いたいが、残念ながら今は管理局に属する身……
貴様を捕らえるぞ。プレシア・テスタロッサ」

『残念だけどそれは受け入れられないわ……』

デイルムツドの答えを聞いたプレシアがそう答えると同時に、時の
庭園内部に異常が起きた。

「魔力反応多数……!!それぞれがAランク相当の魔力を有しています
!!」

軽く百は越える鎧を纏った人形が地面から出現するのと同時にプ
レシアの周囲に九個のジュエルシードが現れて輝きを増す。

「九個全てのジュエルシード発動！ 次元震が発生します！」

膨大なエネルギーが解放され、その余波が艦を大きく揺らす。今すぐあれを止めなければどのような惨劇を引き起こすかわからない。

しかし、その為にはあの大量の魔術兵器を越え、その上でプレシアの元へ辿り付く必要がある。

『アリシアを蘇らせる為に……失われた都……アルハザードへ！ そして取り戻すのよ……すべてを！』

魔力の奔流と共に、プレシアの狂ったような叫びがブリッジに響き渡る。

「まずはフェイトを医務室へ。その後に俺達も出るぞ」

「う、うん！」

虚ろな瞳のフェイトを気遣わしげな目で見つめながらなのはが頷いた。

「クロノ！」

「デイルムツド、僕も出る！ 付いてきてくれ！」

ブリッジから飛び出し、廊下を駆けていると反対方向からやってきたクロノと出会う。

「了解した。アルフ、フェイトを——」

「デイルムツド、ちよつとだけでいいから……フェイトの傍にいてやってくれないかい？」

アルフにフェイトを託して時の庭園に向かおうとすると、唐突にそう切り出された。確かにフェイトの事は心配であるが、プレシアの暴走を一刻も早く止めなければならぬ。

「フェイト、あんたの事、凄く信賴してたんだ……だから」

「デイルムツド君！ 私が行くからフェイトちゃんの傍にいてあげて！」

迷うデイルムツドの背をなのはが押した。

「……わかった。クロノ、すまないが少しだけ時間をくれ」

「わかった。待ってるよ」

皆と別れ、デイルムツドは医務室に向かう。中に入り、フェイトをベッドに寝かせ、その手に先程彼女が手落としたバルディッシュを握

らせてやる。

「……俺も本物ではない」

デイルムツドの言葉にピクリとフェイトが反応した。それを見て言葉が伝わっていると判断したデイルムツドがそのまま話を続ける。

「今は時間が無いので詳細は省くが……俺は英霊『デイルムツド・オディナ』の『情報』を使って作られた存在だ」

聖杯によって英霊の情報をそのまま転写して現界した存在なので、本物と言っても構わないほど差異はないが、コピーという意味ではフェイトと同じ存在と言ってもいいだろう。

「俺は己を確たる個として認識している。英霊デイルムツドのコピーではなく、この世に存在するデイルムツド・オディナであると」

今の状態ではどうなるかわからないが、本来は死すれば情報となり座に送られるだけの存在だ。

座にいる己とは別であることを理解しているが、それでもデイルムツド・オディナの代わりだとは思ったことは無い。

「無論、俺と同じ考えを持ってなど高慢な事は言わん。だがなフェイト……」

こちらを見つめる少女の頭を優しく撫でながらただ伝えてあげた言葉をお前だ。^{フェイト}他の誰でもない、俺と共に過ごしたフェイト・テスト

ロツサは偽りなどではない」

上手く伝えられたかわからない。アリシアの代わりではなく、フェイトという一人であるという事をデイルムツドなりの言葉で伝えなかった。

「辛ければここにいい。フェイトは今まで努力し続けてきたのだからな」

突きつけられた残酷な真実を受け入れるには少女はまだあまりにも幼い。逃げ出しても……現実から目を背けても責める者にはいないだろう。

「だがもしもあの女に伝えたい言葉があるならば……自らの足で立ち、向き合い想いを伝えろ」

だが…己のように後悔だけはして欲しくない。願わくば辛い真実に向き合つて乗り越え、前に進む力に変えて欲しいとも思っている。「どうするかは…お前が決める。フェイト・テスタロッサ」

最後の決断をフェイトに託し、デイルムツドは医務室を後にした。

デイルムツドが去つた後、フェイトは彼の言葉を反芻していた。

——俺と共に過ごしたフェイト・テスタロッサは偽りなどではない

母さんは私を偽者だと言つた。その言葉が悲しくて……信じたくなくて……悲しい現実イヤなことから逃げようとした。

「母さん……」

母さんに微笑んで貰いたかつた。頑張つたねって言つて欲しかつた。私が生きていたいと思つたのは…母さんに認めて貰いたかつたからだ。

辛い思いも…痛いことも…母さんが笑つてくれる為ならと耐えられた。捨てられた今でも…その想いはこの胸に残っている。

母さんに会いたい。あつてもう一度話をして……この気持ちを伝えたかつた。だけど——

「怖い……」

拒絶されるのが——またあの冷たい声で「いらない」と言われる事が。

辛ければここにいてもいいとデイルムツドは言つてくれた。なのはどの戦いの後も頑張つたねと褒めてくれた。

でも……彼の言葉の中には逃げないで立ち向かつて欲しいという願いが込められていたのも私は感じていた。

まるで彼自身が何かを後悔し、その想いを味わって欲しくないと
言っているように思ったのだ。

「伝えないと……」

デイルムツドも大切な人に伝えられなかった何かがあったのかも
しれない。

だったら自分がどうするかは決まっている。デイルムツドが握ら
せてくれた掌の中にいる大切なパートナーを展開する。

「バルディッシュ……また一緒に頑張ってくれる？」

《Yes sir.》

ボロボロであったバルディッシュはフェイトの想いに呼応するよ
うに放たれた光に包まれる。

光が弾けた時、そこにあつたのは新品同様の姿に戻った戦斧の姿
だった。

「行く……！ 本当の自分を始める為に！」

黒衣のバリアジャケットを纏い、フェイトは自分を支えてくれた者
達の元へ向かう。

——
今までの自分を終わらせて前に進む為に

時の庭園にたどり着いたデイルムツドは先に向かったクロノ達の
元へ向かっていた。廊下には大量の鎧片が散らばっており、激しい戦
闘が行われた事は想像に難くない。

そのまま疾走していくとクロノの姿を見つけた。なのは達とは別
行動を取っているのか、一人で大量の傀儡を相手取っている。

その背後から一体が迫ってきているが、疲労のせいかそれに気が付
いていない。

「はあっ!!」

彼を守るため一気に間合いを詰め、大なる激情と小なる激情を一閃し、傀儡を斬り伏せた。

「少年、隙だらけだぞ?」

「嫌味か!」

初めて会った時と同じ台詞を言うのと、しつかり反応が返って来た。

「まだ余裕がありそうだな」

「当たり前だ。犯人の下に着く前に倒れるわけにはいかない」

話ながらも向かって来た傀儡をディルムツドが斬り、クロノの魔法が薙ぎ払う。

「向かってきた分は全て俺が斬り伏せてやる。お前は安心して魔法を使えばいい」

「実戦でこんな安心感を感じたのは初めてだよ」

傀儡に対してディルムツドは一切防御を行っていない。

ランサーとして呼ばれるにふさわしい敏捷性を発揮する彼の前では鈍重な傀儡では反応することすら叶わず、一瞬で懐に入り込んで胴体を分断していく。

遠距離からの攻撃を当てようとするくとクロノの遠隔魔法が頭を打ち抜き、音を立てて崩れ去る。

クロノを中心にその周りを走り、跳躍して刃を振るい、迫る敵から彼を守る。ディルムツドの攻撃射程外の者はクロノが正確無比な射撃魔法で倒していく。

初めての共闘でありながら、実力を持つ二名は互いのサポートを行うことで絶妙な連携を發揮し、五十以上はいた傀儡達が僅か三分足らずで駆逐された。

「なのは達はどうした?」

「駆動炉の封印に向かってもらった! 僕達はこのままプレシアの所に向かうぞ!」

「承知した。先陣は努めよう!」

二人して最深部へ駆けながら邪魔な傀儡を倒し、プレシアのいると思われる区画に向かっていく。

途中の穴から見えるのは『虚数空間』と言い、魔力が拡散するせいであらゆる魔法が使えなくなる空間らしい。

落ちたら助けられないと言われたが、そのようなハマをやる程落ちぶれてはいない。

「近道するよー!」

《Blaze Cannon》

クロノのデバイスが放った砲撃魔法が壁を貫き、穴を空ける。そこから飛び出すと目的の人物がいた。

「プレシア・テスタロッサ!」

「待たせてしまったかな? 約束通り、捕らえに来てやったぞ?」

アリシアの入ったカプセルの傍らにいる女に声をかける。ディルムッドとクロノの姿を見るとその顔を忌々しげに歪めた。

「どうして……どうして邪魔をする……!」

「こちらを巻き込んでおいて随分な言い草だな。道を阻む者を排除する……先程貴様がやったことであろう?」

プレシアの想いを否定はしない。だからと言って他人を巻き込んでいいという訳ではない。

罪には相応の裁きを与え、償いをさせなければならぬだろう。

「それに、どのような技術や奇跡を用いても死者の完全なる蘇生など不可能だ」

聖杯ならば可能性はあるかも知れないがそれをここで言っても仕方がないだろう。

「そんなことは無いわ……! アルハザードになればその術はある!」

『アルハザードはただの伝説です。存在するかも知からない曖昧なものに縋って、貴方は何を望むの?』

執念だけで生きる女の言葉を否定するようにリンデイの声が念話で届く。

視線を向けると背中から光の羽を発生させた彼女が、巨大な魔方阵の上に立ち、こちらを見ていた。

「私は取り戻すの……アリシアとの過去と未来を……! こんなはずじゃなかった世界の全てをつ!」

「世界は、いつだって……こんなはずじゃないことばかりだよ!!」

隣に立つクロノが怒りの籠った視線をプレシアに向け叫ぶ。彼もまた変えたい……取り戻したい過去を抱えているのかもしれない。

「ずっと昔から……誰だってそうなんだ!」

ふと、こちらに向かってくる気配に気が付き上を見上げると、バリアジャケットを纏ったフェイトの姿が見え、その瞳と目があった。

(……向き合う決心をしたのだな)

その瞳にある決意を感じデイルムツドが微笑む。この世界の子供達は何故こうも強いのだろうか。

「こんなはずじゃない現実から目を逸らすのも向き合うのも個人の自由だ! だけど……自分の勝手な悲しみに無関係な他人を巻き込んで良い権利はありはしない!」

かつて己も愛に生きた。グラニアを守るために多くの者を巻き込み、傷付けた。

「周りを傷付けて得た幸せは生涯消えぬ楔を心に遺す。本当の下種ならばその限りではないがな」

確かにプレシアはフェイトの心を傷付け、今も一つの世界を巻き込む大災害を引き起こそうとしている外道であるかもしれない。

だが、その行動の根幹にあるのは失ってしまった娘への無二への愛情だ。その想いを持つ者が救いようの無い人間とは思えない。

「故に止める。何よりその少女も……母が破滅を迎えることを望まないだろう」

そしてデイルムツドが一步下がり、クロノもそれに倣う。

「母さん……!」

二人の想いは伝えた——今度は彼女が想いを伝える番だ。

「……何しに来たの……消えなさい。もうあなたに用は——」

不意に言葉が途切れ、プレシアが口を押さえて激しく咳き込む。

「プレシア・テストアロツサ……貴方は……」

顔を上げたプレシアの口から流れる紅い筋を見てクロノが呟く。

おそらくは病……それもかなり重度のものだろう。

おそらくは自身の最期が近かったことを理解しており、索敵される

可能性があつたのにかかわらずあのような暴挙に出たのだろう。

「貴方に言いたい事があります」

駆け寄りたい気持ちを堪え、フェイトがゆっくりと言葉を紡ぐ。

「私はアリシアではありません…貴方が作った…ただの人形なのかもしれない…ですけど——」

辛い現実を受け入れながらフェイトが真つ直ぐにプレシアを見つめる。

「私は…フェイト・テストアロツサは、貴方に生み出してもらつて…育てて貰つた。貴方の娘です！」

はつきりとフェイトが宣言した。

「貴方が娘であることを望むなら…私は世界中の誰からも…どんな出来事からも貴方を守ります。貴方は…私の母さんだから」

そう言つてフェイトが手を差し出す。その手をプレシアが取るならば、フェイトはクロノに…デイルムツドにも刃を向け、彼女を守るだろう。

「…くだらないわ」

しかし、彼女の想いに対するプレシアの答えはたった一言の拒絶の言葉だった。

アリシアの幻影に囚われた哀れな女は、フェイトの無償の愛情を理解しようとしなかった。

そしてデイルムツドが両手の剣を握り直すのとほぼ同時に、プレシアの足元に魔方陣が現れる。

(ちっ…い… 破魔の紅薔薇を失った代償をここで払わさせられるかっ!!)

破魔の紅薔薇を投擲して魔方陣に刺せば止められたかもしれないが、肝心の紅槍の修復は終わっておらず、止めようと駆け出すのが、間に合わない。

プレシアを起点に亀裂が走り、周囲が崩れていく。

「私は向かう…! アルハザードへ…!! そして取り戻すのよ…たつ

た一つの幸福を……！」

そして、彼女の足場が崩壊し、アリシアと共にその身体が虚数空間の中に落ちていく。

「かあさ……！」

「フェイト！ 生まれ！」

反射的に飛び込もうとしたフェイトを後ろから掴んで引き寄せる。クロノから虚数空間の話を聞いていなければそのまま彼女が飛び込むのを止められなかっただろう。

最期の瞬間まで、誰よりも己を信じてくれた存在の温もりに触れないまま、プレシア・テスタロッサは虚ろなる狭間の中へと消えていった。

「母さん——！！！」

フェイトの叫びが崩壊する庭園に響き渡った。

『みんな！ 脱出して！ 崩壊まで時間がないよ！』

しかし状況は干渉に浸っている時間は与えてはくれず、崩壊する時の庭園から転送魔法を使い、脱出したのだった。

——つかぬままに
不気味な面を着けた人物がその場に居た事に誰も気が

奇跡の残骸

「わかってはいたが、帰って来るなり投獄されるとはな」

アルフとフェイトと共に暗い牢獄の中で二人と同じ囚人用の服と手錠を付けたデイルムツドが苦笑した。

プレシアが死亡し、次元震が停止した事で事件は終わりを迎えた。それにより協力者の肩書きを失い、犯罪者扱いに戻った。

そういう訳で現在は疲れて眠っているアルフと彼女に膝を貸しているフェイトと共に拘置室の中なのであった。

「ごめんね。デイルムツド…」

自分と出会わなければ彼はきつとなのは達と同じ立場でいられたかもしれない。

そう思うとフェイトは申し訳ないという気持ちを抑えることができなかつた。

「お前達と共に行動したのは俺の意思だ。フェイトが気に病むことは無い」

目の前で母を失って一番辛い思いをしたはずなのに、他の者の心配をする優しい少女の頭に手を伸ばし撫でる。

「なのはと戦う前にも言ったが、フェイトの無罪は保障されている。気を楽にして待ってあげればいいさ」

気持ちよさそうに撫でられるままの少女の姿が小犬を思わせ、庇護欲を掻き立てる。

宝具は常にデイルムツドと共にあり、この程度の牢も拘束も彼には無い物と変わらない。にも関わらず素直に捕まっているのは彼らと約束したフェイトの無罪を認めさせる為であった。

「私の責任をデイルムツドに押し付けるなんてできないよ……!」

「気にするな。元々だいたい減刑する事が可能だったらしいからな。お前の分の罪はそれほど大きくはないさ」

もしも契約を反故にするならば今からでも相応の対応を行うつも

りではあったが、リンディとクロノは信用できるので問題ないだろう。

「それに、既に死した身だ。俺の犠牲で未来ある者が救われるならば安い物だろう。それにお前に自由を与えることができた今、すでに生きていく意味など——」

三度の生は確かに満たされる物も多かったが、使えるべき主がいなという虚無感が現界した時から常にこの身を蝕んでいた。

新たな主君を探そうかとも考えたが、やはり心から仕えたいと思つたものはフィンだけである。令呪の様な強制力がなければ他の主君に仕えようとは思えなかった。

「そんな事言わないで！」

無いと口にする前にフェイトが大声をあげる。

優れた聴覚を持つアルフが耳元で発せられた大声に驚いて床に落ちたが、そちらを気にしている余裕が無いのかただデイルムツドだけを見ている。

「私が前を向こうつて思ったのは…生きようつて思えたのは！ デイルムツドのおかげなんだよ！」

違う——俺はそんなに立派な者ではない。主君を生涯で二度も裏切り見殺しにされてもまだ、その生き方を捨てることのできない愚か者だ。

「俺を過大評価するな。そう思えるようになったのはフェイトの心の強さだ」

「きつかけをくれたのはデイルムツドだったよ。貴方の言葉がなかったら私は母さんと向き合えなかった…：…そうしてずっと後悔する事になってたと思う」

「フェイトならば俺の言葉など無くとも立ち直れただろうさ」

彼女ならばデイルムツドがいなくても過去を乗り越え、変わろうと決意して行動を起こすことができただろう。

「俺は変われなかった。結局…誰かの為に尽くすことでしか充足を得ることが出来ない」

偉そうに少女に語っておいて、何一つ変わっていないかった己に呆

れ、己を嘲笑った。

少女を救おうとしたのも純粋な善意だけではなく、失った主君の代わりに尽くす相手を求めただけなのかもしれない。

「フェイト、自分の幸せの為に生きる。これからのお前には時間の可能性も多くあるのだからな」

デイルムツドのそれは歪みだ。誰かを幸福にする事で幸せ得る：それは間違いではなく一つの生き方である。

しかし、その中に自身を大切にするという観念は存在しない。フィンの、グラニアの、ケイネスの為……常に槍を捧げる相手の事を想い、そのためだけに生きる。

個の幸せを切り捨てても主君に名誉を捧げる事を喜びにする……それは奇しくもフェイトが終わらせた『今までの自分』と全く同じ生き方であったが、デイルムツドはそれに気が付いていなかった。

「私は……デイルムツドが今までどんな生き方をしていたかわからないけど……きつといっぱい頑張っていたって言うのはわかるよ……だからね」

フェイトの瞳がデイルムツドを見つめている。

「貴方が幸せになってくれる事が私の幸せになるから……！ だから……これからは自分の幸せの為に生きていてください」

告白のようにも聞こえる台詞だったが、その表情は真剣そのもので、純粋にデイルムツドの幸せを祈っていた物であった。

少女は、母が手に取ってくれなかった小さな手を差し伸べながら想いを告げる。

そんな少女に対してデイルムツドが取るべき行動は決まっていた。

「このデイルムツドが女性の頼みを断る訳は無い」

不安そうに揺れる瞳の少女を安心させるようにその手を掴んだ。

「フィオナの騎士、デイルムツド・オティナ。己の幸せの為に生きることをここに誓おう」

主君という楔を埋め込まれた騎士がそれを取り払い、人として生きる。

騎士であるという誇りは捨てる事は出来ないだろうが、そんな生き

方も悪くないかもしれない。

「後、その聖誓を止めないとまた同じことやる気がするんだけどねえ……」

「それは少し考えさせてくれ」

話に入るタイミングを逃して床で話を聞いていたアルフの呟きに答える。流石に聖誓はそう簡単に曲げることはできそうになかった。

大量のモニターの並ぶ部屋の中、一人の男が悠然と座っていた。

「ただいま戻りました」

悠然と座り、紅茶を飲む白衣の男の前に、暗闇から溶け出すように小柄な少女が現れた。

褐色の肌に白衣のワンピースの少女。それだけ聞けば普通の少女としか思えないが、その顔を覆う骸骨のような真っ白の面が異彩を放っている。

「やあ。〴〵苦勞だったね」

突如目の前に現れた異質の存在に全く動じず、白衣の男が朗らかに返事する。

「プレシア・テストアロツサは虚数空間に飲まれ、残念ながらジュエルシードの回収は叶いませんでした」

「気にしなくていいよ。叶うならば欲しかったがね。Fの遺産の方はどうなったかね?」

「管理局に回収されました。今後も我々が監視を続けていこうと思います」

「よろしく頼むよ」

白衣の男がいくつか質問し、淡々と黒衣の人物が答えていく。

「プレシア・テストアロツサ……全く惜しい人物を失ったね。私の基礎理論を完成させてしまうとは全く驚嘆に値するよ」

せめて亡骸を回収できればその頭脳を手に入れることができたのだらうが、無理ならば仕方がない。そんな事よりも男にはやるべきことがあるからだ。

「娘達はまだ完全とは言いがたいからね。君達の存在はありがたいよ。ハサン」

「不気味な我々を拾い、匿ってくれたのですからこれくらいは当然のことです。Dr, スカリエツティ」

白衣の男：『無限の欲望』ジェイル・スカリエツティと小柄な少女：『百の貌』のハサンが出会ったのは2年前だった。

突然研究所の中に現れた意識の無い少女を処分するのではなく、助けたのは気まぐれであった。

もしかしたら自分を狙う罠であった可能性もあった。万全を期すならば、意識を取り戻す前に処理するのが正解であったろう。

それをしなかったのは娘達の面影を重ねてしまったからだ、それは彼にとって最高の選択となった。

少女から語られた話は無限の探求欲を持つスカリエツティにとってはあまりにも魅力的であり、彼の世界を一変させる物だったのだ。

七体の英霊の殺し合う戦争。その果てに勝者が得ることができる万能の願望機『聖杯』の存在。

彼女がその中で暗殺者のクラスを与えられた百を越える人格を持つ多重人格者であり、それら全てを独立した人格と身体、個性や特技を有していること。

目の前の少女の姿は本来は意識の底に眠り現れる事のない人格だが、何らかの要因が働いたせいで現在は主人格となってしまうらしい。

「充分過ぎて怖いくらいだよ。本当に何も望みはないのかい？」

「居場所の提供で充分です。他のサーバーヴァントに力で劣る私は、戦い以外でしかお役に立てないので」

「それはいずれ娘達がやってくれるはずさ」

『専科百般』のスキルを持つアサシンは様々な特技を有しており、単体でも三十二の特技を發揮できるが、分担すると非常に効率よく様々

な事を行える。

その種類は戦術、学術、隠密術、暗殺術、詐術、話術、読唇術、罫作成、掃除、洗濯、宴会芸、料理、裁縫、ゲーム、買物物の値切りなど多岐に渡り、おかげで今は研究に没頭できるようになった。

ちなみに裁縫が得意なのはポニーテールの女性アサシンである。

「トウウマの食事也非常に素晴らしい物だしね」

何気に全人格の名前と顔…面の形が一致しているのはさすががとうべきであろう。

「ところで他のサーヴァントという事はやはり……」

「はい。時の庭園で管理局の者と共にいるランサーを発見しました。外見はだいぶ小柄になっていましたがその実力は衰えておりません」

ランサーとアサシンがこの世界に現れた。それはつまり他のクラスのスーヴァントの現界の可能性もあるということだろう。

「なかなか面白いことになってきたね。一体これから何が起きるのか…全く興味が尽きないものだよ」

薄暗い部屋の中で、狂気の天才が不気味に囁うのであった。

プレシアが目を覚ますと、そこは一面の荒野であった。

アルハザードへ向かうために賭けに出て虚数空間に飛び込んだが、このような荒野がアルハザードとは思えない。

「お目覚めですか？」

失敗したと絶望するプレシアは、背後から声をかけられ振り返る。

そこにいたのはカエルめいた異相の男であった。その隣にはアリシアの入ったガラスが鎮座している。

「私のアリシアに…近寄らないで……！」

不気味な男をアリシアから引き剥がそうとふらつく足で立ち上がるが、バランスを崩して倒れてしまう。

ジュエルシードの九個同時発動と病、虚数空間の影響。全ての要因が重なり合った身体がまだ鼓動しているのがまだ奇跡である。

「その身ではもう持たないでしょう。後ほどこの少女と共に埋葬して差し上げましょう」

「その必要はないわ……！ 私はアルハザードへ……死者を蘇らせる術を手にしてその子と……愛しい私の娘と一緒に……！」

奇妙な襟首の青いローブを纏った男の言葉を拒絶し、吐血して這いずりながら娘の元へその身を進めていく。

アルハザードに辿り着いたはずだと叫び、プレシアは奇跡を信じ、再び立ち上がる。

「あるはギード……なる場所は存じませぬが……ここは草木も水も魔術も私が目覚めるまで存在しなかった辺境です。おそらくはそのような技術がある地ではありませんまい」

しかしその祈りは容易く手折られ、膝を付く。その衝撃でいつの間にか懐に入っていたジュエルシードが零れ落ち、日差しを浴びて美しく輝く。

「これは……ふむ……成程……」

男がジュエルシードを拾い興味深げに眺めているが、絶望し心の折れたプレシアはそれを気に留める余裕が無い。

「私の朋友が作りし魔導書『螺湮城教本』と貴方の命……そしてこの魔石の力を使えばこの少女の魂を器に戻せるかもしれないね……もつとも……可能性があるだけで実際にどうなるかはわかりませぬが」

そう呟いた男の言葉にプレシアが弾かれたように顔を上げた。

魂を戻せる可能性がある……それはつまりアリシアの蘇生という意味に他ならない。

男は語る。この魔導書は元々異界の在り処を示した書物で、魔術の才を持たない男でも大魔術・儀礼呪法を遂行することが可能とする代物だと。

魂の情報に近い母親の魂を依り代して、娘の喪失した魂を輪廻の輪から引きずりだし器に定着させれば可能性はあるという。

ただし、それには莫大な魔力が必要で魔導書単体では不可能だが、これほどの魔力を秘めた結晶体を使えば必要な量はあるとのことだった。

「いかがですか？ どうせ潰えるその命…最期は神に祈り、奇跡を起こす可能性に縋るのも悪くはないでしょう」

「なぜ……一体何が目的……？」

何の見返りもの無く、そのような可能性を提示するとは思えない。必ず何か裏があると考えていた。

「そのような物は求めませぬ……しいて言うならば私が罪から逃れる事に利用する……と言ったところでしよう」

以前、狂気に堕ちた彼は多くの命を弄んでいたのだが、聖なる光を受け正気を取り戻した。

なので、せめてもの償いとしてここで身寄りの無い子を救い、育てているとのことだった。

「強要は致しませぬが……もしもこの娘を救いたいと願うならば！ この魔導書を手に取り！ 祈るのですっ！」

大仰な動作をしながら声高に男が叫ぶ。神など曖昧なものを感じる男の妄言ではないかとプレシアは疑ったが、魔導書からは放たれるオーバーSクラスの魔力と自身の命が消えかけている事が背中を押した。

「アリシアの魂を……どうかこの世に呼び戻しなさいっ!!」

ジュエルシードを引き寄せ、男から受け取った魔導書に全ての魔力を注ぎ込みながらプレシアが叫ぶ、同時に急速に肉体から命が消えるのを感じた。

魔導書に魔力を吸い尽くされたジュエルシードが砕けていき、莫大な魔力を得た魔導書から放たれた光がアリシアの身体を包む。

——最後の瞬間にプレシアが見たのは、うつすらと瞳を開けた愛しい娘の姿であった

そして目覚めたアリシアの最初の反応は泣き声だった。

「どっ……どっ……どうしましたかな？」

目を開けたらドアップのインスマウス顔があれば誰だって恐怖するであろうが、男はそれに気が付かない。

十分ほどして泣き止んだアリシアから目を開けてると怖いと言われ、ようやく今まで初対面で子供が泣く理由を知ったのだった。

「記憶喪失ですと？」

「うん」

落ち着いた少女に姓を尋ねると、自分の名前すらわからないという。

（本物の魂を呼んだのか、それとも別の魂か…判断する術がありませんねえ……）

その答えを判断できる女はすでに物言わぬ亡骸となっている。そもそもアリシアという名はこの女が言っていたからわかるのであって、今となってはこの者の名も姓も知ることは叶わない。

「ではこれからはアリシア・ダルクと名乗りなさい」

「ダルク？」

「高潔にして可憐！ 美しき聖処女の名です！」

男にとって最高の名前を付け、本人を置いてけぼりにして熱くなっていたが、意味は殆ど伝わっておらず、アリシアは首を傾げているだけであった。

「おじさんの名前は何ていうの？」

「私の名前はジル・ド・レエと申します。ではアリシアよ。ひとまず村に行きましようか」

尋ねる少女に男が名を名乗り、アリシアを肩に乗せた。

そしてプレシアの亡骸と大破した杖を両脇に抱え、アリシアを肩車しながらかつてキャスターと呼ばれた男がその場を去っていったのであった。

時の庭園での戦いから数日後、デイルムツドは一日だけの単独行動の許可を貰うことができた。

昼間になのはとユーノにフェイトと共に一時の別れと再会の約束を告げた彼の姿は、夕暮れの図書館の前にあった。

「はやて」

「デイル君！ 久しぶりやね！」

目的の人物に声をかけ、それに気が付いた車イスの少女がこちらに近寄ってくる。

「少し、立て込んでいてな。時間が取れなかったのだ」

はやてと図書館で出会ってからすぐにアースラと交戦、その監視下に入り、昨日までは営倉の中で過ごしていたのでこうして会ったのは一ヶ月ぶりである。

あの時のように談笑する二人であったが、デイルムツドがここに来たのは別れを告げるためであった。

「さて…すまないがはやて。本日はしばしの別れを告げに来たのだ」「えっ?！」

驚くはやてに魔法に関する事を伏せ、遠くへ行かなければならない事情ができ、しばらくは戻れないという事を伝える。

これからアースラと共にミッドチルダという地に向かい、一ヶ月後そこで法の裁きを受ける。

しかし、次元漂流者であり物事の危険性を把握していなかった事、アースラへの敵対行動はこの世界で衣食住の提供をしてくれた

フェイトへの礼であり悪意があつての物ではないとクロノとリンデイが擁護してくれたおかげで実刑を受ける事は無いとのことだった。

「せっかく友達になれたのに……」

「いつ戻れるかわからないが、近いうちに戻れる努力はするつもりだ」
これからデイルムツドは囑託魔導師という資格を取る為に色々とする必要がある。

彼の持つ特異な能力と武器は上層部の興味の対象であり、このままでは裁判後に何をされるかわからないという事でアースラ所属の魔導師としてリンデイの保護下に入る為に裁判中に取得する必要があった。

「再会の約束する証としてこれを渡そう」

「指輪？」

チエーンに通された銀色の指輪をその手に握らせる。最悪の場合二度と会えない可能性もあったので、せめて孤独な彼女の傍に何か送れたかったのでクロノとの『賭け』に勝った時に貰った金で購入した。

特にそれ以外で必要な物は無かったので残額は返したが。

「安物だがな。本物はいずれ君にふさわしい男から貰ってくれ」

「ありがとうな。大事にする…じゃあわたしはこれを代わりにあげるわ」

「俺も大事にしよう。お前との語らいは実に心地が良かったぞ」

そう言っただけで彼女が取り外した髪留めを手渡されたデイルムツドは彼女が偶然持っていたカメラで共に写真を撮り、二人は別れたのだった。

「待たせたか？」

「いや、約束通りの時間ピッタリだよ」

待ち合わせの場所へ着くと、そこにはすでにクロノの姿があった。本来は監視を行わなければならなかったのだが、デイルムツドの二人で会いたいという願いを聞き入れてくれたのだ。

「君の力は稀少技能扱いだからね。フェイトと違って試験は実技だけでければ通るはずだよ」

だからすぐに戻ってこれることができると言葉の中に含ませクロノがそう言った。

リンデイの計らいでデイルムツドの出自はアースラの人間以外に

は伝えられておらず、特殊な武器を呼び出すという稀少技能『宝具作成』を持つ男であると報告したらしい。

「裁判は君もフェイトも実刑は絶対にさせないって約束する」
「感謝するぞ」

若い少年に負担を掛けることしかできない事を申し訳なく思いながら、感謝の意を伝える。

「その必要はないよ。その分僕の部下として頑張って働いてもらうからね」

「承知致しました、ハラオウン執務官殿。このデイルムツド、この槍を貴殿のために振るいましょう」

「止めてくれ！ やっぱり君の敬語はなんか凄くプレッシャーを感じる！」

冗談めかしてデイルムツドが恭しく膝を付きながらそう言うとき、クロノが叫んだ。

主君に絶対の忠義を誓う騎士であるという事を知っているせいで、敬語だと結構緊張するらしい。

今朝、それをなのはの前でそれを聞いたデイルムツドはそんなの気にする必要はないと笑ったが「気になるよっ！」とクロノとなのはに同時に突っ込まれた。

「まあ、なんにせよ。しばしの別れだ。海鳴市よ」

デイルムツドの別れの言葉と同時に、二人の姿が光に包まれ、フィオナの騎士はこの地球から姿を消した。

——そして五ヶ月の月日が流れる

フェイト・テスタロッサとデイルムツド・オディナは囑託魔導師の資格を与えられ、アースラ所属となった。

その代償としてその力に大きな制約を与えられた彼が再び地球に降り立った時、新たな戦いの幕が上がるのだが、今はまだその事を知るよしは無かった。

アリサ・バニングスの日曜日は優雅な物であるはずだった。今日はなのはやすずかと遊ぶ約束をしていなかったなので、犬と一緒に庭で遊ぼうかなと考えていた彼女だったが、その思考は突如中断されることになる。

――庭から聞こえてきた巨大な音によって

何かが墜落したような轟音に驚いたアリサが執事の鯨島を引き連れ、大慌てで庭に飛び出すと巨大なクレーターの中に男がいた。

歳は二十と行ったところだろうか。紅い髪、紅い髭の筋骨隆々の身体。真紅の外套を羽織った男の横にはアリサの背ほどの長さを持つ剣が刺さっている。

「むう……ここはどこだ？ ウエイバー……はおらぬようだが……」

屋敷の人間が啞然として見ている中、男が頭をかきながら起き上がり、クレーターの中から出てくる。

「でっ……でっかい……」

二メートル程の巨体の男がキョロキョロと周囲を見回していたが、アリサの眩きを聞き止め、その視線をそちらに向けた。

「おう、小娘。ちいと聞きたいのだが……ここは冬木のどこらへんだ？」

フユキなどという地名はアリサは知らない。隣にいる鯨島に視線を向けるが首を振る。どうやらそんな地名に心当たりはないら

しい。

「そつ……それよりアンタなんでウチの庭に降ってきたのよ？」

「うむ。英雄王に討たれた所までは覚えてるんだがなあ……気が付けばここにいたのだ」

「えいゆうおう？」

二人ともウタレタと言う意味を『討たれた』と脳内で変換できなかったのだが、本人が現状を理解していないことはわかった。

大男がふうむと言いながら振り返り地面に刺さっていた剣を軽々と引き抜くと、鞘に収める。

「何故だが知らんが受肉しておるし……とりあえずは街中にでも繰り出してみるか。ではな小娘、邪魔をしたな」

「ちよ……ちよつと待ちなさい！ アンタ一体誰よ！」

不法侵入だとか銃刀法違反だとか庭の惨状どうするんだなど色々言いたかったがとりあえずは飛び出しそうになった言葉を堪えた。

「余か？ 我が名は征服——」

「グルルルッ！」

男が答えようとした瞬間、一匹の立派な黒い毛並みを持つ大型犬が男に向けて突進してきた。

先日怪我しているところをアリサに拾われたその犬は懐かず、暴れてばかりで檻に入れられていた。

「あ……あぶな——」

その様子からアレキサンダー大王の愛馬であった暴れ馬の名を取り、ブケファラスと名付けられた犬は男に飛び掛かろうとした。

しかし、男の双眸が大型犬を捕らえた瞬間、ピタリとその動きを止めると、驚くほどに従順になり、素直に男の大きな手で頭を撫でられていた。

「なかなか生きが良いではないか！ 小娘！ こやつの名はなんという？」

「ブ……ブケファラス……だけど」

初めて見るその様子に啞然としながらアリサが答えると、男は満面の笑みを浮かべた。

「ほほう！ 我が愛馬と同じ名であるとは！ 気に入った！ ブケ
フアラスよ！ 余と共に世界を目指すか！」

そう言つて男が豪放磊落に笑っている間にも屋敷の犬が続々と男の周りに集まっっていく。

「む……腹が減つたな。念願の受肉が叶つたのだ……まずは手始めに市街を侵略し、美味なる物を食らうとするか！」

男が発する言葉には不思議なカリスマが秘められており、それに反応するかのように屋敷の犬がそれに付いていく。

「ちよ……ちよつと待ちなさい!!」

呆氣に取られ、思わずそのまま見送りそうになつたが、流石に屋敷中の犬を連れていかれそうになれば、嫌でも正氣を取り戻す。

「むう？ なんだ小娘、余の霸道を邪魔するところか？」

「霸道だかなんだが知らないけどウチの犬を勝手に連れて行こうとしないですよ?!」

怪しき満点の大男にペットを全て奪われかけたのは正直堪えていたアリサだったが、黙つて連れていかれる訳には行かない。

とはいつてもペット達は男に付いて行く気満々で行つた様子であり、このままでは大脱走してでも付いていってしまう恐れもある。

「さつきは聞きそびれたけどアンタ一体何者よ！ てか侵略つてどういうこと?!」

侵略などと発言する正体不明の男にアリサが叫ぶ。

最初は呆氣に取られたせいで忘れていたが、ようやく今は警察に電話するべきだという考えに至つており、返答によつては連絡を――

「我が名は征服王イスカンドル！ マケドニアの霸王である！ 聖杯の呼びかけに答え、ライダーとして我が忠臣、ウェイバー・ベルベツトの元に現界した！ 受肉を果たした今ツ！ 余が求むのは世界の征服であるつ!!」

ヤバイちよつと危険な人だ。アリサと鮫島は同時にそう思った。

イスカンドルと名乗った男にふざけている様子が無い。世界征服というのが本気かはわからないが、鍛え抜かれた身体に纏われた日本ではありえない軽鎧と外套。そして腰にある剣という不審者全開の

男をここから出したら碌でもない事になるのは明白である。

宣誓と同時に発せられた圧倒的な存在感を受け、警察ではこの男を物理的に止める事は不可能だと本能的に感じ取った二人がイスカンドルの前に立ち進路を阻む。

「どうした？ 余は我が忠臣を探し出し、これから世界を征しに向かねばならぬのだが…」

物理的な意味では老人と子供では勝ち目が無い。つまりこの男を止めるには何か留まりたくなる事を言わなければならない。

「え…えつとね？ 私、あんたの世界征服のやり方に興味があつて……一緒にゲームでもしながらゆっくりと話を聞いてみたいなんて思つて……」

一か八かと賭けに出たアリサの言葉にイスカンドルは――

「ほう！ 余の壮大なる計画を聞きたいと申すか！ 小娘！ なかなか見所があるぞ！ ちなみに余はゲームも好きだが……アドミラル大戦略はあるか？」

――あ。こいつバカだ

あつさりと話に乗ったイスカンドルに対し、アリサが心の中でガッツポーズをした。

そんなアリサの内心を他所に、覇道を語ろうと嬉々としているイスカンドルがアリサを持ち上げズンズンと屋敷に歩を進めていく。

「では小娘よ！ 聞かせてやろう！ 余の覇道を！」

「ちよつと！ 下ろしなさいよ！ というか私にはアリサって立派な名前が――」

「なあに、余からすれば貴様なんぞまだまだただの小娘よ！」

アリサの抗議を無視し、イスカンドルは悠々と屋敷の中に入って行き、その後を慌てて執事が追ったのであった。

その後、鏡を見て若返ったと驚いているイスカンダルを上手くおだてつつ、彼が侵略に向かわないように上手く約束を取り付けることに成功した。

犬の逃走を防ぐためにゲームと行動の自由を約束にバニングス家に居候させる事にしたアリサは、この問題児を大事な親友に絶対に会わせないと胸に誓うのであった。

A, S編

ステータス (A, S)

- ・筋力：C
- ・耐久：c (D)
- ・敏捷：A (B)
- ・魔力：E
- ・幸運：C+
- ・宝具：B (E)

『固有スキル』

- ・対魔力：D
- ・心眼 (真)：B
- ・愛の黒子：D (E)

『プロフィール』

所属：アースラ

地位：囑託魔導師

魔力色：形容しがたい深い闇色

転生したフィオナの騎士。忠義を重んじ、騎士道を重んじる。

半年で一部能力が成長したが、宝具を危険視され、すべての宝具に限定処置を施され、身体能力も制限を受けたせいで現在は耐久以外は転生時よりも低下している。

ストレージデバイスを槍型に改造した物を使っており、そのサポートにより空戦能力を獲得している。

・宝具

デイルムツドの有する4つの宝具。

破壊されてもデイルムツドの魔力によって再生可能だが魔力のランクで修復時間が変化する。

ランクEであれば一週間で復活する。

管理局により封印処置を施されており、限定解除はリンデイの許可が無くてはできず、宝具の具現化も普段は行えなくなっている。

・破魔の紅薔薇

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2～4 最大捕捉：1人
刃が触れた対象の魔力的効果を打ち消す紅の長槍。

・必滅の黄薔薇

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2～3 最大捕捉：1人

この槍に傷付けられた者に治癒不能の呪いをかける黄の短槍。

・大なる激情

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：1人

大怒の意を持つマナナーン・マツクリール神の剣。

・小なる激情

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：1人

小怒の意を持つマナナーン・マツクリール神の剣。

深夜の開戦

——『十二月一日』——

「久しいな。ユーノ」

「デイルムツドも元気そうで良かったよ」

アースラの食堂で再会したデイルムツド・オディナとユーノ・スクライアが互いの息災を喜んだ。

「僕、半月前にここに来たけど、まさか出発直前まで会えないとは思わなかった」

「ここ半月はデバイスの調整が忙しくてな。なかなかアースラに戻れなかったのさ」

デイルムツドは事実上無罪となったのだが、破魔の紅薔薇、必滅の黄薔薇、大なる激情、小なる激情は危険と判断され、封印処置を受ける事となった。

それと同時にデイルムツド自身にも封印が施されており、ただでさえ弱体化した身体はさらに力を失ったが、包帯なしで『愛の黒子』の能力も低下しているのであまり困っていないどころか感謝している。

「ストレージを無理矢理武器に改造したんだっけ？」

「ああ。そのまま武器型を使えば良かったのだが…それだと飛行魔法が上手くこなせなくてな」

デイルムツドの左手に付いているのは管理局から支給されたデバイスだ。

待機状態は時計型でデイルムツドの位置を常にアースラに伝える『首輪』としての機能も有している。

「宝具無いとキツくない？」

「騎士は得物を選ばん。それに我がデバイスは俺に合わせて作られた物だ。今の状態でも最高の力を発揮できるだろう」

そう言ってデバイスを一瞬だけ展開し、栗色の柄の槍をユーノに見せて仕舞った。

必滅の黄薔薇ほどの長さであるが今のデイルムツドの身長よりも

大きい。最初は主力武器であった破魔の紅薔薇に合わせようかと思っただが、特殊能力を持たないデバイスであるならばリーチより小回りを優先した方がいいということでの長さになった。

「明日はようやく裁判の判決日だね」

「ハラオウン執務官殿が尽力してくれたのだ。何の問題もないさ」

現在はクロノの護衛兼先兵としてアースラに所属しているので、クロノは直々の上官となっている。

少し離れたところに座っている本人の嫌そうな顔からわかるようにまだデイルムツドに敬語で話されるのに慣れていない。普段はタメ口で話しているが、公の場では上官として敬意を示さなければならぬ。

「それよりレテイ総督より厄介な話を聞いてな。おそらく明日、アースラは地球に向かう」

「何かあったの?」

「とあるロストログアの調査の為に地球に向かった調査隊からの連絡が途絶えたらしい」

デイルムツドのアースラ所属へ尽力してくれた恩人から聞いた話をユーノに伝える。周囲の人間……特に別の席で食事をしていたクロノ達はその言葉に反応を示す。

「なんていうロストログア?」

「そこまでは教えてくれなかったが、第一級搜索指定の危険物であるとは言っていたな……まあ確定すればリンデイ殿より何か連絡がされるだろう」

そう言つてデイルムツドが優雅に紅茶を飲む。

それを見ていた女性局員が頬を染め、男性局員が齒軋りするといったいつもの風景に戻った。

「ぐああああっ!?!」

深夜二時。オフィス街の薄暗い路地裏から男の叫びが響き渡った。彼らは時空管理局の魔導師であった。最近頻繁に痕跡が発見されている第一級搜索指定のロストロギアを調査する為、第97管理外世界『地球』を訪れたのだが、突然現れた存在に抵抗も出来ずに倒された。

「雑魚いな」

倒れている二人の魔導師を見下ろしているのは左脇に大きな魔導書を持った赤いスカートの少女であった。

「こんなじゃたいした足しにもならないだろうけど」

そういつて赤い少女が脇にあつた魔導書をかざすとページが開き、不気味な光を放つ。

「お前らの魔力…闇の書の餌だ」

魔導書がリンカーコアから魔力が吸い取り、二人が苦悶を声を上げるが少女は眉一つ動かさない。

「ふーむ。妙な魔力の流れを感じたんで覗いてみたのだが…：ずいぶんと物騒な事になっておるのう」

次の獲物を探そうと思っていた少女に後ろから声をかける存在がいた。

ここには封鎖領域という魔法が掛けられており、魔力の無い人間は入れるはずが無い。

声を掛けられるまで気がつけなかった事に驚きながら少女が振り返る。

「察するに小娘。貴様、その小僧共から魔力を奪った…：といったところか？」

「なんだよおまえ。文句あんのか？」

真冬だというのに胸に『大戦略』と書かれた奇妙なTシャツとGパンというラフな格好をした大男が立っていた。

（なんだコイツの魔力…：15ページ…いや…：そんなもんじゃねえ?!）

まるでリンカーコアよりもさらに奥…：この男の中に莫大な魔力が潜んでいるよう様である。

「いやっ！ 敵を蹂躪し略奪する！ この征服王イスカンドルと共に歩むにふさわしい行いである！ お主、我が軍門に降らぬか？」

「……は？」

睨み付ける少女に対し、イスカンドルは高らかに笑ってそれを否定する。

「酒が飲みたくなって街に出てみれば、このような逸材を見つければ全く持って運がよい！ 小娘！ 余と共にこの世界を征服しようではないか！」

同居人の命令を無視した発言だが、ライダーと呼ばれた疾走者がその程度で止まるわけがなかった。

「寝言は寝ていいな！ おっさん！ ついでにその馬鹿でかい魔力も貰ってくぜ！」

無論少女がそんな滅茶苦茶な話に乗る訳がなく、型に担いでいたハンマーを突きつけながら拒絶する。

「ふーむ…？ おおそうか！ 安心するがいい、待遇は応相談である」「そういう問題じゃねえ！」

叫びながら少女が跳躍し、ハンマーを大きく振るう。

「まーた交渉決裂かあ…。セイバーやランサーにも断られたが…：…なーにが気に入らんのだ？」

「なっ?!」

コンクリートすら砕く破壊の鉄槌を大男の巨大な手が掴んで止めていた。

「どれ、小娘。ならば征服王イスカンドルにふさわしい方法をとらせてもらおうか!!」

そう言っただけでイスカンドルはハンマーを掴んだまま、空に向けて少女を放り投げた。

「うわあ?!」

少女が空中で静止し、下に視線を向けるとイスカンドルの服が変化していた。

真紅の外套を纏い、巨大な剣を握っていたが、飛行能力は無いのか、こちらを見ているだけだった。

「売られた喧嘩…買ってやろうじゃねーか…アイゼン！」

《Schwalbfliegen》

先に喧嘩を売ったのはどう考えても少女の方なのだが、そんなことは少女にとってはどうでもいい事で、呼び出した2センチほどの鉄球をハンマーで打ち出す。

「ぬうんっ!!」

高速で飛ぶ鉄球は相当の破壊力を秘めているはずであるが、イスカンドルはその手の剣を一閃し、全てを弾き落とした。

「なるほど。空中戦が望みか…であれば余がそちらに向かつてやろうではないか!!」

オフィス街に響き渡る大きな声でイスカンドルが叫ぶと、剣で空を切った。

「一体何を…?!」

イスカンドルの行動が読めなかった少女は、次の瞬間、その意味を理解することになった。

突如雷雲が辺りを包み、巨大な雷がイスカンドルの傍に落ち、抉れた地面から発生した粉塵がその巨体を覆い隠した。

「なん…だそれ?!」

粉塵が晴れた時、そこにあつたのは巨大なチャリオットを率いる雷を纏った巨大な二頭の雄牛の姿であつた。

「物は試しであつたが、『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』は元通りになつておるな！」

さーて。小娘…『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』を使わせるほど余を追い詰めることができるか試してみるがよい!!」

イスカンドルがチャリオットに乗り込むと雄叫びを上げながら空中にいる少女の元に突進してきた。

「ほう、その奇怪な魔方陣、ずいぶん硬いではないか！」

「あたしの防御はヴォルケンリッターの中で一番なんだよっ！」

突進しながら振り下ろされた剣を展開した障壁で弾く。それを見たイスカンドルが愉快げに笑った。

「ではこのイスカンドルがその限界を試してやろうではないか！小娘よ！我が宝具の一撃を見事受け止めてみるがいい！」

『ヴァイア・エクスプログナティオ』
『遙かなる蹂躪制覇』!!』

—— 『遙かなる蹂躪制覇』

イスカンドルの有するこの宝具は言ってしまうばただの突進である。

しかし神牛の蹄と車輪に雷神ゼウスの顕現である雷撃が付与された攻撃は触れたものを消し飛ばす圧倒的な破壊力を有している。

「防御：最大展開っ!!」

おそらくは爆走する二トトラックに轢かれる方がまだ生存率が高いのではないかという必殺の疾走を少女が全力を込めた障壁で迎え撃つ。

激突の瞬間、尋常ではないかは威力を秘めた雷撃が飛び散る。もし攻撃がぶつかったのが上空でなければ雷撃がビルを粉碎し、地面を抉っていただろう。

—— 爆音の後の静寂が訪れ、やがて煙が晴れると

「ほう！ 見事防ぎおったか!!」

イスカンドルの視線の先には障壁を展開した少女の姿があった。

神威の車輪は衝撃によりチャリオットの一部分が損傷し、雄牛にも傷があったが、イスカンドルには全く負傷は無く。腕を組んだままそこにあっただ。

対する少女は魔力を使いきり、身体に傷は少ないが、バリアジャケットはボロボロであり、これ以上戦えないのは明白であった。

「その力！ 余を守る盾として是非とも欲しい！ 小娘よ！ 再び尋ねるが、余の軍門に下り、共に覇道を歩まぬか!!」

「断る……!! あたしが守るのは…はやてだけだ!」

満身創意となってもイスカンドルの誘いを躊躇いなく切り捨てる。「ふむ。すてに仕える王がおる身であったか…ならば仕方がない！」

今宵は諦めるとしよう！」

そう言つてイスカンドルが地面に降りると、再びその姿がラフな格好に戻り、チャリオットが虚空に消える。

「どういうつもりだ…?」

「なあに。王がいるから余の軍門に下れぬというならば、余がすべき事は一つ！ お主の王を蹂躪し征服するだけである!!」

「…っ?! ふざけるな！ てめえにはやてをやらせる訳ねえだろ!!」

ボロボロの身体でもなお、主を守る為に武器を構える。

「落ち着けい！ 貴様のような猛者が命を賭けて守ろうとする王の命を奪う訳なからう」

今にも飛び掛りそうな少女を手で制する。

「じゃあ…どうするつもりだ…」

「決まっておるわ！ その王を我が軍門に下すのだ！ そうすれば貴様も余の軍門に下る！ どうた？ 素晴らしい案であろう?」

滅茶苦茶な宣誓に少女は絶句していたが、それを気にせず高笑いしながら男は結界から出て行ったのであった。

「…帰るか」

なんとも言えない気持ちになりながら、少女もその場から立ち去り、オフィス街は再び喧騒を取り戻した。

——『十二月二日』——

地球に向かっていたアースラに緊張が走った。

観測を行っていた者達が、鳴海市に突如発生した大小二つの結界の存在を感じたのだ。

「状況は?!」

「駄目です！ 先遣隊にも現地の高町さんにも連絡が取れません!!」

リンデイの問いにアレックスが返す。

昨夜連絡が途絶えた調査隊の者を捜索するために先に地球に降りた数名のアースラのクルーとも結界の展開と同時に連絡が途絶えたのだ。

「おそらくはどちらかの結界の中にいると思いますが…リンデイ殿。如何致しますかな？」

「二手に別れて内部に突入します。デイルムツドさんは小規模の結界に。大規模の結界にはフェイトさん、アルフさん、ユーノさんの三人が突入してください」

「承知致しました」

デイルムツドが転送ゲートの中に入り、デバイスを展開する準備を整える。

直接内部に入ることは出来ないので上空からの侵入になる。初の実戦での飛行魔法の使用になるが、それほど緊張はしていない。

「デイルムツド。気をつけてね？」

「フェイトもな。お前達が容易くやられるとは思えんが、何が起きているかわからん以上、警戒は怠るなよ」

そう伝えると同時に光に包まれ、次の瞬間には鳴海市の上空にいた。

「さて。いくぞ『グラニア』！」

かつての想い人の名を与えられたデバイスが展開する。

普段の服がバリアジャケットの性質を持っているので変化はないが、その手には栗色の槍が握られていた。

デイルムツドがアームドデバイスではなく、杖型のストレージデバイスを槍に改造したものを使っているのには訳がある。

半年前の戦いは、飛行能力を持たないデイルムツドは戦える舞台が大きく制限されていた。

その為、デバイスで飛行能力を手に入れようと考えたのだが、魔法サポートに劣るアームドデバイスではデイルムツドの才能では飛行魔法を行えず、ストレージデバイスであれば辛うじて使用できた。

しかしデイルムツドの真髄は武器を扱う技量であり、魔法の才能は

ゼロに等しいので飛行魔法のみに特化した特殊仕様でやつと飛べる
と言ったところであった。

そうして完成したのが、飛行魔法だけに絞り、武器のリカバリー性能と硬度を限界まで強化したアームド風ストレンジデバイス『グラニア』である。

この名前をつけた時のアースラの一同は微妙な反応を示したが、
デイルムツドとしては己の命を預ける物にふさわしい名だと思っている。

「アル！ ブルーノ！ フィル！」

結界内に侵入したデイルムツドが見たのは、鎧を纏った女性の前で
倒れているアースラの仲間達であった。

「お前もこの者達の仲間か？」

デイルムツドの侵入に気がついた女性がこちらに問いを投げかける。
長い桃色の髪を後ろに束ねた女性の手にはアームドデバイスと
思しき剣が握られていた。

「いかにも。時空管理局アースラ所属の囑託魔導師だ。とりあえずお
となしく投降してもらおうか？」

「それはできない。我が主の為にもここで捕まえる訳にはいかんのだ」

「ほう。主の為に尽くす騎士であったか。ならばこちらも騎士として
対応するのが礼儀であるな」

デイルムツドの表情が喜びに染まる。まさかこの時代に騎士の心意
気を持つのに逢えるとは思っていなかった。

「なるほど。その様子だと貴様も騎士道を重んじる者であるようだな」

騎士王の物に似た意匠の騎士甲冑を纏った女剣士も嬉しそうに微笑
んだ。

それぞれが槍と剣を構える。そして互いの顔に浮かぶ歓喜の色に
気が付き、二人は仲間であると直感的に悟った。

「ファイオナ騎士団『輝く貌』デイルムツド・オデйна」

「ヴォルケンリッター『烈火の将』シグナム」

互いに名乗りを上げ、喜びに打ち震える。

二人ともこの一時は立場も目的も捨て、訪れる最高の時間を予兆し
歓喜する。

「誉れある勝負を望むぞ。『烈火の将』！」

「無論だ。全力で相手させてもらうぞ。『輝く貌』！」

時を越えた二人の美男美女は訪れた運命のめぐり合わせに感謝し
ていた。

一目見た瞬間にデイルムツドはシグナムが強者であることを見抜
いており、シグナムも先ほどから見せるデイルムツドの精錬された動
きからその実力を感じていたのである。

「いぎ!!」

「参る!!」

そしてかつて主君に殉じた騎士と主君のために戦う騎士の戦いが
始まった。

守護騎士と英霊

人氣の消えた結界の中、二つの影が交差する。

「ふっ！」

「はあっ！」

デイルムツドが槍を繰り出すとシグナムはそれを紙一重でかわし、返しに振り上げられた逆袈裟斬りにデイルムツドが即座に反応し、バックステップで回避する。

後退したデイルムツドを追撃するように大きく前に踏み出したシグナムの上段から振り下ろされた剣をデイルムツドが左手甲で弾き、体勢を崩した相手の腹に蹴りをねじ込んだ。

「ぐうっ！」

左手で蹴られた腹を押さえるシグナムに対し、剣を弾いた左甲が痺れていたデイルムツドが腕を振るって感覚を戻そうとする。

「流石に無茶なかわし方だったか…なっ！」

今度はデイルムツドが接近する。

柄の中ほどを掴んでいた手を石突近くに持ち直し、突くのではなく柄の部分で叩きつけるように振るうと空を裂く音を響かせながら強烈な打撃がシグナムを左から襲う。

「甘いっ！」

その打撃をかわすのではなく、手甲の鎧で弾くことで、衝撃を槍に伝わらせる事でデイルムツドの硬直を誘う。

しかしデイルムツドはあえて槍を放すことで槍に掛かる負荷を減らし、弾き飛ばされた槍の落下地点を予測してそこに向けて駆け、空中でそれをキャッチした。

「輝く貌。貴様、二槍使いか？」

「ご名答だ、烈火の将。二槍でも二刀でも…剣と槍の組み合わせでも戦えるが…今は管理局に力を封じられていてな。すまないが今は一槍しか持っていない」

おそらくは槍の捌き方で気が付いたのだろう。一瞬左手で追撃を

行おうと考えてしまい、身体がわずかに反応してしまったのをシグナムは見抜いていた。

デイルムツドとしては是非とも宝具を使用した全力の死合いを望みたかったが、能力限定を受けている以上それは叶わない。

「だが、けてして手を抜いている訳ではない。これで敗北するならば俺の力量が貴殿に劣っていた…それだけだ」

「言い訳はしない。と言う事か」

「そういう訳だ。手心など加えるなよ、烈火の将？」

義を重んじる所や真つ向勝負を好む点。その甲冑や剣を使う所など、シグナムにはどこか騎士王の姿を彷彿させた。

それがデイルムツドには嬉しいと同時に苦い想いを抱かせる。故に手心を加えないようにと言ったのだ。

「安心しろ。けてして手は抜かん。主の為にも我らは負ける訳にはいかんのでな」

「それを聞いて安心した」

槍を構えなおし、目の前の騎士と再度向き合う。

「貴様とはもつとゆつくりと死合いたいが我々には時間がない。一気に決めさせてもらうぞ……レヴァンティン！ カートリツジロード！」

《Explosion》

シグナムの言葉に反応し、レヴァンティンと呼ばれたデバイスの峰の一部がスライドし、筒状の物が排出され、刀身が炎に包まれる。

「紫電一閃っ！」

こちらに飛び掛ってきたシグナムであったが、デイルムツドはそれに充分に反応できており、斬撃を防いで攻撃しようとし――

「なにっ?!」

硬度を限界まで強化していたはずのデバイスが容易く切断され、左肩を斬り裂かれた。

即座にリカバリーを施しデバイスを修復したが、左肩の負傷により、左腕に力が殆ど入らなくなってしまった。

シグナムが繰り出す怒濤の斬撃を防ぐのではなく受け流す事で捌

いていくが、こちらのデバイスではシールドを突破できず、相手の攻撃は槍で防ぐしかできないという状況にデイルムツドが追い詰められていく。

「どうした輝く貌！ やはり一槍では全力は出せんか！」

「舐めるなよ烈火の将！ その程度の剣捌きで俺の首級をあげる事などではせんぞ！」

単純な技量だけ見ればデイルムツドの方がシグナムを上回っているのだが、得物の能力と魔法によってその差は埋められている。

それどころか攻撃が通らない以上、デイルムツドには勝利する未来が見えない。

（例え勝てなくとも……烈火の将をここで足止めできれば……！）

悔しいが全力を出せない時点で勝てる可能性はゼロに近い。故にデイルムツドは個人の勝利ではなく、管理局が勝利する為に尽くす道を選ぶ。

シグナムの参戦を抑えれば、それだけフェイト達がなのはの救出を行いやすくなる。

展開されている同一の結界と先程シグナムが無意識に言った『我らは負けるわけには』という言葉からシグナムのような実力者が複数いるとデイルムツドは読んでいた。

『ごめんなさいシグナム。今すぐヴィータちゃんのとこに向かつて』

だが、その中に直接内部を攻撃する能力を持った者がいるという可能性に至らなかった。

「なっ……!!」

シグナムにだけ届いた念話の直後。

デイルムツドの胸を女性の細い手が貫き、その手の中に魔力を放つ黄金の欠片が現れる。

「それは……リンカーコア……なのか？」

まるでこの世との繋がりを引き裂かれたような激しい苦痛と底なしの泥沼に沈み込んだような倦怠感がデイルムツドを蝕む中、シグナムは信じられない物を見たという顔をしている。

「くっ……そっ……！！ 烈火の将……！ キサマ……！ キサマもっ！

俺の目の前で……！ 騎士の誇りを貶めるのかア……!!」
「ちっ……違っ……!!」

先ほどの念話——この手の主の声はデイルムツドには聞こえていない。

そのせいでデイルムツドはシグナムに騙し討ちされたと思い、憎悪ではなく裏切られたことへの絶望がデイルムツドを支配する。

『あっ……いや……!!』

その瞬間デイルムツドの中から出てきた金色の破片からドロリとした赤黒い何かが溢れた。

それが握っていた女性の手の平に触れると慌てたように腕が消え、同時に黄金の破片もその姿を消す。

「ぐっ……!!」

最後にシグナムを睨み、デイルムツドの意識は途絶えた。

『……シヤマル。無事か?』

『私は大丈夫……それよりシグナム……ごめんなさい』

シヤマルと呼ばれた女性はシグナムが楽しそうに戦っていたのをデバイスを介して見ていた。

できることならば戦わせてあげたかったが、管理局の少女に押される仲間の救出を優先しなければならず、このような手に出たのだ。

『気にするな。我らには使命がある……それを果たすことが最優先だ』

『そうね……後、そのデバイスだけど、貴女の戦闘の映像が入ってるから——』

『わかっている。破壊しておくさ。先ほどのやつらのようにな』

その場に倒れているデイルムツドの元に歩み寄り、レヴァンティンの切っ先をデバイスのコアに突き刺した。

そして、もしかすれば最高の好敵手となっていたかも知れない少年の姿を、しばらく見つめていたシグナムは仲間の救出の為に結界を後にした。

もう一つの結界の中では、フェイトがアルフと協力して拘束した少女にデバイスを突きつけていた。

「名前と出身世界。目的を教えてもらおうよ！」

親友を傷付けた相手に対し、囑託魔導師として毅然とした対応を取る。

民間人であるのはへの襲撃は軽犯罪では済まされないが、ディルムッドやフェイトのように更正と協力の意思を示せば減罪の可能性はある。

「?! なんかやばいよフェイト！」

本能的に危険を察知したアルフが叫ぶと同時に、下から飛び上がった桃色の髪の女性がフェイトに向けて剣を振るった。

「フェイト…?!」

辛うじて斬撃を防いだフェイトだが、勢いを抑えきれず弾き飛ばされる。

さらに援護に向かおうとしたアルフの元に蒼い服の鍛えられた男が飛来し、強烈な打撃を放ってアルフを吹き飛ばした。

「レヴァンティン。カートリッジロード」

刀身から薬莖のような物を排出したデバイスが焰を纏う。

「紫電…一閃ッ!!」

「っ?!」

防ごうとしたバルディッシュごと切断し、女性が返しの太刀を防ごうと展開したシールドごとその勢いで吹き飛ばし、フェイトが地面に叩きつけられる。

「シグナム……」

「すまんヴィータ、遅くなった……素晴らしい槍騎士に苦戦してな」

「槍…騎士?」

ビルの中まで叩きつけられたフェイトは槍騎士という言葉に反応する。彼女の脳裏に浮かぶのは先程もう一つの結界に向かった大切

な人の姿だった。

「結構手こずったみたいだけど勝ったみたいだな」

ヴィータと呼ばれた少女を拘束していたバインドをシグナムと呼ばれた剣士が解除した。

「あんな結末は勝利と言わん……！」

悔しげに左手を握り締めるシグナムを見てヴィータが首を傾げているが三人とも内心は激しく動揺しており、それに気がついていなかった。

槍騎士とは間違いなくデイルムツドの事だろう。そして彼が敵を逃すはずは無く、彼女がここに来ることが出来た理由は一つしか思いつかない。

——デイルムツドの敗北

「そんな事——」

あるはずがない。

フェイトにはそれを信じることができず、その可能性に至ったユーノとアルフからも動揺の気配を感じた。

「……槍使いの魔導師をどうしたの？」

何かの間違いであるとフェイトは必死に言い聞かせながら、努めて冷静に問いかけた。

「殺してはいない……が、それ以上の侮辱を与えてしまったが……」

「っ?! バルディッシュュ！」

《Scythe Form.》

切断され短くなったバルディッシュュを修復することなく斬りかか。激高したフェイトの攻撃をあっさりと防ぎ、そのまま押し込まれ弾き飛ばされた。

「悪くは無い……が、輝く貌には遠く及ばんな」

吹き飛ばされた事で冷静さを取り戻す。闇雲に飛び掛っても勝てないと悟ったフェイトはバルディッシュュにリカバリーを行い、失った柄を再構成する。

現在この結界には通信妨害の術式が組み込まれており、アースラとの連絡を取ることはできない。

『ユーノ、アルフ。全員を結界外に転送できる?』

『アルフと協力すれば何とか…』

『ちよいと厳しいけど、やってみるよ』

ヴァイータと呼ばれた少女だけならば逮捕も可能であったかもしれないが、増援に現れた二人によって現在は三対三となっており、戦力差の優位性は失われた。

その状態に加えて負傷したなのはを護りながら戦うのは正直厳しい。
い。

(だったら今は撤退してなのはの安全とアースラとの合流を優先した方がよい…)

何の準備もなく飛び込んだフェイト達はこのままでは不利である。

ここは取り逃がす事になるが、まずはなのはの安全の確保とディルムツドの回収を優先すべきであると判断したのだ。

『私が前が出る。その間にやってみ——』

「AAAAAAAAAAAAAAIE!!」

そんなフェイトの決意をぶち壊すかのように稲妻と轟音と共に上空から何かが飛び込んできた。

「げっ……!!」

敵の増援かと思っただが、その姿を見たヴァイータが心底嫌そうな声を出し、武器を突きつけているのでおそらく違うのだろう。

「ほう！ 昨日と似たようなもんが展開されておっただけで見に来てみたが……」

二頭の雷を放つ牛が牽引するチャリオットとあり得ない存在に乗っている二メートル近くの大男は空中で対峙するシグナムとフェイトのだ真ん中に陣取ると愉快げに結界内で戦う者達を眺めている。

「おお！ 昨夜の赤い小娘もいるではないか！」

「……ヴァイータの知り合いか?」

「そんなんじゃないよ！」

明確な敵意と警戒を込めたその声から何かを感じ取ったのか、シグ

ナムとアルフと戦っていた男も

現れた乱入者への警戒を強めている。

「そう睨むでない。今宵は貴様達と戦う気は無いわ」

「じゃあ何のために来やがった!」

「そりゃあお前さん……この場にいる者がこの征服王イスカンドルと共に覇道を目指すに値するかを見定めるために決まっておろう!」

ヴェータの怒鳴り声にも怯まず、イスカンドルと名乗る男はそう答え、フェイト達もシグナム達も啞然とさせられた。

「生身で空を駆け、奇妙な宝具を持つ者達が戦う……バビロニアの王が言っておったように、この世界は余を飽きさせることはない!」

そう言うのとチャリオットに積んであった樽の蓋を拳で破壊し、自身の真紅の液体……おそらく赤ワインを柄杓から直接飲む。

周りの反応など気にせず酒を飲んで豪胆な男の姿に全員戸惑うが、ユーノだけはイスカンドルの言葉からその正体に行き着いた。

「宝具……貴方はデイルムツドと同じ世界から来たのですか?」

「デイルムツド……おお!! ランサーの奴めもこの地に現界しておったか! こりゃあ面白いことになっていないか!!」

デイルムツドの名を聞きイスカンドルは大いに喜んでた。

「腑抜けたマスターに自害を強要されて散るなどあの男もさぞかし無念であったろうからなあ……」

彼は軍門に入りたい逸材であり、忠臣ウェイバーの使い魔から伝えられたデイルムツドの末路を知っている。

なので彼の絶望を理解しているイスカンドルからすれば今度こそは朋友としてその力を振るってもらいたい相手であったのだ。

「自害……?」

「デイルムツドは自分で命を絶ったって言うのかい?」

イスカンドルの呟きはデイルムツドを知る者達からすれば信じられないものである。いくら主君に命令されたからと言って彼が自ら命を絶つなど有り得ないと。

状況を理解していないシグナム達も目の前の男を警戒しながらも

その話を聞き、同時に機会を狙っていた。

「自ら…というのはちいと違うのお…余も直接その結末を見た訳ではないのだが…おそらくは令呪による強制であろうな」

「令呪…？」

「ランサーの奴からは聞いておらんか？ サーヴァントに掛けられた三度の絶対命令権よ」

イスカンドルはデイルムツドが意図的に省いた事実を言った。

令呪とはマスターは自分より圧倒的に格上の英霊を御するための物で、三回の絶対拒絶できない。

それによりデイルムツドはマスターから『自害』を強制されて自らの胸を槍で穿ったと。

「どうして…デイルムツドの主はそんなことを…」

「さあなあ…余もそこまではわからん。それがセイバーとの一騎打ちの最中であつたと聞き及んではいたがなあ…む？」

最後の言葉に何かを感じたのかシグナムの表情が歪むが、イスカンドルは何かに気が付き、視線をそちらに向けたのでそれに気付かなかった。

「なのは?!」

そこにはユーノが展開した結界から出たなのは上空に向けて収束砲を放とうとしている姿だった。

『私が結界を壊すから…タイミングを合わせて転送を！』

なのはが念話でフェイト達に呼びかけ、三人がそれに頷く。シグナム達もそれに気が付き、なのはを止めようと向かったが、それをフェイト達が阻む。

「ほほう…」

それを興味深げに見ていたイスカンドルの前でなのはに異変が起こった。

——少女の胸から腕が生えていた

それを見たフェイト達が叫ぶ。

胸から現れたその手には彼女のリンカーコアが浮かびあがり、明滅していた。

「スターライト……!」

なのはは苦悶の表情を浮かべながらも収束した魔力を放とうと構え――

「ブレイカ――!!!」

自身の渾身の魔法を上空に向けて撃ち込んだ。

放たれた桜色の閃光が結界を切り裂くが、おそらくはあの腕に何かされたのだろう。その直後、なのはが意識を失い、地面に倒れた。

『結界が抜かれたか…離れるぞ!』

『心得た』

『あの牛のおっさんはどうすんだよ』

三人が念話で会話する視線の先には、イレギュラーな乱入者であるイスカンドルの姿がある。

『今は放っておけ。あの男に管理局の意識が行っている方が撤退しやすい』

彼女達の仲間である蒼い騎士…ザファイラがそう答えた。

ここでイスカンドルの魔力を狙うよりも管理局から逃れる方が優先であるという判断だ。

『わーったよ…シヤマルごめん。助かった』

『うん…いったん散って…いつもの場所で…』

『シヤマル? どうかしたのか?』

『ううん…大丈夫よ。心配しないで…それじゃあまた後でね…』

シヤマルの苦しい様子にシグナムが心配そうに尋ねるが、彼女は何でもないと答える。

その言葉をひとまず信じた全員がバラバラに散開していく。その瞬間、認識齟齬の魔法も解除されてしまった。

「むう? 余の神威の車輪が見えているのか」

その言葉で我に返ったユーノが騎士達がいなくなった事で解かれていた結界を再展開した。手遅れの気もするが、何かの見間違いと勘違いしてくれることを祈るしかない。

「ごりやー、一献交わせる様子では無くなったなあ」

散っていった騎士達の方向を眺めながらイスカンドルがため息を吐き、現在の拠点に戻ろうと手綱を握る。

そのまま去って行くイスカンドルをフェイト達は見送ることしか出来なかった。

アースラの内部では、送られてきた映像に騒然となっていた。

バラバラに散っていく四人とスターライトブレイカーを放った後に倒れたなのは。

さらには先程上空から結界の中に侵入していった男が映っており、一体中で何が起きたのかと全員が混乱していた。

「急いで医療班を現地に飛ばして！」

だが、まずはなのはの治療と保護が最優先だと、リンデイが命令を下す。

「乱入者の男も撤退を開始しました！ 追跡を開始します！」

四人はすでにバラバラの方向に逃走しており、レーダーのロックから外れてしまったので、せめて一人だけでも居場所を掴もうと局員の一人が手元のパネルを操作する。

「申し訳ありません。それは困ります」

その言葉と共に、パネルに黒塗りの短剣が突き立てられ、火花が飛び散り、ブリッジに悲鳴が響き渡った。

それに反応した全員の視線がそちらに向くと、そこにいたのは褐色の肌の少女だった。

「お初にお目にかかります。我らはアサシンのサーヴァント、ハサン・サツバーハと申します」

そういうと少女が短剣を引き抜きながらペコリと頭を下げる。

頭にお面のように付けている髑髏が不気味であったが、それ以外に

はおかしな所はない。

——ここが一般人の入れないアースラのブリッジでなければ

「気が付かなかったのは仕方ありません。我らの『気配遮断』と主の技術を合わせたのですから」

リンディ達の焦りを理解しているハサンがあっさりと能力を暴露する。アサシンの気配遮断はわかっているにも気付く事ができないからだ。

「あなた方に手を出すつもりはありません。我らが命じられたのは『ライダー』とヴォルケンリッターを逃がす手伝いだけです」

「我らという事は、他のもいるという事かしら」

リンディはデイルムッドからアサシンというクラスがあつた事は聞いている。つまりは彼女も何らかの英雄であると同時に特殊な能力を有しており、それによってここに侵入できたという事は想像に難くなかった。

「我らは一人にあらず」

少女がそういうとリンディの背後に黒い靄が現れ、振り返ると骸骨の面を付けた黒尽くめの女が現れる。

「我らは分断された個」

「郡にして個の英霊」

「それぞれ個にして…影」

ローブを纏った者、長髪の者、小柄な者…骸骨の面と黒尽くめという共通点がある不気味な人物がブリッジに現れる。

その数はすでに十を超えており、異常を察知したクロノとエイミイが駆けつけた。

「我らに構っていて宜しいのですかな？」

「どういうことだ？」

クロノがデバイスを構え、ハサンの一人が不意にそんなことをいった。

「我らはここに居るのが全員ではありません。予め分裂していた者も

います」

クロノの問いに褐色の少女が答える。

「ランサーから目を離すとは」

「意識を失った仲間を放り出しておくとは」

「管理局も冷たいものですな」

「っ?! しまった! デイルムツドはどうなってる?!」

周囲のハサンの言葉を聞き、ようやく彼らの言葉の意図を掴んだが遅かった。

慌てて同時に解除されたもう一つの結界周囲の映像とデイルムツドのデバイスの発信機の信号を確認するが、彼の痕跡が消えていた。「…デイルムツドさんをどうしたのですか?」

「殺してはいませんよ。我らが命じられたのは『可能な限り場を面白可笑しく引つ掻き回して欲しい』ということなので少し彼を移動させただけです」

そう言うとハサン達の姿が掻き消えていき、少女の姿だけがそこに残った。

「何故、今代の主はそのような命令をしたのかしら?」

先程の四人の顔をリンデイもクロノも知っていた。

守護騎士ヴォルケンリッター。二人にとつて因縁深いロストログア『闇の書』の防衛プログラムである。

ただでさえ強力な守護騎士を持つ闇の書の主がサーヴァント『アサシン』を配下に行っているというのは厄介であり、主の狙いを読み取るうと問いかける。

それを聞いて首をかしげたハサンの少女は数秒考え込んだ後、ああ。と何かに気が付いた素振りを見せる。

「勘違いなさっているようですが。我らの主と、やて…闇の書とは無関係ですよ。さてそれでは失礼します」

そういうといつの間にか少女の手に握られていた小型の機械が光を発し、その姿を包み込んでいく。

「待てっ!」

「我らは影です。必要とあらばこちらから逢いに参りましょう」

クロノの静止を無視し、ハサンの姿がその場から消えた。

「デイルムツド…」

消えた友の身を案じながら、クロノが拳を握り締める。まもなく戻ってくるフェイト達に何と言っているのかクロノにはわからなかった。

月村すずかは焦っていた。

突然窓から飛び出した猫を追って外に出ると森の入り口に左肩を斬り裂かれ意識を失った少年が倒れていたのだ。

「だ…大丈夫？」

大丈夫ではないと思うが、意識があるかを確認するために声をかける。少年は荒い息を上げているだけで、呼びかけに反応する様子がまったくくない。

——整った顔の少年だった

年齢はすずかと同じ位だろうか。

黒髪だが、西洋系の顔立ちで右目下に泣き黒子がある。触れてみると同年代としては異常なほど鍛え上げられた体付きをしているのがわかる。

傷口自体はそれほど深くはないが、衰弱しており、放っておけば危険であるのは間違いない。

「とりあえず治療してあげないと……」

病院に連れて行くべきだと思ったが、それを躊躇ってしまったのは少年の隣に突き刺さっている損傷した機械の槍の存在があったからだ。

重症を負った少年と機械の槍。

普通ではあり得ない事情を抱えているのは明白であるが、怪しいからといって見捨てることが出来る少女ではない。すぐに家に駆け込み、二人のメイドを呼ぶと、即座に対応してもらった。

詳しい事情は彼が目覚めてから聞くことにして、屋敷で処置を施すことになった。

なんとなくなかったが、すずかは彼が悪い人だとは思えず、早く話をしてみたいと思ったのだった。

ちなみに似たようなのを抱える事になってしまった彼女の親友のアリサは、翌日のテレビで空飛ぶ牛が現れたというニュースと不鮮明な画像を見る事になるのだが、それが庭で鍛錬している同居人であるとは夢にも思わないのであった。

想い出は慟哭の中に

アースラに帰艦したフェイト達に待っていたのはアサシンによる攻撃と攪乱を受けたと言う事実、さらにはデイルムツドの生死不明という最悪の状況だった。

「アサシン……ハサンの中の少女の言っていた事が本当ならば彼はどこかで生きています。今はそれを信じましょう」

なのはも守れず、デイルムツドも行方不明という状況に意気消沈するフェイトにリンデイが慰めるように声をかける。

もしも宝具を最初から使い、全力の状態のデイルムツドであればこのような結果にならなかつたのではないか。

彼を上層部の思惑から守る為に能力を封じた事が結果的に彼の身を危険に晒してしまったので一番後悔しているのはリンデイなのかもしれない。

現在、レテイ総督と共にリンデイは上層部にデイルムツドを発見次第、能力を全解放する許可を取るために動いている。

ライダーとアサシンの出現によりデイルムツドの宝具の絶対性が揺らいだからだ。

ハサンが言っていたライダー……フェイト達の報告では自らをイスカンドルと名乗っていた男の能力は未知数であり、ハサンも全く気配を悟らせずに内部にアースラ内部に侵入するなどという驚異的な能力を有していた。

サーヴァントと呼ばれるクラスはまだ他にセイバー、アーチャー、キャスター、バーサーカーが残っており、全て現れる保障はないが、全員が同様に高い能力を有していると考えられる。

それら全てが敵となった時、全力でないデイルムツドでは対処できない可能性が高く、それどころか管理局が致命的なダメージを負う恐れがある。

「イスカンドルもハサンも……伝承を見ても一体どんな宝具が全然わからないのよねえ……」

「はい。チャリオットの能力とかさっぱりですし、ハサンの分身(?)

も全く書かれてなくて…」

「ディルムツドの時のように伝承から二人の英雄の能力を探ろうとしたが、全くわからなかった。」

「バルディッシュの音声データからイスカンドルの乗り物の名前が神威の車輪とはわかりましたけど」

「能力には結びつかないわねえ…」

「イスカンドルの結界の中での行動と会話はバルディッシュのデータから見ることができた。」

「それからわかったのは、彼に敵対意思はなく、むしろ静観しこちらを見定める様子であった。」

「さらにヴォルケンリッターの一人が過剰に警戒を示していた事から彼らとも敵対した位置…すなわち中立の立場にすることがわかる。」

「ハサンの主が接触を妨害したのは中立のイスカンドルを管理局側に入れないためだった可能性も高い。」

「ディルムツドと合流できたら…わかるんでしょか」

「フェイトの声色にはまた会えると信じたといった色があった。」

「そうね…明日はお友達と会うのでしょうか？ そんな様子じゃお友達も不安になっちゃうわよ」

「明日からアースラの代わりに地球のなのは家の近所に臨時本部を設置することになっている。」

「最初はアースラの整備をを急ピッチで切り上げて使おうという話であったが、ハサンはあの場以外にも現れていたようでアースラの重要部位を数箇所破壊された痕跡があったので、本格的な修復も必要になっちゃった。」

「フェイト、なのはが目覚めたそうだよ」

「本当?! すみません、リンディ提督。私行つてきます!」

「モニタールームの扉が開き、クロノがフェイトに声をかけるとフェイトが慌てて飛び出していき、クロノもそれに付いて行った。」

「主。ただいま戻りました」

「みんな、おかえり〜。今シチュー温めるからちよつと待っていてな〜」
ヴォルケンリッターが今代の主の自宅に戻ると、アルバムを見ていた少女：八神はやてが車椅子を操作して四人を迎え入れた。

暖かな家と優しい主。

今までの主と違い、彼女はヴォルケンリッターを騎士ではなく家族として接した。

闇の書が完成した時、莫大な力を主に与える。だがはやてはそれを望まず、ただ一緒に暮らすことだけを願った。

はやてと過ごす日々は暖かかった。道具ではなく、家族として過ごす日常はとても愛しく、ずっとこんな毎日が続くのだと思っていた。

あの日……はやての病状が悪化しているという事実を伝えられるまでは。

担当医である石田医師が告げたのは、原因不明の麻痺が徐々に内臓方面に侵攻していつている事、このままでは命を失うという最悪の事態が迫っているという事だった。

現代医療では原因不明であったが守護騎士達にはすぐにわかった。闇の書が成長途上にある彼女のリンカーコアを侵食していたのだと。彼女を救うには蒐集を行い、闇の書を完成させるしかない。そうなれば守護騎士達が取道は一つだった。

はやての命を救い、彼女と過ごす日常を守るために……例え主の願いに反してでも、このかけがえのない毎日を彼女と過ごすために。

——だから守護騎士達は戦う道を選んだ

彼女の未来を血で汚さないために誰かの命は奪わない。だが、それ以外ではどんなことだってするし、その後にとどのような罰を受けたっ
ていい。

四人はそんな覚悟を胸に秘めていた。

ふと、テーブルの上においてあったアルバムの一ページが目に入る。

そこにある写真は殆どが守護騎士達との思い出が占めており、写真の中の彼女たちは皆幸せそうであった。

「この写真は……！」

「ウソツ……?!」

偶然開いていたそのページの中の一枚に写っていた人物にシグナムとシヤマルが反応する。

そこには笑顔の主と共に写っている少年がいた。顔に包帯を巻いているがそこから覗く整った顔は見間違えようがなかった。

「どうしたん？ あ、デイル君かく。そういえば最後に会ったんはシグナム達がうちに来る前やったからなあ」

その写真に写っていたのはデイルムッド・オディナ。先程戦い、倒した男だった。

「かっこいいから見とれちゃった？と冗談混じりで尋ねてくるはやての言葉を聞きながらシグナムは内心の動揺を隠しきれなかった。

「遠くにいかなあかんっていつてお別れしてんけど、その時にこれをくれてんよ」

彼女は大事な友達を傷付けた自分たちを許してくれるのだろうか。首にぶら下げていたチェーンに通された銀色の指輪を取り出しな

がら笑顔を向ける主の姿を見ながら、二人は葛藤するのだった。

——『十二月三日』——

アリサ・バニングスの土曜日の朝は優雅な物であるはずだった。

今日の昼にずっと楽しみにしていたなのはの友達であるフェイト・テストアロツサと会うことになっており、ウキウキとした気持ちで廊下を歩いていった。

まだ出発の時間ではないのにカバンを持っていることから、どれだけ浮かれているかがわかる。

「ん？ おおちようどいい。ちいと聞きたいのだが…」

「ああイスカンドルどうし——」

だから廊下の角から出てきた新たな同居人の質問にも上機嫌に答えようとしてそのまま固まった。

「いやあ朝から酒を飲んだのだが、履物に零してしまつてなあ。代わりの物を頂戴しようと思つたのだが…」

同居人イスカンドルの言葉はアリサには届いていない。

——なぜならズボンを履かずパンツ一丁であつたからだ

「——つ?!——」

それに気がついた瞬間。声にならない声を上げ、持っていたカバンを神速のレベルで振るつた。

「ぬうつ?! 余の反応を上回るとは！ 小娘…見事である…!!」

「見事である！ じゃない！ ズボンを履かずに廊下を歩くな——
!!!」

膝を付き、こちらに賛辞を送るセクハラ男にアリサが怒鳴る。

朝からイスカンドルの股間の神威の車輪を見せられるという悪夢に少女の心にはトラウマが残りそうだった。

そんな朝のハプニングから二時間後、アリサは庭でため息を吐いていた。

「どうした？ 小娘、ため息なんぞ吐きおつて」

「誰のせいよ誰の」

朝の事なんてすっかり忘れて昼前に酒を飲む駄目人間…自称征服王イスカンドルにアリサが突っ込んだ。

「全く乙女なんて物見せてんのよ…」

「あー。そりやすまんかつたなあ…それで？ お主は何を悩んでるんだ？」

ポリポリと頬を搔きながら侘びを入れたイスカandalがアリサに尋ねる。どうやら悩み事があつた事に気が付いていたようだ。

「今日、今から友達と会うんだけど……」

「友と会うのになーにを悩む必要がある？」

イスカandalにビデオレターの説明をする。そして直接会うのは今日が始めてであることも。

ずっと会うことが楽しみであったが、いざ会う時間が迫ってくる、どんな風に話していいかわからなくて緊張してきたことを伝える。

「お前さんはあ、難しく考えすぎだ。変な遠慮などせずに、ありのままのおぬしの態度で行けばよい」

話を聞いたイスカandalは茶化すことなどなく、珍しく真面目な顔で言った。

「小娘はそやつと真の友になりたいのであろう？」

「うん……」

「だったら遠慮などせんで良い。おぬしが心を開いて接していけばそやつも心を開くだろうさ。時間はかかるかもしれないが、諦めずに何度もぶつかる事が大事であるぞ？」

そう言つて、イスカandalがその大きな手でアリサの頭を撫でた。彼の雰囲気と言葉には不思議とこちらを引き込む力があつた。

先日的一件と彼を屋敷で匿う旨を伝えたらアメリカから両親が翌日に駆けつけたのだが、彼のその不思議なカリスマに引き込まれてしまい、その日の晩には信頼を勝ち得ていた。

「まあ愚痴ならば今晚余が共に酒でも飲みながら聞いてやるわ」

「未成年どころか小学生にお酒を飲ますつもりかあんたは！」

そしてその日の夜、無事にフェイトと仲良くなれたアリサはイスカandalに嬉しそうに報告するのであつた。

「うっ……くっ……」

洋館の一室でデイルムツド・オディナが目を覚ました。

「ここはどこだ？ 俺は烈火の将と戦って……」

思い出そうとするが、謎の腕に胸を貫かれてからの記憶が曖昧で何故ここにいるのか全くわからない。

起き上がると左肩に痛みが走り、見るとシグナムに付けられた傷に包帯が巻かれていた。おそらくはこの家の者が処置してくれたのだろう。

窓から外を見ると、そこにあつた光景に見覚えがあつた。

「ここは……俺が目覚めた森の近くの屋敷か」

この世界に来て街に向かう時に通りかかった場所であると気が付いた。

場所はわかつたがシグナムと戦った場所はここからかなり離れた場所のはずだ。

「まずは住人と話をする必要があるな」

面倒を避けるためには黙って出て行くのが得策かもしれないが、治療を施して貰った恩を伝えずに出て行くなどデイルムツドにはできない。

そう思つて窓辺から離れ、ドアに向かい、ドアノブを掴もうと——

「ようやくお目覚めですか」

背後から声をかけられ、デイルムツドが反射的に振り返る。そこにいたのは黒ずくめの骸骨の面の男——

「直接お会いしたのは初めてですな。アサシン、ハサン・サツバーハが一人、サイドでございます」

「可能性はあつたとはいえ……俺以外のサーヴァントもこっちに来ていたとはな……」

手元には武器がなく、身体にかけられたリミッターは残っている。

いくら格下のアサシンが相手でも今のデイルムツドでは充分に脅威と言つていいだろう。

「ご安心を。戦いの意思はありません。少々お願いがあつて参りました」

「願いだと？」

「はい。しばらくは管理局の関係者と合流しないでいただきたいのです」

デイルムツドはアサシンの能力を知らない。ケイネスとソラウがマスターの権限を奪い合つていたので一時的に情報網を失つていた間にアサシンが正式に敗退したので、デイルムツドの中ではアーチャーに速攻で殺されたサーヴァントという認識のまままだ。

「勿論、ランサー殿の判断を尊重いたします」

「ならば答えは決まっているだろう。そのような頼み、聞く義理も意味もない」

そういつてハサンの言葉を一蹴する。そのまま部屋を出たいがいくら最弱のサーヴァントと呼ばれるアサシン相手でも暗殺に特化した英霊に背を向けるなど愚の骨頂なので、警戒しながら睨みつける。

「それは残念です。ですが…よろしいのですかな？　ここは高町なのはの友人の家。貴方が離れた後に何が起きるかわかりませんが？」

そういつてハサンがその手の中に黒塗りの短刀《ダーク》を表出させる。管理局と合流すればこの人間の命は保障しない。と言う事だろう。

「下種め」

「暗殺者めに高尚な精神を求めないでいただきたいですな」

人質を使った脅しをかけるなど心底腐った根性の相手にデイルムツドが嫌悪感を露にするがアサシンはそれをさりと流す。

正面切つた戦いを好むデイルムツドと奇襲に特化したハサンでは考えが合わないのは当然である。

「それではわたくしは失礼致しましょう」

そういうとハサンの姿が掻き消えていき、デイルムツドだけが部屋に残される。いつまでもこうしていても仕方がないので扉を開けて

出ようと再度ドアに向き直った。

「あ…」

その瞬間タイミングよくノックが響き、すぐに開いたドアから少女が小柄な少女が顔を出した。

「ああ、すまない。先程目を覚ましたので家主に礼をしに行こうと思っただが…：勝手に部屋を出たら拙かったかな？」

この部屋にノックをしたという事はデイルムツドがこの部屋にいることはわかってはいただろうが、扉を開けた先に素性のわからない人間が目覚めて立っていたら驚くだろう。

なので、敵意がない事を示すために笑顔で尋ねた。だがデイルムツドは致命的な事を失念していた。

デイルムツドの人生を狂わせる呪い『愛の黒子』はデイルムツドへの能力限定によって大幅にステータスダウンしている。

その影響で女性と会話しても即惚れられるなどという最悪の事態が発生しなくなったせいで、顔を見ただけで惚れられる事なんて無いと思ひ込んでしまっていたのだ。

「あ、あの…えっと、その…」

しかし呪いがなくてもデイルムツドは絶世の美男子と言われた男である。

そんなのが扉を開けたらいい笑顔で尋ねてくる破壊力は凄まじく、またダウンしてるが『愛の黒子』自体が消えている訳ではない。

そんなものを恋愛経験ゼロの純粋な少女が見ればどうなるか。

「あー、あのっ！ 私！ 月村すずかっつて言います！ 二日前に森の前で倒れてるのを私が見つけて…！」

「そうか、それは助かった。俺はデイルムツド。色々と説明をしたいのだが、どこか皆が集まる場所へ案内してはもらえないか？」

「は…：はいっ！！ 今はお姉ちゃんいないんですけど…：！ こつちでしゅー！！」

惚れた。それはもう焦って嘔むほどに。

(さて何と説明すべきかな…：ひとまずは礼とデバイスの回収…：その後はこちらを出てアースラに見つからないようにどこかへ潜伏する必要

があるな)

それに気付くことなく、今後の行動を考えながらデイルムツドはずかの後ろを付いていった。

しかし、この後やたらとメイドの一人に気に入られ、ここを出て数日野宿をする予定だと答えると、ずかの強い要望もあり、この家に数日住まう事になった。

槍に関しては心苦しかったが、管理局の事を言うわけにも行かないので、自分のものではないと言って誤魔化し、その上で自衛のために欲しいと頼み返してもらうことに成功した。

征服王の『カリスマ』と輝く貌の『愛の黒子』……魔力を持たない者にはその影響が顕著に出るのである。

——『月一日』——

夢を見ていた。

荒廃した工場で二人の騎士が戦っている。

黄金の剣を持った美しい女剣士と真紅の槍を持った美男子が流麗な舞いを彷彿とさせる鮮やかな剣戟を繰り広げている。

『左手を使わないつもりか』

幾度か斬り結んだ後、真紅の槍を自在に扱う男がいぶかしげに尋ねる。

それに女騎士が答える。左手を使えば慙愧が剣を鈍らせ、それが致命傷に繋がると。

『故に——よ。これが全力で貴方を倒すための私にとっての最善の策だ』

黄金の剣を鮮やかに三度振るいながら笑顔で宣言する。それを聞いた槍騎士が喜色満面の表情になり、闘志をみなぎらせる。

『騎士道の剣に誉れあれ！ 俺は…お前と出会えてよかった！』

先ほどの剣士に対するように、真紅の長槍を自在に振るい、槍を構えなおす。

『フィオナ騎士団が一番槍！——推して参る』

『ブリテン王！ アルトリア・ペンドラゴンが受けて立つ！』

互いに名乗りを上げ、剣士と槍騎士がぶつかり合う。

全力でぶつかり合う二人は、命を賭けた戦いであるというのに楽しそうであった。

誇りを賭けた騎士の戦いは両者共に一步も譲らず、見ている者を引き込む。

——グシャツ!!

それは唐突に終わりを告げた。槍騎士が『自身の槍』で貫かれたことで。

『あ……？ ガファツ!!』

自らを穿った槍騎士がその身に起こった出来事に一番驚き……そして

『貴様らは……そんなにも……』

絶望していた。彼の無念が流れ込んでくる。

『そんなにも勝ちたいか?! そうまでして聖杯が欲しいか?! この俺が……たつたひとつ懐いた祈りさえ、踏みにじって……貴様らはツ！

何一つ恥じることもないのか?!』

ただ騎士として戦いたかった。ただ忠義を尽くしたかった。それだけであったのに。

『赦さん……断じて貴様らを赦さんツ！ 名利に憑かれ、騎士の誇りを貶めた亡者ども……その夢を我が血で穢すがいい！ 聖杯に呪いあれ！ その願いに災いあれ！ いつか地獄の釜に落ちながら、この

の怒りを思い出せ！』

と酷似していた。

—— さあなあ…余もそこまではわからん。それがセイバーとの一騎打ちの最中であつたと聞き及んではいたがなあ

そして思い出すのはイスカンドルの言っていた言葉。

アルトリアと名乗った女剣士がセイバーなのだろうか。だとすれば彼が言っていた事と今の光景が一致する。

「だったらこの夢は彼の過去の出来事？」

そんなものを見ることになつたきつかけは一つしか浮かばない。

彼のリンカーコアを狙つて現れた金色の破片。取り出す瞬間までは彼からは殆ど魔力を感じなかつたが、あの破片を取り出した瞬間に魔力が膨れ上がった。

その結果、かなりの量の魔力を蒐集できたが、代わりに彼の破片から出てきた泥に触れた左掌は、見た目は変化はないが、感覚が無くなつてしまった。

言えば余計な心配をかけることがわかつているのでこの事は誰にも伝えていない。

「あのイスカンドルって人には手を出しちゃ駄目ね」

高い魔力を有しているのはわかるが、同じ世界から来たといつていた。ならば彼もリンカーコアではなく黄金の破片を持つ者であるかもしれない。

「惜しいけど、これ以上危ない物に手を出す必要はないわね……」

そう判断し再び作業に戻る。守護騎士として生まれて初めてシヤマルは眠るのが怖いと思つたのだった。

狂いし歯車

——『十二月八日』——

現在エイミイは本局に診察に向かったなのはの付き添いで付いていったユーノと通信を行っていた。

同時に守護騎士との戦いに備えて修復と強化を施したレイジングハートとバルデイツシュの受け取りも行うことになっている。

『そう…やっぱりデイルムツドの行方はわからないんだね』

「うん。広域探査をかけたんだけど何らかの妨害術式が掛かってうまくいかないの」

おそらくはアサシンの主という者が何かをしているのだろう。

現在展開している守護騎士の魔力の痕跡を追跡する術式は作動しているのだが、デイルムツドとイスカンドルの魔力を探知しようとするシステムに異常が発生するトラップがかけられている。

『アサシンの主の狙いがわからないね。彼らの話を信じるなら無事に目が覚めているそうだけど』

わざわざそのような機能を本局に仕込み、分身するアサシンを有しているその人物は、こちらの行動を邪魔するだけだと思っただけだが、

時折現れるアサシンから送られてくる情報には守護騎士の行動パターンが記されていたりなど、本当に場を引っ掻き回すことばかりを行っている。

「おかげで守護騎士の行動パターンはわかるんだけど…アサシンの主って絶対性格ひん曲がってるよ」

『ハハハ……』

名前も顔も知らないアサシンの主を思い浮かべ、エイミイが口を尖らせながら言うともニターの向こうのユーノが苦笑している。

直接局員を派遣し人海戦術で直接探そうとしたのだが、アサシンの

奇襲を受けて全員気絶して帰って来る始末である。

「でもここまで探知を妨害してらるって事は…」

「デイルムツドが生きてる可能性は高いね」

少なくとも死亡しているという可能性よりは だが。

アサシンの言葉を信じるならば、デイルムツドはすでに目を覚ましているらしい。にもかかわらずデイルムツドが接触を行ってこない事、そして無数に分裂して行動するアサシンの存在。

「考えられる可能性はデイルムツド君が捕まっているか」

『動けない状況を作らされている…かな?』

物理的な拘束か脅迫による拘束か。

後者であるならば人質を取られているという可能性もあるだろう。

「まあとりあえずは戻ったらバルディッシュとレイジングハートのカートリッジシステムの説明を——」

現状答えがわからない以上考えても仕方がない。彼の無事を祈って前向きに考えようとした矢先、鳴り響いたアラートが緊急事態を告げる。

『どうしたの?!』

「守護騎士の二人が見つかったの! 今クロノ君に向かって貰うけど、ユーノ君達も現地に向かって貰っていい?!」

『わかった!』

画面が切り替わり、そこには武装隊に囲まれた赤と蒼の守護騎士の姿が映っていた

——『十二月八日』同時刻——

「友の家で食事?」

「うん。そうなの。デイルムツド君もどうかなくなって思ってた」

鍛錬を庭で行っていたデイルムツドにさすがが声をかけた。

これから図書館で知り合った友人とその家族と一緒に食事を取るといふことだった。

(まさかな…)

図書館と聞きデイルムツドの脳裏に一人の少女の姿が浮かんだが、それを振り払う。彼女は両親がいらないと言っていたからだ。

「せっかくの誘いだが今回は遠慮しておこう…：今から少々しなければならぬ事が出来てしまつてな。今夜は戻れんかもしれん」

この場所に接近してくる感じたことのある強大な気配に、デイルムツドが手にしたデバイスを握り直す。

「そう…残念だけどそれならしょうがないよね…」

「すまん。また次の機会があれば誘つてくれ」

残念そうに項垂れるすずかの頭を撫でてやる。

そのまま二人のメイドと友に車に乗って屋敷から離れていったのを確認したデイルムツドが森の中に入る。

「さて…少しは気配を隠す努力をしたらどうだ…ライダーよ」

「ランサー。貴様は気配を…：ほう、おまえさんもずいぶんと小さくなつたのお…」

森の開けたところで声をかけるとそこから大柄な男…イスカンドルが姿を現す。

「そちらもずいぶんと若返つたようだが…：それで、なんのようだ？」

半壊したままの槍の切っ先を突きつけ、デイルムツドがイスカンドルに問いかける。

「そう殺気を出すのではない、ランサーよ。余の言いたい事は一つである。今度こそ余の朋友となる気はないかの？」

「貴様はまだそんな事を言っているのか？」

初めて出会つた時のように勧誘してくる男にデイルムツドが呆れた声を出す。イスカンドルは当たり前だと答えて返す。

「無論である。余の願ひである受肉を果した今こそ！ 世界征服に乗り出す時であろう！ ランサーよ。マスターがおらぬ今の貴様なら余の軍門に下ることになんの問題もないであろう？」

「大有りだ。平和な世に争いを齎すなど言語道断であろう！」

その誘いをバツサリと両断した。人柄としては認めるところであるが、無益な争いを引き起こすなど認められる筈も無い。

「ランサー殿」

一触発の空気の中、デイルムツドに人質を取った男：ハサンの人、ザイードが姿を現す。

「ほう：アサシンの奴めも現界しておったか」

「民を人質に取る下種だがな」

その姿を見た二人がそれぞれ反応を示す。どちらもアサシンには良い印象が無かった。

「そつ……そう邪険にしないでいただきたいですな。今宵は貴方様にお力を戻しに参ったのですよ」

優れた武を有する英雄二人に睨まれて冷や汗を流しながらザイードが、手に持っていた機械を操作すると周囲に鎖が千切れたような音が響き渡る。

「……これは」

その瞬間、デイルムツドを縛っていた能力限定が解除され、意識を込めるとその両手に破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇が現れた。

「我が主にとつては管理局の物など所詮はただの玩具……この程度造作もないのです。それでは……失礼致す!!」

最後に急に早口になったザイードが即座に姿を消す。

全力を取り戻したデイルムツドとイスカンドル相手だと命がいくつあっても足りないかと判断し、速攻で逃げたのだ。

「……ランサーよ。ならばここは一つ賭けをしようではないか」

「賭けだと？」

しばらく何かを考え込んでいたイスカンドルがデイルムツドに提案する。

「余と一騎打ちを行い、余が勝ったならば軍門に下れ。貴様が勝ったならばここは素直に引こう」

「……いいだろう。だがここでは周囲に被害が出る。場所を移すぞ」

このタイミングで封印を解除したのはデイルムツドとイスカンドルをぶつける為だろう。

アサシンの思惑に乗るのは気に食わないが、このまま問答をしていても埒があかないと判断し、それを受ける。

「安心せい。最高の舞台を用意してやろうではないか！」

「……固有結界か」

「うむ。余の『王の軍勢』の内部であれば誰にも邪魔されずに戦うことが出来よう」

キャスター討伐の時にあの巨大な海魔を転移させたイスカンドルの宝具。確かにそれならば周囲に被害は及ばないだろう。

「承知した、征服王。俺はそれで構わないぞ」

海魔討伐時のやり取りから内部に軍団を展開する宝具であることはわかっていたが征服王は一騎打ちと言った。ならばそれらが襲い掛かって来る事はないだろう。

「ならば見るがいいランサーよ！いずれ貴様も加わることになるイスカンドルたる余が誇る最強宝具——『王の軍勢』の勇姿を!!」

イスカンドルの叫びと友に膨大な魔力が展開し、その場から二人の姿が消えた。

「ち。管理局か……」

囲まれた騎士の一人、ザファイラが呟く。

周囲にはすでに強固な結界が展開されており、離脱が困難になっていた。

「だったらこいつらぶっ飛ばして——」

もう一人の騎士…ヴィータがデバイスを構えると、局員達が一斉に散開する。

「上だー！」

突然の行動に訝しげになるヴィータがザファイラの声で慌てて上を見る。

そこには魔方阵と複数の剣状の魔力弾を展開しているクロノの姿があった。

「ステインガブレイド・エクスキューションシフト!!」

百を超える魔力刃が一斉に二人に襲い掛かる。

それらすべてがザフィーラが直前で展開した障壁に直撃し、魔力刃が爆散する。煙が晴れた時、そこには悠然とそこに構えているザフィーラの姿があった。

「くっ……!」

全力で放った一撃だったが、殆ど効果が無かった。その腕に三つの刃が刺さっているが、非殺傷設定であるのでダメージになってはいなかった。

(デイルムツドの槍ならば……!)

あの堅牢なシールドを貫き、行動不能のダメージを与えられるのではないか。行方不明になっている友人の姿を思って歯軋りする。

『クロノ君! 武装局員配置完了したよ! それと今、助っ人を転送したから!』

「助っ人?」

その言葉に視線を向けるとなのはとフェイトの姿があった。

そして二人がバリアジャケットを展開するとその手に握られている二人のデバイスの外見が変化している。

カートリッジシステム…:守護騎士の使用するベルカ式デバイスにも搭載されている魔力を増幅する機構を搭載したのだ。

守護騎士に敗れ、大破したレイジングハートと中破したバルディッシュが自らの意思で搭載を希望したそのシステムは二度と主を敗北させない為の決意の証でもあった。

「私たちは貴方達と戦いに来た訳じゃない。まずは話を聞かせて」「闇の書の完成を目指している理由を――!」

まずは会話を行い、その真意を探ろうとする二人の言葉をヴィータが一蹴する。

「あのさあ。ベルカの諺にこんなのがあんだよ。『和平の使者は槍を持たない』ってな!」

ザファイラ曰く、諺ではなく小話のオチだったそうだが言いたいことは伝わった。話し合いに応じる余地はないのだろう。

その瞬間、捕獲結界の上空から新たな影が現れ、地面に降り立つ。「お前は……」

桃色の髪の剣士シグナム。その姿を見たクロノが睨みつけた。全力ではないとはいえデイルムツドを倒した相手に怒りを隠せない。

「クロノ君！ 手を出さないでね！ 私、あの子と一対一だから！」

「私も……彼女と……」
武器を構えたクロノを二人が止める。前回のリベンジマッチと話し合いをする為なのだろう。

「……わかった。それならちようどいい……ユーノ。僕らは手分けして闇の書の主を探すんだ」

『闇の書の？』

途中で念話に切り替えたクロノと一緒に転送されてきたユーノに声をかける。

『奴らは持っていない。ならばもう一人の騎士が主が持っている可能性が高い。僕は結界の外を探すから君は中を頼む』

『わかった』

守護騎士三人の相手をなのは達任せ、クロノが結界の外へ向かった。

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

二人が新たな姿『レイジングハート・エクセリオン』と『バルディッシュ・アサルト』を構える。

「カートリッジロード!!」

二人の掛け声に答え、デバイスがスライドし、カートリッジを排出し、強大な魔力を使い手に与える。

これによりデバイスの差は無くなった。後は純粋な実力と気合の差が勝負を決するだろう。

なのははヴィータの元へ、アルフがザファイラの元に。それぞれが戦うべき相手の向かった。

そしてフェイトはシグナムと対峙していた。

前回はイスカンドルの介入で決着をつかなかったがあのままでは負けていたのは確実であった。

だが、フェイトはあの時からいつそう鍛錬を積み、バルディツシユは新たな力を得た。今は勝利を得る自身がある。

「戦う前に一つ聞かせてもらおう…ディルムツドはどこにいる?」

「……なんだと?」

フェイトの質問に対するシグナムの反応でわかった。守護騎士は…少なくともシグナムはアサシンとの繋がりはないと。

「その反応で充分だよ…今は貴方を倒すことだけに専念する…!」

「そうか…ならば先ほどの質問の意味は貴様を倒してからにすることにしよう」

互いの言葉が言い終わると同時に二人も全力でぶつかり合い、結界の中では三者三様の戦いが始まるのであった。

「…いた!」

結界外部に出て周囲を探索していたクロノが闇の書を持つ騎士を発見した。

内部の仲間と連絡を取っているからか周囲への警戒が甘いようでクロノの接近に全く気がついていない。

「搜索指定ロストログアの所持。使用の疑いで貴方を逮捕します」

「っ?!」

即座に背後に杖の先を突きつける。相手が動くより先に攻撃を行える自身がクロノにはあった。

「抵抗しなければ貴方には弁護の機会が——」

「やれ。狂った騎士よ」

降伏勧告を言い終わる前に第三者の声が聞こえた瞬間、横から襲つ

てきた一撃がクロノを弾き飛ばし、隣のビルのフェンスに叩きつけた。

「ガッ…ハッ…?!」

バリアジャケットで怪我はしていないが、それでも衝撃は全て防げるわけではない。痛む身体に鞭を打ち、顔を上げるとそこには鎧を纏った騎士の姿とその背後には仮面をつけた男が立っていた。

自身を攻撃した騎士の姿を脳裏に焼き付けようとしたのだが、思考がそれを拒絶するという異常な現象を先ほどからクロノを襲っている。

「A——urrrrrrrッ!!」

漆黒の鎧を纏った騎士が咆哮を上げる。

全身から溢れ出る黒い靄状の魔力によってその姿の全貌を知ることとは出来ない。

しかし四肢を胴を…頭部を覆い隠している兜をも縛る白銀に輝く鎖とその手に持つ武器の姿だけは脳が認識することができた。

「あれは…杖…か?」

黒く染まり、そこに赤い不気味な紋様が浮かび上がっているという異常な状態であるがその形状から武装局員の使っている杖と同型であることがわかる。

「あ、あなたは?」

守護騎士…シヤマルが驚いた様子で尋ねている様子から、彼女自身も想定していなかった援軍だったのだろう。

「闇の書の手を使って結界を破壊しろ。その局員は狂戦士が抑えてやる」

「A——urrrrrrrッ!!」

仮面の男が答えがそういうと、漆黒の騎士が飛び掛ってきた。

ビルとの間には相当の距離があるのだがそれを軽々と飛び越えクロノに接近し、手にした杖を叩きつけるように振るった。

「なっ?!」

咄嗟に障壁を展開してその打撃を防ぐが、その瞬間、ありえないことが起きた。

杖で殴っただけで障壁にヒビが入ったのだ。AAA+クラスのカ
ロノの障壁をただの打撃で損傷させるなど普通ではありえない。

「いったい…こいつは…?!」

それだけの衝撃を障壁に与えたのにその手に持つ杖には壊れた気
配の全く無い。

障壁を破壊できないと判断した騎士が空いている左手で足元に強
烈な打撃を叩き込むと、屋上のフェンスの一角が崩れ、足場を失った
クロノの身体が空中に投げ出される。

「しまっ——!!!」

「A——urrrrrrrツ!!」

空中で無防備になったクロノに向けて 強烈な打撃が振るわれ、一
気に地面に叩きつけられそうになったが、浮遊魔法を使って辛うじて
激突を避ける。

「なんなんだ…?! こいつ、まるで獣みたいに…!!」

「狂戦士…バーサーカーといえはわかるか？」

「っ?! こいつも?!」

上空でこちらを見下ろしている仮面の男がバーサーカーと呼んだ
騎士が上空から落下の勢いを付けて杖をクロノに突き刺そうと迫る。

それを加速魔法で回避し、一気に上昇してバーサーカーから距離を
取る。デイルムツドと同じならば飛行魔法は使えないと判断し、空中
に逃げた。

「なっ?!」

確かにバーサーカーは飛行魔法は使えなかった。

だが、ビルの間を高速で壁蹴りをして上ってくるというありえない
方法で一気にクロノの元に接近してくる。

「止まれバーサーカー。もう終わった」

仮面の男が片手で何かを引っ張るような仕草をすると、クロノに
迫っていたバーサーカーの身体を縛る白銀の鎖が後ろに引っ張られ、
その身体が勢いよくビルに叩きつけられる。

慌ててクロノが上空を見上げると、そこには強大な魔力が収束して
おり、今にも放たれんとしているところであった。

「撃つて…破壊の雷!!」

そして、シヤマルのその掛け声と共に、強大な威力を秘めた一撃が結界に叩きつけられた。

晴れ渡る蒼穹に熱風吹き抜ける広大な荒野と大砂漠。それを埋め尽くす無数の英雄が見守る中で二人の男がぶつかり合う。

「ぬうん！」

「はあっ!!」

イスカンドルのキュプリオトの剣とデイルムツドの小なる激情が火花を散らす。

戦いが始まってからすでにおよそ二時間以上が経過している。

デイルムツドの必滅の黄薔薇は砕かれて失われたが、神威の車輪の雷牛一頭の命を引き換えにした。

大なる激情はチャリオットと共に失われ、破魔の紅薔薇は残りの雷牛の頭蓋を穿ち、今は地に倒れているイスカンドルの愛馬の心臓に刺さっていた。

「まさか貴様と剣でぶつかるとは思っておらんかったぞランサーよ!!」

「俺も貴様とこのような心躍る戦いをする事になるとは思わなかったぞ！ ライダー!!」

純粹な白兵戦ではデイルムツドが有利であったが、未成熟な身体で神威の車輪をかわしながらの戦いを行った後であり、すでに満身創痍である。

対するイスカンドルは神威の車輪を失っているとはいえ肉体は二十歳の状態であり、さらに余力を残している。

打ち合えばデイルムツドが弾かれるのは当然であり、すでに身体を何度も弾き飛ばされていた。

「ぐっ……！」

再び吹き飛ばされたがそれはデイルムツドの狙い通りであり、地に伏した馬の心臓から破魔の紅薔薇を引き抜き、両手で武器を構えイスカンドルに向き合った。

「はぁ……はぁ……はぁ……！！！」

破魔の紅薔薇と小なる激情が残っているとはいえ、すでに限界を訴える身体では満足にそれを振るう事も難しい。

認めたくはないが目の前に立つ男が己より格上の存在であると再認識せざるを得なかった。

「まったく……聖杯戦争で貴様と戦わなかったのは……正解であったな。こちらにいるのが信じられんぞ……」

もし目の前の男と生死をかけた全力の死合いをしたのなら、背後にいる無数の軍勢に飲まれ、なす統べなく死を迎えていただろう。

この世界にいるということは聖杯戦争で敗退したということであろうが、イスカンドルが敗北したというのが信じられない。

「うむ。アーチャーの奴めに見事に破れてしまつてなあ……」

「なるほど……あの宝具の弾丸にはこれほどの軍勢であっても……届かなかったか」

無数の宝具を打ち出す黄金の鎧の男を思い浮かべる。あれを防ぐのは至難の技であつたのだろう。

「それよりも余の軍勢を一撃で粉碎する対界宝具の方が厄介であつたな」

「……なんだそれは」

そんな非常識な宝具が存在するというのはか。不幸だと思つていたがもしかすればあそこまで生き残つたのはかなり幸運だったのかも知れない。

「だが、騎士に二度も敗北は許されん。悪いが勝たせてもらおうぞ！
征服王！」

シグナムに続いて二度も敗北するなどデイルムツドの騎士としての誇りが許さない。

勿論、客観的に見れば全力でなかった上に第三者の奇襲を受けたの

だから仕方が無いと思われるかもしれないが、それを良しとする事ができる男ではない。

「うむ！と言いたいがな…今宵はこの辺でお開きとしようか」

イスカンドルがそう言うのと広大な大地が霞み。周囲の光景が再び鬱蒼とした森に戻った。

「どういいうつもりだ…?」

突然の幕切れに困惑するデイルムツドをよそにイスカンドルの装いがTシャツにGパンと真冬にはありえない格好に戻る。

「なあに。余の根城にしているとこの小娘がうるさくてなあ…そろそろ戻らなくてはならんのだ」

「……そんな理由で戦いを中断したのか？」

くだらないとは思わないが勝負を中断する理由としては納得が来ず、怒気を込めて尋ねる。

「貴様は立っておるのがやつとであろう？ 決着は貴様の身体が戻ってからにする。その時に改めて貴様を倒し、余の軍門に迎える事しよう」

それだけ答え、イスカンドルの身体が森の中へと消えて行った。気が離れていったのを確認するとデイルムツドがその場に膝を付く。
「……強いな」

中断された事に怒りを覚えたが、あのまま続けていたらどうなっていたかわからない。いや、悔しいが敗北を刻む事になるのは間違いないかっただろう。

「次こそは…必ず……!」

全力を取り戻した時に再度挑めと征服王は言った。ならば次こそは必ず勝利し今回の不名誉を返上する事を己に誓った。

「さて能力が解放されたという事は…」

おそらくは愛の黒子も本来の状態に戻っている。そうなってしまうはずかの家にいる訳には行かないだろう。

「しっかりと別れの挨拶ができなかったのは心残りだが……」

友人と語らい、楽しむすずかの姿を思い浮かべる。勝手に出て行つたとなれば優しい少女を傷つけてしまうかもしれない。

「アサシンよ。これよりこのデイルムツドはアースラと合流する！それともまだ俺をこの地に縛るか？」

虚空に向けて声を上げると、足元にアサシンの黒塗りの短刀が投げつけられる。

地面に突き立てられていた短刀に巻かれていた紙を開くと、そこには地図が書かれていた。おそらくはアースラ関係者と合流できる地点であろう。

「五日か…長かったな……」

傷だらけの身体を引きずり、地図に記された場所へと向かう。本当は今すぐにも意識を手放したいほど満身創痍だったが、合流するまでは気絶する訳には行かない。

暗い森の中をデイルムツドはゆつくりと歩き、目的地に向かうのであった。

狂気と安寧

——『十二月八日』——

闇の書を確保する直前まで追い詰めたが、仮面の男と共に現れたバーサーカーの攻撃のせいで結界の破壊を許してしまい、守護騎士を全員逃がしてしまった。

現在フェイト達は、司令部代理となっているマンションの一室に戻っており、これからの対策と守護騎士の説明を行おうとしたのだが、それを部屋に響いたドアを叩く音が中断した。

「? こんな時間に誰だろう?」

代表してエイミーが玄関に向かい、チャイムを鳴らさずにドアを叩く謎の来客の正体を覗き穴から確認する。

「うそっ?!」

その姿を確認したエイミーの信じられないといった声に慌てて全員が玄関に向かい、開かれた玄関の外を見た。

「あ……っ!」

「……どうやらアサシンの奴は正しい情報を寄越した訳か…」

そこにいたのは破魔の紅薔薇を杖代わりになっているデイルムツドであった。服は所々破れ、血が滲んでいたが、大きな出血や怪我は見当たらない。

「よく無事で……って言いたいけど…」

「満身創痍だ…我ながら無様だな……まあ征服王相手に生き延びただけでも奇跡というべ……き……」

「デイルムツド!!」

「デイルムツド君!!」

そこまで言うと言心したのか意識を失い、破魔の紅薔薇が虚空に消

える。慌てて倒れそうになったデイルムツドをクロノが支え、部屋に連れていった。

「ダメージは大きいけど…致命傷はないね」

ソファに寝かせたデイルムツドにユーノとクロノが治癒魔法を施す。肉体を限界まで酷使した形跡はあるが、致命傷や呪いの類は見当たらない。

「さつき征服王がって言ってたからこのダメージはあの男と戦った結果かもね」

破魔の紅薔薇を持っていたことから、デイルムツドは何らかの手段で能力限定を解除に成功し、その上でイスカンドルと戦ったのだろう。

あの豪放磊落な大男が全力のデイルムツドをここまで追い詰めるほどの力を持っていることに全員が警戒心を新たにす。敵対するのであればあまりにも厄介な存在であるだろう。

彼が目覚めるまで説明は中断されることになり、その間、全員が回復を祈る。

そのまま三十分ほど懸命な治療を行うとようやく意識を取り戻した。

「…っ！俺は……」

「目が覚めたんだねっ！よかつた〜」

意識を取り戻したデイルムツドになのはが安堵の声を上げる。その声に周囲を見渡した彼に――

「デイルムツドッ!!」

「がふうっ?!」

フェイトがダイブしながら抱き付き、腹部を襲った衝撃に彼の口からは普段は聞くことが無い叫びが出た。

「良かった…無事でいてくれて…よかつたよお……」

現在進行形でちよつと危なかったと言いつつになつたが、フェイトの泣きそうな表情を見て、その言葉を全力で飲み込んだ。

あの日、デイルムツドが生死不明と言われてから後悔と不安を胸の内に隠して戦ってきた少女は再会の喜びを抑え切れなかったのだ。

「フェ：フェイトにも心配をかけたな……それに皆にも、連絡が取れず済まなかった…」

腹部に直撃を浴びるのは魔猪に殺された時以来であり、久々の衝撃に目の前で星が回っていたが何とか堪えて笑顔で返す。

傷はユーノ達が治してくれたが、イスカandalとの戦いで魔力で筋力の強化を行ったので肉体内部のダメージはかなり残っており、正直僅かな衝撃でもかなりのダメージとなる。

「申し訳ないですけどデイルムツドさん。貴方が戦ったのはイスカandalという男ですか」

「やはりすでにそちらと接触を行っていましたか…その通りです。奴とは軍門に下るか否かを賭けて一騎打ちを行いました」

抱きつきながら涙を堪える少女の頭を撫でつつも深呼吸してその痛みを誤魔化しながらリンデイの質問に答える。

その後もあの後に起きた出来事を語る。デバイスが破壊されたこと、目覚めた屋敷で住人を人質に脅されて動けなかった事、

ハサンの主という者の技術で能力の封印を解除された事を伝えた。「俺を救ってくれたのは月村すずかという少女でな」

ハサンから彼女は名なのはの友人と聞いている。突然知った名前が出て驚くかもしれないと思ったのだが。

「ああ…そうだったんだ」

「デイルムツド君、すずかちゃんの家に行った…」

何故か二人とも妙に納得したように頷いた。

「すずかから俺の事を聞いていたのか？」

「そうじゃないんだけど…」

だったらそちらから接触してこなかったのはおかしいと思い、尋ねると二人とも言葉に詰まっていた。

(最近の様子が恋する乙女だったから…)

などとは口が裂けても言えない。

『フェイトちゃん、キスってどんな味だろうね』

『なのはちゃん、一緒に住んでたら恋人になれるかな…お姉ちゃんたちみたいに』

等、その他を挙げればキリがない。今まではいきなりそのような事を言い出した理由がわからなかったが、今の説明で納得した。

「それで今夜ハサンによって能力を解除されてしまったのでな…魅了しては不味いので屋敷を離れたのだ。どうやらハサンの方も合流を認めたようだったのな」

(手遅れだよ…デイルムツド…)

デイルムツド・オディナは致命的な勘違いをしている。

自分が女性にモテている自覚は持っているのだが、それらは全て魅了による物だと思い込んでいるのだ。

つまりは自身の魅力だけではそんな事にはならないと信じている。

なので魅了を封じられた状態や魔力を保有しながらあえて呪いを受けるような人間以外は絶対に自分を愛さないと思っけて行動している。

「それよりそちらの状況はどうなっている?」

「ああ、今夜例のロストログア…闇の書を回収しようとしたんだがバーサーカーに襲われて…」

「あの狂戦士もこちらに来たか…」

自身の説明は終わったと、いない間の状況の確認を尋ね、それにクロノが答えていく。

目の前の管理局の女性の視線を一手に集め、一部女性局員を十歳程の少年に対し抱く感情に自分の性癖がおかしくなったのではないかと苦惱させている事など夢にも思っていないのだろう。

「ならばバーサーカーの相手は俺がしよう」

そんな少女二人の内心など知らず、一通りの説明を受けたデイルムツドがバーサーカーの相手を引き受けた。本当はシグナムに借りを返したいところであるが相性を考えての判断である。

「以前戦った時、奴の武器を破魔の紅薔薇で破壊することができた」

バーサーカーの触れたものを宝具化する能力にとってデイルムツドの魔力を打ち消す破魔の紅薔薇は天敵と言ってもいい。

なんらかの奥の手を隠している可能性もあるが基本的に優位に戦いを進める事ができるだろう。

デイルムツドの今後の行動が定まったことで、話は中断されていた話題：守護騎士の正体の話に戻った。

「使い魔でも人間でも無い擬似生命？」

それがクロノから語られた事だった。

「それって私みたいなの……」

それを聞いたフェイトが不安げな声で尋ねる。

アリシアのコピーとして作られた自分は人間ではないのではありませんか。どこかそのような不安を抱えていたのだろうか。

「それは違うわ！ フェイトさんは生まれ方が少し違うだけで命を受けて生み出された人間でしょう？」

「検査の結果でもちゃんとそう出てただろうか？」

それをリンデイとクロノが即座に否定する。

「そうだな。フェイトは人間だろう。そう悲しい事を言うな」

デイルムツドも彼女の不安を否定する。擬似生命というならばむしろ己の方がそうだと思っただが、そう言う余計にややこしい話になるのは明白であるので口にはしなかった。

エイミイの解説によると守護騎士とは闇の書に内臓されたプログラムであるようだ。

そもそも闇の書とは転生と再生を繰り返す様々な主の元を渡り歩くロストログアであり、他の生命から蒐集と呼ばれるリンカーコアと呼ばれる魔力源を喰らう行為を行って魔力と魔力資質を得ると同時に闇の書の頁が増えていく。

守護騎士とは主を守りながら代わりに蒐集を行う感情を持たない存在で、過去の事件で意思疎通を行うための対話能力があることは確認されている。

「しかし……俺は烈火の将以外とは会話していないが……彼女には明確な感情があった」

デイルムツドと戦った時、シグナムは笑みを浮かべ、名乗りを上げて礼節を尽くそうとした。横槍に倒れ、怒りの声を上げたデイルムツドに対して動揺するなど感情の揺れも見せた。

それはなのとはフェイトも同様であったようで二人とも守護騎士

達からは感情を感じたようだ。色々疑問点は残ったが、捜査に当たっている局員の報告を待ち、それから判断することになった。

「デイルムツドは守護騎士の事を恨んでないの？」

話が纏まって来た時、フェイトがデイルムツドに尋ねる。一騎打ちの最中に不意打ちなど騎士道精神に反する行為をされたにしてはそれほど彼らに対して怒りを感じている様子がなかった事が不思議だったのだろう。

「そうだな…最初は憎悪すら抱いてしまったが…少し思うところがあつてな」

そう言いながら思い出すのは意識を失う直前のシグナムの表情だった。

最初は騙されたと思ったが、冷静に時間を置いて考えてみるとあの事態は彼女としても想定外であったのかもしれない。

もしそうであったならば、あれは互いにとって不本意な結末であったのだろう。

「全てが終わった時、今度は正々堂々と全力でぶつかり合って決着をつける。それでいいと思ったのさ」

私情よりも優先すべき事がある。

それはかつて主君に尽くしていた己が一番理解できる。なのにそれに殉じていた彼女を恨むなど逆恨みも甚だしい事だと今は思えたのだ。

明日からはデイルムツドはハサンによる限定解除の影響の検査と次の戦いまでに身体を万全にするため、ユーノは闇の書の詳しい調査を行うためにそれぞれ本局へ向かう事となる。

そして、黙って去ることの謝罪と後日の再会を約束した旨を書いた文をすずかの家に届けてもらうことをなのはに頼み、彼女と別れたのだった。

結界を闇の書で破壊し、管理局から逃れた四人が家に戻った時そこに主の姿は無く、今晚一緒に食事を取る約束をしていた友人であるはずかの家に泊まるという内容の手紙が机に置いてあった。

「はやてちゃん…ホントにごめんなさい…!」

『平気や。全然怒ってへんよ』

はやてに謝罪するためにシャマルが電話を掛け、電話越しの彼女が笑って怒っていないと答える。

『それより聞いてーなシャマル。実はすずかちゃんの家にな、こないだ話したデイル君が今住んどるんやって!』

「…え?」

彼女の口から語られた事に、シャマルの意識が固まった。

デイルムツドという少年は管理局側の人間である。もしもはやての口から自分達の名前が出れば彼女が闇の書の主であることが管理局にバレてしまう可能性が高い。そう思うとシャマルは緊張で自然と口の中が乾いていくのを感じた。

『今晚は用事があるてゆーて出かけてるらしくてな…会えへんかったんけど…こんな近くにおるんやったら家に来てくれても良かったのに…』

会いたがっていたはやてには申し訳ないが、幸いにも彼と出会えなかったようだ。それを聞いたシャマルがホツと胸を撫で下ろす。

その後いろいろと彼女の話聞き、最後に受話器をヴィータに渡してシャマルが庭に出る。そしてそこにいた予想外の存在を見つけて悲鳴を上げそうになったが慌てて口を噤んだ。

そこにいたのはシャマルを助けた全身を白銀の鎖で拘束された黒騎士だった。

先程の狂戦士と言っているほど荒々しい気配とは打って変わり、そこに佇む黒騎士は月夜の湖の水面のように静かである。

『それは貸してやる。蒐集に役に立つだろう』

驚くシャマルと異変を感じて出てきたシグナムとザファイラに向けて念話が届く。その声は先ほど目の前の騎士と共に現れた仮面の

男のものだった。

ヴィータははやてを不安がらせないように平静を保つように室内で電話を続けながらもその声に意識を傾ける。

まるで彫像のように佇む黒騎士の姿がかつての：はやてと出会う前の：感情を持たず、主の命令に従うだけの存在であった頃の自分達の姿と重なる

「こいつは…一体……」

『瀕死のそいつの記憶を覗き、弄った……今のそいつは永遠の悪夢の中に囚われているただの人形だ』

ザファイラの言葉に仮面の男の声が答える。

「A r …… t h u r ……」

アーサー。そう、騎士が呻くように呟いた。

その声を聞いてようやく黒騎士に心があることに気が付く。しかしその声には悔恨と憎悪…そして深い絶望が籠っていた。

『その鎖がある限りそいつは貴様達には逆らず、命令がなければ暴れる事もない。だが戦いになれば命を賭してでも目的を遂行するだろう』

「貴様…ッ!!」

記憶を改ざんし、鎖で自由を奪い道具のように利用する。

黒騎士の意思を無視したあまりに残酷な行為に守護騎士達が怒りを覚える。

『何を怒る？ 貴様らは今まで多くの者を蒐集によって踏みにしり、苦しめただろう？ それが少し増えたところでたいした事ではあるまい？』

彼らの怒りに対し仮面の男が返したのは哄笑と侮蔑の言葉だった。今更善人面するな。他者を苦しめ、その力を利用しているという意味では同じだと。

「……っ!!」

シグナムは違うと言おうとした瞬間、デイルムツドの最後に自身を見る表情を思い出してしまい躊躇ってしまった。

「違うっ!!」

そんなシグナムに変わり否定の言葉を上げたのは、はやてとの会話を終え、庭に出てきたヴィータだった。

「あたし達とお前は違うー! あたし達はこんなひでえ事しねえ!」

叫ぶヴィータの声は、まるで自分に言い聞かせるようにも聞こえた。

ヴィータもまた、大切な主を守るためとはいえ他の誰かを傷付ける事には自責の念を感じているのだ。

はやてと出会う前であるならば、目の前の拘束された黒騎士を見て何も感じる事無く、ただ蒐集が楽になると思うだけであっただろう。

だが今は違う。はやてと出会い、その優しさに触れた事で変わった。

他人の痛みも悲しみも理解できる。理解できるからこそ蒐集を行う事が辛いのだが。

『そうか……そのバーサーカーも……かつては湖の騎士と呼ばれていたそうだ』

「え?」

ヴィータの叫びに何かを感じたのか、仮面の男は唐突にそう言った。

思わずシャマルが聞き返そうとするが、その言葉を最後に念話が途絶えてしまい、詳しく聞くことはできなかった。

「行ってしまったな……」

ザファイラが呟く。守護騎士とやや猫背気味に佇んでいる黒騎士……バーサーカーだけがその場に残された。

バーサーカーは何も喋らない。なんとも言い難い気まずい雰囲気
が寒空の庭を支配する。

縦横無尽に動き回っていた時は気付かなかったが、改めて見ると
思ったより小さい。

全身を覆う甲冑と猫背のせいかわかりづらかったが背丈はおそらく
デイルムツドと同じくらいだろう。

「……どうしましょうか?」

「とりあえず、中に入れる…:か?」

寒さを感じるのか…:そもそも彼(?)が人間なのか使い魔なのかもバーサーカーが発する黒い魔力の霧によって判別することができない。

家主の判断無しで家に入れていいのか迷ったが、こんな寒空の中に鎖に拘束され、自由を奪われたバーサーカーを放り出したままにしておくのは彼らの芽生えた良心が痛む。

室内に入るように言っていると素直に四人の後を付いて来た。

「うおわっ?! スリッパが真っ黒になった?!」

「あの時の杖みたいになったわね……」

土足と呼んでいいかわからないが全身を覆う騎士甲冑のままりビングに入れるのはまずいと思ったのでスリッパを履かせると、ピンクのスリッパが真っ黒に変色し、赤い模様が浮かび上がっている。

「とりあえず…:食事にしようか」

はやてが用意してくれた鍋を食べようと全員が席に着く。

なんとなく怖いもの見たさもあつたので、バーサーカーを空いているはやての席に座らせる。

グツグツと鍋の中身が煮立つのを待つ中、緊張感が漂う。全員シヤマルからバーサーカーが大暴れして管理局の魔導師を圧倒していた話を聞いていたからだ。

先ほどの仮面の男が命令がなければ暴れないと言っていたが、それでも絶対にそうだといい保障はない。

「え…:と。貴方ってご飯食べれる…:」

鍋で出来上がり、緊張しながらも勇気を出したシヤマルが中身を食器に移し黒騎士の前に置く。

バーサーカーは数秒それを見つめた後、やたらと器用に同じく触つたと同時に黒くなった箸と器を持った。

「うおー…:そこ開くのか?!」

兜が邪魔で食べれないのではないかと思っていたが、兜の下顎部分が上にスライドし、隙間が生まれてそこから器用に食べ始めた。

『鎧の中身が見える気がするのだが……よくわからんな』

『たぶんあの黒い魔力の霧が彼の姿を識別できなくしているのよ』

『だが、おそらく少年だな……十代半ば程か?』

『なあ、はやてにこいつ飼っていいか聞いていいか?』

椅子にちゃんと座り、何も言わずに黙々と食べる姿は、

狂気に満ちた戦いをしてきた時とのギャップを感じさせてそれが場を和ませた。

そんな事が話し合われているなど理性を奪われたバーサーカーには察することなどできず、ただ本能のままに食事を行う。

なお、理性が無いのに行儀良く食事をしているのは掴んだ物を自身の宝具として扱う『騎士は徒手にて死せず』と戦闘技術が劣化しない固有スキル『無窮の武練』による賜物である。

「さて……」飯食べ終わったし……あたしとザファイラと……お前も蒐集に向かうぞ」

食事を終えたヴィータが声をかけると鎧を軋ませながらバーサーカーが立ち上がった。

「でもこの子武器を持って——」

いないとシヤマルが言おうとした時、変化が起きた。

全身を覆っていた黒い魔力の霧が消え、白銀の鎖と漆黒の鎧がはつきりとその姿を見せる。

そしてバーサーカーの右手に禍々しくも見事な造詣の剣が姿を現した。

アロンダイト
無毀なる湖光

約束された勝利の剣と同じく神造兵装であり今は魔剣となった伝説の武器である。

円卓の騎士の中で最強の男であった彼が有するその剣はそこに存在するだけでもその威光で他者を屈服させる。

理性を奪われた悲しい黒騎士が赤と黒の光彩を放つ至高の宝剣と

共に動き出した。

——『十二月九日』——

——頼む、一緒に来てくれ

管理局に着き、検査に向かおうとしたデイルムツドの服を掴みながら、珍しくクロノ・ハラオウンが懇願してきた。

それほど身体に不調を感じている訳でも無く、何より緊急の用事も無いのに上官の頼みを断る訳にも行かないだろう。

そんな訳で現在はクロノ、エイミイ、ユーノと共に闇の書の調査を協力してくれる人物の元に向かっていた。

「これから会う人物はクロノがそこまで警戒する人物なのか？」

前を行き、ユーノと色々と話をしているクロノに聞こえないように隣を歩くエイミイの耳元に口を寄せ、尋ねる。

二人組みであるだけでは聞いていた。デイルムツドは目の前を歩く聡明な少年が警戒するのだから底の見えない老人二人組みなのではないかと考えていた。

「んー…警戒はしてるけど、たぶんデイルムツド君のイメージとは違うかな」

そんな考えを読んだのか、エイミイは正しい人物像を浮かべながらそう答える。

とりあえず会えば理由がすぐにわかるといふ事だったので、そのまま黙って廊下を進み、やがて一室のドアの前で立ち止まる。

クロノがゆっくり深呼吸し、緊張で固まった表情を笑顔にするとドアを開いて中に入る。

「リーゼ、久しぶりだ。クロノだ」

デイルムツドも三人の後に続いて入る。そこにいたのは猫耳を生

やした二人の女性だった。おそらく双子なのだろう。全く同じ顔をしていたが、片や長髪、片やショートカットである。

「クロスケ〜！」

数秒の静寂の後、ショートカットの女性が嬉しそうにクロノに飛びかかり、そのまま抱きしめて押し倒した。

「リーゼアリア！おひさしっ」

「うん。おひさしっ」

悲鳴を上げる幼馴染を無視してエイミーがもう一人の女性：リーゼアリアと呼ばれた長髪の方とタッチしながら挨拶した。

助けようとしなかったのを見たところ、おそらくこれが普段から繰り広げられているのだろう。デイルムツドはようやくクロノがあんなに警戒していた理由を理解した。

楽しそうに話す二人の邪魔をしないようにデイルムツドとユーノはエイミーの後ろで黙って聞いていた。クロノが助けを呼ぶ声が聞こえた気がしたが、命の危険は無さそうだし、何より邪魔したら余計にややこしくなると思ったので気付かない振りをする。

「リーゼロツテ。おひさしっ」

「エイミー、おひさしだー！」

ソファの影から満足そうな表情で出て来た女性：リーゼロツテにエイミーが声をかけると嬉しそうに飛び出して、先ほどのようにタッチした。

後で顔にキスマークを付けられた幽鬼のように立ち上がるクロノを放置してエイミーと談笑していたリーゼロツテだったが、ふと後ろでそれを見ていたユーノに気が付き、彼をじつと見る。

「なんかおいしそうなネズミっ子がいる。あ、食っていい?!」

「よくないよ?!」

その目は獲物を見つけた獣の物であった。普段フェレットに変身している事に本能的に気が付いているのかもしれない。

焦るユーノを苦笑いしながら見ていると、今度はリーゼロツトの視線がデイルムツドに向けられた。

数秒デイルムツドの顔を見つめ、その視線が右目下の泣き黒子に移

ると、その表情は納得がいったというものに変わる。

「ああ！ あんたが噂の『管理局の輝く愛の狩人』！」

「待て。なんだその不名誉な通り名は」

リーゼロッテの口から出た不吉な呼び名にデイルムツドの表情が歪んだ。

その瞬間、クロノ達が笑いを堪える気配を感じるが、デイルムツドにとっては正直笑えない。

「だって今君、超有名人だよ？ 老若男女をその麗しい美貌で虜にし、数多の局員が性犯罪に走りたくなる絶世の美男子が管理局に入ってたて。後は裁判にかけられたのはその魅了の呪いが原因だとかなんとか」

「そんな訳ないだろう…って、待て。男とはどういう…いやっ！ いっ！ 答えないで構わん！」

不吉な言葉は聞こえ、思わず聞き返しそうになったが止めた。確かに女性のせいで人生破綻したが別に男に逃げる気など微塵もない。

聞きたくなかった己の通り名を聞かされてだいぶ心が折れそうになったが、何とか持ち直したデイルムツドは皆とそこで別れ、技術部へと足を運んでいた。

シグナムとの戦いで損傷したデバイス『グラニア』の修復を依頼するためである。

レティ提督の元、正式に宝具の開帳が許されたので今更必要無いかもしれないが、万が一の備えとして持っていて悪くはない。

デイルムツドが直接渡さずともよいのだが、わざわざ開発してもらったデバイスをここまで壊した事を謝罪しなければならぬと思いい、直接出向くことにしたのだ。

「失礼する。囑託魔導師、デイルムツド・オディナだ。マリエル殿はおられるか？」

第四技術部と書かれた扉を開き、開発を主導してくれた人物に声をかける。

「あ。デイルムツド君。数日行方不明って聞いて心配だったけど…元気そうで安心したわ」

その声に振り返ったのは目的の人物、マリエル・アテンザだ。

彼女はエイミイの後輩であり、彼女を介して出会った。デイルムツドの管理局入りの頃から宝具の代わりとなるデバイスの相談をしており、

アースラの面々を除くと管理局内では一番付き合いが長い。

「騎士の誇りは砕かれたままだがな：昨日報告が行っていると思うがデバイスの件で伺った」

「レイジングハートとバルディッシュ見た後だから覚悟してたけど：これは……」

デイルムツドから手渡されたデバイスを見てマリエルが苦い表情を浮かべる。

待機状態である時計型の原型を辛うじて留めている程度という酷い姿に開発担当としてはやはり相当ショックなのだろう。

改めて深く頭を下げて謝罪をするとマリエルが慌ててそれを止めさせる。

無理をした訳でも故意に破壊した訳でも無い事をわかっているの
でそこまで気に病まないでいいと。

「ただ…コアがここまで大破してるとなると…修復より再開発した方が早いね…」

「そうか…ならば一つ頼まれて欲しい。最悪、飛行魔法は外しても構わない——」

そうして今回の敗北を踏まえ、グラニアへの改良プランを提示する。

デイルムツドが依頼した希望を叶えるために開発した技術が後のデバイスに継承されることになるのだが、それを知るのはまだ先の話である。

その後、色々と話をした後、デイルムツドは検査に向かうため、技術部を後にした。

魔槍と凶獣

——『十二月十日』——

デイルムツド・オデイナが本局で検査を受け、バーサーカーがシグナムと共に管理外世界に向かい蒐集の手伝いをしていた頃。

豪放磊落を地で行く男、征服王イスカンドルは自由気ままに散歩をしていた。

デイルムツドとの全力の一騎打ちでチャリオットの宝具、神威の車輪を失うという致命的な損害を受けた。

最初はどうしたものかと思っただが、自身の魔力を勝手に使った宝具が自動修復を行っていることに気が付いてからは、「直るまでは自由に過ごす」といういつも通りの事を、いつもより小規模で行おうという結論に至った。

そんな訳で現在は神威の車輪無しで行ける範囲で散策を行っていた。

この世界に来てからイスカンドルは自由気ままに生きていた。具体的には

- 一、昼どころか朝から酒を飲む。
 - 二、夜中にふらつと出て行き、朝に戻ることもある。
 - 三、恐ろしいほどデリカシーがない。
- という正直血縁者であっても放り出したいレベルの最悪の穀潰し生活である。

アリサも最初は何度か追いつくかと思えば、相談に乗ってくれたり、力がある仕事を手伝ってくれたりするのでギリギリ踏み留まっている。

彼女の性格からして、自分の庭に落ちてきたから自身で面倒を見なければならぬ。というよくわからない責任感を感じているのかも

しれないが。

しばらく彼女と共に過ごしてきたイスカンドルであったが、神威の車輪の修復が完了次第旅立つ事を考えていた。

彼は何も考えていないようだが、様々な事を考えて行動している。

普段行っている散歩は周囲の地形や情報の把握だ。

以前はウェイバーが情報を収集していたのだが、現在はそうではないので自分で色々調べなければならぬ。

遠距離の散策を行う時は神威の車輪が見つかりにくい深夜を。情報を調べる時は昼間に周囲を歩く。

その過程で見つけた違和感。その人払いとは異なる……認識を狂わせるように展開されていた結界に入るとそこにいた少女と交戦となった。

戦ったのは彼女の使う魔術がイスカンドルの知る物とあまりにかけ離れていたからだ。退いたのは彼女をあれ以上傷付けずに無力化するのが難しいと判断したためだ。

その次の介入は内部の人間に自身の情報を晒し、相手の反応を見ることが目的だった。

そこでランサーとして対峙したデイルムツドの情報を得た。その時に聞いた『同じ世界から来た』という言葉からイスカンドルは一つの仮説を考えたのだ。

『ここは第四次聖杯戦争が起きた後の未来ではなく異なる世界なのではないのか』と。

勿論、自身が召喚されてから十年あまり経過していた事は最初にはリサの家で気が付いている。それでも誰も冬木を知らないなどおかしいと思ったのだ。

最初は冬木の地があの後滅び、それを隠蔽するためにウェイバーから聞いていた魔術協会が何かをしたのではないかと考えていた。

しかし世界が違うというのであれば冬木が存在しないというのも納得できる。

その後、結界が解除され、人目に付いても隠れようとしなかったのはそれを好都合と捉えたからだ。

サーヴァントという魔術の神秘の一つがあそこまで衆目に晒されれば、魔術協会が接触してくるのではないかと推測したのだが、その気配はなかった。

次にイスカンドルが考えたのはデイルムツドとの接触だった。同じ境遇である相手とぶつかれば何かわかるのではないかと。

戦いを王の軍勢の中で行ったのも周囲の被害だけを考えて使ったのではない。

勿論デイルムツドとの戦いを邪魔されなくなかったという事もあったが、固有結界を展開した本当の目的は『アサシンの捕獲』であった。

力を抑えられていたというデイルムツドの前に現れ、あの場で解放したのは二人を戦わせてその様子を見るため、もしくは両者の疲弊か片方を撃破させると考えた。

アサシンを捕らえて奴らを操る者と接触しようと考えていたのだが、軍勢内部に捕らえる事は叶わなかった上に、勝負に夢中になってしまい、アサシンそつちのけで戦ってしまったのだが。

王の軍勢を展開できるのはおそらく後一度。

勿論魔力が回復すればまた展開できるだろうが、魔術師ではないイスカンドルの回復速度は遅い。

神威の車輪の真名解放程度ならば全く気にしなくていいが、貯蔵魔力を大量に持つていく王の軍勢となると数年はかかるだろう。

切り札の大半を事実上封じられた状態のイスカンドルが選んだのは一時の静観と旅立ちの支度であった。

近いうちにまた戦いが起きるだろう。

それは問題ないのだが、そこに戦う覚悟のない少女を巻き込む訳には行かない。

なので新しい拠点を探しているのだが、そうそう簡単に見つかるものではない。

「美味いっー」

そんな訳で、現在イスカンドルは休憩がてらに見かけた翠屋と書かれた喫茶店でケーキを食べていた。

『今回は』略奪するのではなく、出かける時に鮫島から渡された金を支払う予定だ。

この店長と長男は超人レベルの強さを持っているが、イスカンドルは本当に人より一つ上の領域にいる存在である。

デイルムツドのように幼い姿で受肉し弱体化しているのとは違い、若返ってもほぼ全盛期と変わらない強さのイスカンドルならば魔力を持たない人間に負けることはない。

とはいえ、イスカンドルは破天荒だが、理性がない訳ではない。

カウンターから笑顔を客に振りまく男が強者であるのは気付いているが、こんな昼間から派手に戦おうとは思わかった。

「ありがとうございます」

イスカンドルの本心から出た言葉に紅茶を持ってきた女性が笑顔で答えた。

ちなみに現代の金銭感覚が未だにわからない彼は入店と同時に財布をカウンターにいた男に渡し、足りる分だけ注文を受けるように頼んでいた。

人生は何事も存分に楽しみ抜く。

それが征服王イスカンドルの信条である。金が足りなくなれば無用な争いが起きてしまい、興が冷めてしまうからだ。足りない分を働いて返すという発想が最初から浮かばないのが征服王らしい。

七皿目のケーキを食べ終え、イスカンドルが立ち上がる。

「まこと、美味であったぞー」

「お口に合ったようで良かったですわ」

必要金額だけ抜き取られた財布を返しながら女性：高町桃子が嬉しそうに微笑む。

嘘偽りなく賛辞を送るイスカンドルの言葉は、作った者にとって最高の喜びである。

「ではまた来よう」

「きやつー」

満足げにイスカンドルが店を出ようと扉を開け外に出ると、足元に何かがぶつかる感触と小さな悲鳴が聞こえた。足元を見ると茶色い

髪の少女が尻餅を付いている。

「なのは、大丈夫?!」

「うん、平気だよ、フェイトちゃ…」

声を掛け合った二人……フェイトとなのはがイスカンドルの姿を見て息を呑んだ。

あのデイルムツドが自身よりも強いと誇張無しで称えた男が目の前に……それも翠屋から出てきたのだから当然の反応だろう。

現在はクロノもデイルムツドも地球にいないので二人はとりあえず一番近くにいるエイミィに念話を送ろうとした。

「すまんなあ小娘よ。小さすぎて気が付かんかったわ」

しかしそれはイスカンドルが人懐っこい笑顔を浮かべながら倒れたなのはを、ひよいと持ち上げて立たせた事で中断される。

「このケーキとやらは絶品であった。お主らも食してみるとよからう。それではな」

「あ、ちよつと!」

その反応に驚く二人を他所にイスカンドルは店の娘に対してケーキを勧め、そのまま横を通り過ぎて行く。

呆然としていたなのはが慌てて声をかけるが、イスカンドルは振り返ることなく、店の前に置いてあった『神威の車輪号(仮名)』という大きな自転車に乗るとそのまま去っていった。

イスカンドルは二人が以前出会った人物であった事に気が付いていなかった。

結界で出会った時のフェイトは、黒を基調としたバリアジャケットを纏いバルデツシュを構えていた。

しかし現在は私立聖祥大学付属小学校の白い制服であり、なのはに至ってはイスカンドルが気が付いた時にはスターライトブレイカーを放つ直前で、ちょうど収束した魔力のせいで姿が殆ど見えていなかった。

二人からすれば居場所不明の警戒すべき対象であったが、イスカン

ダルからすれば目の前に現れた巨漢に驚く小娘程度の感覚である。

一応二人とも警戒心を込めて睨んだのだが、場数を踏んだ歴戦の英雄に取っては小さな少女の睨みなど子猫が警戒心を剥き出しにしているのと変わらない。

彼の姿を呆然と眺めていたなのは達であつたが、フェイトが我に返り、追いかけてようとする。

しかし『騎乗』A+のスキルを持つイスカンドルの駆る『神威の車輪号(仮名)』はもの凄い速さと安定性で疾走して行き、すぐにその姿を眩ませてしまった。

後ほどこの話を聞いたデイルムツドが頭を抱える事になるのだが、イスカンドルがそれを知るよしはなかった。

——『十二月十一日』——

人の住んでいない辺境世界。そこで烈火の将シグナムは魔法生物と戦っていた。

「くっ……い」

現在管理局の監視を逃れながら蒐集を行う為、守護騎士達はバーサーカーと共に、無人世界で蒐集を行っている。

リンカーコアは人間でなくても魔法が使える生命には存在する。なので奪つても気付かれにくい魔法生物からの蒐集をメインに行うことにしたのだが、その作業は困難を極めていた。

蒐集は人間からの方が圧倒的に効率がいい。厄介なのや強力な者がいて苦戦するが、それに比例した魔力が手に入る。

対して魔法生物はそれとは逆の場合が多いのだ。いくら凶体がかく強かつたとしても、いざ蒐集を行うとなるとあまり集まらないと

いうことはザラであった。

「ぐっ…はっ…!!」

勿論全ての魔法生物がそうという訳ではない。中には力や巨体に比例したリンカーコアを有している物も存在している。

その例が今日の前でシグナムを殺そうと襲い掛かってくる巨大な翼竜だ。

刃を弾く堅牢な鱗に全てを焼き尽くそうとする強力な火炎ブレス。高高度から急降下による鋭利な爪による一撃。

空の王者とでも呼ぶべきこの世界の覇者は、自らの命を脅かそうとした外敵に対して容赦なく必殺の一撃を連続で振るう。

全快ならいざ知らず、連日の戦闘で疲弊していたシグナムに無慈悲な暴力の嵐が襲い掛かる。

「しまったっ!!」

それでも必死に堪え、反撃の隙を狙っていたシグナムであったが、疲労でバランスを崩してしまった。

それを見逃してくれる程、野生の生き物は優しくはない。回避行動が遅れたシグナムに向けて、急降下してきた飛竜の鉤爪が襲い掛かる。

シグナムは避けられないと判断し、レヴァンティンでその一撃を防ごうと構えた。

当たれば死にはしないだろうが戦闘を継続することはできないだろう。襲ってくる衝撃に備え、シグナムが身を硬くした直後――

――赤い雨が乾いた大地を濡らした

「グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

ただしそれはシグナムの物ではなく、先ほどまで狩人であった飛竜の物だった。

直後、地面に落ちた物によって大地が揺れる。その正体を見ようと

代わりにシグナムは飛竜の冥福を祈る。

彼はただ本能のままに動き、シグナムを守るという命令だけを遂行する為に脅威を排除しただけだ。

その死を痛む心すら封じられた騎士が本当はどんな気持ちでいるかは守護騎士達は知る由もない。

それと同時に二人の前に光の輪が出現し、二人の人物が姿を現した。

一人はフェイト・テストロッサ。そしてもう一人の人物は――

「久しいな、シグナム……それにバーサーカーよ」

真紅の魔槍と銀色の刃を持つ剣を構えたディルムツド・オディナが、笑みを浮かべながら再会の言葉を告げた。

時刻は両陣営がぶつかり合う少し前に遡る。

バーサーカーが飛竜を惨殺していた映像は地球の臨時本部とディルムツドのいる本部にも届いていた。

『酷い……っ！』

斬り刻まれ、鮮血を飛び散らせる飛竜の姿に、別のモニターに移った臨時本部にいるのが視線を逸らしながら呟く。

凄惨な映像はいくら強い精神を持っているなほでも流石に直視できるものではなかった。

「アイツは未だに狂化が解けていないのか……」

「狂化？」

「バーサーカーのクラスは意図的に理性を捨て、その代わりに自身の能力を底上げする。しかし何故……？」

彼の手に握れているのは座の英霊からすればあまりに有名な剣。

それを振るう冴え渡る劍技。

そして何より彼の聖杯戦争での行動を思い出し、デイルムツドは彼の真名にたどり着いていた。

「とりあえず俺が行こう。バーサーカーの相手をするのが俺の役目だからな」

だが……その人物が狂戦士となる道を選んだ理由が理解できない。それを確かめるためにも槍を交えたいと思ったのだ。

『私も行く……』

『あたしもだ』

『私も。あの子とお話しなくちゃ行けないから!』

デイルムツドが転送ゲートに向おうとするとなのはとフェイト、それに子犬形態のアルフも声を上げる。

それぞれが決着を付け、その真意を聞く為に四人が戦うべき相手の元に向かった。

——そして先ほどの対峙した状態に戻る

「輝く貌……」

「どうした烈火の将? 何をそんなに呆けた顔している?」

笑みを浮かべているデイルムツドに対し、シグナムの表情には翳りが浮かんでいた。やはりあの結末は彼女にとっても心苦しい物だったのだろう。

「そう気に病むな。劍が鈍るぞ?」

「貴殿は私を恨んではいけないのか……?」

「色々と思うところがあつてな……今度は全力で……と言いたいが、生憎今回はそちらのバーサーカーの相手をしなければならぬ」

そう言つて破魔の紅薔薇の刃先をバーサーカーに向ける。聖杯戦争の時は終ぞその名を知る事が出来なかつた騎士王を超える存在へと。

「何故、貴殿のような武人が狂戦士に身を墮としたのだ?」

「バーサーカーの名を知っているのか?」

番外編：新しい家族

——『十二月九日』——

砂漠での戦いが起こる二日前。八神家ではちよつとした騒動があった。

時刻は夕方。今朝方友人宅から返って来た彼女達の主、八神はやてが上機嫌に夕食の支度をしている中、ヴィータを除く守護騎士達は緊張していた。

その理由は昨日の夜にやって来た黒騎士……バーサーカーにあつた。

現在バーサーカーはヴィータと共に蒐集を行っておりこの場がない。来たばかりで悪いとも思ったがすぐに戦いに向かつて貰ったのは主とのエンカウントを遅らせ、その間に良い案を考えようとしたからだ。

朝からずっと念話でどうするべきかと守護騎士の将と参謀と守護獣は話し合っていた。

日常に溶け込ませるにはあの外見は少々問題がある。どこかの城であれば廊下に立っていて貰えば問題ないが、あいにくこの家は一軒屋である。

最初に浮かんだのはこっそり家の中に隠れておいてもらうという案だ。

はやては足が不自由なので、天井裏に入ってもらえば鉢合わせることは無いだろう。

ただ時々バーサーカーは呻く。それも憎念籠った声で。

そんな呻き声が真夜中に天井裏から聞こえてきたら幾らなんでも

不気味過ぎて気が付くだろう。床下も同様で、食事中に下から呻き声が聞こえればお茶の間が凍りつくのは間違いない。

次に屋根の上にもと思ったが、閑静な住宅街の屋根に漆黒の鎧を纏った騎士がいたら間違いなく管理局の前に警察が来る。

そんな事になればはやての私生活に悪影響を与えることになる。それだけは絶対に避けなければならない。

第三の案はいつそここの管理外世界で待機してもらおうかという物だ。

流石にそれは酷いと思つたのと、最悪管理局に見つかつて捕縛される可能性もあり、それで万が一バーサーカーが敵に回れば、ただでさえ厳しい蒐集を行うのがより困難になるだろう。

上手く隠し通すアイディアが浮かばず、惜しいが仮面の男を見つけて引き取ってもらうしかないと諦めていた時、ヴィータから念話が入つたのだ。

曰く、いい案が浮かんだと。

シヤマル達には他に妙案が浮かばなかつた。

だったらいつそそれに賭けてみようということになり、彼女の帰宅を待っていたのだ。

「ただいまー」

「あ、ヴィータ帰ってきたなあ」

そう言つて彼女を出迎えようと玄関に向かつたはやてとシヤマルを見送つた……見送つてしまった。

色々と疲れていたシグナム達は致命的なミスを犯した。ヴィータの言う案の内容を聞いていなかったのだ。

三人の中ではあの異様な存在であるバーサーカーを、はやてと会わせるのはマズイという暗黙の了解があり、ずっと彼女と接触させずうまく隠す方法を模索していた。

「ヴィ……ヴィータ?! その人誰?!」

だから彼女が玄関からバーサーカーと共に入ってくるなど全く想定していなかつた。

はやての声で瞬時に己のミスに気が付いたシグナムがソファから

立ち上がったて玄関へ向けて駆け出し、ザフィーラもそれに続く。

そしてたどり着いた先でシグナムが見たのは、ヴィータの後ろに立っている漆黒の魔力に包まれたバーサーカーの姿だった。

唯一の救いは手にあったのが無毀なる湖光ではなく、昨日出発前に念のためにと持たせた木刀に変わっていたことだろう。それでも禍々しい輝きを放つ木刀は恐怖を与えるのに十分な威圧感があったが。

「えつと……ヴィータ？ お客さん……やないよね？」

はやてが恐々と尋ねる。気絶しないのはヴィータと一緒に入ってきたからだろう。もしバーサーカー単体で見たらどうなっていたか。

「ひ……」

「ひっ」

しばらく緊張して口を開かなかったヴィータが四人の視線が集中する中、意を決して口を開く。一体彼女が何を言うのか……この状況をどうやって打開するのかと息を呑んで見守る。

「ひろった……」

(えええっ?!)

あまりにも予想外……それ以前にあり得ない言い訳に、シヤマルは声を上げそうになるのをギリギリで堪えた。

シグナムはガクンと身体を崩しかけて慌てて体制を立て直し、ザフィーラに至っては絶句して固まっている。

「ひっ……拾ったあ?!」

「うん。ウチで飼っていい?」

「飼う?! 人間って飼うもんなん?!」

はやても想定外の返しに思いつき動揺している。

確かに昨日飼いたいか言っていたが、本当に聞くとは思わなかった。

そしてこのままでは混迷を極めて行くだけなので、第二十三回家族

会議を行うことになるのであった。

——会議開始から一時間後

「なるほどなあ……」

守護騎士からの説明を受けてはやてが領いた。

蒐集の最中に出会った事は言う訳にはいかなかったので昨日
ヴィータが歩いてる時に見つけた次元漂流者（それについても説明済
み）ということにした。

理性を奪われている事と鎖で制御されている事は伏せている。

言えば優しいはやては解放を望むであろうし、守護騎士達としても
バーサーカーの現状を何とかしてやりたいとは思っている。

しかし、そうすれば制御を離れたバーサーカーが何をしでかすかわ
かったものではない。それに加えてこの鎖の効果を知らないので迂
闊に手を出すことはあまりに危険過ぎた。

「それで放っておけへんから昨日連れてきたけどどうすればええかわ
からんかったから……」

「この時間までヴィータちゃんと散歩して来てもらったんです」

はやての言葉をシャマルが引き継ぐ。

偶然この世界に漂流して住む場所がない。無口で鎧を外そうとし
ないが、大人しい黒い鎧を纏った騎士。

言っていて相当無理があるように感じていたが、シャマルの絶妙な
嘘によってバーサーカーの立場はそんな風になった。

「まあ、みんなが大丈夫やっていうならわたしは一人くらい家族が増
えても問題あらへんけど……」

居場所がないとなればはやても放って置けなかったのだろう。
少々不安げであったが佇むバーサーカーを見ながらそれを受け入れ
た。

「ところでこの子の名前は？」

「えっ？」

はやてに言われ、シャマルがきよとんという表情に変わる。

念のためにシャマルが展開していた防音の結界がなければ近所の人が出てくる所だっただろう。

「次は……ガウエイン」

「詫びを入れそうな雰囲気になりましたな」

先ほどまでの咆哮がピタリと止み、バーサーカーが膝を着いた。

そして手を着き、頭を垂れる姿はまるで誰かに謝罪しているようにも見える。

「ガラハッド」

「今度はなんか気まずそうな反応してんぞ」

そのままの姿勢でこちらを向く。甲冑で隠れて見えない表情が微妙に判る気がした。

「後もう一人有名な騎士がおってんけど……えーとなあ……」

理性は無いが心と記憶はあるのだろう。

それ故にはやてが告げる名前に本能的に反応しているのだろう。名前を聞く度に色々な感情が想起されているのかもしれない。

「あ！ 思い出したで！ 確かラン——」

「はやてちゃん！ なんか嫌がってますからそこから名前取るのは止めましょう?」

色々な反応を示すバーサーカーが面白かったのだろう。そのまま面白がって続ける主をシャマルが慌てて止める。

理性が無い事を知らない主に悪気はないのだろうか、これやったらバーサーカーがどうなるかわからない。

「ほんならシャマルが決めてーな」

「うええええ?! 私ですか?!」

予想外の振りにシャマルが素っ頓狂な声を上げる。

そんな事言われると全く考えていなかったので何のアイディアもない。シャマルが冷や汗を垂らしてながら仲間に助けを求めて視線を向けるが、全員顔を逸らし、目を合わせなかった。

『頑張り』

飛んできたザファイラの念話を聞いて、守護騎士の絆ってなんだろうと黒い思いがちよつと込み上げてくる。

ありませんと言いたかったが、期待した目で見ているはやての期待を裏切ることにはシヤマルにはできなかった。

「黒騎士なので……クロ……とか？」

精一杯考えて出た名前を言った。というか彼女にはそれが限界であつた。

仮面の男が言っていた『湖の騎士』という言葉から名付けようとも思ったのだが、そこからは特に浮かばず、はやてにどこでその名前を聞かれたか？ と問われても困るので口には出さなかつた。

案の定、「それはないわ」と言つた四つの視線を感じる中、バーサーカーだけは全く反応を示さなかつた。

「……拒絶しないな。クロでいいのか？」

シグナムの問いかけるが相変わらず反応はない。しかし、先程までの様に過剰な反応を示したりもしなかつた。

バーサーカーが拒絶しなかつたのは無関心……彼の出自に関係した名前ではないので全く気にならなかつただけだ。

守護騎士達もその詳細を伝えられていない彼の四肢と胴体、頭部を縛っている合計六つの鎖は魔法で編まれた特別な物である。

それぞれ一つ一つの鎖ごとに暗示の効果と『狂化』を増幅させる効果が与えられており、単純なダメージでは破壊できないが『魔力の流れを止める事』ができれば消失させることが可能だ。

六つの鎖全てに縛られている現在のバーサーカーは『狂化』スキルがAまで増幅された状態で、一つ失われる事に『狂化』のランクが一段階低下していき、全てが破壊されると彼を苦しめている『偽りの記憶』と『狂化』スキルが喪失する仕組みとなっている。

ただし消滅するまではその効力は永続的に続くので、本来は言葉だけでこのように暴走するなどはありえない。だが、かつての仲間達の名は、白銀の鎖の支配を押し退けようとする程バーサーカーの過去を刺激し、心を抉ってしまう。

そのせいであのように暴れそうになつたのだ。

「それでええんや……」

そんな事は知らないはやてはただ残念そうに呟いた。

冗談などではなく、結構真面目にそこから名前を取ろうとしていたのだ。

彼の本当の名前がわかるか、もしくはいい感じの名前が決まるまで間はその名前で行くという事に決まった。

本日の家族会議は終了し、それぞれが自分のやることに戻る中、命令を下されないバーサーカーはその場に静かに佇んでいる。

—————結局、はやてが最後の名前を言おうとした瞬間、バーサーカーの様子が変化していた事に誰も気が付くことはなかった

避けた。

デイルムツドは振り抜いた直後の胴体を晒したランスロットの懐へ潜り込み、小なる激情を正確に鎧の脆い部分……腰の付け根に向けて切っ先を突き出す。

しかし、それはランスロットが驚異的な反応速度で後ろに下がった事で当たることなく宙を斬った。

砂漠では本来、踏み込んでも硬い地面ほど速度を出すことができない。流れる砂は力を分散させ、時には足を捕らえて動きを阻害する。

どれだけ優秀な戦士であってもそんな環境でこれほどの動きをするなど、それこそ魔法でも使わなければ不可能だろう。

しかし『その程度の事』は時代を超えて語り継がれる英雄には関係ない。地形による有利不利など地形に関する逸話でもない限り、両雄の力に影響を及ぼすことはない。

「覚悟はしていたがここまでとは……全く恐ろしいな」

捕まえる。などという選択肢は最初から捨てていた。

理性を奪われた哀れな狂戦士は、デイルムツドを殺そうと襲い掛かってくる。

これが貧弱な英雄が狂化し、獣のように挑んでくるのであれば、まだ捕縛を想定して戦う事が許されたかもしれない。

しかし目の前にいるのは己と対等に渡り合った騎士王アルトリアが生涯一度も勝てなかった騎士である。

そんな英傑が狂化によって力を増幅しているのだ。手心を加えた瞬間にこの命はこの世界から消えることになるだろう。

聖杯戦争では叶わなかった死闘。

しかし、デイルムツドにあるのは強敵と戦える事の歓喜の想いではなく、いつ訪れるともわからない死への警戒だった。

死ぬ事が恐怖なのではない。強敵と戦い、華々しく散る事は騎士としての本懐だ。理性が無いとはいえ、目の前の存在との戦いは騎士として最高の誉れと言っている。

何も背負う物のなく挑むのであれば、ただ歓喜の想いだけがデイルムツドを支配していただろう。

だがしかし――

もし己が敗れば、今も烈火の将と苛烈な戦いを繰り広げているフェイトがランスロットの刃の餌食になるかもしれない。

そう考えれば、絶対にここで散ることは許されない。彼女達にランスロットを止めると誓った以上、決して死ぬ訳にはいかないのだ。

「はあああああつ!!」

「■■■■■■■■■■ーーー!」

デイルムツドの叫びにランスロットが応えるように咆哮する。

幾度と打ち合いその度に弾かれ、ランスロットの剣戟を破魔の紅薔薇で受け止めた時と、小なる激情で防いだ時で僅かに差がある事に気が付いていた。

デイルムツドは知りえなかったのだが、無毀なる湖光は竜属性に追加ダメージを与えるだけでは無く、全てのパラメーターを一ランク上昇させる効果がある。

それによってランスロットは若返りによる総合的なステータスダウンの影響を狂化と無毀なる湖光の力によって補っている。

普段の狂化はAランクだが、戦闘行動に移るとA+に上昇し、全てのパラメーターをAランクまで上昇させているのだ。

だが、破魔の紅薔薇は刃の触れている間だけ魔力的効果を打ち消す。それによって無毀なる湖光の竜殺しの力とステータス上昇を打ち合いの瞬間だけ無効化していた。

前者は竜の因子を持たないデイルムツドには影響は無いが、後者のステータスパラメーター上昇の無効は、ランスロットに対し非常に優位に働く。

ランスロットは破魔の紅薔薇を受け、攻撃を弾く度に、ステータスの低下と上昇を繰り返している。

基本的にはバーサーカーの消費魔力は安定しており、それほど負担を掛けることは無い。

もし所持者の魔力が不足しそうならば、最悪の場合、闇の書から魔力供給に切り替える事も可能であったので、守護騎士自身に負担をかける心配は無いはずであった。

「っ?! ……なん……だこれ?!」

「ヴィータちゃん?!」

「寄るんじゃ……ねえ!」

《Eisen ge he ul.》

しかし、突然バーサーカーに魔力を急激に奪われ、それにより激しい苦痛がヴィータを襲ったのだ。

その様子になのはが異常を感じ、慌てて声を掛けるが、ヴィータは激痛を堪えながらバーサーカーとの魔力の流れを闇の書と繋ぎ直しながら一撃を放った。

「ぎゃ……!」

放たれた攻撃は攻撃の為ではなく、視界と音を奪う轟音を放つ物で、それによつてなのはヴィータの姿を見失い、その隙を突いて一気に距離を取った。

痛みは治まったが、バーサーカーの異常によつてかなりの魔力を奪われたので、なのはと戦うのは危険と判断し、離脱してシグナムと合流しようとしたのだ。

シャマルからの念話によつてバーサーカーが強大な魔力を有する飛竜を倒し、シグナムによつて蒐集に成功した事は聞いていた。

(よっし……ここまで離れりゃ……!)

魔方陣を展開する。この距離であれば邪魔される事なく転移する事ができると判断した。

現在もバーサーカーは闇の書から魔力を吸収している。それどころか吸収する量が少しずつ上昇しているのだ。

このまま放置していればバーサーカーによつて手に入れた魔力がバーサーカーによつて消えるという本末転倒な事態になる。

そうならない為にも早く全員と合流してここから離脱しようとし

て――

(うええええつ?!)

こちらに向けて魔法を放とうとしているなのはの姿を見た。
ヴィータの考えは間違っていないかった。

ここまで離れれば普通は転移魔法を展開するまでの間に長距離魔砲の準備を整える事など不可能に近い。

この距離から砲撃を当てようなど考え、実行する者などほんの一握り程度だろう。

《Divine buster. Extension.》

「デイバイン――!!」

ただその一握りがヴィータの前に立ちはだかった少女であっただけだ。

「バスター――!!」

なのはの掛け声と共に、ヴィータに向けて桜色の砲撃が放たれた。
デイバインバスター・エクステンション――デイバインバスターのバリエーションで最大射程を強化したものである。

常識外の遠距離から放たれる砲撃は、目標を捉える事ができる弾速、精度、威力を持ち、さらにはバリア貫通能力まであるという常識を超えた一撃だ。

話をするためならば逃げる相手を打ち落としても会話可能な状態に持っていこうとする。

それが高町なのはという少女なのだ。

撃つ方はいいが撃たれる方はたまったものではない。おそらく自身が放つ攻撃の恐ろしさを理解していないのは本人だけだろう。

かつてフェイトとの一騎打ちの後、ディルムツドが敬語になったのは巫山戯た訳でも茶化した訳でもない。

彼はクソが付く程、真面目な人物である。彼が怒る時は本当に許せない時であるし、冗談など言えるような性格でもない。

――アレは本当に不味い

ず問いただそうとしたが、それは最後まで言うことは叶わなかった。突如ランスロットの頭部と胴体に残っていた鎖が後ろに引き寄せられたかと思うと、そのままいつの間にか現れていた魔方阵に飲み込まれ、その姿が虚空に消えていく。

——王——貴方に——裁かれ——

最後の瞬間に聞こえたのは初めて聞く声……しかし間違いなく、鎖が破壊されたことによつて溢れた最強の騎士の想いであった。

『デイルムツド！ 撤退する！ フェイトが!!』

虚空に消えたランスロットのいた場所を見つめながら思考していたデイルムツドであったが、クロノからの念話で中断される。

魔方阵が展開した次の瞬間、デイルムツドの身体は砂漠ではなく、アースラのブリッジにあった。

そして、そこで伝えられたのは、フェイトが蒐集を受けて意識を失つて運ばれたという結果であった。

敗北の先へ

——『十二月十一日』——

フェイトが蒐集を受け倒れた後、アースラの作戦室では会議が行われていた。

会議に参加しているのはこの作戦の指揮官であるリンディに現場に向かったデイルムツド、なのは、アルフ。他に後方の支援を担当したエイミイと本局から駆けつけたクロノと彼の師であるリーゼロツテである。

リーゼロツテを除き、直接この事態に対応した者達のみで行われている。

「フェイトさんはリンカーコアに酷いダメージを受けてるけど、命に別状は無いそうよ」

リンディの言葉で全員がひとまず胸を撫で下ろす。

両手を挙げて喜ぶ事はできないが、最悪の事態は避けられたと言っているだろう。

「ごめんね……あたしのせいだ……」

俯きながらそう呟いたのはエイミイだった。

フェイトとなのはが出撃した後、駐屯所の管制システムが妨害を受けて、機能を停止したらしい。

そのせいで現場の映像が途絶え、状況がわからなくなってしまい、慌てて復旧作業を行ったのだが、元に戻った時に映ったのは仮面の男に貫かれるフェイトの姿であった。

「フェイトもすぐに回復するのだろうか？ 他の皆も無事だったのだ……そう己を責めるな」

「いや、あんたが一番酷かった気もするけどねえ……」

アルフがデイルムツドの姿を見ながら呟く。彼の身体には何箇所

も包帯が巻かれていた。

ランスロットとの激戦。相手にもそれなりのダメージを与えることはできたが、デイルムツドも無傷とはいかなかった。

帰還した直後の彼は酷い有様であった。

右腕からの滴るほどの出血がアースラの床を濡らし、左の脇腹は裂かれていた。右ふくらはぎに数センチの深さの刺し傷があり、並みの精神力では立つことすらできなかっただろう。

とどめは額ストレスを斬られた事による出血で、彼の美しい顔が紅く染まっていたことだ。それを見た数人のクルーが失神したほどである。

本人としては少し怪我した程度であったが、周囲からすればどう考えても重傷である。

あの惨状を見ずに済んだフェイトは、蒐集を受けて良かったと言ってもいいかもしれない。もし見ていれば確実に彼女も失神していただろう。

も。と言うのは、なのはも彼の姿を見た瞬間に気を失ってしまったからで、この会議も彼女が目覚めるのを待ってから行われた。

「それにこちらもやられたんだ。エイミイだけの責任じゃない」

そう答えるのは帰還した直後のデイルムツドに即座に応急処置を施したクロノだ。

デイルムツドが砂漠へ転送した直後に、本局の転送システムもエラーを起こし、交戦現場への転送が不可能になってしまったらしい。

本局は勿論、駐屯所の機材も管理局で使っている最新の物なのだが、それが警報も防壁も素通りでやられたらしい。

過去の英雄であるデイルムツドだが、聖杯戦争時に呼ばれた際に与えられた現代の知識のおかげで、性能差はあれどそういった物の仕組みは把握している。

なのでそれがどれ程異常な事態であった事かは理解していた。

「それについても一考すべきではあるが……俺からも一つ言っておきたいことがある」

デイルムツドの言葉に全員の視線がこちらに集中する。

「俺が戦った相手……騎士ランスロットはおそらく狂化だけではなく、何らかの精神操作もしくは幻術系の魔術を掛けられている可能性がある」

その結論に至った理由となった戦闘中に感じた違和感を全員に説明する。

まずは白銀の鎖。あんな物は以前の聖杯戦争時には無かった。最初は狂化状態のランスロットを抑える物であると思っただが、破魔の紅薔薇によって鎖が破壊される事に、疑惑を抱いていった。

その確信を持ったのは四つ目の鎖を破壊してからだ。

「最初はただの憎悪の叫びかと思っただが……彼の主君、アルトリアの名と慟哭は、俺に向けられていた」

おそらくは全員ではなく、敵対する対象をアルトリアと認識していたのだろう。

もう気がついたのは、狂化がこの世界に来た時、一度解除されていた可能性だ。

そう思った理由は鎖が消失する事にランスロットの力が減衰し、言語能力の回復と動きに人間らしさが戻っていった点だ。

一度目の鎖を破壊で制御能力を破壊し、それ以降の破壊によって狂化ランクの低下を起こしていったとディルムツドは推測していた。

「勿論間違えている可能性もあるが……ランスロット卿は自分の意思で俺達に敵対しているのではないかもしれない」

「でもあくまで可能性でしょ？ 実際にはそうとは限らない訳だし……」

「確かにな。だが鎖を全て破壊する事で、やつの暴走を止める事ができるかもしれない。うまくいけば味方に引き込める可能性もあるぞ？」

その推測を聞いて全員が沈痛な面持ちになる中、冷静にそう聞き返してきたリーゼロッテに対して答える。

彼を捕える事の難しさは己が一番よくわかっている。本気で殺^とりに行かなければ次はこの程度の怪我では済まないかもしれない。

「まあ、本来のやつと騎士として手合わせしたいとも思っているがな」
ディルムツドは語り継がれる英雄であるが、本人は決してそのよう

な者を目指したのではない。

ただ無辜の民を守ることは当然と疑わず、真つ直ぐで高潔な精神を持っていた。彼にとつては当然の生き方をした結果である。

彼は英雄である以前に、ただ主君に殉じようとした騎士であり、強者との戦いに心躍らせる一介の武人だ。

最強の騎士にアルトリアの幻影としてではなく、デイルムツド・オダイナとして挑み、勝利したいと思うのは当然の感情であった。

「何よりも、かの者程の騎士をこのような事に利用する。というのが許せん」

彼の尊厳を踏みにじる行為を行う者も許せない。救い出し、騎士の誇りを穢す者を突き止めたいとも思っている。

己の手で制裁を与えたい気持ちもあるが、今は管理局にいる身である。それは局員がしかるべき措置を下すだろう。

「……なる程ね。それじゃあ私は海鳴市周辺を探ってみようかな。何かわかるかもしれないしね」

「頼む。リーゼロツテ、何か掴めたら連絡をくれ」

デイルムツドの答えを聞いて少し何かを思案していた様子のリ―ゼロツテだったが、納得したのだろう。

自身が散策を行う事を提案し、クロノがそれを了解した。簡単に見つかるとは思えないが、何らかの接触が行える可能性があるかもしれない。

「俺も別行動で探索に回ろう。それくらいしかできんからな」

アースラについても鍛錬か休養以外にすることは無いし、クロノの素早い処置で傷は塞がっているので、戦闘が起きても問題ない。

それならばここで何もしないよりも守護騎士達とランスロットの探索を行う方が有意義である。

(それに……彼女達に一度会いに行かねばならんしな)

手紙だけで一方的に別れることになったすずかに直接、今までのお礼と突如姿を消したことの謝罪もしなければならぬ。

それに、色々忙しかった事もあったが、あの時から会っていない少女もいる。

あれから連絡を一切取れなかったので忘れられているかもしれないが、一度会いに行ってもいいだろう。

「わかりました……それでは、これより少し早いですが、司令部をアースラに戻します」

リンデイがそう宣言し、それぞれが自身の役職に戻っていく。

詳しく聞いていないが、アースラは整備だけではなく、対闇の書の切り札となる装備を搭載していたらしい。

クロノはあまり使いたくは無いと言っていたので、おそらくは最悪の事態が起きた時の苦肉の策、といったものだろうとデイルムツドは考えていた。

「ところでランスロット……だっけ？ 調べたけどその人が仕えてた人ってアーサー王って男性なんだけど……」

「その人物であつてはいるが、騎士王は女性だ……真名はアルトリア。外見はエイミイと同じ歳ほどの清廉で麗しい女性であつたよ」

彼女との騎士道精神に則った胸躍る一騎打ちを思い出しながら、デイルムツドが答える。

最期は不本意な結末であつたが、また相見える事が叶うならば、今度こそは納得のいく決着を付けたいと、今は思えるようになった。

（デイルムツド君がそんな風に女の人を褒めるの初めて聞いたかも……）

話を黙って聞いていたなのははそう思った。

同時に彼の表情を見て、この事は絶対にフェイトに黙っておこうと密かに心に決めたのであつた。

そんなやり取りの後、会議は終了した。

早朝。八神家に帰還した守護騎士達は先ほど起きた予想外の事態と今後についての話し合いを行っていた。

バーサーカー……ランスロットが突如単独行動に走り、こちらの静止を無視して闇の中へと消えていったのだ。

シグナム達は知らぬ事だが、鎖が四つ破壊されたことによって、彼の狂化スキルはDまで低下していた。

Dランクであれば言語能力は不自由であるがある程度戻り、複雑な物は無理だが簡単な思考能力は取り戻す。

記憶の操作は解けていないとはいえ、自我をある程度取り戻したランスロットは闇の書との魔力パスを自ら切ってしまう、魔力の流れでは追跡できなくなってしまうている。

何を想ってそのような行動を取っているのか……それを知る者は彼以外にいない。

「これはある意味都合かもしれない。バーサーカー……ランスロットだったか。奴を捜索している事にすれば、我らが家を離れている理由にもなる」

ザフィーラがそう提案し、シグナムとシャマルも同意する。

ランスロットの不在を隠すよりも、突如行方を眩ませてしまった彼を捜索している事にした方が行動しやすいと考えたのだ。

魔力パス切断時に、蒐集した魔力を数ページ分ほど奪われてはいたが、ランスロットが回収した分を考えればそれほど問題となる量でもない。

デイルムツドの全力を遠見の魔法で見ているシャマルとしては、その彼と拮抗していたランスロットの離脱は痛い。

かといってランスロットを探す事に時間を掛けて蒐集が遅れては意味がないので、捜索とはやての護衛はシャマルが行い、残り三人は蒐集を継続する方針となった。

対応が決まった所で話し合われるのは、もう一つの懸念……彼らにランスロットを齎した仮面の男についてだ。

ランスロットを支配する強力な魔法と、鎖が破壊され暴走状態の彼

を魔方阵まで引きずり込む腕力。

そんな力を持つ人物が自分達に協力する理由が彼らにはわからない。

唯一接触してきたのはランスロットを連れて来た時だけで、後は戦闘中以外にこちらを援護してくるだけなのだ。

「あれだけの力を持つ者が何故、我らに手を貸すのか……」

「敵ではないと思うけど……」

考えられる理由としては完成した闇の書の力、もしくははその物を手に入れる。またはその力を利用して何かを為そうとしていると考えられる。

「……ありえんな」

そこまで考えたシグナムが自らの考えを否定する。闇の書の力を行使する事ができるのは、主であるはやてだけだからだ。

もしかすれば闇の書を得た主を捕え、傀儡にしようと企んでいるのかもしれないが、完成した闇の書の力を持つはやてに

、ランスロットを封じた鎖も洗脳のも効果は無いだろう。

もつとも、守護騎士達がいる以上、そう易々と手を出すことなどできなはずであるが、いずれにせよ仮面の男が動くのは闇の書が完成してからだろう。

「……ねえ」

不意にヴィータが呟いた。

闇の書の主は大いなる力を得る。それは守護騎士であるヴィータ達が誰よりも『理解』している事だ。

だが彼女は……彼女だけが胸に違和感を抱いていた。思い出さなければならぬ、何か大事なことを忘れている……そんな違和感を。

それを他の三人に伝えようとしたが、二階からの聞こえてきた大きな音によって中断された。

守護騎士全員が居間にいて、ランスロットが不在の現在、二階にいるのはこの家でただ一人しかない。

「はやてっ!!」

ヴィータが真っ先に駆け出し、残りの三人もその後続くように二

階のはやての部屋に向かう。

たどり着いた四人がそこで見たものは、倒れた車椅子と床にうずくまり、苦しげな表情を浮かべるはやての姿だった。

はやてが病院に搬送された頃、アースラではデイルムツド、クロノ、リーゼロッテ、エイミイの四人と、闇の書について探っていたユーノとリーゼアリアと通信をおこなっていた。

デイルムツドも先ほどまでフェイトの傍にいたのだが、容態の安定を確認できたので、交代に来たリンデイと頑としてその場から動かないアルフに看病を任せてこちらに来た。

現在ユーノ達がいる場所は無限書庫と呼ばれる場所で、管理世界の書籍やデータが全て収められた超巨大データベースである。

探せば見つからない情報は無いと言われる程の膨大な資料がここにはあるそうだ。

もつとも整理されていないせいで、探す事その事が非常に困難であるのだが。

「夜天の魔導書？」

それが闇の書のかつての……本来の名だそうだ。

現在の闇の書は蒐集を行わなければ所有者の魔力を侵食し、完成すれば持ち主の魔力を際限なく使って、差別破壊のために命を奪い、無理に外部から改変を加えれば、主を喰らって転生し、新しい主の元に現れてしまう。

そんなとりに憑かれた時点でどう足掻いても救いがなく、おまけに破壊不可能という非常に悪質な物になっているが、元々はそのような物ではなかったらしい。

本来の夜天の魔導書は、主と共に旅をして、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、その研究成果を次代に伝えるという非常に健全な存在であったのだが、歴代の主がプログラムを何度も改竄した結果、現在

の姿になったそうだ。

「デイルムツドの槍で闇の書のシステムその物を破壊できないのか？」

「破魔の紅薔薇は過去に交わされた契約や呪いを覆す事はできない。ジユエルシードに効果があったのは、あくまで『発動中』であったからだろう」

「主のリンカーコアを直接槍で突き刺して破壊するってのは？」

『蒐集不可のダメージを負ったと認識して転移するだけだと思うわ』

「以前にクロノには言ったが、そんな事は最初からするつもりは無い」
闇の書に有効な破魔の紅薔薇ではダメージを与え過ぎてしまい、必滅の黄薔薇は無生物にダメージを与えられないので無意味。

「純粋な攻撃力しか持たない大なる激情と小なる激情では解決策にはならない。」

「ダメじゃん君」

「否定はせんが、俺の武器は対人宝具。人外相手では限界はあるさ」

「デイルムツドの宝具は圧倒的破壊力を持たない代わりに、同じ相手と長期に渡って戦うことに長けるといいう代物だ。」

「白兵戦であれば、相手が強力な魔装備を持った集団であっても、ファイオナ騎士団でも上位の実力を誇っていたデイルムツドが、簡単に遅れを取ることは無いだろう。」

「しかし、大規模な魔術を行使された場合や、間合いを詰められない距離からの攻撃には対処できない。」

「実際に聖杯戦争時には大型海魔相手にはデイルムツドは決定打を与えることができず、アルトリアとイスカンドルの戦いを見ていることしかできなかつた。」

「英霊の中に一人くらいは、『あらゆる魔術を初期化する宝具』などを所持する者も存在するだろうが、残念ながらデイルムツドはそのような物を持っていない。」

「数多の英霊の中では、有用なスキルが心眼と何故か固有スキルに組み込まれた対魔力のみのデイルムツドは平凡な方だろう。……もつとも、通常の人間からすればスキルと宝具を有しているだけでも十分」

に強力であるのだが。

「闇の書自体に関してはどうする事もできんが、守護騎士や現界している他のサーヴァントに対してならば対処は可能だ。俺はそちらに専念しよう」

「私とアリアも交代で見回りしてみるよ」

「なら、デイルムツドはなのは達の護衛を兼ねて二人の家の周辺の警戒を。ロツテ達はそれ以外の箇所を頼む」

クロノがデイルムツドとリーゼロツテにそう指示を出し、二人と画面の中のリーゼアリアが了解の意思を頷いて示した。

「イスカンドルとランスロットを発見しても交戦はするな。必ずアースラか俺に伝えろ」

「大丈夫だよ。私もロツテも強いし、切り札があるからね」

転送ゲートに共に向かうリーゼロツテに忠告するが、『切り札』とやらに相当自信があるのかサラリと流す。

いくら霊体で無くなった事で物理的なダメージも受けるようになったとはいえ、相手は英霊である。

今この身体は常に神秘の加護で守られており、生半可な通常攻撃では傷を負わせることはできないのだ。

「ま、危なくなったらすぐに逃げるから大丈夫だよ」

「……承知した」

引き際を見極める力はあるだろうし、英霊は強大だが無敵ではない。

切り札が何かはわからないが、撃破はできなくとも撤退させる事も不可能とは言い切れない。

そして二人が転送ゲートに入ると身体が光に包まれ、海鳴の別々の地点に転送されていった。

解き放たれし湖光

——『十二月十三日』——

砂漠での守護騎士達との戦いの翌日。

目覚めたフェイトは、なのはの時と同じように魔法はしばらく使えないが、日常生活を送るには問題がないと診断された。

フェイトが復帰するまでは、増員した武装局員による周囲の散策と情報の収集を行う事となったので、指示があるまではなのはと共に日常生活を送る事になったのだ。

「入院？ はやてちゃんか？」

私立聖祥大学付属小学校。

登校したなのはとフェイトとアリサは、友人であるすずかの友人が入院した事を聞き、心配になった。

三人とも、すずかが図書館で知り合ったという、同い年の少女の話は度々聞かされており、いつか紹介してくれるとも言われて、楽しみにしていたのだ。

「そんなに具合は悪くないそうなんだけど、検査とか色々あるって……」

すずかに入院の話が伝えられたのは昨日の夕方であった。

今度のはやての家に泊まろうという話をしていた矢先の事であつたらしい。

「だったら放課後にお見舞いにいきましようか！」

そんなすずかの様子を見たアリサがそう提案し、なのはとフェイトも頷いた。彼女達からすれば、友人の友人は自分達の友人なのである。

「高町さん、テストロッタさん。ちよつといいかな？」

そんな話をしていると、クラスメイトの男子に声をかけられた。校門の所で、背の高い少年が二人に用事があるという人がいるという事だった。

授業開始まで十五分前。いったい誰だろうと、二人が窓から校門を覗き………全力で駆け出した。すずかとアリサも慌ててそれに続く。

廊下に出ると同じように校門に向かっていている女子の集団があった。先程見た校門の様子と合わせると、おそらくは学校中の女子が終結しつつあるだろう。

真っ先に飛び出して真っ先に失速したなのは三人が合わせながら校門にたどり着くと

デイルムツド・オディナがその美貌を隠す事なく、校門に背を預けながらこちらを見ていた。

「二人とも、わざわざ呼び出して済まなかったな……すずかも久しいな」

「おつ……お久しぶりです」

「黙って出て行ってすまなかったな。改めて謝罪させてもらいたい」

「い……いえ！　なのはちゃんからお話は聞いてましたし……！　それにお手紙も……！」

まさかここに現れると思わなかった人物の登場に固まる二人を他所に、デイルムツドとすずかが親しげに話していた。

蚊帳の外であったアリサは最初は突如現れた現れた美少年を見つめていたが、すずかのその様子を見てここ数日前からすずかが妙になった原因だと察した。

『デイルムツド君、外に出てきても大丈夫なの？』

『周りが凄い事になってるけど……』

アリサも交え、朗らかに談笑しているデイルムツドに二人が念話を送る。

魔術の心得が無かった彼はデバイスがないと遠距離の念話ができない。

聖杯戦争の時はマスターと魔力パスがあったので問題なくできたが、基本的には視認した対象としかできない。

『簡易封印は掛けてある。殆ど魅了の影響はない……はずなのだがな』

周囲の様子にデイルムツドが苦笑する。

どう考えても殆ど彼自身の魅力が原因なのだが、相変わらずそこに思考が到達していないようだった。

「クロノからこれを渡されたのだが……使い方が分からんのだ」
「さすがとの会話を切り上げ、デイルムツドが取り出したのは携帯電話だった。」

デイルムツドが聖杯から与えられた現代知識は、この世界の物から比べると十年も昔の物である。

当時一般に普及していた携帯は画面は白黒、スペックも電話とメールができればいい程度の物で、今デイルムツドが持っているものとは比べ物にならない。

老人向けの携帯ならともかく最新型の携帯など渡されても使えるわけが無い。

おまけに完璧なクロノにしては珍しく携帯の電話帳は白紙。デバイスの改良が終わるまでの間、連絡を取るためにと渡された道具はただの四角い箱である。

（まあ、いざ使おうとした瞬間にこの状態に気が付いた俺にも問題があったがな……）

昨日出発する前にリーゼロッテと話していたのもあり、携帯電話を渡されたことをすっかり忘れていたのだ。

デイルムツドの服にはポケットが付いていないので、腰のベルトに付いている小物入れに携帯を入れていた事も忘れていた原因であったりする。

連絡が取れないと色々困る事が多い。そう考えたデイルムツドは、目覚めてからすぐに二人を探しに行った。

二人が通っている学校の名前は知っていたので、同じ制服の生徒を姿を辿って校門で着いたデイルムツドは、通りがかった少年に、二人の名前とクラスを告げて伝言を頼んだのであった。

「そこの君！ 何してるの?! どの学校の子ですか?!」

そんな訳で二人に電話番号を登録してもらい、さすがとアリサも連絡先を教えようとした矢先、騒ぎに気がついた教師がこちらに向かっ

て来た。

デイルムツドがなのは達と比べて背は高いとはいえ、あくまで外見は子供。事情を知らない者からすれば、本来学校に通っているはずの年齢にしか見えないのだ。

加えて彼の着ている服はサイズは違えど、聖杯戦争でも着用していた深緑の戦闘服。

そんな時代錯誤な服の少年が、自分の学校の生徒とホームルーム前に校門で親しげに話をしているのだ。教師としては無視する訳にはいかないだろう。

「屋敷で特別に教師を付けて貰っていたので学び舎には通っておりません。フェイトとは親戚でして、彼女を介してなのは縁を持ちました。昨日こちらに着いたのですが、連絡先が登録できておらず取れなかったのです。故に無礼とは思いましたが、学び舎に二人の連絡先を問いに参りました」

「そ……そうですか」

爽やかな笑顔でリンデイから与えられた『設定』をスラスラと答えるデイルムツド。

二人の関係以外はそれ程大きな嘘を吐いている訳ではない。

それでも嘘を嫌うデイルムツドとしてはそれでもかなり心苦しい物であったが、リンデイに『地上ではこのように振舞って』と言われ、てしまえば、断る事はできなかつた。

「それでは皆、これにて俺は失礼する」

「あ、うん。また後でね」

これ以上ここにいてもゆっくり話す余裕は取れないだろう。目的は達したので、探索に戻ることにした。

『何かあればこちらから連絡を取る。それまではゆっくり過ごせ』

頑張っていたのだから、二人には子供らしく過ぐしてもらいたい。そう思って二人に念話を送って背を向けた。

デイルムツドが離れていくたびに周辺でその様子を見守っていたギャラリーがモーゼのように道が割れていくのはかなり壮観であった。

「あ。デイルムツド君もはやてちゃんのお見舞いに誘えばよかった……」
デイルムツドの姿が見えなくなった頃、ポツリとすすかが呟いたのだった。

——『十二月十四日』——

深夜、人の気配の無い暗い森の中、そこに漆黒の鎧を纏った騎士……ランスロットの姿があった。彼は己の宝具によってその力と存在感を覆い隠し、ただ静かにそこに佇んでいる。

いくら優れた武人であろうと、純粋な気配察知能力では、彼の存在を捉えることはできないだろう。

「見つけたぞ」

魔法を使っても見つける事が困難である程、極限まで気配を消していたランスロットの元に、一人の人物が姿を現した。

仮面の男。デイルムツド達の妨害をし、闇の書の完成の協力していた、今の彼を見つけ出す力を持った人物だ。

「守護騎士の元から姿を消し、このような所に身を潜めていたとは——」

闇と一体化していた彼を回収しようと近寄った仮面の男が異常に気が付いた。

彼の姿が完全に闇と溶け込んでいるという事の違和感に。それはランスロットの姿が完全な漆黒に包まれているという事を意味する。

「貴様——ッ!!」

それは、白銀の呪縛を完全に振り払った証明であった。その事実が気が付いた仮面の男の反応は早かった。

ゆらりと立ち上がるランスロットの左手に変貌した鉄パイプを握っている事に気が付き、それが振るわれる前にと彼に向けてその手

に表出させた物を投擲した。

仮面の男が放ったのは白銀の鎖。

ディルムツドに破壊されるまで彼を完全に支配し、制御下に置いていた、強力な術式により具現化させた実体を持った鎖だ。

実体を持っているので、純粋な魔力だけでは引き千切る事は困難で、対魔力と相当の筋力が無ければ容易に破ることができないという特性を持っており理性を奪い、支配下に置くという性質と相まって悪質で強力な代物である。

回避できない距離で対象に向けて放たれば、普通は対処する事はできない。

そう、普通であれば――

ランスロットは至近距離で放たれた鎖を、防ぐ事も避ける事もせず、ただ右腕に飛んできたその鎖をそのまま右手で掴んだ。

「なんだとっ?！」

その瞬間、驚愕する仮面の男の前でまばゆい輝きを放っていた白銀の鎖が、禍々しい黒に豹変し、真紅の紋様がその表面を走った。

仮面の男はランスロットの過去を見た時、致命的な誤解をしていた。彼の能力を武器を強化する物だと考えていたのだ。

それは間違いではないが、ランスロットの能力の本質ではない。その真価は彼の真名を看破したディルムツドも気が付いていないものであった。

ランスロットの伝承が具現化した宝具『騎士は徒手にて死せず』^{ナイト・オブ・オーナー}その本当の能力は、彼が武器と認識できるものを己の支配下に置き、宝具へと変化させるというものだ。

どのような物であっても武器として扱えるのであれば、性能の差はあれど、英霊の持つ切り札である宝具へと変質する。

その左手に握られていた鉄パイプは、並みのデバイスであれば容易く破壊できる凶器となり、彼に向けられていた白銀の鎖は、彼に仇なす愚者を捕える楔へと変貌していた。

ランスロットが宝具となった鎖を振るうと、蛇のようにしなりながら仮面の男を捕えて引き寄せ、その勢いのままに突き出された鉄パイプが障壁を強引に抉り、仮面の男の腹部を貫く。

「ぐっ……ああ……!!」

焼けるような痛みが仮面の男を襲う。

鎖を力で引き千切ろうとするが、Dランク相当の宝具へと変貌した鎖は、筋力だけでは破壊不可能な強固な代物に変化しており、同様の神秘を有する宝具か、魔力を込めた攻撃……もしくは魔術を無効化する破魔の紅薔薇でなければ破ることはできないだろう。

その為、魔法が不得手な仮面の男ではここから抜け出すことはできない。

鎖によって思考を狂気に蝕まれていく苦痛に、仮面の男の施していた術が解かれ、その姿が揺らぎ、変化した。

「やはりあの姿は仮初めの物であったか……」

鎖に囚われ、苦痛の声を上げながら地面に蹲っている女性に対し、頭上から声が掛けられる。

深い悲しみを漂わせたような声……それは彼女が記憶を覗いた時にも殆ど聞く事がなかったランスロットの声であった。

「なんで……鎖が……」

「闇の書の手を使わせてもらった。ランサー殿が鎖をあそこまで破壊してくれなければ、今も囚われたままであったであろうが……貴様に問う事がある。何故、あの魔導書の完成を目論む？ 貴様の……貴様達の目的を答えてもらおう」

圧倒的。二人の実力差を表す言葉にこれ以上ふさわしい言葉は無いだろう。

彼女も戦いに関しては自身を持っていた。

それは驕りでも何でもない。事実、接近戦に関してだけならば、彼女に勝る物は管理局でも少ないだろう。おそらく並みの局員が相手であれば勝負にならないはずだ。

——まさに今のよう追従を許さない戦いになるはずであ

る

「くっ……い！」

支配する者とされる者は完全に逆転した。

ランスロットを操る手綱となっていた鎖は、支配者であった彼女を封じ込める堅牢な檻と反転した。

もし彼の事情を知らぬ者がこの光景を見ていたのならば、その姿は主に対する『裏切り』を行っているように見えるのではないだろうか。見えない筈の漆黒の兜の中の目と視線があつた気がしたその瞬間、彼女の持つ獣の本能が警鐘を激しく鳴らす。答えなければ……いや、抵抗すればその次の瞬間には自身の命は潰えると。

恐怖はある。しかしそれは自身が死ぬ事ではない。自身の死ねば『主』と共にここまで覚悟を決めて推し進めてきた計画が、破綻してしまふ可能性に対してであつた。

ここで沈黙し、死を受け入れた後、自身の死の原因から主の計画にたどり着き、阻止されてしまふかも恐れがあつた。

彼女が死ねば彼女の弟子は間違いなく動くだろう。そして聡明な『彼』ならば自身の正体に気付き、主に辿り着くかもしれない。

可能性はゼロに近いがゼロではない。

だから彼女はランスロットに対し、その目的を話した。

苦渋の決断であつたが、自身の死が原因で阻止されるなど、断じてあつてはならなかつたから。

「そうか……。ところで貴様の治癒の魔術で自身の負傷を治す事は可能であろうか？」

「？……」応ね。この程度の負傷なら治せるレベルは使えるよ」

全てを語り終えた時、ランスロットが言ったのは哄笑でも憐憫の言葉でもなかつた。

それを訝しげに思いながらも彼女がそう答えると、彼が鎖の呪縛を解き、同時に左腕の鎧が霧のように消失する。

「ならば魔力を譲渡する。それで傷を癒せ」

そう言うのと、露わとなつたランスロットの左手の薬指に付けられた

指輪が、魔力帯びた光を発し、それが彼女の中に流れ込んでいった。

そして、彼が左腕を下げると、臓器を傷つけない絶妙な部分に刺さっていた鉄パイプが、引き抜かれ痛みと出血が襲ってきたが、即座に渡された魔力で傷を塞ぐ。

「……どういふつもり？」

「まずは謝罪をさせていたただきたい。情報を聞き出す為とはいえ、女性に手傷を負わせるなど騎士道に反する真似をした事を」

その姿は先程までの威圧感を放っていた人物とは同一とは思えない程に穏やかである。

そして膝を付き、最強の騎士が深く頭を垂れる。その様子は演技でも無く、本心からの謝罪であった。

「……恨んでいないの？ 私達を……」

「貴方は私の過去を見たのであろう？ 己を保つ為に王を恨んだ愚かな過去を。そんな我がこれ以上他者を恨む事など、許されるはずはない」

生前の彼が本当に憎んでいたのは王ではない。親愛なる王を裏切り、守るべき主君を死へ追いやった己自身である。

「これはその裁きの一つであったのだろう。故に少女よ。我は貴様を恨む事はない。だが――」

記憶を操作されていた事で忘れていた聖杯戦争での己の最期。それを思い出した事でランスロットの心は救済された。

彼の悲願であった王の手に掛けられるという望んだ結末を迎えたのだ。今の彼には憎しみは無い。それでも為すべき事だけは見つけた。

「新たななるマスターはやては我を受け入れた。切り捨てられて当然の我に守護騎士と同じように接した。

煉獄の業火に焼かれるべきこの身を、光の中に戻したのだ。故に我はその恩義に報いよう」

理性無き獣に堕ちても、彼女の暖かな想いはランスロットに届いていた。穢れ無き優しい少女が理不尽に殺されてしまうなど、あつてはならない。

「貴様達がマスターの命を奪うというならば我はそれを阻む。貴様達が再び我と刃を交えない選択を選ぶ事を祈ろう」

「……なんで主と守護騎士達から離れたの?」

「あの光の中に闇はいらぬ。只それだけの事である」

最後にそれだけ言うと言ノスロットは背を向けた。

デイルムツドと言ノスロット。

異なる時代に生まれ、異なる大地を駆け抜けた英雄は、共に騎士道に殉じ、愛と忠義の狭間に苦悩しながら生きた。

時空を超えてサーヴァントとして出会い、その果てにこの世界へと降り立った二人が、その心に抱いた想いは異なる物であった。

デイルムツドにとってこの世界への転生は、三度与えられた宿願を叶える好機であり、奇跡のような幸運であった。

だが宿願を果たし、狂気に駆られて多くの者を犠牲にした償いを望んでいた言ノスロットにとっては、この新たな生は苦痛でしかない。

言ノスロットが現れた場所が彼女の主の住まいの前でなければ、目覚めた直後に自刃していたはずである。そういう意味では彼女達は言ノスロットの命を救ったと言えるだろう。

——
価値なき命だが、せめて最期は主君を守ってから
迎えたい

それが王と同じ理想を抱きながらも、その理想に殉ずるにはあまりにも弱すぎた騎士が見出した命の使い方であった。

「ところで『この姿』は違和感はないだろうか?」

「なっ?!」

彼女は驚愕した。しかし、驚くのは無理はないだろう。

振り返った人物は言ノスロットではなく、平凡な日本人の青年の姿だったのだ。

先程までとは声も背丈も体格も全く異なっている。記憶の中の彼の姿は、彼女の主と同じ西洋系の顔であったはずだ。

『フォーサムワンス・ゲロウリー己が栄光のためでなく。これぞ我が宝具の真髄……本来の能力と

して使用したのはこれが初めてだがな」

姿を覆い隠す黒い魔力は彼の伝承が昇華した宝具の持つ力の副産物であり、その本当の力は、他者の姿への完全な変身能力である。

狂化によって真価を発揮できなかつたが、今のランスロットはその力を全力で発揮する事が可能になったのだ。

「我は常にその身を他者に変える事ができる……貴様達に我を追うことはできないだろう」

その姿のまま、ランスロットは再び暗い森の中へと姿を消したのであった。

英霊の力

——『十二月十五日』——

早朝。

真冬の薄暗い朝の森の中を、デイルムツドが歩を進めていた。

「ここか……」

その中の開けた場所で立ち止まる。そこには黒く変色した血の痕が残っていた。

デイルムツドの携帯に連絡が入ったのは二時間前。

クロノからリーゼロッテが『狂化状態の』ランスロットと遭遇し、交戦して負傷したという連絡が入ったのだ。

ある程度交戦した後に撤退し、すぐに治癒魔法を施したので大事には至らなかったそうだが、

腹部を刺し貫かれる重傷であったと聞かされている。

近接戦でリーゼロッテが敗れたという事実はアースラの面々には相当の驚きであったようで、

改めて元サーヴァント達の強さと、非殺傷設定を持たない者との戦いを改めて思い知らされる結果となった。

管理局で元サーヴァントとの戦闘経験があったのはデイルムツドと戦ったクロノだけ。

それもあの戦いでデイルムツドは本気で殺すつもりのない、あくまでフェイト達の離脱時間を稼ぐ為の戦いだっただけ。

理性を失って加減ができなかったとはいえ、元サーヴァントと本気の命のやり取りをしたのはリーゼロッテが初であろう。

「しかし……」

クロノからの連絡を受け、戦闘地点として送られてきた座標に付いたデイルムツドは周囲の光景にある疑問を抱いていた。

——綺麗過ぎる

それがここに来たデイルムツドが最初に抱いた感想だ。狂化したランスロットと交戦したとはとても思えない。

自身が戦端を開いたアルトリアとの交戦の際、理性ある二人の純粹な剣撃の余波だけでも、相当の破壊を周囲に振り撒いたというのに。仮に一方的な戦いであつたとしても、もつと大きな破壊痕があつてもいいはずだ。

だというのに、戦いの痕跡として残っているのはこの血痕だけ。本当に戦いがあつたのかも疑わしい。

「いや……」

そこまで考え、デイルムツドは自らの考えを否定する。

リーゼロツテが負傷しているのは事実だ。

そして何よりも、この場に残されていた物がランスロットと戦つた事の証明だろう。

——まるで墓標のように突き立てられている鉄パイプ

表面は血によって黒ずんだそれが、リーゼロツテに傷を負わせた物だ。打撃に使用されて傷を負わせたのならば理解できるが、彼女の傷は刺し傷。

ただの鉄パイプで——それも障壁を突破した上で身体を貫通させるなど、普通はありえない。

しかし、デイルムツドは知っている……いや——確信はなかったが、ランスロットの能力であればそれも可能であると気がついていたのだ。

ランスロットが掴んだ物が異常な程の耐久度を誇る事を。それが破魔の紅薔薇を受けるとその効力を失う事を。

あの時はイスカンドルの推測を信じきれていなかった所があった。しかし、彼の逸話を考えれば不思議なことではなかった。

「掴んだ物を宝具化する。それが奴の能力か……」

聖杯から与えられた時空を超えた知識によって、ランロットの逸話は記憶に在る。

彼の見せた力と逸話を照らし合わせ、デイルムツドはランスロットの能力を『正体の隠蔽』と『手にした物を宝具に変化させる』物だと推測した。

間違っているかも知れないが、正解を知っているのはランスロットだけである以上、正否を知ることにはできないので、思考を切り上げる。その瞬間、まるでタイミングを計っていたかのように携帯が鳴った。

「クロノか？」

『そうだが……さっきかけた電話番号は登録してないのか？』

「できる訳無いだろう。俺にできるのは、音が鳴ったら通話ボタンを押すことと、電話帳を開くことだけだ」

『老人かつ！』

「老けてはいないが、古い人間なものでな」

『……………そういえばそうだったな』

電話越しでクロノが頭を抱えている様子が浮かんだ。

こうしてデイルムツドが彼の様子を想像できるのも、クロノがデイルムツドを『英雄』だと意識しなくなったのも、あの半年前の出会いから積み上げてきた絆の賜物と言っていいたいだろう。

『それよりどうだった？ 現場の様子は』

「綺麗過ぎる。争った形跡が見えない。彼女が不意を突かれて一瞬で倒れたというなら、この状況もおかしくは無いが……」

『ロツテは“ある程度”戦ったと言った。……本当はすぐに倒されたが見栄を張って抵抗したという可能性もあるが……』

「狂化状態のランスロットの不意打ちを受けて離脱できるとは思えん」

現場の様子を確認してほしいというのは、クロノが直接デイルムツ

ドに依頼したことだった。

経験、実力、洞察力。戦いに関してであればアースラ内でデイルムツドに勝るものはいない。流石に策を講じる事はできないが、クロノが彼に望んだのは、戦士として戦場となった場所を見た場合の判断だ。

それだけならデイルムツド以外に適任はいないだろう。

「彼女を傷を負わせた得物は確認したし、血痕もある。ランスロットと遭遇したのは事実だろう。しかし……」

『現場の様子とロットの証言に矛盾がある……と』

「あくまで俺が見た限り。というだけだ。師を疑われて不快かもしれないが……」

『気にしないでくれ。頼んだのは僕だからな』

デイルムツドがこのように現場に来ていることはリーゼロッテどころか、リンデイも伝えられていないクロノ単独の判断である。

「何か気になることがあるのか？」

『……いや。今は何とも言えない。今は少し考えさせてもらってもいいだろうか』

『承知した。上官がそう言うならば俺は何も聞かぬさ』

リーゼロッテにクロノが何らかの疑いを持っているのは明らかだ。こうして現場の様子を見て、デイルムツドも彼女の証言に疑いを持つようになっていく。

しかし、現在は上官であるクロノが一応の主である。彼が考えたいというならば、己はそれに従うだけだと引き下がった。

『ところで、なのは達と合流しないのか？』

「つかの間の休息を邪魔するのは野暮というものだろうか？」

二人に電話番号を聞きに行った時、二人に自分の番号を伝えなかったのはわざとである。

せっかくの休暇なのだから、こちらを気にせずゆっくりと休んでもらいたいというデイルムツドなりの配慮だった。

警備の方もデイルムツドが周辺の散策に当たっている。それに加えてアースラが常に周辺を警戒し、武装局員数名が搜索兼護衛を行っ

ている。

少々プライバシー面に問題がある気もするが、安全は確保されていると言っている。

そういう訳で動きがあるまではあれ以上の接触を行うつもりは無かったのだが――

「なんだこの電子音は？」

通話を行っていた携帯から甲高い電子音が鳴り出したのだ。

『バッテリー切れだ！　なのはかフェイトのところへ行つて充電しろ！

君のデバイスももうす――』

クロノが何かを言い切る前に、携帯の電源が消えた。

こうなつてしまつてはただの箱である。充電方法はわからない上に、それに必要な道具がない。

合流する予定は無かつたが、二人の元へと向かわざるを得ない状況になつてしまつたのであつた。

「そういう訳でな。すまないが携帯の充電をさせてもらいたい」

「気を使うところを間違えてると思うの！」

帰宅途中の二人と合流し、事の顛末を伝えるとなのはが吼えた。

フェイトには伝えてあるようなのでなのはもすでに知っていると思うが、現在、周囲に護衛を行つている武装隊がいる事と、同時に守護騎士と闇の書の主の探索を行つていることを伝える。

余計な不安を与えないように、リーゼロッテの負傷とクロノの疑惑は伏せておいたが。

「だが残念ながら、探索の成果は上がらないだろう」

「？　どうして？」

確かに他の世界にも派遣しなければならぬので、全員で一箇所の探索に当たることはできない。

とはいえ、世界中を探すならばともかく海鳴市だけに絞れば、数日もあれば目標がいるかないかはわかるだろう。

「ハサンだ」

しかしそれは何の妨害も無い場合である。実際には複数のハサンの妨害によつて探索が満足に行えないのだ。

勿論、武装隊の中には一部のハサンと渡り合える者もいるが、相手は暗殺者である。任務達成を最上とする彼らは奇襲、だまし討ち、複数体同時の攻撃といった手段を選ばない戦法を使ってくる。

幸い、必殺の宝具を有していないので障壁やバリアジャケット超えてダメージを与えるとこはできないが、常にそれらを展開している訳には行かないだろう。

その上、こちらから仕掛けたくとも『気配遮断』スキルによつて隠れたハサンを捉えることは不可能である。

理由は不明だが、海鳴に現れる黒衣のハサンは全て霊体化できるのだ。

なので実際に搜索を行えるのは、全てのハサンが束になっても敵わないデイルムツドだけ。という事になってしまっている。

返り討ちになるとわかっているのか、ハサンは一体もデイルムツドの前に姿を現さない。

「そういう訳で周辺の探索は俺が行っている。奴らの気配は捉える事ができるのだが……転移魔法は厄介だな」

気配を察知して彼の強みである敏捷を駆使して駆けつけても、さすがに転移魔法を使用する守護騎士には間に合わないのだ。

「本当に私達こうしているのいいのかな……」

「そうは言ってもフェイトは本調子ではないだろう？　子供は遊ぶ事も仕事だと言うぞ？」

「デイルムツド、おじさんみたいだよ」

「古い人間だからな」

似たようなやり取りを今朝方クロノとした事を思い出し、ふと笑みが漏れる。

少年の物とは思えない大人びた笑みは、彼を見ていた通行人の心を

ドキリとさせた。

「ところでデイルムツド君って今はどこに住んでるの？」

なのは家が見えてきた時、ふと気になった事をなのはが尋ねた。あれからずかの家には行っていないようだし、代理本部であったフェイトの住んでいる部屋にも訪れていない。

「まさか……」

ふと、フェイトはある事を思い出した。半年前、自分達と出会う前にどのような経過していたか尋ねた時のデイルムツドの答えを。

「森の中だ。やはり自然の中は落ち着くな」

その時と全く同じ答えにフェイトが嘆息した。

実はフェイトは連絡の取れないデイルムツドの事が気になり、昨夜クロノと連絡を取った。

そしてその際に、転送前にそれなりのお金を渡して、ホテルにでも泊まるようにと伝えたので大丈夫だと、言われてたのだが、結果はご覧の通りである。

「……なんで森の中なの？」

「ホテルは合わん」

なのはの疑問にそれだけを答える。ホテルに泊まりたいという気にならないのだ。

その原因はケイネス、ソラウと共に宿にしていた冬木ハイアットホテルが丸ごと爆破された事にある。常ならばともかく、明確な敵対意思を持つ守護騎士や元サーヴァント三騎がいる状態では憚られた。

そんな事を話していると、彼女の前に到着する。

「フェイト。家の鍵を借りておいていいか？ 先に戻って充電というのをしておきたい」

歩きながらフェイトが今夜は高町家で夕食をとるといふ話を聞いていたので、先に戻る為に鍵を借りようと手を差し出す。

フェイトの家となっている元臨時本部には入ったこともあり、家で待っているアルフから操作の仕方を教わることもできるだろうと判断した。

「せっかくだからデイルムツド君と一緒にご飯食べない？」

「いや……俺は」

自身の忌まわしい呪いを考え、それを断ろうとした。なのはの家族とはいえ一般人だ。

その影響を受けたせいで家族に亀裂が走ってしまったらデイルムツドは生涯後悔する事になるだろう。

「大丈夫だよ」

デイルムツドの考えを察したなのはが自身満々にそう言っ彼を手を取る。いったいその根拠はどこから来るのだろうか。

「だって私の家族だもん！」

どれ程の強敵よりもデイルムツドが恐れる呪いを、なのはが大丈夫と断じた理由は、とても曖昧で……しかし強い。強固な家族の絆を信じる心だった。

そして、扉を開いてデイルムツドを引き入れた。

「お帰りなさいなのは。あら？」

娘の帰宅に母、桃子が出迎えると、彼女にその手を引かれているデイルムツドと眼が合った。

「お初にお目にかかる。俺の名はデイルムツド・オディナ。フェイトの従兄妹で、先日この地に参った」

「なのはの母、高町桃子です。よろしくねデイルムツド君」

挨拶したが、桃子の心が揺れた様子が全くない。

魔法によって抑えているとはいえ、呪いは常に存在している。魔力を持たない桃子に全く影響が出ない事は、嬉しい誤算とはいえ、デイルムツドとしては意外だった。

「君は……」

そんな事を思っていると桃子の後ろから青年が姿を現す。初めてなのはと出会った日に見た彼女の兄である。

「デイルムツド・オディナだ。以前は挨拶もせず去って申し訳ない」

「高町恭也。なのはの兄だ」

挨拶を返されるが、士郎の目には警戒する色が見て取れた。

おそらくはデイルムツドの筋肉の付き方や、纏う雰囲気ただの子供ではないと気が付いたのだろう。

「よろしく願う。恭也殿」

だがその様子にあえて気づかぬ振りをし、武人ではなく少年として応じる。

向こうは勝手に警戒しているようだが、こちらにその気はない。むしろなのはとフェイトの安全を守る為にいるのだから無駄な事である。

「ディルムツド君。少し話をしないか」

とはいえこちらがそう思っているとしても、相手もそう考えるとに限らない。

年不相応の強さと気配を持つ人物が大切な家族とその友人と行動している。恭也にとっては警戒する理由はそれで十分である。

「承知した。二人は待っていてくれ」

なのは達にそう告げると、ディルムツドは恭也の後を付いて行く。心配そうに見送る二人に念話で『妹が男を連れてきて心配しているだけだ』と告げると、その雰囲気や和らいだ。

勿論そんな易しいものではなく、完全に危険人物を見る目であったのだが、その本質を見抜く力がない二人を納得させるには十分な理由だった。

「君は何者だ。その強さ、とても子供の物とは思えない」

庭に着くと恭也が振り返り、問いかける。

「ただの一介の子供です。お二二共、そう警戒せずとも俺はなのは達に害を加える気はありません」

だから自身を見ている二人に対してそう答えを返した。

そうすると茂みに隠れていたもう一人の人物……高町士郎が姿を現した。

「……よく気が付いたね」

「偶然ですよ。三度目になりますが、ディルムツド・オディナと申します」

気配を消していた士郎の存在にあっさりと気が付いたディルムツドを二人はただの子供とは考えていない。

これほどの強者が『普通の子供』である自分達の家族に接触してく

る理由を問わなければならないと思っていた。

「ずいぶん余裕だな」

常人なら浴びるだけで震え上がらせる恭也と士郎の殺気を浴びながら、平然としているデイルムツドに、庭に置いてあった木刀の切っ先を向ける。

子供相手と二人は思っていない。目の前にいるのは異質な存在であると、最大限の警戒心を持っている。

「余裕も何も……脅威でもない者を恐れる必要があるか？」

先ほどまでの表面上の敬意を捨て、恭也の言葉にそう返した。

下手な問答を繰り返しても拉致が明かない。穏便に済ませたかったが、いくら言葉を並び立ててもこの状況は変わらないだろう。

「訳は話せんが……二人の日常に影響を及ぼさん程度に護衛もしている。実力が見たいのならば……全力で来い」

全て応えるのが一番の解決策に繋がると思うが、魔法の事や自身の存在などは話せない。

それに相手を丸め込むような話術も使える訳でもなく、状況を覆す知恵をひねり出す頭脳がある訳でもない。

力を示す。武人であるデイルムツドにとって一番得意な方法はそれに限る。デイルムツドがそう囁けると、恭也が一気に間合いを詰め、目にも止まらぬ速さで木刀を振った。

勿論、恭也に本気で当てるつもりはない。いくら力があるとしても相手は子供であるのだから傷付けるつもりなど毛頭ない。

だから直前で止めるつもりではあるが本気の斬撃を放つ。確かにデイルムツドは子供になった事で筋力が失われ、リーチも劣った。強みである俊敏性もこの至近距離で打ち込まれては生かせないし、宝具も展開していない。

「なっ?!」

「何を驚いている？ 殺す気で来ていないそんな斬撃が通る訳無いだろう」

だがそれだけだ。ただ強いだけの人間に負ける理由にはならない。デイルムツドはその場から動かず、左指ので木刀を掴み、受け止めた。

二人が強いのは知っているが、最初から命を奪う気もない上に、物が殺傷能力の低い木刀では警戒する必要は全くない。『脅威ではない』と言ったのはそういうことだ。

そのまま即座に反撃するのではなく、驚く恭也の思考が反射的に防御を行えるコンマ0.1秒待ってから、わき腹に向けて抉る様な蹴りを放つ。

「つぐ?!」

おかげでわき腹を守ることができたが、ガードの上からでも十分な衝撃を与えた。

「……五時間後に家の前にいるとフェイトに伝えてほしい。そちらはあまり談笑する気分ではないだろう」

吹き飛んだ恭也が体制を立て直すのを確認した後、デイルムツドは二人に背を向ける。

二人が人としてはかなりの強さを持っていたのを見抜いていた。流石にそれを制限がかかったままでは受け止められないと思っていたので、封印を解除して全力で迎え撃つたのだ。

封印が解かれた愛の黒子では流石に高町家に影響を与えないとは言いが切れない。

なので夜の帳が下りた暗闇に紛れ、デイルムツドは二人の前から姿を消したのだった。

この後、デイルムツドに何をしたのかなのはに言及され、二人が怒られたのは当然の結果だろう。

そしてデイルムツドの方は、フェイトの部屋にアルフがいる事を思い出し、彼女に扉を開けてもらって中で携帯を充電し、フェイトが戻る頃には再び姿を消したのであった。

悲劇の槍 前編

——12月18日——

高町家での騒動の後、一度アースラに戻り封印処置を施したディルムツドは散策を再開していた。しかし、武装隊を襲っていたザイードを破魔の紅薔薇で討ち取った事以外は成果を挙げられていない。

散り際に「今の私は滅びませぬぞお！」と叫んでいた事は気掛かりだったが、サーヴァントが消滅する時のように粒子になっていたので確実に倒したはずだろう。

そんなディルムツドの携帯電話にフェイトから電話があった。どうやらクロノに連絡して番号を聞いたらしい。

話したいことがあるから合流したいとの事だったので二人の気配を辿り、指定された場所、『翠屋』に着いた先で、一昨日出会い、一撃ぶつけ合った恭也と士郎もおり、出会い頭に謝罪された。

二人の行動がなのは達を心配してとの事だと理解していたディルムツドにそれを拒む理由は無く、それを受け入れる。

ただ、軽くあしらわれたのは悔しかったらしく、正式な試合を求められた。

「その挑戦、受けてたとう」

「ありがとう。・・・俺が勝てば君の正体を教えて貰えないか？」

「構わないが・・・それでは俺を知る事は叶わないぞ？」

「負ける気はないということか」

「初めから敗けを考えていたら勝てる戦いも勝てぬとは思わないか？」

「それもそうだな」

清い心を持つ相手ならば、武を交えた瞬間強敵（とも）となる。

拳を合わせる二人をなのはとフェイトは呆れた目で見ていた。

「さて、二人とも話とはなんだ？」

恋人と用事があるといつて出掛けていった恭也を見送り、デイルムツドが二人と向き合う。

「すずかちゃんから聞いたんだけど、デイルムツド君ってはやてちゃんの友達なの？」

「ああ。半年前に出会った」

予想外の名に驚きながらも、フェイトと別行動した際に出会った事を伝えた。

「今はやてちゃん、入院してるんだ」

「成る程。家に気配が無かったのはそれが理由か」

実は一度、三日前に彼女の家を尋ねたのだが、人の気配が無かったので探索に戻っていたのだ。

「これからすずかちゃんとアリサちゃんと一緒にお見舞いに行くんだけど、デイルムツド君も一緒に行かない？」

「是非同伴させてもらおう。頼る者もなく一人で病床に着いているのはつらいだろうからな」

半年前のはやての姿を思い浮かべながらその提案を受ける。

頼る者もなく一人で病と戦うのは幼い少女には辛いだろう。

「?はやてちゃんは一人じゃないよよ?」

「何?」

そう考えていたデイルムツドだったが、なのはの言葉に訝しげな表情を浮かべる。

「半年前の彼女は一人で過ごしていたはずだが?」

はやては家族は死んだと言っていた。それに以前はやての家で食事をした時、他の人間の生活感を感じなかった。

「遠い親戚の人が来てくれたんだって」

私達も詳しくは知らないけど。フェイトがデイルムツドの疑問に答えた。

唐突に現れた親族の存在に違和感を感じたが、彼女の事を深く知っている訳でない。

「まあ。孤独ではないならば別に良いさ」

己にはわからない事情があるのだろうとその違和感を忘れること

にした。

「じゃあすずかちゃんにメールするね」

ようやく再会の約束を果たせると、携帯を打つなのはの姿を見ながら少し感慨深い想いを感じていた。

もし未来を知っていれば……なのはの行動を止めていただろう。

しかしこの何気ない彼女の行動が事態を急転させるなど、誰も知るよしもない。

「でもデイルムツド。なんではやての事を気にしてたの？」

すずかからの連絡を待つ間に、そうフェイトが問いかける。デイルムツドは外見は少年だが本来の姿は歴戦の英雄である。

普通の少女であるはやてに対してここまで意識を向ける理由がわからないのだろう。

「印象深かったのさ」

それだけ答え、彼女に出会った時に感じた感覚については口をつぐむ。

デイルムツドとしては語るには曖昧で、あり得ない事だと思っ言わなかったただだが、なのはとフェイトは違う意味で捉え、なのはの意外そうに、フェイトは拗ねたような表情に変わる。

(我ながらおかしな感覚だな……)

二人が彼がはやてに恋愛感情を抱いているというところでもない誤解をしている事など気付かないデイルムツドはその時の感覚を思い出す。

八神はやてという少女が放つ、全てを包み込むようなオーラから『上に立つ者の資質』を感じたのだ。

異なる時代に生まれ、特殊な才覚を有していればもしかすれば王は無理でも団長のような立場に立つ事もあったかも知れないと。

「……それでも……俺の求める主君の姿ではないだろうか」

「え？」

「気にするな……只の独り言さ。それでなのはよ。はやての保護者は――」

連絡が帰ってきたか確認しようとしたデイルムツドだったが、脳に

響いた声によりそれは中断された。

「……すまない、二人共。どうやら見舞いに向かうのはまた今度になりそうだ」

「え？」

「ど……どうして？」

先程までの穏やかな気配は鳴りを潜め、鋭い戦意を現したデイルムツドに二人が問いかける。

「奴ら、俺に用事があるらしくてな。一人で来いとわざわざ念話で呼び出された。罨の可能性が高いが……無視する訳にはいかないだろう」

誰が。とは言わなかったが、二人はそれで彼を呼んだ人物達に気が付き、表情を引き締める。

「さて……このタイミングで俺を誘き出す理由はなんだ。……烈火の将よ」

唐突に気配を現した騎士のいる方角を眺めながら、デイルムツドはそう呟いた。

デイルムツドがシグナムの気配を察知する少し前、シャマルは自身の携帯に届いた連絡に動揺していた。

『デイルムツド・オデイナをはやての見舞いに連れていきたい』

そんな内容の文面がはやての友人であるすずかから来たのだ。

「ど……どうしよう」

五日前になのはとフェイトが見舞いに来ることになった際と全く同じように、焦っていた。

前回との違いは今後の動きを確認するために守護騎士全員が八神家を集結していた事だろう。

「会わせる訳にはいかんだろうな」

シグナムがはつきりと断じた。はやてにまた自分達の事を黙って

もらうにしても、二人と違い、デイルムツドならばその違和感を感じ取り、自分達に行き着く可能性が高いと考えたのだ。

他の守護騎士もそれには同意を示し、頷く。

「だがどうする？ 断る理由がない」

ザフィーラの言葉に三人が難しい表情を浮かべる。

デイルムツドがはやてと縁がない人物ならば「怪しい男を近付ける訳にはいかない」と言えたかもしれない。

しかし、二人は自分達よりも先に出会い、はやても会いたがっていた。はやてにデイルムツドの見舞いを拒否した事を伝えないように頼むのも手だが、なのはとフェイトの口を止める事は難しい。

「なら方法は一つしかねーだろ」

ヴィータが胸元にある待機状態の《グラーフアイゼン》を握りながら呟く。

会わせる訳にはいかないのであれば、会わさなければいい。

はやてに接触する前にデイルムツドを説得、もしくは撃破してしばらく動けない状態に持ち込む。

言うだけならば簡単だが、相手の実力を考えればかなり難しいだろう。

「奴が主はやての身を案じているならば仲間を引き込めるかもしれない」

闇の書を完成させなければはやては死ぬ。

それを理解してもらえばデイルムツドもこちらに協力してくれる可能性もあるとシグナムは考えていた。

彼が説得に応じ、味方に付いてくれるのが理想。しかし相手は管理局に属する身である。

いくら死者を出さないように努めているとはいえ、蒐集を受けた人間は無傷という訳ではない。

直接確認する事はできないが、リンカーコアに外部から凄まじい負荷を与えているのだ。後遺症が残った者も確実にいるだろう。

はやての命を救うためとは言え、真っ直ぐで背信行為を嫌う彼が、このような被害者を出す行動を黙認する可能性はあまりにも低い。

行動を封じる手としては結界に捕らえるか、外界に転移させるかの二つがある。殺害するという手段もあるが、それは自らに課した誓いによりできない。

「結界はすぐに察知される可能性が高い。故に奴を捕らえ、未開惑星に飛ばす手を使うぞ」

未開惑星とは言っても、食事に困らない自然豊かな場所に転移を行うつもりだ。

今回は緊急なのでこのような手段に出るが、心情的にははやての友人である彼にこのような事はしたくはない。

ただ現在の蒐集の速度を考えた場合、多少のズレがあつて遅れたとしても、クリスマスまでの夜までには闇の書を完成させる事ができるはずなのだ。

逆を言えば、まだそれまでは完成させる事ができないということである。

今管理局にはやての事がバレてしまえば、病院から動かさないはやてを守らなければならない。その状態の彼女を管理局から守りながら蒐集を行うのは不可能と断言していいだろう。

それに何よりも時間がない。

闇の書は刻一刻とはやての命を蝕んでいるのだ。守護騎士達にずっと隠し続けていた身体の痛みを誤魔化しきれなくなる程に。

「いくぞ……ディルムツドの場所に案内できるか」

将であるシグナムが立ち上がりながら誰もいないはずの空間に声をかける。すると空間が揺らぎ、そこに褐色の少女が姿を現した。

「はい。ご案内します」

ランスロットの離脱と共に守護騎士の協力者となったハサンの少女がシグナムの言葉に答えた。

何故彼女がここにいるのか……それはハサンが主であるジェイル・スカルエツティより受けた命令は闇の書の完成させる事であるからだ。

本来ハサンは彼女達と共に行動する予定ではなかった。イレギュラーたる元サーヴァントであるディルムツド、イスカンダ

ル、ランスロット……そして別世界にいるジルを監視し、主の望む流れに誘導する。

アサシンの本分であ『影』として徹するつもりであったのだ。管理局にデイルムツドと闇の書一派にランスロット。

どちらにも所属せず単独で動くイスカンドルとこの世界にいないジル。

数日前まで四体の英雄は見事にそれぞれ異なる立場にあつたので戦力が拮抗していたのだが、ランスロットが単独行動に移ったことで守護騎士の戦力が大幅に低下してしまった。

このままでは闇の書完成に影響が出ると判断したハサンはそれを補う為、彼女達の前に姿を現す事にした。

当然最初は警戒されたが、サーヴァントの正体と彼女らでは知りえない管理局内部の情報を教えることで協力者としての立場を認められる事となった。

(彼女達は四人で挑めばデイルムツド・オディナに勝てるかと踏んでいるようですが……さてどうなるでしょうね)

他のハサンの誘導でデイルムツドの元に向かった守護騎士の後姿を屋根の上から見つめながら、ハサンの本体である少女が内心で呟いた。

この世界に来たサーヴァント達は全員受肉を果たしている。つまりは霊体化を取ることができない。

それはハサンも同様のことである。それなのに他のハサンが霊体化を取ることができ理由は他のハサンという存在があくまでここにいる受肉している少女の姿をしたハサンの宝具という扱いだからである。

ザバーニャ
妄想幻像

生前の多重人格であった逸話を宝具化したこの能力は、最大八十体に自身を分割し、それぞれが単独行動をとることができる。

しかし、本来それはハサンが霊体であったから可能だっただけで、

本来は一つの肉体に複数の意志が宿るだけのはずであった。

なのに何故ハサンは群体をとることができるのか。それは受肉したハサンの少女を核とし、魔力によって自身の意識に肉体を与えているのだ。

原理としては闇の書の守護騎士システムに近い物があるだろう。

ただしあちらはそれぞれが一騎当千の強さを持つ故に四人しかないのに対し、こちらは個の力を薄めることで数を産み出しているという違いがあるが。

そしてこの力が宝具であるというのがこの世界での強みである。宝具の再生はハサンも有する。つまり人格が破壊されても再生するのだ。

つまり本体である少女が存命である限り、全てのハサンは蘇生する。

ザイドの人格がデイルムツドに殺害されても痛手ではないのはそんな理由があった。

「ランサーと守護騎士が接触したようだ」

しばらく守護騎士が向かった方角を眺めていた少女の背後に、ポニーテールのハサンが現れそう告げる。

「そう」

興味無さ気に少女が答えを返す。それも仕方がないかもしれない。彼女にとってはこの戦いでデイルムツドと守護騎士がどうなっても知ったことではない。

流石に守護騎士が全滅すれば、蒐集ができなくなってしまうのでそれは気にする点ではあるが、全滅するまで戦うことは無いだろう。

スカリエッティによって闇の書の真実を伝えられている少女にとって守護騎士の行動はあまりにも滑稽に見えていた。

主を守る為に命賭けの戦いをし、その行動が結果主を殺す。しかもそれを守護騎士は理解していない……いや理解できないのだ。

改竄されたプログラムによって守護騎士は、現在の闇の書のシステムに疑問を持たないらしい。

ある程度の違和感を認知できる事もあるそうだが、真相に辿り着く

事はできない哀れな道化として戦い、主を殺して消える宿命を持った存在なのだ。

「全く愚かで……くだらない存在ですね」

「命に執着するのは当然の反応だ。守護騎士は主を慕っている。ならばその命を守るために戦おうとするのは当然の感情と言っている。いいだろう」

生きようと足掻く者達に対し無感情にその行動を否定した少女にハサンの一人たる女性が答える。

「理解できません。これだけ人間がいるのですから少し減ったくらいで問題ないはずでしょう」

異常な精神を有するハサンの中において、最も異端な存在なのは他でもなくこの少女であった。

彼女は全てのハサンの中でもっとも普通の姿をとっていないながら、その心は誰よりも虚ろで感情と命の価値観が欠如して生まれてしまった誰よりも人間らしくない異常者であった。

その為ハサンの少女にとって生命とは無価値な存在であり、それに執着する事に意義を見出せないのだ。それは自身の命に対しても例外ではない。ただ命令を与えられて遂行できればそれでいい。仮にスカルエツティに死ねと命じられれば他のハサンが止めてでもそれを成し遂げるだろう。

勿論スカリエツティにそのような命を下すつもりはない。何故なら彼にとってハサンもまた娘の一人であるからだ。

だが心無い少女にそれを理解できない。主が自身に向ける者は使える者であるから目にかけて貰っている程度でしかないのである。

(この無意味な物語が終わる時に……私は心という物を理解できるのでしょうか?)

少女にとって今生きる理由は、かつてマスターのように『目的を見つけるのが目的』であるからだ。

ハサンはこの世界にいる元サーヴァント達の正体を伝えたが、意図的にある一点の情報だけを隠した。それは英雄達の必殺の切り札である宝具の存在だ。

「神秘と伝説が形を成した奇跡の宝物は、どれだけ不利な状況でも一撃で覆す力を持つ力を有している。」

守護騎士がデイルムツドに勝てるかと判断したのは、必殺の宝具の存在を知らなかった事が大きいだろう。その結果が何を引き起こし、どのような結果を迎えるのか……少女は知りたかった。

「どのような結末を迎えるのか。見届けさせていただきます」

少女は虚ろな眼で展開された結界を見つめながら、そう呟いたのだった。

悲劇の槍 中編

——12月18日——

なのはとフェイトと共にいる時に唐突に届いた念話。

それはアサシンの妨害もあり、今まで管理局が捕捉すらできなかった守護騎士達が『話し合い』をしたいと接触を望むものだった。

「そちらの望み通り、俺一人で来た訳だが……わざわざ俺を呼び出した理由を聞かせて貰おうか？」

シグナムから届いた念話の望み通り、単独で指定された場所……初めてシグナムと戦い、敗れた公園に到着したデイルムツドが目の前に立つ四人の騎士に向けて、問いかける。

話し合い、と言っても最初から穏便に済ませられるとは思っていない。

「やはり管理局員を呼んだか」

結界に接近する複数の気配を感知したシグナムがデイルムツドの問いとは異なる言葉を発する。

「純粋な試合が望みであったなら無粋な真似だとは思いますが……そうではないだろうか？」

一人で誘いに乗ったデイルムツドだが、けして無策で来たわけではない。

なのはとフェイトが結界外に待機し、アースラに連絡して周囲の武装隊がこの地に接近している。

念話を受けたデイルムツドは最初にクロノに連絡を取った。

囑託魔導師になったデイルムツドだが、フェイトと異なり、与えられた任務以外の独断行動を取る許可を与えられていない。

現在受けている任務は守護騎士の探索であり、発見後の行動も命令として新たに受けなければならない。

非常に面倒だが、これを破ると監督役であるクロノ達に影響が出

る。武装隊の何人かが監視を行っている以上、無視できないだろう。このような処置を与えられているのはデイルムツドに信頼が無いからではなく、彼の宝具を恐れているからである。

だから闇の書事件開始前に宝具を封じさせたし、解放後には監視を付けられた。

そういう理由でクロノに指示を仰いだ結果。相手の誘いに乗る事になった。

敵の狙いは読めないが、守護騎士を捕獲する機会を逃すわけには行かないので、この判断は打倒であろう。

闇の書の力なのか、外部とは連絡がとれないどころかなのは達が境界内に入れないという結果は少々予定外だが、その程度で動揺するほどデイルムツドは弱くない。

「デイルムツド。こちらの望みは一つだ。この戦いから手を引いて欲しい」

「貴様達が蒐集を止めるならばそれでも構わないがな」

シグナムの提案を斬り捨てる。闇の書が完成してしまえば、蒐集による被害者を越える惨劇が起きる可能性が大きい以上、当然の回答であった。

「それはできんな」

彼女達の答えも予想通り。このままでは交渉の余地は無いだろう。膠着した意見を動かすにはそれぞれが有する情報^{カード}を切る必要がある。

先に情報^{カード}を切ったのは守護騎士だった。

「我らが闇の書の完成を求めるのは主の意志ではない。むしろ主はそれを望んでいなかった」

「……リンカーコアの侵食か」

沈黙を破り、シグナムがそう言い、ユーノから聞かされた闇の書の特性を思い出す。一定期間の蒐集を行わなかった主を苦しめる呪縛。

主が完成を望まなくても苦痛から逃れるためには蒐集を行い闇の書を完成させなければならぬ。

ユーノの調べた情報によると過去の所有者全てが完成を望んだ訳ではないらしい。しかし、この呪縛によりそれは叶わなかった。

苦痛から逃れようとやむを得ず蒐集を決断した者も、最期まで苦痛に耐えようと足掻いた者も同じ結末を迎えてしまった。

以前に砂漠でアルフがザフィーラから聞いた話と今のシグナムの言葉を合わせて考えるならば、守護騎士達が主への負担を軽減するために独断で行うという、初めての事例なのだろう。

「貴様達の主の事情は理解した。だがそれで他者を苦しめる事を正当化することはできません」

主が守護騎士が蒐集を行っていることを知らないという事であるならば、無罪とは言えないが、情状酌量の余地はあるだろう。

しかし主を苦痛から解放する方法は闇の書の完成。破壊と悲しみを撒き散らし、その果てに待つのは同じ結末だ。

まずは闇の書の主を確保し、その上で救済の為の対策を模索しなければ同じ結果を繰り返すだけである。

完成してしまえばそれすら叶わない。闇の書に選ばれた不幸を憐れだと思ふし、守護騎士の心情も理解できなくはないが、それを許してやることはできない。

「……主は病室で痛みと戦いながらも我々を不安にさせまいと気丈に振る舞っておられる。まだ幼い彼女が苦しむ様をただ黙って見ておくなどできない」

「なん……だど?」

シグナムが決定的な言葉を告げ、流石のデイルムツドも動揺を隠せなかった。

病室と少女。そしてこのタイミングで守護騎士全員が接触してきた意味から真実に行き着いてしまった。

デイルムツドと病室の少女が接触する事を恐れたから……出会ってしまえば闇の書の主だと知られてしまうからであったと。

「はやてが……闇の書の主だと言うのか……!」

守護騎士は否定も肯定の言葉も口にしない。ただヴィータの肩が僅かに震えたのが全てだった。

「そうか……」

動揺してしまつたデイルムツドだったが、それも一瞬の事。一度目

を閉じ、数秒後にその目を開いた時、その瞳に揺らぎはなく、決意の焔が宿っていた。

「ならば尚更貴様らを止める必要があるな」

破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇を呼び出し、彼らを阻止する道を選ぶ。

助けてやりたいとは思う。知っている相手だからだけではない。目の前に不幸になりそうな罪なき者がいるならば無条件で救いの手を差し出したい。

偽善でもなく見返りを求める訳でもなく、ただデイルムツドが紛れもなく英雄であるが故にそう思うだけである。

「なんでだよー。お前はやての友達なんじゃねーのか?!」

ヴィータの叫びをただ真っ直ぐに受け止める。

もしも蒐集の果てに彼女に救いがあるのならば、それも一つの選択肢として考えたかもしれない。

例えばこれから先の蒐集対象を魔法生物だけに限定させるなど、犠牲を抑え、完成させる事も視野に入れてもいいだろう。

「ならばこそ。彼女を破滅に追い込むわけにはいかない」

しかし現実が違う。完成と共に迎えるのは絶望の未来。

——だからこそ違和感がある

闇の書が完成した結末を何度も見たはずの守護騎士が同じ悲劇を繰り返そうとしていることに。

(守護騎士は完成後の結末を知らない……?)

蒐集に影響が出ないように闇の書が記憶を消すのか、それとも闇の書の完成時に彼女達が存命していなかったのか。

その理由は不明だが、今の会話から彼女達が打算ではなく純粹にはやてを想って行動しているのは伝わった。

「貴様達に聞きたいことがある」

だからこそ問うておかなければならない。そして伝えなければならぬだろう。

「夜天の魔導書と言う名を覚えているか？」

本当の名とその生まれた理由。そして彼らの行っている事が悲劇しか生まないという悲しい真実を。

「夜天の魔導書だと？」

聞き覚えのない呼び一名にシグナムが訝しげに問いを返す。

ザフィーラとヴィーダも似たような反応を示す中、シヤマルだけはそれに反応することができなかった。

——アイツノ言葉ニ耳ヲ貸サナクテイイゼ

まるで深い闇のそこから何かが囁き掛けているかのような感覚がシヤマルを蝕んでいく。

ここに来るまではそのような事はなかったのに、デイルムツドと対峙した瞬間、その身に異変が起きたのだ。

それは感覚を失っていた左手からジワリと這いより、少しずつシヤマルの感覚と意思を侵食していくようであった。

「やはり記憶を失っているのか……それが闇の書の本当の名だ」

そう言つて夜天の魔導書が各地の偉大な魔導師の技術を集め、それを研究するために作られた収集蓄積型の巨大ストレージであった事、それが悪意ある物の手によって改竄された事で現在の闇の書になった事を告げる。

「そして闇の書の完成がもたらすのは絶対の力を与える物ではない。主を飲み込み暴走し、破壊を撒き散らしてから新たな主の元に転生する存在だ」

「そのような虚言で我らを惑わせる事ができると思っているのか」

デイルムツドの言葉をただの虚言と一蹴するシグナムとザフィー

ラ。ヴィータはその言葉に同様を見せるがそれを認めようとはしない。

思考能力を奪われていくシャマルもシグナムとザフィーラと同じ考えであった。

ハサンによりデイルムッドが異世界からこの世界にやってきた事は知らされている。闇の書と共にあった守護騎士とこの世界に現れたばかりの異世界の住人。

どちらの方が闇の書のことを理解しているかなど、明白だと思っ
ているからだ。

——— アアソウダ。 才前達ハ正シイ

自身を侵食している『純粋な悪意』もシャマルの意見を肯定する。

「ならば貴様達は歴代の闇の書の主の結末を覚えているのか？」

守護騎士の反応も予想通りであったのか、デイルムッドは冷静に守護騎士に問い続ける。

確かに歴代の主がどうなったのか……それをシャマル達は思い出
すことはできない。

しかし、彼女達の奥底にあるナニカが闇の書が完成する事で主が救
われると告げているのだ。

それが闇の書が守護騎士達に蒐集行為を肯定させ、潤滑に行わせる
為に無意識に働きかける悪意あるシステムであるとは気付かず、

彼女達はその意思を信じ、はやてを救う為に蒐集を行うとする。

「……過去は関係ない。我らは主はやてを救う為に闇の書を完成させ
なければならぬのだ」

「……そうだ！ アタシ達ははやてを助けなきやならねーんだ……過
去なんてどうだっていい！」

だからデイルムッドの言葉は彼らに届かない。その矛盾に薄々勘
付いていたヴィータさえも不自然な程に話題を逸らし、真実から眼を
背けてしまう。

不都合な真実を受け入れられないのではない。受け入れるという

事その物を拒絶してしまうのだ。

悪意のあるプログラムは、不都合な事実を告げようとするディルムツドを危険なウイルスとして消去させようと守護騎士の無意識に働きかける。

—— エエ。私達ハ正シイワ

『純粋な悪意』の声が少しずつ変化していく。ソレは彼女という殻を破り、この世界に現出しようとしているのだ。

彼女の意思の大半を既に蝕んでいるソレは、闇の書の悪意のプログラムを肯定し、シャマルを介してそれが正しい物であると守護騎士達に受け入れさせた。

それに気付くことはなく、あくまで自分達の意思だと疑うことも無く、三人がディルムツドを排除しようと襲い掛かる。

「ちっ！ やはり避けられないかっ！」

彼女達の中でそのような事象が起きている事など知らないディルムツドは、やむを得ず紅と黄の槍を持ってそれを迎え撃つ。

『シャマル！ 我々で奴を押さえ込む！ 今のうちに転移の準備をしろ！』

『……わかったワ』

ザフィーラの念話がシャマルへ届き、それに応えて術式の展開を行うと身体が動く。

操られているのではなく、『純粋な悪意』がシャマル自身に宿るだけであり、本物となんら変わらない偽者となるだけである。

故にこの行動は紛れも無くシャマル自身の意思であり、強制された訳でも意思を則られた訳でもない。

彼女が展開した術式は長距離転移魔法。少々時間と魔力が必要である難点があるが、転移の痕跡を完全に消し、現在守護騎士が展開した結界に重ねてかけられている管理局員が展開した結界を越えて指

定ポイントに飛ばすことができる。

闇の書が蒐集した管理局員の中で、転移魔法に優れた者と結界突破に優れた者の魔法を掛け合わせた代物だ。

術式発動までの十五分間という時間を稼ぐ為、守護騎士達は全力で攻撃を行う。しかし、戦いはデイルムツド優位に進んでいた。

——彼らの攻撃がデイルムツドに通らないのだ

一撃一撃が凄まじい破壊力を持ち、高い防御力を有するヴィータ。カートリッジシステム搭載前とは言えなのはの障壁を撃ち抜いたパワーは本物である。その威力ならば、障壁を展開できないデイルムツドを一撃死させることもできるだろう。

「くっ……当たたら……ねえ！」

ただしそれは当たればの話だ。

《グラーファイゼン》の加速を使えばデイルムツドのトップスピードに届くかもしれないが、小回りは比べ物にならず、一定の強さを越えた武人が当然のように有する能力である

『見切り』によってそれらを容易くかわしていく。

「うおおおおおっ!!」

ヴィータの鉄槌を風のように回避するデイルムツドへ、獣の咆哮を上げながら突撃してくるザフィーラの攻撃を、二槍を巧みに使いこなし牽制し攻撃を通さない。

槍と拳ではリーチの差が圧倒的に差がある。懐に入ればその差を一気に覆せるのだが、それを許す訳は無く、常にデイルムツド優位のリーチを維持している。

術式の展開を行っているシャマルは攻撃に参加する余裕は無く、仮にできたとしても一度蒐集行動を行ったデイルムツドにはリンカーコアの蒐集が行えないので決定的なダメージを与えることはできないだろう。

「レヴァンティーン！」

《Sturmwinde》

そうなると必然的に速度、射程共にバランスが良いシグナムがデイルムツドと直接渡り合うのに最も相性が良いと言えるだろう。

しかし相性が良いから勝てる訳ではない。

「疾風」の名を持つ具現化した炎を伴った斬撃がデイルムツドに向けて放たれるが、それを横に飛ぶ事で回避する。

反応速度に身体能力が追いつかず、炎が僅かに左腕を焼くがその痛みを強靱な精神はあっさりとは無視し、シグナムに向けて駆け距離を詰めて、強力な一撃を繰り出す。

デイルムツドの腹部ほどの高さへ横薙ぎに放たれた炎の斬撃。それを跳躍せずに横に走ってかわしたのは判断ミスではない。

三体一という変則戦闘の中で飛行能力どころか射撃攻撃や防御魔法を持たないデイルムツドか空中に身を晒すのはただの自殺行為ではないからだ。

だから攻撃を受ける可能性があっても地面から足を離さない方法を選択した。

この状況の中でも周囲の敵の位置を気配や殺気から正確に把握し、最適な手を選ぶ事でデイルムツドは守護騎士の猛攻を凌ぐ。

それだけでも驚異的な物であるが、それ以上に恐ろしいのは、彼はこの戦闘が始まってから一度たりとも彼らに刃を向けていない事である。

デイルムツドはシグナムへの攻撃だけではなくザフィーラの拳を防ぐ事も全て石突のみで行っていた。

「デイルムツド……貴様手を抜いているのか？」

「手加減はしていない。それでも全力で戦っているさ」

その天才的な技量への驚愕と、騎士として手を抜かれているという屈辱を言葉に込めてシグナムが問うが、それをデイルムツドはあっさり否定する。

デイルムツドは手を抜いている訳ではない。だが、本気を出すことのできないのも事実である。その理由は単純明快な物。

本気を出せば彼らを殺してしまうからだ。相手が敵ならば破魔の

紅薔薇と必滅の黄薔薇を容赦無く振るうのだが、守護騎士ははやての孤独を埋めた彼女にとつての大切な存在である。

故に本気を出せない。デイルムツドが本気を出すということは、彼らを殺すという事に他ならないからだ。

「素直に管理局に下れ。これ以上はこちらが持たない……俺を本気にさせないでくれ」

そういつてデイルムツドが逆手に持っていた槍をくるりと空中で回す。

それは切っ先が守護騎士に向けた事を意味する。これ以上向かってくるなら殺すしかないという意味の現れてもあつた。

これまでの攻防は実に僅か五分の出来事である。残り十分間殺意を持ったデイルムツドを抑える事は危険である。

撤退するべきか否か……その作戦の指揮を任されているのは参謀であるシャマルだ。残されたシャマル本来の意思が結界破壊と撤退の宣言を告げようとするが――

――叶エテヤルヨ。才前ノ願イ……「闇ノ書ノ完成」ヲ……

それは唐突に膨れ上がった『純粹な悪意』に飲み込まれたせいで叶わなかつた。

それは本当の願いではなく、手段であると否定する暇も無く、シャマルの意識はソレと一体化した。

「みんな。もう少しだけ抑えてちょうだい」

戦いの継続。デイルムツドの願いとは真逆の決断が守護騎士の一人から告げられた。

(素直に下がる気はない……か)

内心では好ましくない状況に苦い想いを抱いていたがそれを隠し、冷静な表情を保つ。

確かに殺すつもりで行くならばこの状況を突破する事は可能だ。
4つの宝具が揃い、身体能力の制限はない現在の状態であれば負ける気はしない。だが――

(俺も甘くなつたな……)

この状況にあってもデイルムツドは守護騎士を殺害するという選択肢を選ぶことを躊躇っていた。

それははやての為という事だけではない。管理局で過ごした穏やかな半年間がデイルムツド・オディナの牙を鈍らせてしまった。

(奴らに降る意思は無い。ならば降らざるを得ない状況に追い込めばいいだけだ！)

それを自覚していながらも殺害するという選択肢を自ら斬り捨て、再度デイルムツドに襲い掛かる守護騎士を迎え撃つ。

先程の戦いで守護騎士に与えたダメージと疲労はシャマルの回復魔法により消えている。

彼女達を殺せない以上どれだけダメージを与えても相手は回復してしまうので持久戦になれば回復手段がないこちらが負けるのは確実である。

ならば『回復させなければいい』だけの話であり、デイルムツドにはそれを可能とする手段がある。

それを為すための布石として敵の心理を誘導を行う必要がある。
まずは相手の心理に焦りを与える為、踏み込んで加速し、右手の紅槍をザフィーラに向けて突き出す。

「破魔の紅薔薇!!」

「むっ!?!」

即座に反応し、防御体制に入つて障壁を展開していたザフィーラの右腕に深紅の刃が沈み、鮮血を吹き上げる。

魔力攻撃での相殺や、武器で防いだ場合はその限りではないが、この世界の防御魔法は基本的にその場に留まった状態で発動する物だ。

故に防御に特化した者にとって破魔の紅薔薇は天敵となる。

障壁貫通は接近戦を主とする三名には驚異であり、特に武器を持たないザフィーラは攻撃射程の差も大きいので非常に不利になる。

「障壁を……！」

「守りに頼れば討たれると思えー！」

両槍による乱撃から紅槍による一撃を主体とした形に切り替える。

三人の攻撃を紙一重でかわしながら急所を避けつつも深手といって良いほどの一撃をそれぞれ何度も与え続ける。

回復魔法があるとはいえ限界はある。しかしそれは回復の担い手の魔力などではない。出血による肉体の限界である。

魔法プログラムである彼女達だが、その身体の構造が人と同じである以上、出血多量による意識の喪失は十分にあり得る。傷をいくら癒しても無尽蔵に血液を精製できるわけではない。

いくら傷を癒しても血がなくなれば生命活動は維持できない。

勿論闇の書の魔力を使えばその限りではないかも知れないが、彼女らとしてもそれは避けたいだろう。使われたらこの持久戦に勝てる見込みは尽きるので闇の書にその力がないのを祈るしかない。

退却が許されるのならばそうするのだが、この結界を抜けるのは不可能に近い。

しかし、敏捷性は緩急で誤魔化せても体力は誤魔化しが効かない。

145cmの身体で二メートルの紅槍と身の丈よりも少し長い黄槍を振り回しながら三人の猛攻をかわすのは、全盛期の肉体を失ったデイルムツドには相当の無茶である。

「くっ！」

それを異様に研ぎ澄ました感性で捌いてきたのだが、デバイスは通常武器や宝具と違い、形態変化で能力が大きく変わる。

突如蛇腹剣に変化したシグナムの《レヴァンティン》を現在の限界を超えた反応速度で回避したが、着地を狙ったザフィーラの打撃を回避しきれずガードしてしまった。

敏捷性においては守護騎士を上回るデイルムツドだが、現状の筋力はザフィーラに及ばない。それを正面から受ければ当然弾き飛ばされてしまい、完全に脚が止まってしまう。

《R a k e t e n f o r m.》

「でええやあつ!!」

その完全な無防備な状況を逃す守護騎士ではなく、一撃でデイルムツドを撃破できるヴィータの攻撃が迫る。

回避は不可能。両槍を交差させてガードを行えば槍ごと倒されるだけだろう。

そう判断したデイルムツドは賭けに出た。この状況を覆せる唯一の手にして使えるか不確かな手段。

使えなければ負け。しかしなにもしなければ倒されるのは確実にある以上使わない手はない。右手の紅槍を躊躇いなく手放し、その手に新たな武器を顕現させる。

自身の弱体化により封じられていた全てを一太刀の元に斬り伏せる宝具を。

その真名を叫び、その眠りを醒ます。

「大いなる激情!!」

デイルムツドの声に応えたのか、刀身に輝きが灯る。

真名解放によりその力を発揮するデイルムツドの剣の切っ先とヴィータの《グラーフアイゼン》の先端がぶつかり合う。

「なあ?!」

閃光と共に砕けたのは《グラーフアイゼン》。光彩を失いデイルムツドの手から弾かれる大いなる激情だったが、その刃に損傷は無い。

反発しあう衝撃に小柄なヴィータの身体が飛ばされるが、デイルムツドはありつたけの魔力を脚部に回してその場に踏み留まると、そこから強引に踏み込んでヴィータとの距離を詰める。ミシリと嫌な音が聞こえたがそれを無視して左手の槍を突き出した。

「必滅の……黄薔薇!!」

「うあつ!!」

黄色の刃がヴィータの右太股に吸い込まれた。そこは予め破魔の紅薔薇の力で破壊していたバリアジャケットの隙間――

「ヴィータ!!」

デバイスを砕かれたヴィータを援護しようとしてこちらに駆け寄ってくるシグナム。デルムツドが破魔の紅薔薇を手放した事で接近することに警戒が無くなったのだろう。

この瞬間こそデルムツドの狙っていた時。紅槍の強力な効果に気を取られ過ぎた彼女は生命に取って本当に恐ろしい存在は、その左手の黄槍である事にまだ気が付いていない。

小なる激情を開いた右手に呼び出してその攻撃を受け止めるのではなく、受け流す。加速をつけたまま攻撃を流されたシグナムはバランスを崩すがすぐに体制を立て直す。

普通なら隙にもならぬ刹那の時間。そこに生まれた僅かな身体の反応のズレは百戦錬磨の英霊にとっては十分に付け入る隙となる。

かつてのアルトリアと同じようにシグナムも迫りくる黄槍の刃に反応し、回避に移っていたが間に合わず、呪いの一撃が左腕を貫いた。

「——ようやく通したぞ……守護騎士よ」

シグナムが後退したタイミングを見計らい、小なる激情を虚空に戻し、その手から離れた破魔の紅薔薇と大いなる激情を回収し、再度紅槍を握り締めて高らかに宣言する。

戦闘開始から十三分。この瞬間追う者と追われる者の立場が一転したのだった。

悲劇の槍 後編

——12月18日——

「左手の筋をやられたか……。シヤマル、治してくれ」

戦闘開始十三分。後二分で転送術式が展開するという状況で、左手の自由を奪われたシグナムが治癒を頼む。

「うそ……。回復が効かない?!」

「なんだと?」

「んなつ?! どーいうことだよ!」

回復魔法を施そうとしたシヤマルが信じられないといった様子で眩き、負傷した二人が問い返す。

二人が動揺するのは当然だろう。魔力を使って止血はできてもその状態を維持するのに魔力を消費する上、肉体の損傷はそのままである。

シグナムは左腕で剣を強く握る事はできないし、ヴィータは左足の自由を失った状態なのだ。全快の状態で拮抗していたというのに、これでは戦力比が大きく崩れる事になるのだから。

「呪槍、必滅の黄薔薇。この槍で受けた傷は決して癒える事は無い」

対象的にその理由を知るディルムツドは冷静に告げる。必滅の黄薔薇は同じ相手と長期に渡って戦う場合に絶大な威力を發揮する呪いの槍。人間であれば一度食らうだけでも死に至る恐れのある非常に凶悪な宝具である。

「今すぐ結界を解除し、投降するなら呪いを解く」

それを解除するには担い手であるディルムツドの死亡か必滅の黄薔薇の破壊なのだが、それを教えてはならない。

簡単な話、それが知られば交渉の余地も無く、呪い解除の為にどちらかを狙うはずだからだ。

前者のデイルムツドの殺害は負けなければ回避できる。後者は黄槍を霊体に戻せば破壊されないかもしれないが、それができない事がこの半年間で判明している。

黄薔薇の呪いは傷を与えてから槍が現界している間という制約が存在していたのだ。

槍の性質を調べる為と管理局相手に一度黄槍を使わされた事があった。しかし霊体に戻した時、治癒力が大幅に落ちたままではあるのだが呪いが解除され、傷が癒えてしまえばその影響が完全に消えるという結果になったのだ。

原因はわからないが可能性として浮かぶ理由は、実体を損なった瞬間に槍と呪いを与えた相手との縁が途切れるからではないか。と実験を行った管理局の研究員が言っていた。

世界の抑止力か自身の身に起きた変化かはわからないが、自身の切り札に制約がかかるのは余り歓迎できない。

とはいえ文句を言ってもどうしようもない以上、そういうものだと受け入れなければならぬだろう。

それはともかくとして、その事実は口に出さなければ相手には伝わらない。守護騎士にとってはデイルムツドが呪いを解除する権限を持っており、自分達の明暗を握っていると思えないのだから。

予想通り彼女達は止血を施す事はできていた。魔法プログラムによる肉体はサーヴァントを構築していたエーテルと酷似しているのかもしれない。出血死の恐れが無いのならば問題なく、必滅の黄薔薇の呪いを盾に交渉する事ができる。

両者が対峙する事二分が経過した。その瞬間デイルムツドの身体を光が包み込む。

「転移?! くっ……最初からこれが狙いだっただか!」

背後でシャマルが術式を展開している事に気がついてはいたが、転移魔法であったとは予想していなかった。

それに気が付いたとしてももう遅い。対魔力Dに堕ちたこの身体はここまで強力な転移魔法に抵抗する術は無く、デイルムツドの身体は守護騎士と共に見知らぬ大地に飛ばされてしまった。

結果が解除されなのは達と武装局員が現場に辿り着いた時目にしたのは、凄まじい破壊の痕跡を残す無人の公園の姿であった。

ザファイラは最悪の状態に舌を打つ。

確かにデイルムツドを予定通り未開惑星に転移する事に成功はした。しかしその結果こちらが負った代償はあまりに大きい。

シグナムとヴィータが回復不能の傷を負わされ、戦闘行動を続行できない状態に追い込まれたのは戦いを始める前よりも厄介な状態といってもいい。

とはいえここまでの戦闘が無駄であったかといえばそうでもない。現状だけを見るならば確かにこちらが痛手を負ったように思える。しかしデイルムツドは守護騎士四人と拮抗する代償として、切り札である武器四つのうち三つの特性を晒した。

今回守護騎士が押されたのはデイルムツドの強さによるところだけではなく、彼の強力な武器の能力が殆ど初見であった事が一番である。黄槍の能力を知らなかったが故に紅槍を警戒し過ぎた事が今回の結果を招いたと言っている。

それを理解していたからこそデイルムツドは黄槍の能力を直前まで隠し、必殺の瞬間までそれを温存していた。

そうして守護騎士に最大の損失を与えることに成功したが、デイルムツドは情報というアドバンテージを殆ど失った上、ここまでの戦闘によるかなりの疲労、さらには先ほどのヴィータへの攻撃の反動によるダメージを負ったのか、左足を庇うような様子もあった。

『シグナムとヴィータは先に戻れ。私とシャルでどうにかする』

デイルムツドに伝わらないよう、念話で二人に呼びかける。負傷した二人では満足な戦闘は行えないだろう。ならば黄槍の呪いを受けていない自分と回復を施せるシャル二人で戦った方が良くと考え

た。

こう言った呪術の類を解除する方法は術者が自ら解除する以外に、術者の撃破か呪物の破壊が考えられる。

解除の条件である投降を受けるわけにはいかない以上、どちらかを実行する以外にはないだろう。

『大丈夫だ！ あたしはまだ戦える……！』

『無茶をするな……それに主の方も気がかりだ』

デイルムツドの阻止に成功したとはいえ見舞いになのはとフェイトが来るのだ。油断する訳にはいかない。目の前の男と一対一を行う危険性は十分に理解した上での判断だった。

『……すまない』

『……やられんじゃねーぞ！』

万全に戦えないことは怪我を負った本人が一番理解している。だから二人はザフィーラの言葉を受け入れ、転移魔法を使い地球へ帰還した。

「ただ俺を転移させたかった……という訳ではないだろうな……管理局の眼の届かぬ地に俺を隔離しようとしたのか？」

僅かに思案した後、デイルムツドはすぐに守護騎士達の狙いを看破した。肉体がダメージを負っていても思考に歪みは無い。

「流石というべきか。すぐ理解したか」

「だが必滅の黄薔薇の呪縛がある以上、引く訳には行かぬといったところか……こちらもこのような手は使いたくない。管理局に降ってはくれないか？」

「断る。我ら主の為にここで立ち止まる訳にはいかんのだ」

「はやての為に引け。貴様らが進んでいるのは破滅の道だ」

「それを我らが信じるか？」

相容れない二人。同じ者を想いながらも、それぞれが信じる物が異なる故にその道が交わることが無い。そして同時に飛び出し、互いに譲れない意思を賭けて蒼い拳と紅と黄の槍が交差する。

「改めて名乗らせて貰おう！ フィオナ騎士団の輝く貌のデイルムツド！ 民の為にこの勝負勝たせてもらう！」

「ヴォルケンリッター、盾の守護獣ザフィーラ！ 主の為にこの命を捧げる！」

互いが己の誇りと名を賭けてぶつかり合う。

「くっ！ 容易く攻めさせてはくれぬか……！」

攻撃を回避しながらザフィーラが呻いた。デイルムツドは迫り来る拳を驚異的な動体視力で見切り回避する。だが先ほどの戦闘で脚を負傷しているのもあり、スピードで翻弄するという得意戦術を封じられている。

その為その場に留まりながら二槍を操り、回避が難しい攻撃や懐に入られる瞬間だけバックステップして体制を立て直しながら追撃を行うというスタイルに切り替えている。

「そちらも決め手を入れさせてくれんな！」

ギリギリの勝負に高揚感を抱きながらデイルムツドが愉しげに笑いながら攻撃を繰り出す。

対するザフィーラは二槍の効果範囲が切っ先だけであるという事を見抜き、太刀打の部分を手甲で弾く事でダメージを防ぎながら黄槍の破壊を狙っていた。

とはいえ必滅の黄薔薇を一撃でも浴びればそれが決定的なダメージになる危険性を考え、迂闊な攻撃を行えない上に障壁無視の紅槍の警戒も同時に行っている為、決定打を打ち込めない。

「守護獣の誇りにかけて主の為に勝たねばならないのだ！」

「真の忠義が主君を殺すなどあってはならない！」

二人の騎士の戦いは熾烈を極める。

戦いの経験はザフィーラが上回るが、過去の記憶を継承していない事もあり、依然ダメージを負ったデイルムツドが優勢を保っている。

迂闊に手を出せばどう均衡が崩れるかわからないので、シヤマルは迂闊に手を出せず回復に専念しており、事実上一対一のまま戦いは続く。

しかしそれは唐突に終わりを迎える事となる。

(……覚悟を決めねばならぬ……か)

黄槍の破壊を狙いながら攻撃を行っていたザフィーラが内心で一

つの決意を決めた。

デイルムツドはこちらの狙いをわかっているのだろう。黄槍による攻撃を繰り返しながらもザファイラが破壊しようと僅かにでも動けばそれを見抜き、黄槍を引き、紅槍による攻撃を行ってそれをさせない。

黄槍の破壊を狙っていることに気が付きながらも先程の剣のように姿を消さない事から、それが呪いを継続させる条件である事もわかる。

とはいえザファイラの拳を何度も受けながらも砕けぬ紅槍の様子から、黄槍が生半可な攻撃では破壊できないことも理解に難くない。事実黄槍に何度か攻撃を撃ち込んだが、呪いの槍は傷一つ付かず、デイルムツドの手に握られている。

だがデイルムツドの破壊を警戒した様子からそれが破壊不可能な代物ではない事もまた事実なのだろう。

最大の一撃を打ち込む。それこそが簡潔にして唯一、ザファイラにできる破壊する手段。

それを成すにはこちらの間合いにデイルムツドを引き込まなければならぬが、それを許すほど彼は甘くはない。だが一つだけその距離に引き込む手段をザファイラは思い付いていた。

デイルムツドはこちらが回避せざるを得ない攻撃を繰り返す時がある。その一撃が向かうのは人体急所。受ければ回復しても助からない致命的な部分への刺突だ。

破魔の紅薔薇は障壁を貫くのでガードという選択肢は選べない。しかし攻撃を通せば命が危うい。つまりザファイラが回避する事を前提においた物だ。

回避不可能なタイミングでは決して放たない攻撃を撃つ理由は牽制と体勢を崩す事を狙った物。デイルムツドはザファイラが回避すると信じている。それはザファイラが死に怯えているからと考えての物では決していない。主の元に生きて帰るといふ守護騎士の決意を信じての行動だ。

それが唯一の打開点を生む。そしてザファイラは動いた。

仲間を生かす為に

(ちっ！ やはり殺さないというのは厳しいな……！)

ザフィーラの猛攻を凌ぎながら内心で呟く。生死を賭けた戦いは否応無くデイルムツドの闘争心を震わせ精神を高揚させるが、楽しんでばかりもられない。

殺意を込めた一撃を放ちつつも致命傷を与えないように立ち回るのはかなり困難を極める。殺さないというのは下手な戦いよりも難しいのだ。

実際、最初から殺すつもりでいたならば、誇張表現でも見栄でもなく転移魔法で飛ばされる前に戦いは終わっている。

すでに数え切れない程に殺す機会はあったのだ。それを理解し、こうなる事を覚悟した上で全て見逃した。

その場合は必滅の黄薔薇ではなく破魔の紅薔薇と大いなる激情の組み合わせが理想であり、黄槍を維持するという面倒を負う必要も無かったのにも関わらず。

「破魔の……！」

ザフィーラが黄槍を狙うモーションを見せたので、右手の紅槍の切っ先を相手の心臓に向ける。

回避しやすい一撃だが相手は回避せざるを得ない。神秘による特殊な守りか堅牢な城壁のごとく硬い鎧が無ければ止める事ができないからだ。

「紅薔薇!!」

それをわかっているからデイルムツドは大振りに必殺の攻撃を放

つ。真紅の刃がザフィーラの心臓を穿とうと伸びていき――

「ぶっ……!」

「なっ?!」

それをザフィーラは回避することなく受け入れ、それどころかそのまま心臓を穿った刃を無視して踏み込むとデイルムツドの懐まで潜り込むと黄槍を左手で掴み取る。

「――ようやく掴んだぞ……デイルムツド・オデйнаよっ!!」

「しまっ――」

そう叫ぶとザフィーラは己の命の力を込めた渾身の力を左手に込める。

――キインツ!!

美しい音色が周囲に響き渡り、呪いの黄槍が砕け散った。

「お前……!」

「槍の呪縛……断ち切らせて貰ったぞ……フィオナの騎士よ……」

どれ程の治癒魔法があっても、心臓を穿たれては回復は間に合わない。助からない致命傷を負ったザフィーラだが、その眼の光は消えていなかった。

「……その覚悟、見事であった。気高き盾の守護獣よ」

彼の覚悟を見誤った己の行動が引き起こした悲劇。だが仲間のために己の命を賭けたその高潔な魂にデイルムツドは敬意を払う。

そしてそれに応えようとザフィーラが口を開いた瞬間――彼の胸を何かが貫いた。

驚き、反射的に後ろに下がったデイルムツドが見たのが、ザフィーラの身体を貫き、その身からリンカーコアを抉り出した禍々しい生体装甲に包まれた左腕だった。

それはなんの慈悲もためらいも無く魔力を蒐集していき、リンカーコアの輝きを奪う。そして声を発することも無く……誇り高き獣はデイルムツドの前から姿を消した。

「蒐集完了。闇の書の完成に近づいたわね」

そしてデイルムツドの視線の先にはザファイラの命を喰らった腕の持ち主が呟いた。

「……誰だ。貴様は」

そこにいるのはここに来てから守護騎士達と共にいた女性シヤマル。しかし身に纏う気配は全く異なる存在だった。

「私は貴方にとって現在であり未来であり過去の存在。アヴェンジャーのクラスのサーヴァント」

「ふざけているのか？ サーヴァントは七騎のみ。それ以外のクラスは——」

「ふざけてはいないわ。貴方にとって過去と未来の聖杯戦争に私は召喚されました」

その目は嘘をついているようには見えない。

アヴェンジャーと名乗る女性……シヤマルの持つ武器と気配はデバイスは大きく変貌していた。

金色の指輪の面影はなく、禍々しく獣のそれを思わせる鋭利な爪と一体化した褐色の手甲がその両手を覆っている。

第八のクラスなど聖杯の知識には無い。それ以前に守護騎士である彼女がサーヴァントであるなど素直に信じる事などできないだろう。

「本来なら殻を被った私の意思は表に出る事はできないのですが……仲間の死によって動じた隙を突いてこのように意思を表出させました」

「殻……？ どういう意味だ？ 貴様は彼女の人格を乗っ取った訳ではないのか？」

「同化というのが近いですね。元々私は虚無。故に私自身の意思は無く、殻の人格の暗黒面が表出した……と言う具合です」

冷酷な感情を感じさせない声でアヴェンジャーはそう告げる。召喚されたサーヴァントには語られない真実があるのかもしれない。

聖杯戦争に関してそこまで詳しい知識を持っている訳ではない己がそれをあり得ないと断じる事はできないだろう。

「……貴様が未来のサーヴァントと言うならば問いたい事がある……」

我がマスターと……ソラウ殿はどうなった……聖杯は誰の手に渡った？」

己を捨て、忠義を汚した相手でも槍を捧げた彼らは主である。その生死は気がかりであった。願わくば生きていて欲しいと。

「死んだわ。そして聖杯はセイバーが破壊し、第四次聖杯戦争は勝者なき戦いになりました」

しかし、アヴェンジャーは慈悲もなく、冷たい真実を告げる。それを聞いた瞬間、ガクリとこれまで守護騎士との戦いでも決して付くことがなかった膝を付いた。

また……守れなかった。その真実は騎士の心を切り刻む。「その手の外装は宝具なのか？」

だが、失意に沈む暇はない。敵は目の前にいるのだ。死ぬ訳にはいかない。フェイトに与えられた聖誓がデイルムツドの心を絶望の闇から救い上げ、立ち上がらせる。

「いいえ。これはただの武器です。『右齒噛咬』と『左齒噛咬』が殻に合わせて変化した物」

「その名……アヴェンジャー、まさか貴様の真名は！」

告げられた武具の名からデイルムツドはアヴェンジャーに辿り着く。その名はゾロアスター教にて語られる対となる悪神の名。そこから導き出される名は一つしかない。

「この世すべての悪。それが私の真名です……最も、正確にはその名を押し付けられただけの名を失った人間……さらにその魂を五つに裂いた分霊の一つですが」

絶対悪の象徴たる名を持つサーヴァントが宿った女性はそうやって静かに名乗った。

「五つの分霊……？」

「これ以上語ることも無いでしょう。それでは失礼します」

そうやって話を切り上げるとアヴェンジャーの足元に魔方陣が展開される。それが転移魔法だと気が付いたデイルムツドはそれを阻止しようとして破魔の紅薔薇を構えて駆け出す。

ここで取り残されてしまったらどうしようもない。

アヴェンジャーは迫るデイルムツドの槍を右歯嚙咬に守られた右掌で防ごうとして——そのまま武器ごと彼女の手を貫いた。

苦痛に表情を歪ませながら突き出された左手の左歯嚙咬の爪先が、デイルムツドの喉を貫こうと迫り、デイルムツドが反射的に後ろに飛んでそれをかわす。

その際に右手を貫いていた紅槍が引き抜かれる。しかし、それこそがアヴェンジャーの狙いだっただけだ。

「——偽り写し記す万象」

アヴェンジャーがそう呟いた瞬間、デイルムツドは破魔の紅薔薇を取り落とした。

宝具『偽り写し記す万象』は「報復」という原初の呪いを宝具化したその力は、自分の傷を負わせた相手の魂に写し共有する事ができる。

傷の再現はできないがアヴェンジャーと痛みを直接魂に刻み込むこの宝具はどれ程の対魔力を持ったサーヴァントでも防ぐことはできない。

突然掌を貫かれた痛みが突然襲ってくれば流石に耐えるのは難しい。左手で取り落とした破魔の紅薔薇を掴んだデイルムツドだったが、その隙を突いてアヴェンジャーは転移していった。

「くっ……そ……そ……」

右手の激痛と身体中の傷……そして極限の緊張状態から解放されたデイルムツドはその場で意識を手放した。

アヴェンジャーは八神家に転移した直後、その意識を深層に隠した。

「……あ……」

その瞬間シャマルからはアヴェンジャーとしての記憶が消え、ザフィーラを失った悲しみが優しい彼女を襲った。

ザフィーラが紅い槍に貫かれた瞬間からの記憶が曖昧だったが、おぼろげながら覚えている……致命傷を負ったザフィーラのリンカーコアを蒐集したことも。

「……シャマル」

そしてそれは待つていた二人にもその事実が伝わっていた。

沈痛な面持ちでこちらを見るシグナムと俯いたまま一言も発さないヴィータを前にしてシャマルは何も言うことができない。

沈黙が周囲を包む中、彼女達の心理を映したようにポツリポツリと雨が降り出し、それは大雨に変わる。

降り注ぐ雨は彼女達の頬を伝う水滴も流す。

「ザフィーラのリンカーコアは蒐集されている……ならば闇の書が完成すれば奴を元に戻すことも可能はずだ」

守護騎士が斃された時に備えて闇の書にはバックアップシステムも存在している。本来ならば記憶を受け継ぐ事はできないのだが、こうして撃破される前に蒐集を行っていた場合は直前の記憶を持ったまま復活させる事も可能だ。

「闇の書を完成させる……そうすりゃザフィーラも帰ってくるし、はやても助かる……!」

俯いていたヴィータがそう決意を表し、二人もそれに応じる。

——冷たい雨が降り頻る寒い冬の空

守護騎士の心に何人たりとも揺らがせる事のできない決意が生まれてしまった。

「ふっ……くっ……!」

その日の夜。一人きりの病室ではやては自身を蝕む痛みで一人で耐えていた。

今日はすずかとアリサが尋ねてきてくれたお見舞いに尋ねてきてくれた。なのはとフェイトが急用で来られなくなかったのは残念だったが、それでも友達が見舞いに来てくれるのはとても嬉しく、はやて達は楽しく談笑していた。

その最中に突如襲い掛かってきた喪失感と痛み。彼女はそれらを気丈に振舞う事で周囲に悟らせなかった。しかし徐々に痛みは増大していき、とうとう堪え切れなくなってしまったのだ。

それでも周囲を心配させまいと耐えていたはやてだったが、ふと傍に誰かが立っている事に気が付き、そちらに視線を向ける。

「クロ……?」

そこにいたのは漆黒の鎧を纏った騎士。先日姿を消してシグナム達が探していると言っていた人物だった。

漆黒の騎士は無言ではやての傍に歩み寄ると、左手の鎧を消失させ、薬指に付いていた指輪を抜き取ると、それをはやての指に通した。「あ……」

その瞬間、先程まではやてを蝕んでいた苦痛が消える。

「……ギネヴィア様より賜った魔除けの指輪だ。その身を蝕む呪いを消す事は叶わないが苦痛を和らげる事はできる。常にこれを身に付けていれば当面は耐えられるはずだ」

「え? クロ、喋って……」

左手の鎧を戻しながら漆黒の騎士がそう言い、初めて聞く声にはやてが戸惑いを見せるが、彼はそれに応じずクルリと背を向けた。

彼がここに来たのはこの指輪を渡す為であり、それ以上の理由はない。彼に対魔力Cを付与していたこの指輪は宝具とまでは行かないがかなりの力を持っており、これがあればある程度の魔力によるダメージを軽減できる。

愛する人との唯一の絆を手放す事に抵抗は無かった——といえ
ば嘘になるが、これで少女が苦しみから逃れられるなら安いものだろ
うと漆黒の騎士は考えていた。

いつか彼女が闇の……いや。夜天の魔導書の呪いから解放されて
この指輪が不要になった時にでも返して貰えばいい——と。

「まっ……待って！」

去ろうとする騎士をはやては呼び止めると彼は足を止めてくれた。
しかし何を話せばいいのかわからない。

「名前……本当の名前教えてくれへん？」

必死に考えて思いついた言葉はそれだった。彼女は知りたいたと
思っていた。彼の口から本当の名前が知りたいと。

僅かな逡巡を見せた黒騎士だったが、はやてに背を向けたまま自身
の名を口にする。

「……ランスロット。王も、愛する人も、友も……全て失った愚か者
だ」

そう答えると制止するまもなく、漆黒の騎士ランスロットは闇へと
解けて込み消えていった。まるでこの出会いが幻であったかのよう
に。

残されたはやての指には今の出来事が幻ではないと告げるように、
月の光を浴びて指輪が輝いていた。

終わりの始まり

——12月20日——

「つ……がつ……離せ……!!」

暗い山の中、苦悶の表情で一体のハサンが足掻く。

ハサンの人格の中では比較的戦闘能力の高い彼は、己の首を締め上げて持ち上げる目の前の存在に恐怖していた。

——何故こうなったんだと自問しても応える者はいない

他のハサンのように管理局の搜索を妨害するという命を受けていた彼は山の中を歩く一人の管理局員を見かけた。

いつものように奇襲して倒そうと背後を取る。彼に恐れなど微塵も無かった『気配遮断』スキルを有する以上、相手は背後を取られた事を知覚する事などできない。

その手にあるダークを投擲しようと考えるが、それを行動に移す前に止める。管理局員の中には投擲に反応して抵抗を見せる者もいたからだ。

別にそうなくても負ける気など毛頭無いが、自分は戦士ではなく暗殺者。標的に気付かれずに確実に仕留めるとというのが正しいあり方である。

念には念を入れ、背後から絶対に反応できない距離まで接近してから攻撃を行おうと判断した。

暗殺者に見栄や格好など必要ない。そうして彼は敵の真後ろに立つが、目の前の獲物はそれに気付かずには辺りを見回すだけだ。

そして躊躇い無くその手のダークの柄をその頭目掛けて振り下ろすと『気配遮断』が解かれた。

彼の選択は間違っていない。慢心もせず、見栄を捨てて確実さを選んだ。殺せば管理局が全力でこちらを対処しにかかっているのはわかっている為、一撃で昏倒させてようとした。

完全なる刺客から直前まで全く気配を察知できない事に加えて、殺意無しに振るわれた攻撃を感知する事など達人の域に到達した者でなければ難しいだろう。

そう彼の判断に間違えは無かった。

彼が失敗した理由はただ一つの不運——自分が襲った管理局員が、正体を偽装する力を持つていた事に気が付けなかっただけだ。

至近距離から振るわれた攻撃をアサシンのクラスであった自身が驚愕する速度で反応して回避した敵は、その身の偽装を解除し漆黒の鎧を晒した。

その姿を脳が認識した瞬間には既に遅かった。その時点でダークを左手で奪い取られ、右手は彼の首を掴んでいたのだから。

「——っ！——！！」

締め上げられた喉からはヒューヒューと空気の通る音だけしか出てこない。恥も外聞のかなぐり捨て、両手両足で漆黒の騎士を攻撃するがビクともしない。

彼だって死線を掻い潜り続けた身だ。生前は人格の一つとして命がけの任務に挑んだし、聖杯戦争では征服王の王の軍勢の中でも、征服王に背後から両断されるまで最期まで戦い続けた。

だがそんな彼でも、後に最高クラスの英霊を多く輩出した円卓の騎士の中で、最強と呼ばれた騎士の放つ存在感とその手に己の生死が握られているという事実の前では恐怖心を抑える事ができなかった。

次元が違うのだ。地を進む一匹の蟻が人に挑めばどうなるかなど、子供でもわかる事だろう。

「ようやく捉えたぞ暗殺者。質問に答えろ。貴様らの目的はなんだ？」

締め上げる手を僅かに緩め、ランスロットが問いかける。それを聞いて彼は自分が食虫植物に誘われた虫であったのだと気付くがもう遅かった。

「我らが答えると——あがあ?!」

ギリイと首を掴む手に力が込められ、死の恐怖から逃れようと身体をバタつかせる。

「質問を変える。貴様らは我がマスターはやての敵か否か?」

答えを要求するランスロットの声に感情はない。漆黒の兜によって表情が見えない事と相まってそれが更なる恐怖を彼に与えた。

「敵ではない……! 我らは闇の書の完成を手助けしている……味方だ!」

「その事が貴様らにどのような益をもたらす?」

「かつ……! 完成後にどのような結末を迎えるかを見届けるとしか聞かされていない……!」

「闇の書が完成すれば何が起きる」

その言葉に身体がピクリと反応してしまう。彼は戦闘面に優れた人格であった反面、精神が弱かった。常の冷静な状態ならばまだしも、今のように極限の状態では身体の反応を抑える事ができない程度に。

そしてその僅かな反応でランスロットには十分な回答になった。答えるという言葉に彼は従うしかなく、闇の書について知る事を全て伝える。再生すると知っていても死ぬのは怖かったのだ。

「完成まで手を出せず、完成後は暴走して消滅……介入できるタイミングはその間だけ……か」

ランスロットは聞かされた情報を呟きながら纏めている。その様子を見てハサンはランスロットが本気で救おうとしているのだと理解させられる。

「くっ……くははははっ!」

思わず晒いが零れてしまう。主さえも不可能に近いと言っている事を目の前の一介の武芸者は成し遂げようと思案しているのだ。そんな事は不可能だと自明の理だというのに。

「主君を裏切り死に追いやった貴様がマスターを死から救う? 果せなかつた忠誠をあの小娘で代用しようとしているのか!」

それならば滑稽だ。完全なる騎士と謳われた騎士が罪の意識から

逃れる為に年端も行かない小娘に代償行為をして満足しようとしているなど滑稽と言わずなんと言おうか。

くだらない。じつにくくだらない。とハサンは嗤う。どうせ殺されるならば目の前の騎士の仮面ヘルソナをかち割ってやろうと嘲りの言葉を突きつけた。

——だがその侮蔑の言葉に対する答えは否定でも怒りでもなく

「そうかもしれないな」

——肯定を持って返した

「私はアーサー王を裏切り国を滅ぼした。それを否定する気はない。王が望むのならば煉獄の炎に堕ちてもよい。奇跡を持って滅びを回避せよと望むならば聖杯を使つてでも叶えよう」

英霊となつても罪の呵責に苛まれ続け、理性を捨てても逃げようとした騎士。だが彼はあの輝かしい黄金の剣で討たれた事でその心は穏やかさを取り戻していた。

「この身はすでに地に堕ちている。今更光の中に戻るつもりなどない。だがマスターには夜天の守護騎士達と共に幸せに生きて欲しいと思つたのだ。それが果されたのならば——」

在るべき場所に戻り、そこで然るべき裁きを受けよう。

そう答えた漆黒の騎士は容赦無くその右手に力を込める。

——ゴキリ

不快な音が聞こえた後、ハサンの意識は途絶え、その身体は粒子となり消え去った。

——12月21日——

時が巻き戻せたなら——

ヴィータは前に行く自身の主と仲間である守護騎士二人を見つめながらそう思っていた。

ザフィーラを失ったあの戦いから三日後。あの日から彼女を蝕んでいた原因不明の麻痺の進行が止んだ。

最も蒐集の成果が出た……という訳ではなく、あの日の夜に訪れたランスロットと名乗った黒騎士に渡された指輪によるものらしい。

指輪が秘める魔力は大した事無いのだが、シャマルが解析を行った所、強力な魔力に対するレジスト効果を持つ物らしく、それがリンカーコアの浸食を抑えているとの事だ。

(あいつにはお礼言わなくちゃな……)

それでも完全には無力化できず、麻痺の進行を停止する事はできなかった。だが痛みは殆ど緩和できているらしい。おかげで担当の石田先生から許可を貰って久方振りに外に出る事ができた。

しかしそれを手放しに喜ぶことはできない。それだけ失った者が大き過ぎたのだ。

過去の彼女達なら仲間を一人失ったからと言ってここまで深く悲しむことは無かっただろう。

だが今は違う。仲間を……大切な家族を失ったのだ。悲しむなど言われても無理である。

はやてにはザフィーラは少し遠くに出かけているという事にして

ある。数日で戻ってくると。

(そうだ。その為にもあたしたちは——)

そこまで考えた時、ふと前を行く三人が立ち止まっている事に気が付く。シヤマルとシグナムが警戒をしている事も。

地面に落としていた視線を上げる。そこにいたのは——

「むっ。」

正直会いたくなかった筋骨隆々の大男、征服王イスカンドルであった。

警戒心を込めて構える守護騎士の視線など意にも介さず、イスカンドルははやてに目を付けた。

「シグナム、この人知り合い？」

二メートルを超える巨漢に見下ろされて少々怯えながらもはやてが尋ねる。そんな彼女をイスカンドルは数秒少女を見つめた後——

「すまん小娘よ、彼奴らには以前会った時にちいと迷惑をかけてしまった事があつての……それで少々嫌われているのだ」

ニカリと愛嬌を感じさせる笑みを浮かべながらそう言ったのだつた。

「あやつが貴様らの王か？」

「……そうだ」

そうベンチに座るイスカンドルが尋ね、傍らで立っているシグナムが頷く。

話がしたいというイスカンドルの要求に応え、シグナムとヴィータは傍にあった公園を訪れていた。

余計な情報をはやてに伝えられなくなかったので、はやてにはシヤマルと共に少し離れた位置で待ってもらっている。

「ずいぶんと顔色が悪いが……どうかしたのだ？」

「……デイルムツドとの戦いで仲間の一人が討たれた」

どのような反応を示すのかと思っただが、イスカンドルはそうかと一言呟いただけであった。

慰めの言葉が欲しい訳ではなかったが、そのあまりにも淡々とした物言いに心が苛立つがそれを抑える。

「その事をあの小娘に伝えておらぬのか？」

シャマルと笑顔で話すはやてを視線の先に捉えながら征服王が問いかける。答える義務など無いが、目の前の男が放つ雰囲気は答えねばならないと思わせ自然に口を開かせる。

「伝えていない……それどころか主はやては我らが戦っている事を存じ上げていない」

「そうか……手間を取らせた。余はこれ以上貴様らに関わらぬ事を誓おう」

そう言って立ち上がるイスカンドル。こちらとしては彼のようなイレギュラーが手を引くというのはありがたいが、その対応に疑問が生じた。

「主はやてを軍門に降すのではなかったのか？」

はやてを降した上で守護騎士を配下にしようと宣言していたとヴィータから聞いていたからだ。だがその様な素振りをイスカンドルは見せない。それが気になりシグナムが尋ねる。

「覚悟無き者を軍門に降そうなど余は思っておらん。それだけだ」

「……どういう事だ」

「わからんか？ あの小娘は貴様達が戦っている事を知らんだらう。歪な主従の在り方など痛ましくて見るに堪えぬ」

あの一瞬でどうして気が付いたかはわからない。しかしイスカンドルは確かに事実を見抜き、守護騎士とはやての絆を歪と一蹴した。「我らと主はやての絆を愚弄するのか?!」

「そうではない……貴様らが何を望み、何を為そうとしているか余は知らぬし、止めるつもりもありやせん。だがな騎士達よ」

シグナムの怒気を受け流し、征服王は立ち上がり、己の考えを語る。

「余はな、王と配下は同じ先を見据えてなければならぬと考えておる。同じ先を見ておらねばとな」

王とは先陣に立ち配下を率いるものだ。そして配下は王の意思の元に纏まり、共に歩むものだ。

「その紅い小娘には以前言うたが、余は貴様らの行動を否定せん。征服王たる余は敵を蹂躪し略奪を行っておったからな。それを否定する気も止めるつもりもありません。むしろ肯定しよう」

マケドニアの王は己の決断がつき従った朋友を散らせてしまう事も覚悟して戦っていた。悔やみはしないが、その死を悼みながらも胸に前に進む事を。

「王とは道標であると共に臣下全ての命を背負う者だ。配下が千であつても万であつても……一人であつても変わらん。すなわちそれは臣下が王にその身を捧げたその瞬間から、そやつ命は王の命となるという事だ。王の意思に背き、ましてや死ぬことなど断じて許さぬ」

「はやては……闇の書の主だけそんな王なんて大きな物じゃなくて……大切な家族だから……」

「統べる者。という時点では王も主も変わらぬわ……無論これは余の王道、余の考えである。それを貴様らに押し付けるつもりも毛頭ありません。ただ、そういう訳で余は貴様らを臣下にしようという気が失せただけの事よ」

ヴィータの言葉を断じてイスカンドルは背を向ける。これ以上語る意味はないと。背中がそう語っていた。

「最後に一つだけ言わせて貰うならば……苦しいかもしれんがあの小娘にも背負わせてやれ。自らが知らぬ所で臣下が傷付き、死していくというのは王としてはなかなか苦しいものだぞ」

そうしてイスカンドルははやてに別れの挨拶を告げると、ゆっくりと歩を進めて去っていった。

「できる訳がない……」

イスカンドルが消えた方角を睨みながらシグナムは呟く。あの優しい少女に悲しみを苦しみを背負わせる事など。

「大丈夫だ……闇の書が完成すれば……」

はやての身体は治り、ザフィーラが戻ってくる。闇の書の莫大な力を使えば全ては無理でも犠牲者に償いをする事も可能だ。そして罪を清算すれば——全てをやり直せる。

奇しくもそれは征服王がかつて否定した騎士王の願いに近いものだった。

——12月23日——

「くそっ！」

「クロノ君……」

苛立ちを抑える事ができず壁を殴ったクロノをエイミイが心配そうに見ている。

彼が苛立つ理由は先日の守護騎士との接触したデイルムツドが行方不明になった事だ。

それも戦闘中の突発的な事故ではなく、自身の判断が友人をこのような状態にしてしまったのだ。責任感が強いクロノが苛立つのも仕方がないだろう。

「転移の痕跡が全くない……！ これじゃ虱潰しに探すしか方法が……！」

「クロノ君、落ち着いて！ らしくないよ！」

「落ち着いてなんていられるか！ もう五日近くたったんだぞ！ 転移先によっては下手をすれば——！」

そこまで言っただけでハツとなる。彼の事が心配なのは自分だけではない。アースラの乗員も本局の局員も彼の安否を気にしている。それは隣にいるエイミイも同じだ。

「……ごめん」

「ううん、気にしないで。それに一番ショックを受けているのは……」
ここにはいない少女。目の前で恩人であり、想いを寄せているディルムツドが転移させられたフェイトの落ち込みようは見えていられなかった。

周囲の気遣いもあつて表面上は立ち直った様子であつたが、彼の安否を誰よりも心配し、何もできない自分を責めている。

「早く見つけて、フェイトちゃんを安心させてあげないとね」

エイミイの言葉にクロノは頷いた。しかし、事はそう簡単なことではない。

転移魔法が発動し、結界が解除された直後からすぐに追跡を行った。しかし、転移先の特定は殆どうまくいかず、わかつた事も地球以外の場所に飛ばされたという有様。

取れる方法は二つある。一つは先ほど言ったように虱潰しに他の世界を探索する事だが、無数にある次元世界の中の一つにいる人間を一人見つけ出すなど、砂漠に落としたり砂を見つける事よりも難しい。いや、下手をすればそっちの方が簡単かもしれない。

そうなれば取るべき方法はもう一つ。守護騎士から居場所を聞き出す事しか有り得ないだろう。そちらもハサンの妨害のせいで容易ではないが、前者よりはだいぶマシだろう。

（彼は万能じゃない……そんな当たり前の事を忘れるなんて……！）

ディルムツドは強い。それは紛れも無い事実だ。実際に自分を一方的に追い込んだランスロットと彼は互角の戦いを繰り広げた。

だが彼は魔法に関しては何れでもないが凡人よりも劣る。それを補い超える接近戦の技術と強力な武器を使いこなす事でそれを全く感じさせないのだが。

最も武芸に関しては非凡なる才能を持っている訳ではあるが、今回の結果が招いたように魔法を用いた絡め手に対してはそれを発揮することは出来ない。

「せめてデバイスを持っていれば信号で居場所を見つけれらるんだが

……」

『グラニア』の調整が終わったのが行方不明になった一日後だったからね……」

このデバイスが後一日早く出来て、彼が結界に入る直前に渡せていれば。と、もしもの結末を考えずにはいられない。

(信じる事と任せる事は違う……それなのに僕は！)

クロノが許せなかったのは他でもない自分であった。周りの人間は「想定できるものではなかった」「自分を責めるな」と言うがそうではない。

自分は心のどこかで思ってしまったのだ。デイルムツドならば何とかしてくれるのではないかという持つてはいけない考えをってしまった。

一介の武装局員や局員であればそう考え、期待してもいいだろう。直接奇跡を起こした訳ではないが、デイルムツドも純粋な英霊である。彼に希望を抱き、その強大な力で勝利をもたらして欲しいと頼ってもいいだろう。

——だがそれは上に立つ者がしていい考えではない

デイルムツドは強い。条件に左右されるところはあるが、正面からの一騎打ちであればなのはやフェイトにもそれどころか自分も勝てるだろう。だが彼は無敵でも奇跡を引き起こす力を持っている訳でもない。

それを理解しているつもりだった。だがそう思っていただけで実際にはわかっていなかったのだ。

もし守護騎士に呼び出されたのがフェイトやなのはであつたら間違つても単独で向かわせることなどしないだろう。逃走の可能性があつても相手の誘いを蹴り、万全を期して部隊を編成し向かわせたはずだ。

当然だ。どのような罠が仕掛けてあるかわからない場所に無策に向かわせるなど言語道断だ。だが、クロノはデイルムツドにそう命令

してしまった。彼を部下として見ていたのなら、力があつたとしてもフェイト達と同様に扱うべきだったというのに。

デイルムツドがそれに応じたのは上官であるというだけではない。彼は闇の書という危険な存在から人を守りたいというクロノの願いに応えるために、危険を承知で敵陣の中心に単独で向かったのだ。

クロノは彼を部下としてではなく英雄として見てしまった。人を超える力を持ち、奇跡をもたらす存在ならばこの困難を乗り越えてくれると心のどこかで期待してしまっていた。

彼にとってクロノは友人であると共に守るべき民の一人である。だからデイルムツドは英雄として救済を求められ、それに応じただけである。

クロノ達は気がついていないが、本来のデイルムツドの属性は思考は社会的なルールに肯定的な秩序ではあるが、自身の中の善悪感は無庸……積極的に救いを行う気はない。

闇の書に関してここまで積極的に協力しているのは一時的なマスターの考えを肯定し、犠牲者が出る事をよしとしないからである。

勿論悪を肯定する気など微塵も無い。ただ、味方と罪無き民に犠牲が出ないように立ち回るが、敵対者の犠牲に関しては今回のように複雑な事象が無ければ容赦しないというだけだ。

そんな彼が今英雄として応えてくれているのは、恩人であるフェイト達に義をもって報いようとしているというのが大きい。最も本質的には善に近いので、目の前で苦しむ無辜の民がいれば迷うことなく助けるだろうが。

「僕は彼に重荷を背負わせていたんだな……」

「クロノ君……?」

「いや、彼の強さに頼ってばかりじゃダメだっと思ってただけさ」

情けないと呟きながらガシガシと頭を掻くクロノにエイミイにそう言葉を返した。

英雄を殺すのは異形の存在ではなく人だと以前彼は言っていた。あの時は意味を表面的にしか理解できなかったが今なら理解できる。

直接命を奪われるということだけではないという事だ。英雄として人の願いを背負い、自身の限界を超えた望みであつても叶えようと戦い、その結果破滅を迎える事だつてある。

それを自分は彼に強いてしまった。それを彼は苦にも思っていないだろうとしても。

だが悔やむのはこれまでだ。そんなものはデイルムツドが戻つてからいくらでもすればいい。今すべき事はそんな事ではなく、闇の書の負の連鎖を断ち切る事なのだから。

「まずは守護騎士の転移状況から奴らの行動範囲を調べてくれ……僕も決着を付けなければならぬ事がある」

「了解！ その範囲に飛ばされた可能性が高いからね！ 何を調べてるかはわからないけど、クロノ君ならできるよ！」

「ありがとう」

決意を新たにし、精神的に成長したクロノはエイミィに背を向け執務室に向かう。ここ数日調べていた事の確信が取れそうなところまで来ており、その独自の調査が大詰めを迎えていたのだ。

仮面の男。その正体と行動の目的。そして真実を知るといふ目的を果たす為、クロノが彼の戦場で戦う。

友が戻ってきた時に誇れる自分である為に

そして時間は進む

—— 12月24日 —— クリスマス・イブの夕方

夕日が差し込む病室で守護騎士達は大切な主と語らう

だが彼女達は気が付いていない

主の大切な友が近づいてきている事に

そしてその者が自分達の敵である事に

やがて鳴り響くノックの音と共に

—— 穏やかな時間を砕く運命の扉が開いた

集いし英霊

——12月24日——

「はやてちゃんが……闇の書の主だったんですね」
「……そうだ」

夜の帳が落ちたビルの屋上。そこで四人の少女達が対峙していた。高町なのはとフェイト・テスタロッサが見つめる先にいるのはヴオルケンリッター、シグナムとヴァイター。

ここ数日管理局の目を完全にすり抜け、存在を全く感知させなかった守護騎士となのは達が出会ったのは本当に偶然であった。

いつものようにすずかとアリサと共にはやての見舞いに行った二人が扉を開いた先に彼女たちがいたのである。

すぐさま管理局に連絡を取ろうとしたフェイトだったが、シャマルによって即座に展開されたジャミングにより念話を封じられ、はやて達の手前、迂闊に動く事もできなかった。

出会ってしまった以上気付かない振りをする訳にもいかない。

予期せぬ邂逅に両者が動揺したが、守護騎士は引く事はできず、なのは達も闇の書の蒐集を阻止する機会を逃す訳には行かず、両者はにらみ合う事になってしまった。

「ディルムッド君を連れ去ったのは、はやてちゃんと出会わせたら気が付かれると思ったからですか？」

「そうだ。奴の観察眼は尋常ではないからな。最初はそのような少年があそこまでの物を持っているのかいぶかしんだものだが、この地の伝説に乗る英雄の魂を持つと聞いてからは納得したものだ」

なのはの問いかけにシグナムが答える。何故ディルムッドの正体を知っているのかは言わなかったが、現状を考えるとハサンから聞い

たと思えるのが正解だろうとフェイトは思った。

彼は自身がフィオナ騎士の一員であった事を誇りに思っているの
でそれを隠す気が全く無い。

だが同時に英雄である事を誇る事もしない彼が、自らの正体を明か
す事も無いだろうというのもフェイトにはわかっていたからだ。

守護騎士が知識としてサーヴァントの事を知っていた可能性は限
りなく低い。つまり誰かから聞いたと考えるのが当然で、そう言った
情報を流す可能性があるのは彼らの逃走を援護し、強力な隠蔽スキル
を持つハサンだと判断するのは当然とも言えた。

「一つ聞かせてください」

闇の書の主の正体、そして彼らの目的。

管理局の人間として最初に知らなければならぬ情報は得た。次
にフェイトは真つ先に聞いたかった言葉を口にした。

「ディルムッドはどこですか？」

冷静さを保ちながらフェイトが問いかける。使命感で管理局員と
して対処しようと努めていたが、それを幼いながら押さえていた。

「すまないが闇の書が完成するまで伝える訳にはいかない。ただ生き
てるのは確実だ」

シグナムの言葉を聞いたフェイトの口から思わず安堵の声が零れ
る。

——「生きている」それは彼女が何よりも知りたい情報だった

「……では貴方達を捕らえて教えて貰います！」

バルディッシュを展開し構える。視線の先ではシグナムとヴィー
タもデバイスを展開していた。

その姿を確認した時、フェイトは自身の失策に気がつく。目の前の
二人を警戒するあまり、病室で出会ったもう一人の守護騎士の存在を
失念していた事に。

そこまで考えた時、フェイトは反射的にその場から跳躍する。その

直後、足元から現れた緑色の糸が伸びてくる。

「きゃ……！」

運よく奇襲を避ける事に成功したフェイトだったが、なのはは反応できず捕えられてしまう。

「グラーフアイゼン!!」

その瞬間、今まで沈黙を守っていたヴィータがデバイスを構え、突撃した。

狙いが動きを封じられていたなのはだと気が付いたフェイトはなのはの足元に向けて斬撃を放った。

放たれた魔力の刃が彼女を捕らえた緑色の拘束を切り裂いた事で自由を取り戻す事に成功する。

そしてグラーフアイゼンが激突する直前、ギリギリ間に合ったなのはが障壁を展開する。そして、激突により発生した衝撃が爆発を引き起こし、屋上を紅蓮に染め上げた。

「ちっー！」

今の一撃で仕留めるつもりだったヴィータが舌打ちする。

ここまで彼女が激高せず黙っていたのは、念話で打ち合わせていたこの奇襲を成功させる為。

シグナムがなのは達が知りたがる情報を話すことで二人の意識をシグナム一人に集中させる事で、ヴィータとシャルへの意識を逸らした所に強烈な一撃を叩き込もうとしたのだ。

「もうすぐはやては助かるんだ……だから……邪魔すんじやねえ!!」

「待って！…話を——」

それが失敗したのならばそんな事をする必要がない。大切な主を救うのを邪魔する敵を潰そうと容赦無く鉄槌を振り下ろす。

だが、怒りに染まった彼女は話し合おうとするなのはの言葉を無視して襲い掛かっていく。

「今の不意打ちによく気が付いたな」

「私の師匠は接近戦の達人ですから」

「ふっ……なるほどな」

苛烈な攻防を繰り広げるのはとヴィータとは正反対に、冷静に互

いを睨み合うフェイトとシグナム。

「正直貴方達がこんな手を使ってくるのは意外でした」

最初の邂逅の際にはなのは奇襲した守護騎士だったが、あれはリンカーコアの蒐集という目的の方が主であり、

不意打ちをあまり好まない彼女達にしては予想外の攻撃だとフェイトは思っていた。

「私としても不本意だがな。輝く貌に仲間を殺されたのでな。手が足りるのだ」

「……え？」

悔しそうに、だが悲しげに表情を歪めてそう答えるシグナムの言葉を聞き、フェイトの思考が停止した。

「ザフィーラを取り戻すためにも……我々は闇の書を完成させねばならない！」

そう言つて一気に距離を詰めたシグナムがレヴァンティンを振るう。

衝撃的な言葉を聞かされて硬直していたフェイトだったが、反射的に身体が動いたおかげでガードに成功した。

ザフィーラの喪失はシグナムには静かなる闘志を、ヴィータには苛烈なる激情を与えた。彼が単身で死闘に望んだ理由は自分達のせいだと思ふ後悔が彼女達を突き動かしているのだ。

彼女の言葉に動じてしまったフェイトだったが、すぐに気持ちを切り替え、戦いに集中する。

何が起きたのか気になる所ではあるが、彼は管理局に所属する事になった際、不用意な殺生を行わないとリンディ達に自身の聖誓を持つて約束させられている。

そんな彼がそれを破るような事したのは、そうせざるを得ない状況であつたのだろうと、デイルムッドに絶大な信頼を寄せるフェイトは信じているからすぐに心を落ち着かせる事ができた。

「バルドイツシュール」

《H a k e n F o r m》

カートリッジが回転し、薬莖が吐き出されると魔力の刃が発生し、

漆黒の杖がデスサイズに変化した。そして再度迫り来るシグナムの斬撃を迎え撃つ。

「はあっ！」

「やあっ！」

シグナムの紅蓮を纏う剣とフェイトの雷光の戦斧が激突すると紅と黄の輝きが周囲を照らす。その色を見た両者の脳裏に、今はここにいない騎士の姿が浮かんだが、即座に目の前の相手に意識を戻す。

今回で守護騎士との戦いは四度目。そして過去三回の戦いのうち、一度は逃げられ、二度は敗北を喫したフェイトにとつて雪辱を晴らす為の機会でもあり、彼の居場所を知るチャンスでもあり負けられない戦いである。

だがそれはシグナムも同様である。過去一回に勝利し前回は不本意な勝利を手にしたとはいえ、デバイスの性能差が無くなったフェイトの強さは十分に勝利を手にする事ができる物である。

敗北すればはやてを救えないと信じているシグナムが油断する事などあり得ず、両者が全力でぶつかり合う。

「レイジングハートっ！」

《Acceler Shooter》

そしてそれはもう一つの戦いを繰り広げる二人も同じである。

「ちっ！ 相変わらず厄介な……！ アイゼンっ！」

《Schwalbfliegen》

話し合う意思を拒絶するヴィータに十二発のホーミング弾が放たれ、それを気合で回避しながらお返しとばかりに四つの小型の鉄球を放つが、なのははそれをホーミング弾を操って全て迎撃した。

かつてフェイトに対して行った「ひとまず撃墜して話し合いに持つていこう」という小学生の考える発想とは思えない、グラニア並のほんでもない行動を至って真面目に真摯に実行しようとしているのはと、頭に血が上って自分達の障害となつて立ちはだかる物を叩き潰そうとしているヴィータが全力で攻撃を繰り出している。

射撃特化のなのはと近接特化のヴィータという一見すると真逆の戦闘スタイルだが、両者とも非常に高い防御力を有しているという共

通点がある。

お互いに攻撃力も高いのだが、同時に防御力も非常に高い。その結果、互いの攻撃が障壁を突破できずに術者に届かないのだ。

なのはとヴィータ。フェイトとシグナム。

互いの譲れない物をかけた戦いは一進一退の攻防となり、その戦いは永遠に続くのではないかと思わせた。

——だがそれは唐突に終わりを告げる。

一度距離を取り、体制を立て直そうとした瞬間、突如出現した白銀の鎖が四人の動きを止めたのだ。

「あつ……ああああつ?!」

その鎖に囚われた瞬間、脳を狂気が浸食していき、理性を強制的に剥離される苦痛が四人を襲う。

必死で鎖の呪縛から逃れようとするが、その精神を狂わせる強烈な不快感と自己を飲み込まれる恐怖が術式を構築する余裕を与えず、逃れる事ができない。

「がっ……はっ?!」

その苦痛に意識を持っていかれていた守護騎士達はその場に接近し、彼女達から闇の書を奪っていた乱入者の存在に気が付くことができなかつた。

唐突に自身を襲った強烈な虚脱感がシグナムの失われかけていた思考能力を僅かに取り戻させ、自身を縛っていた鎖がランスロットの自由を奪っていた物と同じだと気が付かせる。

そして同時に目の前に開かれた闇の書と自身のリンカーコアが浮かび上がっている事も。

「きゃ……まは……」

闇の書を手にしていたのは仮面の男だった。正体不明の協力者は表情を窺わせない仮面の奥から彼女達を見つめている。

「なに……しやがるんだ……」

隣を見たシグナムはそこで自身と同じように囚われ、リンカーコア

を摘出されているヴィータの存在を目にする。

「貴様達三人の魔力を蒐集する事で闇の書は完成する」

「ちく……しよう……！」

貴様達は用済みだと。そう言いながら仮面の男は容赦なくリンカーコアの魔力を根こそぎ蒐集し、ヴィータの姿が虚空に消し去った。

「ヴィータ……！」

その光景に絶望するシグナムや目の前で起きた事に驚愕しているのはとフェイトを無視し、仮面の男が別の術式を起動すると魔方陣が展開され、光の中心に主であるはやてが姿を現す。

「シグナム……?!」

病室から転移魔法を使って連れてこられ、戸惑いながら周囲を見回したはやてが拘束された三人の姿に気が付く。

思わず手を伸ばそうとしたはやてに見せ付けるように、シグナムのリンカーコアから一気に魔力を蒐集する。

「主はやて……申し訳……ありませんでした……」

仲間を奪われ、大切な主を守る事すらできない事を後悔しながら、はやての目の前でシグナムの姿も虚空に消えていき、はやてがシグナムとヴィータに送った洋服だけがその場に残されていた。

目の前で家族が消されるといふ絶望的な光景を目の当たりにし、涙を流すはやてを後ろから誰かが抱え上げ、跳躍すると仮面の男から離脱しようと駆ける。

「シヤマル……!?!」

最初の奇襲を行った後。結界維持と索敵を行う為に、この場から離れていたシヤマルが異常事態を察知し、主を守ろうと駆けつけてきたのだ。

その両手を覆う右歯噛咬と左歯噛咬に驚いたが、それよりもはやては、彼女が無事でいてくれた事に安堵した。

アヴェンジャーが憑依し、暗黒面を浮き彫りにされていたとしても、その本質はシヤマルと変わらない。

今のシヤマルはアヴェンジャーの意思が完全に表出していないの

で、闇の書の完成よりもはやてを守る方を重要視しているのだ。

「まずはここから離れないと……!」

シグナムとヴィータが消された事に怒りを覚えてながらも、今は逃げる事が最優先だと判断する。

主を抱えて全力で距離を取ろうとしたシヤマルだったが、横から迫る殺気に気が付き、即座に障壁を展開したと同時に何者かが強力な蹴りを打ち込んできた。

「二人……?!」

自身に強烈な蹴りを打ち込んできた人物とビルの上からこちらに接近してくる人物の姿が同じものであった事にシヤマルが驚愕する。

分身か別の固体かはシヤマルにはわからなかったが、はやてを抱えながら逃げる事が困難である事は明らかだろう。

「くっ……!… ここまで私まで蒐集される訳には……!!」

問答無用で仮面の男達が放つ攻撃をはやてを守りながら全力で凌いでいく。

本来のシヤマルはサポートに特化した能力であり、直接戦闘はあまり得意ではないので、これほどの攻撃を受ければ数分も耐える事ができなかつただろう。

しかし今はアヴェンジャーが憑依した事でサーヴァント化しているので、強力な『神秘の加護』を獲得している。それによってある程度は耐える事ができた。

「きゃあっ!?!」

それでも仮面の男達の攻撃に完全に耐え切る事はできなかつた。単身で逃げるだけならばまだしも、はやてを守りながら逃げるには力が及ばなかつたのだ。

障壁を砕かれ、強烈な打撃が打ち込まれる。咄嗟に右歯噛咬で守られた手でガードするも魔力を帯びた打撃に武器が耐え切れず粉碎され、無防備になった彼女の白魚のような手の骨が砕かれてしまう。

「っ……!」

「あっ……!」

アヴェンジャーの力が宿っていてもその身は守護騎士の時と大差

はない。

激しい激痛がシャマルを襲った時一瞬意識が霞み、はやてを手放してしまふ。落ちて行く彼女を助けに向かおうとしたが、その隙を付かれて拘束されてしまふ。

「シャマルっ！」

下を見るとはやての身体が宙に浮いていた。どうやら仮面の男が落ちないように浮遊魔法を施したようだ。

彼女が無事であった事に安心するが、胸元から浮かび上がるリンカーコアを見て、自分の消滅も免れない事を悟る。

「…………ごめんなさい」

全身を覆う虚脱感を感じながらはやてに向けて謝罪の言葉を告げ、シャマルはアヴェンジャーごと闇の書に蒐集され、消滅した。

「あ…………あああ……………」

自身を決死で守ろうとしてくれたシャマルの消滅により、押さえ込んでいた絶望感が溢れそうになる。

「そや………… ザフィーラは…………？ ザフィーラはどこに…………」

「奴はとつくに死んでいる。デイルムツド・オデイナの手によってな」最後の希望に縋ろうとここにいない家族の姿を探すはやてに向けて、残酷な真実を無常にも叩き付ける。

それがはやての心を壊す引き金となり、悲痛な少女の叫びと共に闇の書が起動した。

これこそが仮面の男達の…………いや二人の主の待ち望んだ瞬間であった。

破壊不可能な闇の書を封印すること。それが二人の主の悲願であった。だがそれを為すには闇の書を完成させる必要があった。

その結果として八神はやてという罪無き少女が犠牲になるとわかっていながらも、二人は守護騎士達の蒐集を手伝ったのだ。

二人の視線の先では、覚醒した闇の書に飲み込まれその姿を変質させたはやての姿がある。

その姿は記録にあった管制人格と同一であり、闇の書が完成した事の証明である。後は彼らの主が用意した切り札を使う事で悲しみの

連鎖が終わる。

——そのはずであった

『湖の騎士のプログラムの異常を感知』

シヤマルと共に取り込んだアヴェンジャーの存在が異変を引き起こす。

闇の書に根付いた歴代の所有者の悪意と全ての悪を肯定するアヴェンジャーが共鳴したのだ。

『サーヴァントの現界状態を確認……ランサー。ライダー。アサシン。バーサーカー。キャスターの現界を確認しました』

闇の書が無機質な機械音を発する事に管制人格の周囲に禍々しい気配が漂っていく。

『アヴェンジャーにセイバー、アーチャーのパラメーターをインストールします』

管制人格の周囲に漂っていた闇が形を成して行き、それが形を成す。それを見た仮面の男も拘束を解除したなのはとフェイトもその不気味な存在に威圧される。

——ッ!!!

集合した闇が新たなる存在生み出す。生まれた異形が声にならない叫びを轟かせた。

本来ならば暗黒面を表出するだけのアヴェンジャーだが、闇の書の中に眠る悪意は膨大であり、その影響により意識ではなく質量を持った反転存在を生み出すまでに至ったのだ。

その姿は二本の足で立つ影の獣。その異形を現すに相応しき名は『ビースト』。666項を持つ闇の書が生み出した黙示録の獣の化身。

その禍々しさの具現化したビーストが握るのは二振りの宝剣。見る物に恐怖を与えるビーストとは正反対に宝剣が放つ輝きは見る者の心を振るわせる存在感を持つ。

——右手に握るは『乖離剣エア』

其れはバビロニア神話に登場する知恵の神・エアの名を持つ開闢の
劍

——左手に握るは『約束された勝利の劍』

其れは湖の乙女から授かった人々の願いを星が集結させ、鍛えた聖
劍

アヴェンジャーを介し、聖杯の記録から取り出した神造宝具二振り。それぞれが莫大な魔力を秘め、どのような奇跡を用いても砕けぬ究極の武装だが、歪な手法でこの世に再現された事で

その存在が捻じ曲がり、担い手でない事と相まって本来の姿と在り様には劣る姿となっている。

名を付けるのならば『偽・乖離劍 エア』と『復讐に歪められし勝利の劍』と呼ぶべき歪められた幻想。

——ッ!!!

獣が咆哮を上げ、周囲を空気を振るわせる。劣化しているとはいえ、その力は並みの宝具を超えている事は事実であり、その存在感はその場にいる四人を圧倒するには十分な代物と言っていいたいだろう。

「ちっ！ なんだあいつは?!」

「一度引くぞ！ 父様に指示を——!」

発生した異常事態に動揺する仮面の男達が撤退しようとして転移魔法を起動しようした瞬間、ビーストの視線が二人を捉えた。

「っ！ マズっ?!」

獣の本能が直接警鐘を鳴らす程の危険を察知し、防御行動に移る。魔法に特化した仮面の男が強固な障壁と復讐に歪められし勝利の劍がぶつかり合い、発生した金色の光が周囲を照らす。

「えっ——?」

二つが激突した数秒の後、ズプリ——と肉を切る不快な音と信じられないといった声がもう一人の仮面の男の耳に届く。

数秒硬直したが、吹き上げる鮮血が相棒が致命傷に近い傷を負わさ

れたのだと気が付かせる。

「刃以もて、血に染めよ。穿うがて、ブラッツデイダガー」

《Blutiger Dolch》

「ヤバイ……ッ！」

ビーストというイレギュラーにばかり警戒心を向けていたが、管制人格が消えた訳ではない。彼女の周囲に展開された血色の実体を持った鋼の短剣が止めを刺そうと放たれる。

その攻撃が放たれた直後、傷を負っていない方の仮面の男の対応は素早かった。意識を失い、宙に投げ出されている仲間を掴むと、転移先を記録してあるカードを取り出して即座にその場から姿を消した。

仮面の男達はその場から離脱した。そうなれば管制人格とビーストの次なる狙いがその場に残され、鎖に囚われたなのはとフェイトになるのは当然である。

「くっ……い！」

「外れ……ない……い！」

二人が持つ膨大な魔力が銀の鎖の狂化をレジストしているので理性を剥離される事は無かったが、堅牢な鎖は簡単に引き裂く事ができない。

「ブラッツェイ——」

「——ッ!!!」

動く事も抵抗する事もできない二人に対し、管制人格は鋼の短剣をなのはに、黙示録の獣は復讐に歪められし勝利の剣をフェイトに向けている。

闇の書が生み出した二つの闇はそれぞれ容赦無く死へと誘う一撃を放つ直前——!

「遙かなる蹂躞制覇ッ!!」

「オオオオオオオオッ!! 切り裂け『無^ア羅^ロン^ンダ^イト^ト湖光』！」

上空より飛来した二つの影がそれを阻む。

莫大な魔力を手に集中させていた管制人格を雷撃を纏う神牛の蹄が吹き飛ばし、迫るビーストの身体を、偽りの神造宝具ごと湖の光を湛えた真実の神造宝具が切り裂いたのだ。

——突如現れた予想外の増援に驚く二人の背後に三つ目の影が舞い降りる

「穿て……破魔の紅薔薇ッ！」

そしてその人物の発する声は、二人が良く知る少年の声だった。彼が振るう真紅の魔槍が二人を戒めていた鎖を破壊し、囚われの少女達に自由を与える。

「あっ……！」

鎖の呪縛から解放され、振り返ったフェイトの瞳に涙が浮かぶ。彼女が目にしたのは一番会いたいと思っていた人物の姿。

「遅くなってすまないフェイト」

——フィオナの騎士、デイルムツド・オディナが、マケド

ニアの霸王と円卓の騎士と共に戦場に帰還した

絶望と救済

「デイルムツド君！」

「無事だったんだね！」

強襲によるダメージを与えた隙に、管制人格とビーストから距離を取り、建物に影に身を隠す。

ようやく一息吐ける場所に辿り着くと、無事に戻ってきてくれた少年の姿を見て二人が安堵の声を上げる。

「あまり強力な生物はいなかったからな。特に危険は無かった……魔猪の大群に襲われる以外は」

トラウマを抉る光景を思い出し、死んだ魚の目になったデイルムツドの脚には、銀色に輝く機械の鎧が装備されていた。

これこそがデイルムツドが依頼した機能を搭載した改良型アームドデバイス《グラニア》である。

以前の《グラニア》は空戦能力を与える為に飛行魔法を使用可能にする事に特化させていたが、それを完全にオミットし、代わりに新開発されたAGSと呼ばれるメインシステムを搭載している。

AGS。『アンチ・グラヴィティ・システム』と呼ばれるこのシステムは、装着者に掛かる重力の方向を接地面に合わせる。簡単に言えば重力下でも壁走りを可能にする事ができるという代物だ。

市街戦や広めの室内での戦闘の幅を広げ、空戦能力を持たない魔導師に擬似的な空戦を可能にし、現在は展開していないブースター搭載の槍型デバイスの爆発的な機動力と併用する事で縦横無人に動く事ができる。

以前から計画され開発されていたのだが、AGS発動中は常に接地面に意識を集中させなければならぬという欠陥を抱えており、先日まで計画が凍結されていた。

さらには重力の操作にのみ特化させているだけで、鎧の方にはブースターが無い。使用者の身体能力がデバイスの最大発揮スペックに

なる。

そして、重力補助がデバイス自身に働かないせいで、展開中は常に十キロの重りを抱えたままであるのと同じであり、障害物が無い場所では邪魔なだけの代物である。

結果としてAGS搭載デバイスは、それら問題点を自身の能力で補えるデイルムツド専用装備となった。

——最も全盛期の力が戻れば不要になる物ではあるのだが

再会に喜びを露にしていたのはとフェイトだったが、自分達の命を救ってくれた者達に礼を言っていない事に気付き、二人に向き直る。

「助けていただきありがとうございます！」

「そう畏まらんで良いわ。この程度助けたうちに入らん」

なのはが感謝を伝え、フェイトが丁寧にお辞儀するとイスカンドルが愛嬌を感じさせる笑みを浮かべながら言った。

「ええ。騎士として当然の事をしたままでです」

「えっ！・喋った?!」

その隣にいる全身を漆黒の鎧で覆うランスロットが喋った上に、その言葉が非常に丁寧な物であった事になのはが驚く。失礼な反応かも知れないが、狂化し大暴れする彼の姿しか見ていなかったのだから仕方が無いだろう。

一応先ほど二人を助けた時に宝具の名を叫んでいたのだがそれを聞いている余裕が無く、二人とも驚いてしまったのだ。

「改めて自己紹介をさせていただきます。私はランスロットと申します。以後お見知りおきを」

「よっ……よろしくお願いします！」

なのはの反応にも（甲冑のせいで見えてないが）笑顔で対応し、自己紹介する。

聖杯戦争の時は狂化のせいで暴走していたが、本来ランスロットはモルガンの策謀によって不貞を暴露されるまでは

同胞であるガウエインに堅物と呼ばれる程真面目で礼節を重んじ、理想の騎士道を歩み、多くの騎士から慕われていた人物である。

子供にちよつと失礼な反応をされたくらいで気分を損ねるような小さな男ではない。

「フェイト、状況の説明を頼む」

「実は――」

フェイトができるだけ簡潔に纏めてデイルムツドに伝える。

はやての見舞いに行ったら守護騎士と遭遇し、戦いになった事。その途中で仮面の男が二人出現して守護騎士を裏切つてシユウシユウによつて彼女達を取り込んだ事。そして守護騎士三名を取り込み、

闇の書が起動した直後に現れた漆黒の獣が仮面の男達を倒した事を伝える。

「状況は理解した。あの黒い獣の正体もな」

シャマルを蒐集した直後にアレが出現したと聞けばアヴェンジャーが影響していると考えるのが妥当である。おそらくは彼女に取り付いていたこの世全ての悪を取り込んだ事で闇の書がさらに何らかの悪影響を受けたのだろう。

「ところでデイルムツドはどうして戻れたの？ それに二人とも今まで見つけられなかったのに……」

今度はフェイトが三人が何故一緒にいるのかを尋ねる。デイルムツドは別世界に飛ばされていたし、イスカンドルとランスロットは見つけられないようにハサンが巧妙に管理局を攪乱していた。

バラバラに行動し、管理局が行方を見つけない事ができなかった三人が同時にこの場に來た事にフェイトは疑問を感じてもいた。

「管理局が感知するよう爆発を発生させ、居場所を管理局に捕捉させる事に成功した。代償に宝具一つを使い潰したがな」

「爆発？」

デイルムツドが行ったのはサーヴァントの持つ最終手段の一つ『壊れた幻想』

神秘の具現化たる宝具の力を爆発させることで瞬間的に膨大なエネルギーを発生させる荒業で、発動の代償に宝具を一つ失うので迂闊

には使えない諸刃の剣である。それを攻撃にではなく管理局に対する信号弾として使ったのだ。

「後で詳しく教えるさ。そして管理局に回収された俺は治療を受けていた。その時に大規模な魔力反応が感知され、デバイスを受理して現場に向かった」

「私も結界の発生を察知しこの場に向かいました、チャリオットで上空に浮かんでいたイスカンドル殿を発見致しました」

「余がこの町を出ようとした矢先にこのような物が出てきおつてな。無視する訳にもいくまい」

そうして出会った三人は状況を確認し合ってから結界に侵入した。そこで拘束されて動きを封じられた二人が襲われていたのを発見したという訳だ。

「では問答は仕舞いだ。彼奴もこちらを見つけたようだしのお」

イスカンドルの視線の先には、初撃のダメージから持ち直しこちらに向かつてくる空を舞う闇の書の管制人格と砕いたはずの剣を持ってビルの上を駆ける漆黒の獣の姿があった。

「あの獣は俺達が抑える。二人とも増援が来るまで無理はするなよ？」

「貴女達はマスターに呼び掛けてください……どうかマスターはやてを救ってあげて欲しい」

決着を付けなければならぬ事があると言っていた友の姿を思い出しながらデイルムツドが破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇を構える。

ランスロットも生前の技術を完全に再現した完璧な構えをしながらも、黒き鎧の中では険しい表情を浮かべ、胸の内では己を責めていた。

「わかったのー！」

「デイルムツド達も気を付けて……！」

なのはとフェイトが管制人格に向けて飛翔する。管制人格はこちらに興味が無いのか、一瞥しただけで攻撃対象を二人に切り替え離れて行く。闇の書にたった二人だけで挑ませるのはあまり得策とは言えないが、ピーストを無視するわけにはいかない。

それに宝具には魔導師のデバイスと異なり非殺傷という概念が存在しない。実際に宝具を使用した戦いでザフィーラの命を奪ってしまっている。

管制人格とはやてが融合している以上、自分達が攻撃を行うのは危険である。デイルムツドはそう考え、二人に管制人格のを任せただ。

一方ランスロットは生前の技術を完全に再現した完璧な構えをしながらも、黒き鎧の中では険しい表情を浮かべ、胸の内では己を責めていた。

自身の行動が悪手となる。生前の彼が持つ後悔の一つである。ランスロットが単独行動をとったのは八神家という輝かしい場所を壊してしまうと恐れたから。

己の不義によって大切に守りたかった円卓の崩壊を引き起こした事が完全な騎士の心に弱さを与えてしまった。

彼女達の大切な世界居場所を壊してしまうのならば、己は永遠の孤独の闇にいる方が良いと思い、離れた事がこのような結果を招いてしまった。

その事を強く後悔していたが、以前のように逃げる気はない。

一つは代償行為。かつて果せなかつた主君への忠義を今度こそ果たす。かつて聖杯戦争でデイルムツドが願った事と同じ悲願を叶えたという想い。そしてもうひとつは彼の目の前にいる漆黒の獣を討つ為。

「その聖剣にかの王以外が触れる事は許さぬ。王の誇りを汚す無礼を償って貰う」

ビーストの手にある剣は歪に歪んで変貌し、邪剣のようになってはいたが、その剣の輝きを傍で見続けていた彼が気が付かない筈がない。その剣に誇り高き騎士王が持っていた勝利の剣の面影がある事に。

償いと敬愛の心。湖の騎士がこの場で命を賭けるには十分であった。

「ふむ……」

フィオナとブリテンの騎士がそれぞれの思いを胸にビーストと向かい会っている中、マケドニアの王は『軍略』と『カリスマ』スキルによって戦況を見定め、最適な指揮を行おうと冷静に思考していた。

イスカンドルに参戦する理由など無い。

はやてと出会ったのも一度、確かに彼女から特別な物を感じたがそれだけであり、それ以上の感情は無かった。加えて守護騎士を臣下に加える意思も無い以上、イスカンドルにこの戦いがどうなっても利益を与えない。

そんな彼が戦う理由はただ一つ。デイルムツドとランスロットにとっても当然の事過ぎて、わざわざ改めて意識していない大前提の行動理念による物である。

——この地にいる者達の命が危ない

征服王イスカンドルにはそれで十分だった。

「さてどうする？ 征服王」

「指示はお任せします」

イスカンドルの指揮能力が高い事を理解している二人は、この場限りであるが己の槍と剣を彼に託した。

現状でも破格の強さを持つ二人。片方は勧誘を二度も断られた相手、もう一人は狂化していたせいで声を掛けなかっただけで、本来ならばイスカンドルの目に十分適う者である。

そんな英霊二騎に采配を任された征服王だったが、その表情は晴れない。

「奴の再生能力は相当の物のようだ。並の攻撃では効かぬかもしれない。」

難しい表情のままにイスカンドルがビーストを睨む。上空から振り下ろされたランスロットの斬撃はビーストの胴体を深く切り裂いていた。

あの位置であればその一撃は確実に心臓を捉えており、相手がサーヴァントであれば現界を維持できない程のダメージであったはずだ

というのにその身体には傷一つ存在しない。

「対城宝具級の一撃ならば確実に討ち取れるであろうが……」

アルトリアがキャスターの操る海魔を消滅させた時の様に、再生する間も与えない強大な一撃を使うのがこの手の相手には有効である。しかし、デイルムツドもランスロットも所有する宝具は対人宝具のみである。

イスカンドルの宝具は共に対軍宝具であるが、遥かなる蹂躞制覇は協力だが相手を一撃で消し去る程の威力は無く、王の軍勢は軍団による制圧攻撃であり軍勢の兵士の個々の力だけを見れば二人の対人宝具に劣る。

「まずは再生不可能の傷を負わせて無力化する。二人の攻撃ならば十分にアレを消し飛ばせるだろうからな」

「それしかあるまいな。余とランスロットであやつの隙を作る。その隙にその槍の呪いを与えよ」

必滅の黄薔薇は治癒不能の呪いを付与する効果がある。それによつて相手の息の根を止めるか、

それが不可能ならば四肢に黄槍を使って致命的な損傷を与えて行動不能にし、その間にデイルムツド達が管制人格の足止めを行つて二人にビーストの撃破を任せる。

二人に頼る事になるがやむを得ない。相性の良し悪しというのはどうしても存在し、今回の場合はそれが顕著なのだ。

「幸いあれは理性なきの獣だ。真名解放や壊れた幻想の警戒は必要――」

無いと言おうとしたデイルムツドが予想外の光景を目にして絶句し、彼の端正な顔が引き攣る。咆哮を上げるビーストの後ろに信じられない物が見えたからだ。

「……なあ征服王」

「……なんだ？」

「奴の背後に見える空間の歪みに見覚えがないか？」

黄金色の空間の歪み。そこから大量の宝具が出てこようとしている光景は既視感が凄かった。

「見覚えがある所ではないわ。余はアレにやられたからのう」

「私も見覚えがあります。というよりもアレで狙われた事が何度かあります」

何かの間違いであって欲しいと思ったが、アレと直接対峙したイスカンドルとランスロットが肯定した事で己の勘違いでない事を悟る。そして三騎士が同時に駆け出した直後、デイルムツド達がいた場所に必殺の威力を持つ宝具が降り注いだ。

『王の財宝』

バビロニアの英雄王が持つ数多の宝具の原典を乱射する大技である。

一撃食らえば即致命傷というとてもない攻撃をビーストは縦横無人に駆け巡りながら射出してくる。

それをデイルムツドとランスロットは敏捷性を生かした回避、イスカンドルは遥かなる蹂躞制覇で宝具を蹴散らして攻撃を食らわないように立ち回る。

「ぐっ……征服王……こちらは俺とランスロット卿で抑える！お前は二人の援護に向かってくれ！」

「むう……すまぬっ！」

ただでさえ素早いビーストが操る宝具の雨を相手に、敏捷性で劣るイスカンドルは不利である。攻撃に転じる隙を無理に立ち回って魔力をいたずらに消費するよりはその方が良いと判断し、イスカンドルもそれに応じてなのは達の元に向かう。

「ちいっ!!」

ランスロットが無毀なる湖光を消失させる。そして飛来してきた『デュランダル絶世の名剣』と『フルンディング赤原猟犬』を掴み取り、支配下に置いた原典宝具で迎え撃つ。

受肉した事でマスター無しで現界できる代償として、魔力供給を受けられないという点がある。無毀なる湖光によるパラメーター補正は失うが、こちらの方法の方が魔力消費が少ないのでやむを得ず自身

の最強宝具を封じたのだ。

「背中は預けるぞ！」

「承知致しました！」

《悲恋忠義》

かつては敵だった二人の騎士がその命を預け合い、ビーストに立ち向かう。

王の財宝から武器を奪い反撃できるランスロットは一見回避しか選択できないデイルムツドより有利に見えるが、長期的に見ればそうではない。

ランスロットは保有魔力はそこそこあるが、強力な宝具をしようする代価に相応の魔力を使用しなければならぬ。反対にデイルムツドの魔力は多くないが常時発動型の宝具はあまり魔力を必要としない為、デバイスに回す余裕さえある。

つまり短期決戦ならランスロットが、持久戦ならばデイルムツドに軍配が上がる訳であり、この場に置いてはデイルムツドが優位に立ち回れる。

「ハアツ!!」

デイルムツドがデバイスの力でビルの外壁を駆けると彼が通った部分に余多の宝具が墓標のように刺さって行く。英霊王と違い、ビーストは宝具の射出時に一ヶ所に留まらない。縦横無尽にビルの間を飛びながら正確に二人を狙ってくるのである意味こちらの方が厄介かもしれない。

「ふっ！」

宝具を奪い、投げ、叩き落としながら接近したランスロットがカロード・ボルク螺旋剣を振るうがビーストはそれを防ぎ、流れるような動作でエアを突き出す。

「大いなる激情！」

ランスロットの腹に剣が突き立てられる直前、デバイスの機能であるウェポンラックに破魔の紅薔薇をマウントしたデイルムツドが接近し、右手に呼び出した剣を真名解放し、破壊の一撃をエアに叩き込み粉碎する。そして武器を失い隙を晒したビーストの脇腹に蹴りを

叩き込み、身体後ろに吹き飛ばす。

「感謝致します！」

「気にするなっ！」

その隙に後退した二人に向け、息つく暇を与えまいと王の財宝が降り注ぐが、それぞれ左右に分散してそれをかわした。

「くっ！また武器が……」

「厄介だな……！見た目だけで中身が伴って無いのが救いか……！」

デイルムツドがウエボンラックに大いなる激情をマウントし、紅槍を構え直しながら再びエアを手にしたビーストを睨み付ける。

変異劣化した神造宝具をこうまで連続で元に戻せるのは、未来においてアヴェンジャーの依り代となるとある少年の力が影響している。それを今の二人は知ることができないが、わかった所で対処はできなかっただろう。

「何としても一撃を通す……！」

「援護致します！」

最悪の化け物相手に獅子奮迅の闘いを繰り広げていたが、莫大な魔力の奔流が放たれた直後、ビーストが二人に背を向けて走り出す。

「不味いっ！」

ビーストの進行方向では管制人格がスターライトブレイカーを放ち、ビーストは王の財宝の矛先を障壁を展開するフェイト達に向けていた。そして管制人格の攻撃が収まった瞬間を狙い、収束砲を防いで疲弊したフェイトに向けて宝具が放たれようとした。

デイルムツドがその敏捷を生かして放たれる宝具の速度を越える速さでフェイトの所に向かった。

管制人格の攻撃を防ぎきり、この結界に迷い混んでしまったアリサとすずかを逃がす事に成功したフェイトは一瞬警戒を解いてしまう。

その為、管制人格の後ろから攻撃を放つビーストへの反応が遅れてしまふ。

「フェイトちゃんー！」

なのはが幾つか宝具を撃ち落とすが、間に合わず、飛来した紅い槍がフェイトを貫こうと迫る。自分を殺す一撃に思わずギュツ！と目を閉じたその直後、肉を穿つ嫌な音と共に、血が飛び散りーフェイトの顔に温かな血が付着した。

「…………え？」

フェイトの可愛らしい顔を鮮やかな紅が汚していたが、深紅の槍はその身を貫いていなかった。じゃあこの血は誰のものかと目を開ける。

「あ…………」

フェイトが見たのは死よりも恐ろしい絶望だった。彼女を庇うように立つ少年、デイルムツド。その胸を貫いていたのはフェイトを貫こうとした深紅の槍だったのだから。

「がっ…………ぐっ…………！」

デイルムツドが苦悶の表情と声を出す。受け止めようとした大なる激情は砕かれ、槍は心臓を貫いてしまった。

貫かれた心臓が破裂した衝撃で肉体がショック死しそうになるのを身体中の魔力を集中させて抑え込み、激痛によって意識が消えそうになるが、意識を手放せば二度と目覚めないと思い、精神力で繋ぎ止めた。

「…………無事——か？」

致命傷を負いながらデイルムツドは自らが守った少女に声をかける。

「…………っ！早く治癒をー！」

フェイトは発狂し叫びそうになったが、デイルムツドを死なせたくない想いが辛うじてそれを抑え込み、不馴れな治療を施そうとした。

「いや…………」

デイルムツドは致命傷を負ったというように冷静に…………いや致命傷負ったからこそそれを断る。

「なんでっ!?大丈夫だよ!アースラでならっ!」

かつて母を失った時のように目の前で大切な人が消える恐怖がフェイトを襲う。だが、冷静なデイルムツドの頭は己を貫いた槍が何か理解していた。

「この槍は——アルスターの光の——御子の——この傷は——
癒えない」

血を吐きながら事実を告げる。

アルスターの光の御子、クー・フリーン。槍使いであるデイルムツドがケルトの大英雄の槍を見間違うことはない。

『刺し穿つ死棘の槍』

それは因果逆転の槍。心臓に命中するという結果を確定し、放たれた槍は担い手が死んでもその心臓を穿つ。ビーストは魔名解放は不可能だが、ゲイボルグの呪いである治癒阻害の効果は存在している。必滅の黄薔薇と違い永続的ではないが、治癒阻害が解ける頃まで自身が生きていられないのはわかる。

死に行く運命を受け入れたデイルムツドは、力が抜けそうな身体に魔力を行き渡らせて出血を抑え込む。

「三分——」

「えっ?」

「奴を——止める。その間に——逃げろ」

途切れそうな意識の中、生命活動が終わるまでの最期の時間を全員が離脱する為の殿に使う道を選んだ。

「そんなのダメ——」

「あちらは私が抑えます」

止めようとしたフェイトの言葉を遮るようにランスロットが前に出る。その視線の先では無感情に此方を見下ろす管制人格がある。

「……感謝——する」

「おきになさらず。王の退路を開くのは騎士の務めでしょう。それではイスカンドル王。皆を頼みます」

「……任されよう」

そう言うといスカンドルは、この場に残ろうとしていたのはと

フェイトを掴み上げ、チャリオットに載せると疾走する。

「デイルムツド——！」

フェイトの叫びを背に受けながらデイルムツドが破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇を構える。

「さあ……ここから先には行かせんぞ」

「アーサー王……どうか見届けてください」

負けが決まった戦いが最期であるのは無念であるが、それで守られる命があるなら無意味ではない。そう信じて希代の英雄は絶望に向けて駆けた。

助からないならば出し惜しみも負傷も恐れる必要がない。防御を捨て、回避を最小限に抑えてデイルムツドがビーストに槍を放つ。ビーストのエアが胴を裂くがビーストの身体を紅槍が穿ち、黄槍が右腕を斬り落とす。

口からは血を吐き、血涙を流しながら修羅となったデイルムツドに美しさの面影はない。だが、僅かな命の焰を燃やしながら守るべき者の為に戦う姿はその魂を輝かせている。

その身を斬り裂かれながらもデイルムツドが放った渾身の黄槍による一撃がビーストの首を斬り落とすと同時に、燃えすぎた蠟燭がきえるように、その命も尽きていく。

そしてデイルムツドの身体が死を迎える刹那——

アロンダイトを解放したランスロットが鎧を砕かれながらも奮戦する。対魔力を喪失した彼は管制人格の攻撃に身を裂かれながらも全力の斬撃を放ち、堅牢な障壁を粉碎する。

「マスターはやて！目を覚ましてください！貴女はここで死んではなりません！」

肉薄したランスロットが負傷しながらも闇の書の中にいる彼女に

呼び掛ける。

「がっ……!!」

しかし、無情にも想いは届かず、管制人格はランスロットの身体を貫いた。

「まだだ——！」

ここまでランスロットが迫ったのは無駄死にするためではない。管制人格の手にある『武器』ストレージデバイス闇の書を掴みとる。

強力なレジスト効果があるようで騎士は徒手にて死せずでも支配権の完全な奪取はできなかったが、闇の書の一部の制御を奪う事には成功し、闇の書に記録された魔法を読む。

「これならば——！」

そして、その術式を強制起動した。その瞬間、討ったデイルムツドの身体が消滅する。だが、必滅の黄薔薇によって付けられた傷は戻らず、不滅のビーストはその身体を維持できず消滅した。

仮面の男から聞き出していた闇の書の情報。ランスロットはそれに賭けた。

それは闇の書に備わっている肉体ごと生きてまま夢に取り込む能力。致命傷を負ったデイルムツドを救う為、そして闇の書の内部に侵入するためにこの魔法を使わせたのだ。

「私達は内側で戦います……外は任せましたよ……」

ランスロットも自らを吸収させる事で内側に侵入する。

——眠れる王を目覚めさせるために

幸福な夢の中で

英霊二騎の奮戦によって離脱の猶予を手にしたイスカンドルが境界の外に出る。

撤退には成功したが、こちらが負った損害はあまりにも大きい。

結界内の様子は視認できないが、膨大な魔力の奔流が渦巻く中で管制人格とピースト滅びを齎す存在とデイルムツドとランズロット人類の守護者たる英霊が激突している気配は結界の外まで伝わっていた。

二人を安全な場所に連れ出す事には成功したが、状況は最悪と言ってもいいだろう。

デイルムツドが宣言した時間は三分だが、それはあくまで最大で彼の身体が持ちこたえる事の出来るという意味だ。故に与えられた時間で最大限に思考し、打開策を考えねば二人の犠牲が無駄になる。

イスカンドルはこの三分が絶対時間であると疑っていない。自らが認めた騎士が約束した時間を守らない事などあり得ないと一種の信頼を持っていたからだ。

とはいえ現状の戦力ではこの劣勢を打ち破るのは不可能に近いとイスカンドルは考えていた。

勿論単純な戦力という意味では、自身の率いた最強の兵を顕現させる王の軍勢を持つこちらが圧倒的有利ではあるだろう。

だが、この戦いで求められるのは数の暴力ではなく、必殺の一手を持つ個である。

だから先ほどは固有結界の展開をせず、神威の車輪による援護に徹し、切り札を温存する方向で戦っていた。

それでもあの状態で互角どころか優勢に戦闘を進める事が出来たのは、軍団に匹敵する魂と強さを持つ英霊二人と、強大な魔力を持つなのはとフェイトという軍勢をイスカンドルが指揮をした事で『カリ

スマ』スキルの恩恵が発動したからである。

「デイルムツド……」

フェイトが茫然自失と呟く。デイルムツドが自分を庇って致命傷を負った事でフェイトの精神は何とか崩壊はしていないものの、とても戦闘継続できる状態ではない。

この状態の子供に戦いを強要するような酷な真似はできない。無理に戦わせて死なせる事になれば、それこそデイルムツドの行動が無駄になってしまう。

「フェイトちゃん……」

反対になのはは戦闘継続の意思を持っていた。これは別に彼女が冷酷なのではない。目の前で友が致命傷を負ったというのに何も出ずに逃げる事しかできなかったのだ。本当は彼女も泣きたいはずである。だがなのはは彼女が最期の力を振り絞って自分達を逃がしてくれた事を無駄にしない為に、折れそうな心を支えて前を見て、折れてしまった友を気遣っているのだ。

(小娘……いや、なのはと言ったか。見事な強さである)

イスカンドルは目の前の少女から民草の希望となる者。英雄の資質を感じた。征服王は高町なのはこの存在を認めたのだ。年齢などは関係なく、純粹に臣下に欲しいと思えるほどに。

別にフェイトが弱いとは思っていない。今はイスカンドルが生きただ常に生死を賭けていた戦乱の世ではないのだ。平和なこの時代では自身や友が死ぬなど常に想像している者はいないだろう。

それを考えれば目の前で親しい者が死んだフェイトの反応はむしろ歳相応の反応であろう。

(だがその強さを持つのは早い)

だからイスカンドルは認めると同時に高町なのはを否定した。自己の心を殺し、己を蔑ろにして他人を救う事ばかりを考える。騎士王を思わせる姿に僅かに眉を潜めるが、今はそれを考えている余裕が無いと思いを切り替える。

「足りぬな……」

戦力はイスカンドル自身となのはだけ。仮にビーストか管制人格

を二人が道連れにしても厳しいだろう。

この戦いはイスカンドルに利は無い。

しかし、これは自らの意思で参加した戦い。それに敵だったディルムツドとランスロットが己を信じて剣を託され、止むを得なかったとはいえそんな彼らを死地に残して下がってしまった。

英傑両雄を犠牲にして己だけむぎむぎと敵に背を向けるほど、征服王イスカンドルの誇りは安いものではない。

「フェイトッ！……ってあんたは?!」

「む?」

そんな事を思っていると第三者の声が響き、そちらに視線を向けるとそこには転移魔法で飛んできたアルフ、ユーノ、クロノの姿があった。

「……何があった?」

虚ろな眼……かつて母親にその存在を否定された時と同じ眼をしているフェイトを見て、クロノが尋ねる。

原因がイスカンドルだと思っているのか、アルフは駆け寄ってチャリオットに座っていたフェイトを抱きかかえて離れた後、こちらを睨みつけてきた。

答えようとしたイスカンドルだったが、残酷な事実を告げようとしたところでピタリと止まった。

結界の中に点在していた四つの強靱な魂のうち三つの気配がほぼ同時に消失し、残った一つが膨れ上がったのを感じ取ったのだ。

「彼奴め……二人の魂を喰らいおったか!」

「なんだ……! この出鱈目な魔力は!」

イスカンドルが叫んだと同時に結界の中から三つの魂を吸収した存在、管制人格が姿を現す。その存在感、魔力は尋常な物ではなかった。

オーバーSなんて言葉では言い表せない莫大な魔力を感じてクロノが戦慄する。

完成した闇の書に加えて、ランサー、バーサーカー。そしてアヴェエンジャーと三騎の英霊の魂を獲得しているのだ。

破滅を撒き散らす存在が人を超えた者を取り込んだ。その結果どうなるかなど嫌でも理解させられてしまう。

「デイルムツド達の魂を喰らったのだ。当然であろうな」

「何だと……？」

信じられない事を聞いたという表情を浮かべるクロノ達を無視してイスカンドルは目の前の敵と対峙する。

「あいつが……いー デイルムツドを……いー！」

するとアルフの腕の中で虚ろな眼をしていたフェイトが明確な感情を浮かべて管制人格を睨み付ける。彼に致命傷を与えたのはビーストであるがそんな事は今のフェイトには関係ない。

管制人格から生まれた存在がデイルムツドに死の一撃を齎し、挙句にその魂を飲み込んだ——その事実だけでフェイト・テスタロッサという純粋な少女の心を憎悪という黒い悪意が穢すには充分だ。

普段の彼女であればここまで心を闇に飲まれる事はなかっただろう。しかし、彼女が憎しみを向けている闇の書はこの世全ての悪を取り込んだ。

人々の悪意、その全ての体現者と化した管制人格はフェイトの憎悪を肯定し受け入れてしまう。

フェイトの心に生まれた小さな悪意ビーストは八神はやてに感じていた友情をも喰らい膨れ上がっていき、その清廉な心をどす黒く染め上げる。

「うああああああっ!!!」

明確な殺意を自覚したフェイトがをアルフの腕から飛び出し、ハーケンフォームに変化させたバルディッシュで管制人格に斬りかかるが、その渾身の一撃を管制人格は呼び出した武器で防ぐ。

「あ……」

追撃しようとして構えたフェイトだったが、管制人格の手にあった武器を見て動きを止めてしまう。

その僅かな硬直を見逃さず、管制人格が武器の切っ先が向けるが、フェイトは障壁を展開しない。それが無意味だと知っていたからだ。

何故ならその手に在ったのはフェイトがずっと見ていた少年の持つ真紅の魔槍だったのだから。

「フェイトちゃん！」

「フェイト!!」

無情にもその真紅の刃がフェイトの心臓を貫く直前、闇の書の手に魔力弾が着弾、それと同時にフェイトの身体が緑の鎖に捕らえたかと思うと一気に皆の元に引き寄せられた。

なのはがアクセルシューターで管制人格を攻撃し、怯んだ隙にユーノがチェーンバインドでフェイトを攻撃範囲から逃したのだ。

未だに睨んでくるフェイトを無表情に一瞥した管制人格が左手を掲げる。するとその手と周辺に金色の魔力が収束していく。

フォトンランサー・ジエノサイドシフト。フェイトを蒐集した事ではにした魔法を闇の書が自身に合わせて調整した広域拡散射撃魔法である。

——ビキリと嫌な音が周囲に響く。管制人格の周囲に球体が形成されていく事に、街を覆っていた結界がひび割れ、崩壊を始めているのだ。

「結界に使っていた魔力まで集めている?!」

「結界も無い状態であんな攻撃を撃つたら……!!」

最悪の予感にユーノとクロノが戦慄する。足元の結界はすでに崩壊寸前で、そんな状態であの攻撃が放たれてしまえばこの街は消滅するだろう。

それを阻止しようとクロノ達が動いたが、それよりも先に管制人格の魔法が完成し、破滅を引き起こす死の一撃が放たれる——

「集えー！ 伝説の勇者達！ 王の軍勢!!」

イスカンドルが英霊の座にいる幾千の朋友に一斉号令をかけた。

その瞬間膨大な魔力の奔流が、泣きそうだったなのは、憎悪に飲まれていたフェイト。そんな二人を援護しようとしていたユーノとアルフ、師から託された切り札を発動しようとしたクロノ。

そして、多くの生命を消し去ろうとした管制人格までもが、晴れ渡る蒼穹と熱風吹き抜ける広大な荒野と大砂漠へと吸い込まれていった。

後に残されたのは結界が失われて動き出した、クリスマスイブの夜

を過ごす人々の穏やかな日常の姿だった。

「つ……………」

木漏れ日から溢れる光にデイルムツドが目を潜める。

——俺は何をしていたのだろうか？

記憶に霞がかかっているかのように思い出せない。回りの景色もデイルムツドの心が反映したかのように朧気で曖昧だった。

「どうしたの？ デイルムツド？」

隣から聞こえてきた声に振り向くと大切な人の姿があった。

「すまないグラニア。少し考え事をしていた」

「疲れているの？ 休んだ方が……………」

「大丈夫さ。それに折角良い天気だというのに室内に籠るのもな」

そう言っ隣に座るグラニアに笑いかける。

なんで忘れていたのだろうか。彼女の顔を見た瞬間、霞がかった景色が晴れ、記憶が戻ってくる。

今日は久々に晴れたのでグラニアと共に近くの森に散歩に出かけたのだ。

「多少は疲れているがな。フィンの奴が『グラニアを娶ったのだからこれくらい手伝え』と仕事を押し付けてきたからな」

「まあ」

フィンの真似をしながらそう言うとグラニアが笑った。

グラニアとデイルムツドが駆け落ちした事で最初は色々あったが、フィンも今では祝福してくれている。

先日フィンとオスカーと共に猪狩りに行ったりと良好な関係を築けている。

デイルムツドはゲツシュによつて猪以外を狩っていたが楽しい息抜きになつたものである。途中で魔猪に襲われたが三人で討伐して事なきを得た。

「そういえば先日は君の忠告を聞いて助かったよ」

「貴方が無事で良かったわ」

グラニアの忠告通りに破魔の紅薔薇と大いなる激情を持つていたお陰で助かったものである。もしも当初の予定通りに必滅の黄薔薇と小なる激情で狩りに向かつていればどうなったか。

多少は負傷したものの、フィンの治癒によつてそれも直ぐに癒えたので問題ない。

色々あつたがそれを乗り越え、かけがえのない友と大切な妻を手に入れた。

デイルムツドは幸せだつた。だが幸せである筈なのにどこか矛盾を感じていた。

何か大切な事を忘れている。そんな違和感デイルムツドの中にはあつた。

「ぐっ……!?!」

忘れては行けない何か。それを思い出そうと意識した瞬間、痛みが走つた。

「そろそろ行きましょう。今日はオスカーと会うんでしょう?」

「……ああ」

キオクが思い出してはいけないと警告するがココロがその失われた何かを求めている。

——俺は何を忘れている?」

まるで夢のような幸福の中で、デイルムツドは現実を探す。

「……っ?!」

唐突にその脳裏には浮かんだのは、茶色い髪足の不自由な少女と涙を浮かべて此方を見ている金色の髪の少女。

二人を知っているという確信はデイルムツドの中にあつた。同時

に何か守らなければいけない大切な『約束』をしたという事も。

だがまるで何かが邪魔しているかのようにその顔も、約束も思い出すことができなかった。

荘厳なる雰囲気のある部屋。その中央に置かれた円卓の席では壮絶なる意見の激突が行われていた。

「いい加減にしなさい」

「うるせえ！ 父上のバーカ！」

「なっ！ 親に向かって何て口を聞くのですか！ あっ！ クラレントは返しておきなさい！」

円卓の騎士を束ねる王、アルトリア・ペンドラゴンとその血を引くモードレットの親子喧嘩である。

会議に参加できないモードレットが乱入する事で巻き起こるのだが、もう慣れたのか他の騎士達は温かい目で見ていた。

「モードレットは相変わらずですね」

「そう……だな」

隣に座るガウエインが走り去っていくモードレットの後ろ姿を眺めながら苦笑している。それをランスロットも目で追いかけている。相槌を返した。

怒りながらもどこか楽しそうなアルトリア——

真面目で誠実だが時にズレた行動をとるガウエイン——

子と認められた喜びを表現できずにいるモードレット——

他にも回りを見るとトリスタン、ベディヴィア、ガレス、パーシヴァル……他にも沢山の共に戦った円卓の朋友の姿があり、皆満ち足りた表情をしていた。

——理想の王の元に集う誇り高き騎士達

この光景が夢であると気が付いていた。自らが壊してしまった理

想を体現した幸福な夢だと。己には為すべき事があり、目覚めなければならぬのだと。

現実の自身がどうなっているかは思い出せなくともそれだけははっきりと理解していた。

だがそれを果す為にはこの奇跡の光景を捨てなければならぬ。ランスロットはそれを躊躇ってしまった。

彼だって英雄である以前に人である。目の前に二度と得る事が出来ない景色があり、ここにいればその幸福を享受できるのだ。

それを姿も思い出せない相手の為に切り捨てる事を躊躇ってしまったとしても罪ではない。だが、同時にその相手を救いたいと決意した事も彼の心は覚えており、それが騎士の心を惑わせていた。

覚醒する両雄

「なん……だ？ここは一体？」

目映い閃光に思わず目を閉じてしまったクロノが目を開くと、信じられない光景が広がっていた

暗い地球の空は跡形もなく消え去り、遮蔽物の一切存在しない一面の大砂漠という悠久の世界に変わっていた。

「これぞ余の最強宝具、王の軍勢。余と臣下の心情景色」

「固有結界か……！」

イスカンドルの力としてその存在をクロノはデイルムツドから伝えられていた。

正直クロノは固有結界を幻覚のような物だと思っていたが、いざそれを身を持って体験してみるとそれが間違いであったと知る。

心の風景を展開して相手を引きずり込むなど言われても、

この瞬間までその恐ろしさをデイルムツドの世界の魔術を知らないクロノは理解していなかったのだ。

幻覚などではない。今自分がいるのは征服王イスカンドルが支配する世界にいるのだと、はつきりと理解させられる。

「なんて宝具だ……」

魔導師を殺す破魔の紅槍、癒しを許さぬ必滅の黄槍といったデイルムツドの持つ力とは違った、自身な存在を揺るがすような圧倒的な暴威。

正しい世界をねじ曲げて己の世界を創造する。まさに世界への反逆とも呼べる行為を目の前の男は為したのだ。

「集えい！余の友達よー！」

イスカンドルの号令が悠久の大地を震わせ、それに呼応し、砂塵の地平線が揺らいだ。

——オオオオオオオオオオオツ!!!

王の言葉に呼応して現れたのは無数の軍勢。

それも一人一人が猛者であると肌に伝わってくる。近接戦闘の鍛錬もして少しは自身が付いていたのが馬鹿らしくなるほどである。

「さて坊主。余らが時間を稼いでおる間に策を講じれるか？」

これなら闇の書を倒せるのではないかと思っていたクロノに、イスカンドルがそう尋ねてくる。

「どうしてだ？ これだけの英雄がいるならば……」

「世の朋友は確かな強さを持つ。だが余の力の限界として宝具の再現はできません。この意味はわかるな？」

デイルムツドもランスロットも基礎の部分でも一線を画しているがやはりその強さを根幹には宝具が存在している。

それを持たないという事は英雄本来の力を発揮できないという事であり、つまりは決定打を与える事はできないという事だ。

「結界の展開は友達が行う故、半数が斃されれば維持できません。アレが相手ではおそらく十分程度が限界であろう」

「いや……充分さ。まずは外の結界を張り直す。僕達を外に出せるか？」

「相分かった。そちらの用意ができたなら強く念じてみよ。それに合わせて結界を解く……その金色の小娘」

イスカンドルがなのはに気遣われているフェイトに声を掛ける。

「貴様に戦え等とのたまう気は無い……だがな貴様を庇って散った彼奴の意思を無駄にしてやるでないぞ」

それだけ告げるとフェイトが何かを言う前に手を横に振るう。その次の瞬間、クロノ達の前から悠久の荒野は消え、夜の帳が下りた海鳴の空へと投げ出されていた。

「時間が無い。まずは結界を再構築して街を保護するぞ！ ユーノ、アルフ！ 手伝ってくれ！」

「……わかった」

「う……うん……」

俯いたままのフェイトを気にしていた二人だったが、時間が無い事がわかってるので境界の再展開と強化へと向かい、この場にはフェイトとなのはが残された。

「……なのは」

「うん……」

しばらく沈黙を守っていたフェイトがポツリと言葉を呟く。なのはは急かす事はせず、彼女の次の言葉を待った。

「私……戦うよ」

そう宣言するフェイトの瞳には光が戻っていた。さつきまでは取り落としそうだった程辛うじて掴んでいたバルディッシュを強く握りなおす。

「……闇の書さんが許せないから？」

復讐心に囚われていないのはその様子からわかっていたが、フェイトの意思を確認する意味を込め、なのはがそう尋ねる。

「ううん、違うよ。だってデイルムッドはきつと……そんな事望まないから」

そんななのはの想像通りの答えをフェイトは返す。

「友達を……はやてを助きたい。デイルムッドだってそうして欲しいって思っているはずだから……バルディッシュ、アレをしよう」

《Yes sir. A h l s p e i e s s f o r m. 》

フェイトがバルディッシュを振るうとカートリッジがリロードされ、その形が変化した。

——アールシエピースフォーム

デイルムッドから学んだ槍術を活かす為にバルディッシュが改修時に設計を依頼したフォームで。刺突に特化した独特な形状を持つ。

柄が短く魔力を放出する杖先の部分も小型化され、穂先となる魔力刃が全体の半分の長さもある。最大の特徴として槍にしては珍しく柄と魔力刃の間に鏢が存在し、槍でありながら懐に入られても競り合えるという特徴を持っている。

これはデイルムツドのように通常の槍でも防御も攻撃も完璧に切り替える事ができなかったフェイトに合わせて調整された物だ。

直後、先ほどよりも強力な結界が海鳴市を覆う。するとそれに合わせた様にイスカンドルと管制人格が再び姿を現した。

「ほう……」

先ほどとは打って変わった様子のフェイトを見てイスカンドルがニヤリと笑みを浮かべる。

「意思は固まったようだな」

「はいっ！」

イスカンドルの問いかけにフェイトが力強く応じる。

——そして再び戦いが始まった

グラニアと一度別れた後、デイルムツドは新緑に包まれた森の中で友を待っていた。

「思い出せん……」

夢と現——まるで自分がその境界にいるような曖昧さがずっとその身を蝕んでいる。まるで自分が心地良い夢の仲にいるような――

「っ?! フェ——」

その瞬間、自己が揺らぐような恐ろしさがデイルムツドを襲い、同時に何かを思い出すかのよう——の名前を口に仕掛けた。

「……今……のは？」

先ほどグラニアといた時いた少女の姿が浮かんだ。今度はその名前と共にである。

——思い出す必要はありません

掴みかけた消えた記憶の手がかりとなる名を掴もうとしたが、脳裏に響く声がそれを阻む。

「……そうだな……別に思い出す必要も——」

「何が必要無いんだい？」

声を受け入れ、思い出すことを止めようとしたデイルムツドに後ろから懐かしい声が聞こえた。

声に反応し振り返るとそこには待ち人であった親友のオスカの姿があった。

(懐かしい?)

自身の抱いた感情に戸惑う。懐かしいという程会っていないかった訳ではないはずだというのに。

「君はもう気が付いているんじゃないのか？　ここが幻想の世界であるってさ」

「幻想……」

オスカの言葉が記憶を覆っていた霞を払っていく。

「ああ……そうか……」

思い出した。

かつてこの時代に生きたデイルムツド・オデイナは死に、聖杯戦争に参加するサーヴァントとして現界した事を。

そしてそこで敗れた後、何故か異なる世界に飛ばされた自分がその先で戦っていた事。そして闇の書から現れた黒い獣の槍に穿たれた事を。

「ここは英霊の座か？」

槍に穿たれた後の記憶が曖昧であったが、受けた傷は確実に致命傷であった。

デイルムツドは死に、英霊の本体が眠り写し身となっていたサーヴァントが戻る場所である座に戻ったのではないか。

「正確には現世と英霊の座の境界だよ。致命傷を負った君はあの闇の書という存在に肉体を吸収された。」

普通ならば器を失った英霊は座に戻るんだが、君の魂は闇の書に囚

われてしまった状態なんだ」

座に戻ろうとする力と魂を捕らようとする闇の書の力。二つの大きな力に引き寄せられあつた結果、デイルムツドの魂はどちらでも無い狭間に捕らえられているのだと。

「お前は……オスカではないのか？」

「どちらとも言えないね。僕は君の中の記憶にあるオスカを闇の書が再現した存在。だけど同時に英霊の座にいる僕の本体ともリンクしている。サーヴァントに近い存在と言っていていいかもしれないね」

デイルムツド・オディナの親友という側面から召喚されたサーヴァントと言つたところかなとオスカが笑いながら言つた。

「英雄デイルムツド。君はこのまま心地よい幻想ユメの中にいたいかい？」

それとも悲しいけど確かな現実に戻りたいかい？」

オスカが問いかけにはすでにデイルムツドの答えを確信している響きがあつた。だからデイルムツドはそれに応じる。

「戻るさ。為さねばならない事が残っているからな」

「流星は僕の親友。君ならそう言つてくれると信じていたよ。再び立つ君に力を渡したい」

「……力？」

「ここは英霊の座と繋がっている。だから君の宝具の力を戻す事ができるのさ」

いつの間にかデイルムツドの周りに破魔の紅薔薇、必滅の黄薔薇、大いなる激情、小なる激情が地面に刺さっている。その光景は初めてあの世界に來た時の事を思い出させた。

四つの宝具が眩く輝き、すぐに光が収縮する。形状に変化は無いが、放つ力は今までと比べ物にならなかつた。

「後はこれは僕個人の手向け……どうか受け取って欲しい」

「っ!! この槍は……!!」

『破滅の蒼薔薇』……祖父から託されていた神槍だ。僕はもう君を助けて上げられないけど、

君が本当に危険になつた時、その槍が必ず僕の変わりに君を救つてくれるはずだよ。祖父も君を見殺しにした事をずっと悔いていたん

だから」

「フィンが……」

受け取った蒼く輝く槍を見つめながらデイルムツドは呟く。その瞬間槍は消失し、姿を消したが、その存在が己の中に在る事は実感できる。

「恨んでいたのも事実だけどね。君が死んだ後ずっと後悔してた。……僕はそれでも祖父を最期の時まで許せなかった。それが僕の後悔だよ」

「オスカ……」

「……さて！ 名残惜しいけど時間が無い。お別れだよデイルムツド」

オスカがそう言うのと周囲の風景が崩壊を始めた。まるで鏡が割れるように、空に湖に地面に亀裂が走る。

色々話したい事はたくさんあったが、その全てを一言に込める事にした。

「また会おう。我が生涯の友よ」

「待っているよ。僕の最高の親友」

——そして幻想の世界は砕かれた。

「——サー・ランスロット」

葛藤するランスロットに優しく声が掛けられる。顔を上げるとアルトリアが穏やかな表情で此方を見つめてる。

「貴方が守った者は幻想から目覚めましたよ」

「……そう……ですか」

その言葉を聞いた瞬間、ランスロットは全てを思い出す。既に円卓

の騎士達の姿は無く、

荘厳な広間にはアルトリアとランスロットの姿しかなかった。

「私には夢から覚めないという選択は選べないのでしょいか」

「ここについては貴方が消えてしまえます。私はそのような事を望みません」

「厳しいお方だ」

思わず笑みが浮かんでしまう。

目の前にいる王がランスロットが自身の記憶から再現しただけの模倣なのか、それとも本物なのかどうかは判断できない。

だがそれでも——目の前にいる王は今のランスロットにとっては確かに己が心から敬愛した御仁であった。

「アーサー王。再び貴方の騎士となる事を認めてください」

ランスロットはかつて苦悩から逃れるために捨ててしまった騎士の誇りをもう一度求めた。

「その願いを受け入れましょう」

アルトリアの元に歩み寄り、魔剣と化した己の剣を差し出すとそれをアルトリアは拒むことなく受け取る。

騎士叙任式——騎士になるに相応しいと認められた者に行う儀式である。

王の前に跪くと、アルトリアは受け取った漆黒に染まった無毀なる湖光とランスロット自身に祝別の言葉を送る。

宝具化した無毀なる湖光には鞘が無く、佩剣はできないので、そのまま刀身で軽く肩と首を三度打ち、ランスロットの手の甲に接吻を与える。

再び無毀なる湖光を受け取り、眼を閉じてランスロットが誓いの言葉を唱える。

「これは……」

儀礼が終わり眼を開くと、黒く禍々しかった刀身は、在りし日の美しい白い輝きを取り戻していた。

「行って参ります」

聖剣へと戻った無毀なる湖光を携え、アルトリアに背を向ける。こ

の夢から醒めれば王と巡り合える事はおそらくはもう叶わないだろう。だが、もしも奇跡が起きて再び謁見が叶うことがあるのなら。「貴方の騎士で在ったという誉れに恥じない者となる事をお約束致します」

——そう誓いを立て、ランスロットは幻想ユメの世界を斬り裂いた

闇を裂く光

偽りの世界の景色が硝子が砕けるように消滅する。

闇の書の中に在る冷たい漆黒の世界で全ての記憶を思い出し、周囲に視線を送るとそこには八神はやたと彼女に寄り添うように管制人格の姿を見つけた。

「久しいな。はやて」

「デイル……君？ なんやえらい大きくなつたらへん？」

「ああ。恐らくはこの場所では肉体の枷を失い、魂のみが在る場所だからなのだろう」

デイルムツドの姿は少年のそれではなく、生前の全盛期。すなわち聖杯戦争時に召喚された姿になっている。おそらくは魂の姿が反映されるこの空間ではデイルムツドの本質である本来の姿を取ることができているのだとデイルムツドは推測した。

「俺の夢を視たようなので既に気が付いているだろうが改めて名乗ろうか。フィオナ騎士団の二つ槍。輝く貌のデイルムツド・オデインだ」

「ケルト神話の英雄……本物なん？」

今度は騎士として目の前の少女に名乗る。日本での知名度は低いので普通はわからない筈だが、出会った時に自身の正体に気が付いた事にはそれなりに驚いたものである。

「騙っていたつもりはなかったが、語れぬ事情があったからな。不快にしたなら詫びよう」

「いつ……別にそんな事はあらへんけど……」

幸い黙っていた事に怒りはないようだ。頬が赤いのは気のせいだろう。気のせいに決まっている。

「そっ……それよりデイル君は大丈夫なん？」

外の光景が見えていたのか、知覚したのかはわからないが、デイルムツドの身に何が起きたかは理解しているようで、心配そうに声を尋ねてくる。

「この中から脱出できてない状態を無事呼ぶかはわからんが、記憶と自我は問題ないな。再会を祝いたい所だが……今はそうも言つてられんか」

「うん。ここから早く出えへんとみんなにもっと迷惑かけてまう……」

「そうだな。だがその前に……はやて、俺は君に詫びなければならぬ」

理由はどうであつても彼女の事を大切に想い、想われていた守護騎士ザフィーラを討つた事を謝罪する為に、膝を付いて少女の視線の高さまで頭を下げる。

「俺は君の家族を——」

謝罪の言葉を伝えるだけでは意味が無い事は分かつている。しかしデイルムツドは自身の過ちを隠す事ができるような性格ではなく、少女の幸せを奪つた事の恨みは背負おうと思つて自身のした事を伝えようとした。

しかしその言葉は最後まで紡がれる事は無かつた。はやてが人差し指でデイルムツドの口を軽く押さえたのだ。

「大丈夫だよ」

穏やかな口調ではやては微笑む。その姿は罪を告解する者に許しを与える聖職者を思わせた。

「リインフォースに全部教えてもらうたから。デイル君がそんな事しなくなかつたつて」

「リインフォース？」

「この子の名前。祝福の風、リインフォース。うちが付けてあげた名前やねん」

そう言つてはやてが隣に立つ闇の書の管制人格と呼ばれていた少女に視線を向けたのでデイルムツドも管制人格……いや、リインフォースに視線を向けた。

「良い名だな……リインフォースよ。貴様にも尋ねるが俺が憎くないのか？」

守護騎士は闇の書……いや、夜天の魔導書の一部である。

夜天の魔導書の中にいるせいかりインフォースの想いが感じられるのだが、そこに恨みや怒りといった負の感情がない。

「貴方は自らの引き起こした結果を悔い、盾の守護獣の行動に敬意を示しました。彼はあなたのような誇り高い騎士に討たれた事は騎士の本懐だと思っていました」

「だが……」

「大丈夫です。守護騎士は皆無事です。全員が消滅前に魔導書に吸収されていますので」

「本当か？」

視線をはやてに向け直し、問いかけると彼女は力強く頷いた。助ける手段があるならば自身が取るべき行動は決まっている。

「リインフォース。彼女達を救う方法と状況を打破する手を教えてくれ」

デイルムツドは立ち上がり、自身の為すべきことを尋ねた。

——過去は変えられない

時の流れは不可逆で不変の物であり、どれ程悔いても……どれ程願ってもその行動を覆す事はできない。

それは奇跡と共に民を導いた英雄でも神代の魔術師であつても変わらないだろう。万能の奇跡を起こす願望機なら可能かもしれないが、少なくとも今のデイルムツドにその術はない。

過去は覆せなくとも悲劇を回避する手があるならば最善を尽くして成し遂げる。それが今を生きるデイルムツド・オディナが見つけた生き方である。

「貴方も迷いを断ち切りましたか」

「貴殿も無事であつたか」

声に反応して振り返ると、以前と変わらない全身を覆う漆黒の鎧を纏ったランスロットがこちらに歩を進めてくるところだった。以前と違うのはその手の剣が騎士王の聖剣にも劣らない神々しさを放っている所だろう。

「あまりの心地よさに浸かりそうでしたがね。おかげで久方振りに心が安らぎました」

「俺も永きに渡る苦悩が晴れた……感謝するぞ。リインフォースよ」
ランスロットが見た夢はわからないが、纏う気配が穏やかな物になっていたので、少なくとも良い夢だったのは見て取れた。

「……どうしたはやて？ 何を驚いている？」
「ああ。マスターはやて。こうしてゆっくり語らうのは初めてでしたね」

固まっているはやてに気が付いたランスロットが先程のデイルムツドのように膝を付き、彼女に視線を合わせる。

「円卓の騎士が一人、ランスロットと申します。以後お見知りおきを」
「……これはご丁寧にどうも……」

「そう硬くならないください。以前のようにクロでも構いませんよ？」

ランスロットが距離感が掴めなくなつて困惑するはやてに、親しみやすい声をかける。

取り込まれる前はどこか死に場所を探しているような雰囲気があったが、今はそういった様子は感じられなかった。

「さて、積もる話は後程。一先ずはここからの脱出が優先です」
「そうだな。はやて、リインフォース。シグナム達を救うにはどうすればいい？」

「主はやてが夜天の主として命ずれば……ですがその前に……」
「ここから脱出せなあかんねんけど……」

デイルムツドの問いに二人が答えるが歯切れが悪い。
「何か問題があるのですか？」

「それは——」
疑問に思つたランスロットが尋ね、リインフォースが答えようとした時、《ソレ》は唐突に現れた。

——夢ヲ……

ズルりと、光の無いこの漆黒の世界よりもさらに深い闇が這いずり出てきた。

「こいつは?!」

力は大きく失われ存在感も希薄となっていたが、その姿は紛れも無く先程戦い、死力を尽くして撃破したビーストそのものであった。

「この空間では力を発揮できない私達ではあの闇の存在を倒せません」

「せやからリインフォースの奥深くに隠れておってんけど……」

「二人が夢を破ってここにきた事でこの場所が露見してしまったようです」

「……俺達のせいかな?」

「そうとも言えるかもしれませんが」

無表情のままばつさりと言葉で斬られた。案外毒舌なのかもしれない。

「ならば俺の為すべき事は一つだろう」

そう言って破魔の紅薔薇と大いなる激情をその手に出現させる。両手に現れた切り札である宝具の様相は大きく変化していた。

破魔の紅薔薇は以前よりも深く鮮やかに見る者の心を奪う程の美しき輝きを称え、大いなる激情は刀身と柄に優美な意匠が施されている。

聖杯の力では英霊の能力を側面を限定しなければこの世に現界させる事ができなかった。しかし、英霊の座と繋がった事で封じられていた能力を取り戻したのだ。

これこそがデイルムツドが有する宝具の真の姿、
原典・破魔の紅薔薇と苛烈なる日輪の憤怒。

その手に表していない必滅の黄薔薇と小なる激情も、それぞれ
原典・必滅の黄薔薇と儂き月光の悲哀と変化している。

まさに輝く貌の二つ名を持つデイルムツドが有するに相応しい宝具と言って良いだろう。

全盛期の姿と本来の宝具。その二つを得たデイルムツドであれば先程互角であったビーストに遅れを取る事はない。ましてや眼の前

の大幅に力を失って形骸化した相手など脅威となり得るはずは無かった。

——絶望ヲ……

「何っ?!」

そう。一体だけであれば脅威でも警戒する必要も無かったであろう。

——慟哭ヲ……

——苦痛ヲ……

——嫉妬ヲ……

——憎悪ヲ……

ありとあらゆる負の感情を書き出しながら無数の獣が闇より這い出し、漆黒の空間をさらに闇色に染め上げる。その勢いは凄まじく、先程まで虚無であったこの場所を埋め尽くそうとしていた。

「なんだ？ こいつら……先程の者とは違う……？」

「ええ……微かにですが、魂の気配を感じます」

行く手を阻まんとする無数のビースト。だが英霊二騎は一つ一つの存在から強弱はあれど、魂の気配を鋭敏に感知していた。

「……かつて私の起こした悲劇によって死した者達の魂です」

「この者達が……かつて人であったというのですか？」

「はい。闇の書と化した夜天の魔導書に取り込まれ、死した魂はずっとここに囚われ漂っていました。ですが……」

「奴らという器を得た事で再び現界しようとしているのか……」

かつて闇の書事件によって管制人格や守護騎士に蒐集、もしくは殺

害された者達は肉体と引き離されて闇の書に囚われた。彼らはここから抜け出す事が叶わず、輪廻の輪にも戻れなかった彼らはこの暗闇の中を彷徨っていたのだ。

この孤独の闇は肉体という器を失い剥き出しとなった魂には到底耐えうる事が不可能な空間である。

はやては夜天の魔導書の主であり管制人格であるリインフォースがその魂を守っているのでこの場の影響を受けていない。

デイルムツドとランスロットは剥き出しの魂の状態であるが、英霊である彼らの魂は純度、密度、強度、硬度は常人どころか高等な使い魔とすら比べ物にならない強さを持つ。

二人はその記憶を喪失しているが、彼らは悪意に塗れた大聖杯の汚泥の中で侵食されながらも泥と化さなかつた。そんな高位の魂からすれば、この闇の中で自我を保つどころかその保有する力を十全に発揮する事など造作はない。

だがこの場にいる彼ら四人以外は皆、特別な力を持たない魂である。中には少しは耐えて自我を保った者もいたかも知れないが、永い時間はそんな抵抗を嘲笑うように心を奪い去っていた。

そんな多くの魂が無数に生まれ落ちるビーストという器と融合して再び世界へ這い出る力を得た。だがビーストはこの世全ての悪より分かれた存在。

闇に染まった魂が悪意と融合した事で彼らの魂は悪に染まっている。

—— 孤独の闇の中にある絶望

—— 地獄に堕ちた事への慟哭

—— 彼らを蝕むのは永遠の苦痛

—— 自我を持つ者に対する嫉妬

——尽きる事の無い生者への憎悪

そんな負の感情が収束し、ビースト……いや悪意の獣と呼ぶべき者達は彼らを抹殺するという意思となつてデイルムツド達に牙を剥いた。

「くっ！」

前振りなく突如襲い掛かつてきた悪意の獣を原典・破魔の紅薔薇が容易く穿ち、苛烈なる日輪の憤怒が鮮やかな陽光のような残映を残しながら敵を裂く。

「させません！」

後ろからはやてを狙つて迫つてきた悪意の獣を光輝を取り戻した聖剣が切り裂く。聖剣の属性に戻ったランスロットの剣は邪の属性を持つ悪意の獣には絶大な威力を發揮した。

「はやてはこの絶望を払う希望だ！」

「指一本触れさせません！」

迫る闇をなぎ払い、囚われの王を守りながら両雄は前に進む。

——この地獄の回廊を抜けて光の世界に戻る為に

痛みへの記憶

無限に増幅する悪意の獣はすでに現実の世界への侵食を始めていた。

「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAIE!!」

「くそ！キリがない・・・！」

群がる悪意の獣をイスカンドルが遙かなる蹂躞制覇が蹴散らし、クロノの砲撃が風穴を開けた。

ビルの影、路地裏、明かりの消えた公園。ありとあらゆる闇から怒濤の勢いで街を埋め尽くさんと現れる悪意の獣をクロノ達は全力で倒していく。

「王の軍勢を使えぬのが口惜しいのう・・・」

ゴルディアスホイールで敵を消し炭にしながらイスカンドルが顔をしかめてそう呟く。

結界の再構築の時間稼ぎの為に発動した王の軍勢は既に管制人格によつて大多数の英霊が討たれて消失している。

悪意の獣は数と身体能力は凄まじいが個々の守りは脆い。こういう相手にこそ王の軍勢の力を発揮できるのだが、もう一度展開できるだけの魔力は既に無く、神威の車輪で蹂躞していくしかなかった。

現在なのは、フェイトは管制人格の攻撃を抑え、ユーノとアルフはなのは達が全力で戦えるようにと結界の維持に専念している。そして無限に増殖している悪意の獣はイスカンドルとクロノを中心とした武装隊とアースラからの援護によつて食い止めていた。

突如として出現した無数の敵に一度は陣形が瓦解しかけたが、イスカンドルが指揮に参加することでスキル『カリスマ』によつて武装隊の能力を向上させ、副官に回ったクロノの指揮により陣形を建て直すことができた。

「やはりそうか」

だがそれを考慮したとしても武装隊に一切犠牲者が出ていないのはおかしい。その違和感に気が付いたイスカンドルはその理由を考え、すぐに答えに辿り着いた。

「何かわかったのか!？」

言葉遣いに気を回す余裕のないクロノが高威力の拡散弾で悪意の獣を打ち落としながら尋ねる。

「アレの意識は余と貴様と向こうの小娘にしか向けられておらん」

イスカンドルの言葉にクロノは改めて戦場全体に意識を向ける。すると確かに悪意の獣は回りにいる武装隊には一切目をくれずにクロノがいる場所と管制人格と戦うのは達に向けて進行しているのが見てとれた。

「一体何故……」

「さてなあ。だがまずは小娘達に向かう彼奴らを……むっ?!」

クロノがイスカンドルとの会話へと意識が逸れた事によって生まれたほんの僅かな弾幕の隙間を縫って悪意の獣がクロノの元へ飛びかかる。悪意の獣がクロノに喰らいつく直前、咄嗟にイスカンドルが咄嗟にその大きな腕を横に突き出して代わりに受け止める。

「これは……?! まさか余の軀を奪う気が……?!」

「イスカンドル!」

ジワリと何か黒いものが組み付かれた腕から侵食してこようとするのを感じ、悪意の獣の狙いを理解する。

同化を求めてか肉体の支配か。どちらにせよイスカンドルの身を飲み込もうとしていることに変わりはないだろう。悪意の獣はそのままその魂を侵食し、器を得ようと邪気を打ち込まんとする。

「器ヲ……寄越セエエ!!」

組み付いた悪意の獣が二人の目の前で口を開く。発せられたその声には邪悪な欲と切実な欲望。そして深い悲しみが込められていた。

悪意の獣はこの世全ての悪であるアヴェンジャーの力と負に染まった魂が融合して生み出された存在である。聖杯と高い親和性を持つアウ`エンジャーの力は同様に聖杯によって受肉した第四次の英霊と非常に融合しやすい。

つまり掴まれた時点で終わりだと言っても過言ではない。だが――

「なるほどのう……」

「ギツ……ガツ……?!」

悪意の獣はイスカンドルの魂を支配するどころかその魂を汚す事すら叶わなかった。

「その程度で余を喰らおうとするのは無謀であつたな」

征服王イスカンドル。彼は多くの文献でその身には最高神ゼウスの血が受け継がれていると語られており、それにより神の血を引き継ぐ事によつて付与されるスキル『神性』を有する。

所詮はこの世全ての悪の分御霊でしかない悪意の獣が神の加護を打ち破る事は不可能なのだ。

「ぬうんっ！」

それでも諦めずに食らい付く悪意の獣をイスカンドルがその豪腕で引き千切り、さらに迫る悪意の獣の群れを神威の車輪で蹴散らす。

「こりゃあちいと不味いかものお……」

とはいえ『神性』の守りも無制限ではない。一匹や二匹なら脅威ではないが、流石に身動きを取れないほどまで組み付かれればイスカンドルとはいえ無事では済まないだろう。

「貴方は一度下がった方がいい！ 相性が悪すぎる！」

クロノはこれ以上の交戦は危険だと考え、イスカンドルに下がるように伝える。

確かに神性の加護は強力だが佩刀キュプリオトの剣による斬撃も神威の車輪の攻撃も接触の可能性が高い。

白兵戦においてもイスカンドルにはデイルムツドやランスロットのように多数に囲まれても圧倒できる技量はなく、神威の車輪は停止直後の隙が存在する。

「だが余が抜ければお主の負担が重くなるぞ？」

「今貴方を失えば守りを維持できない！」

この混戦の中でも命令系統が維持できているのもイスカンドルという支柱があるからこそである。

大多数対大多数の戦いにおいては特に絶大な効果を発揮するこのスキルの存在がこの拮抗状態を維持させているのだ。

イスカンドルが離脱すればこちらは一気に劣勢立たされるし、取り

込まれて悪意の獣が『カリスマ』の能力を獲得すれば敗北は必須であつた。

「ならば余は下がるう」

イスカンドルの姿が光に包まれ、アースラと転送されていった。英霊一騎を前線から下げるのは痛手だが、クロノは最悪のシナリオを避ける方を最優先とした。

「やってやるさ……い！」

今まで二人で倒してきた悪意の獣が一斉にクロノに向けて迫る。懐にある切り札ではなく、相棒であるデバイスS4Uを握り締めながら眼下に広がる化け物を睨みつけた。

——その瞳には悲劇の因果を終わらせるといふ強い信念が込められていた

クロノが奮戦する傍ら、なのはとフェイトもまた激しい戦いを繰り広げていた。

「シュートッ！」

「ファイヤーッ！」

なのはのアクセルシューターとフェイトのフォトンランサーが管制人格を挟むように放たれる。

「ハアッ！」

その攻撃を管制人格が持つ必滅の黄薔薇と小なる激情が弾き落とす。管制人格が振るうデルムツドが所持しているはずのその剣と槍は全体が黒く染まり、紅い紋様が浮び上がっている。

取り込んだデルムツドの必滅の黄薔薇と小なる激情を同じく取り込んだランスロットの騎士は徒手にて死せずによって制御下に置いているのだ。

「強い……い！」

「全然当たらない……い！」

元々有する強力な魔力による守りと魔法攻撃に加え、英霊二騎の武器と力を使い、管制人格は二人の猛攻を退けていく。

「だったらっ……！」

闇の書の暴走のリミットや相手の魔力総量を考えると、持久戦に持ち込めばこちらが負けるのは確実だとフェイトは判断した。

「私が前が出る。なのはは援護をお願いっ！」

「うんっ！ 任せてっ！」

このまま撃ち合っていては埒があかないと思ったフェイトは前衛後衛に分かれての攻撃に切り替える。

不治癒の呪いを与える必滅の黄薔薇は脅威ではあるが単体では簡単にバリアジャケットを突破する事はできず、小なる激情のカウンター攻撃も支配はしていても担い手ではない管制人格には真名解放できないのでそれほどハイリスクな手ではないと考えたのだ。

（理由はわからないけど……破魔の紅薔薇を使ってこない今がチャンス……！）

実は最初管制人格は二槍を使った攻撃をしてきていた。だが悪意の獣が出現した瞬間、その手にあつた破魔の紅薔薇が消失したのだ。それ以降相手はずっと必滅の黄薔薇と小なる激情しか使ってきていなかった。

管制人格がこの二つの宝具を選んでるのは打算や意味があつてではない。ただ単純に使わないのではなく使えないだけなのだ。

伝承によつて派生が存在する事があるが、大原則として宝具は1つしか存在しない。

管制人格の使用できる宝具は二種類。アヴェンジャーを介して生み出した劣化宝具デッドコレイか飲み込んだ英霊の宝具を取り出して使うかの二択となる。

今管制人格が使っているのは後者であり、デイルムツドとランスロットの宝具を代わりに使っている状態である。

悪意の獣が出る前。即ち二人が目覚める前まではその力を自在に振るうことができた。だが、内側の世界で目覚めた二人が宝具を展開した時点で状況は大きく変化する。

宝具の所有権は担い手にあり、担い手が望めばその手に優先して現れる。そして前述の通り宝具は世界に一つしか存在しない。デイルムツドの手に紅槍が現れれば管制人格の手から破魔の紅薔薇が消えるのは当然の事であった。

デイルムツドが主力武器である紅槍を手にするのは当然の選択であったのかも知れない。しかし、その行動が結果としてフェイト達を救う結果に繋がったのだ。

「はあっー」

「くっ……いー」

アールシェピースフォームによる雷撃を纏った強力な刺突を管制人格に放つ。それを管制人格は辛うじて小なる激情で防ぐ。

「……いーもしかして……いー」

その動きを見たフェイトは一見隙のない無敵の存在に見えた管制人格に二つの大きな弱点が存在する事に気が付く。

まず一つは英霊の戦闘の経験や技の継承はできていない点である。それらを引き継いでいたならば今の攻撃をギリギリのタイミングで防ぐ訳がない。デイルムツドの弟子としてその技術を学んだフェイトにはそれがわかったのだ。今のがデイルムツドならばこの程度の攻撃を簡単に防いで返しの一撃を与えてくれるはずだと。

二つ目は管制人格の器では英霊の能力を引き出すには身体能力に限界がある点である。これは管制人格が攻撃に反応してから防御に移るまでの反応が遅い事から推測できる。

(いけるっー)

勿論管制人格の反応速度も常人を上回るものではあるが、デイルムツドよりは確実に遅い。膠着を打破する可能性を見出だしたフェイトがその身に魔力を纏わせて再び突撃する。魔力変換資質『雷気』という特殊な性質の魔力の効果によって魔力を電撃に変えて纏うその姿は雷神というイメージを周囲に与えた。

管制人格では反応できない必殺の威力を持つ雷光が敵を穿とうと迫るが、ただ一つだけフェイトには過ちがあった。相手が英霊二騎の宝具だけではなく、スキルまで手にしている可能性を彼女は失念して

しまっていたのだ。

デイルムツドの持つ『心眼』スキルは絶望的な状況下でこそ真価を発揮する。窮地において活路を見出だすこのスキルを管制人格も手にしていたのだ。

雷光の一撃を回避できないと判断した管制人格はコンマ一秒という刹那の時間で思考し、この状況を打ち破る手段を選択する。

そして自らの能力では回避できないと分析した彼女は『フェイトが攻撃を止めるか外す』ように誘導すべきだと考え、それには心を揺さぶるのが一番有効であると結論を出した。

その結果、フェイトに心の弱さがある事を知る管制人格が選んだのはランスロットの宝具を使う事であった。

「フェイト」

「あ・・・」

その声を聞いた瞬間、雷光が敵を穿つ直前にピタリと静止する。止めてはならないと分かっているのにも関わらず、それでもフェイトは必殺の一撃を止めてしまった。

「流石私の娘。止めてくれると信じていたわ」

何故なら撃つべき敵は愛する母の姿をしていたのだから。

——ランスロットの宝具、己が栄光の為でなく

伝承において他人の代わりに漆黒の鎧を纏って馬上試合に出た際、ガウエインやアルトリアさえ騙したという逸話によって生まれたこの宝具は、気配、雰囲気、声、性格。全てをそのままコピーする完全偽装能力であり、その効果は変化魔法や幻覚を大きく上回る。

バーサーカーの状態でもアルトリアを騙したこの宝具は完全な状態で発動した場合、理屈や事実は関係なく見た相手に変化した人物本人であると認識させる事ができる。

その為母は死んだと理解している筈のフェイトも目の前にいるのが本物の母だと思い込まされてしまったのだ。

「ありがとうフェイト」

「……っ?! がっ……あ……?!」

硬直したフェイトにプレシア・テスタロッサへと化けた管制人格は優しい声と共に腹部に魔力弾を叩きつける。膨大な魔力の一撃を至近距離で受けたフェイトのバリアジャケットが壊され、腹部の守りが失われる。そしてその無防備な場所へ必滅の黄薔薇の切っ先が向けられた。

「愛しいフェイト。母さんの為に死んでね」

「フェイトちゃんっ!」

そしてなのはの悲痛な叫びが響く中、黄槍の一撃が無情にも放たれた。

目覚めし聖剣

デイルムツドとランスロットが象徴である宝具を振るい道を開く。その二人に守られながらリインフォースが進むべき道を示しながら、その腕にこの世界で唯一、絶望を希望に変える可能性を持つはやてを大切に抱えて駆ける。

「くっ……！ キリがないな！」

「随分倒したつもりですが数が減りませんね……っ！」

そう言いながらデイルムツドが悪意の獣の首を撥ね飛ばし、ランスロットが剣による一閃で正面の四体を斬り捨てながら応じる。

時の概念が無いこの空間ではどれだけ時間が経過したかは認識できないうが、既に両者合わせて一方は軽く打ち倒しているのは確かはずである。だが悪意の獣は一向に減る気配を見せない。

「倒した数だけ蘇っているとしか思えませんね……っ！」

「それだけなら殺し続けるだけの話なのだが……なっ！」

それだけならいい。この程度の相手ならば慢心でもしなければいくら数がいとも今の二人が負ける可能性は存在しない。

「せめてこちらを狙ってくればやりやすいのですが……」

「俺達は眼中に無いのか！」

しかし敵はデイルムツドとランスロットを無視して二人が守っているはやてとリインフォースを狙い、自らを屠っていく英霊には一切の興味を示さない。

確実にリインフォースが指す出口へと歩を進めてはいるが、そのせいで中々攻めに転じれず、防戦を強いられていた。

より強い器を求める悪意の獣にとって魂だけの状態であるデイルムツドとランスロットに興味はない。敵が望むのは英霊二騎の肉体を捕らえたままのリインフォースと夜天の主であるはやてなのだ。

——リインフォースから二人の肉体を奪い取り、永い時の中で積もった憎悪をはやてにぶつける

ただそれだけしか考えていない悪意の獣には英霊など見えてさえいなかった。

——苦シイ

——助ケテ

——憎イ

そして自我も曖昧になり、闇の書の主へ憎しみを向けるという意味だけが辛うじて残っている悪意の獣は、はやてが自らを殺したと誤認して様々な負の感情を今の主であるはやてに向ける。

「ううっ……」

「耳を傾けるな！」

自身に向けられるその膨大な悪意に押し潰されそうになったはやてにデイルムツドが叫ぶ。

「コレはお前の罪ではない！　今はここを出て彼らを救う事だけを考えろ！」

確かにここにいる魂は全てはやてが主となる前の犠牲者だが、彼らの憎念をはやてが受け止めなければならぬ理由はない。

「マスターはやてが背負うべき痛みは貴方達……いえ、私達家族が巻き込んでしまった『被害者』の物だけで良いのです！」

「クロ……」

ランスロットもはやてを鼓舞するように声を掛ける。彼女は仇ではないと諭せば良いのだが、闇の書への憎悪以外残っていない彼らにはこちらの言葉は届かないだろう。

終わりが見えない状況で無数の敵からはやてとリインフォースを守りながら見えない出口に向けて歩を進める。常人なら耐えられない絶望的な状況下だが、この程度の逆境で心が折れる英霊ではない。

「デイル君、クロ。大丈夫？」

「くっ……問題ありません……！」

「心配しなくていい。必ずここから出してやる……!」

だが強靱な意志を持つ英霊であっても、一瞬たりとも気を抜く事が許されないという状態を強いられ続ければ疲労の色は隠せない。

「それにこの程度の苦境は何度も超えた……!」

「武器無しで敵に囲まれてる時よりは余裕があります……!」

それでも生前幾たびの危機を乗り越えた英霊としての矜持とはやてを守るという意思によって迫りくる敵を次々に打ち倒していく。

正直この状況よりも生前の修羅場の方が危険で恐ろしかったと思っている二人ではあるが、それを口にしては色々と台無しになるのでそれは言わない。

とはいえそれも限界がある。十の敵を一度に葬っても開いた場所にすぐに次の敵がなだれ込んでくるのだ。全方位から来る敵から二人を守りながら

「やむを得ないか……はやて、済まないがコイツを少し持っていてくれ」

「え、ちよつ……つてか重……つ?! デイル君こんな軽々振り回してたん?!」

このままではいずれこちらが押し負けると判断したデイルムツドは原典・破魔の紅薔薇をはやてに手渡し、苛烈なる日輪の憤怒を両手で構える。

「受けよ我が一閃。苛烈なる日輪の憤怒ッ!」

真名解放と共にデイルムツドが剣を振るうと静かに刀身が煌めいた。次の瞬間、正面を覆い尽くしていた無数の悪意の獣の胴体と身体が切断され、消滅する。

「凄い……」

一太刀で全てを倒すという苛烈なる日輪の憤怒。その圧倒的な一撃が齎した威力にはやては感嘆の声を上げる。そして視線の先、悪意の獣が消え去った先には微かな光が存在していた。

「あの場所から脱出できます!」

「……っ! 全員走れ……っ!」

リインフォースの言葉を聞いたデイルムツドがはやてから原典・破

魔の紅薔薇を再び受け取ると四人が出口に向けて駆けだした。

「ぐっ……！」

「デイル君?!」

だが後少しで光に辿り着くというところで突如デイルムツドが立ち止まって膝を付いてしまう。

「先に……行け……っ！」

デイルムツドがそう言っても彼を見捨てるという選択肢を選べる三人ではない。そして悪意の獣がその隙を逃すはずはなく、再び包囲されてしまった。

苛烈なる日輪の憤怒の真名解放は強大だが、魔力総量が高くないデイルムツドにはかなりの負担となる。最大威力で撃った事で貯蔵魔力を使い切ってしまったのだ。

このリスクを理解していたので使用を躊躇っていたのだが、状況を切り抜ける為に使わざるを得なくなってしまった。

「済まない……！」

苛烈なる日輪の憤怒を消して原典・破魔の紅薔薇を構える。戦えない訳ではないが、今のデイルムツドには剣と槍を自在に操るほどの力は残されていない。

「いえ。あの状況では仕方ありませんでした……後は私の番です」

ランスロットが剣を腰だめに構えると、彼の持つ聖剣が強烈な存在感を放出し始める。

「なんだ……この気配は……！」

約束された勝利の剣と同等、いやそれを上回る力を放っているという事実^{エクスカリバー}にデイルムツドは驚愕させられた。

——湖の乙女が何故自らが育てたランスロットに与えし剣に兄弟剣としながらも勝利の名を与えなかったのか^{エクスカリバー}

それはアロンダイトが二つの剣に劣っていたからではない。事実はその真逆。アロンダイトこそ湖の乙女が産み出した最強の聖剣であつたからである

勝利の剣の名に相応しく無いのではなく、その力を越えた存在である故にその名を与えられなかったのだ。

最強の聖剣の担い手であったランスロットであったが、しかし彼は王を輝かせる為はその力を隠していた。

その後聖剣から魔剣に堕ちた際に弱体化し、その後はランスロットの死と共にその力の大半が失われた為、その力と真実は星の歴史から消え去ってしまった。

こうして後世の逸話に登場するアロンダイトは刃こぼれしないだけの剣と化したのである。

だが今ランスロットの手にあるのは真なる力を取り戻した究極にして唯一の聖剣。

「受けよ我が究極の一撃、光輝なる——」

ランスロットの声に応じ、太陽と月の魔力が交わった幻想的な輝きが聖剣へと収束していった。

——湖はあらゆる光を受け入れる

それが荘厳なる星の輝きでも灼熱の太陽の輝きであっても変わらない。そして光を受けた湖はその水面を美しく煌めかせるだろう。

「——湖光の剣！」

そうして究極の一撃が放たれた。

——約束された勝利の剣と 転輪する勝利の剣

二振りの聖剣が司る太陽と星の力。その二つを統べる光輝なる湖光の剣の一撃は敵を紅蓮の焰で焼き尽くし、極光が闇の世界に光を与えた。

後一度だけ起こった奇跡

——痛みは訪れなかった

代わりに訪れるのは金属がぶつかる鈍い音。自身の鼓膜を震わせる物の正体を知ろうとフェイトは閉じていた眼を開く。

「……っ?!」

そうして視界に入ったのは必滅の黄薔薇の一撃を漆黒の投擲刀型のデバイスで受け止める少女の背中。突然現れた自分よりも小さな少女の存在にフェイトは驚いて息を飲んだ。

(いつの間に……)

だがそれ以上に驚いたのは、管制人格の攻撃を両手とはいえ少女がその細腕で抑えているという異常さ。その姿を視界に納めるまで存在を全く知覚できなかった。視界に捉えた今でも、目の前にいる少女の気配を感じる事ができない。

まるでスクリーンに投影された映像のように目の前の少女は曖昧で不確かな存在であった。

「今です」

誰かと問いかけようとしたフェイトより早く少女が誰もいない空間に声を掛けた瞬間、少女の身体がブレたように見えた。

「なっ?!」

見間違いかと眼を擦り、再度少女の姿を確認したフェイトは更に驚かされる事となる。フェイト達を囲むように三十を超える不気味な人物が空中に佇んでいたのだ。

体躯や性別は様々だが、骸骨の面と黒衣という共通点があり、全員がいつの間にかフェイト達を囲うように現れていた漆黒の鎖を足場にしている。その姿を見てフェイトは少女の正体を理解した。

「アサシン……っ?!」

アースラを襲撃し、デイルムツドとフェイト達が分断される原因を作り、守護騎士発見を妨害していた暗殺者の英霊。

襲撃者の中に小柄な少女がいた事は伝えられていたが、映像データは破壊されて確認不可能であった為にフェイトもなのはもその姿を

知らなかった。少女以外のアサシンの外見的特徴として聞かされていた骸骨の面と黒衣を見てようやく気が付いたのだ。

「捕縛開始」

アサシンの少女がそう告げると全員が一斉に新たな漆黒の鎖を放つ。放たれた鎖は管制人格に幾重にも絡み付くとプレシアの姿が霞み、管制人格が再び姿を現す。

「……主の眠りを阻む者は排除する」

乱入者を排除すべき敵だと判断した管制人格が、邪魔な鎖を破壊しようとして魔力を込める。莫大な魔力と英霊の力を持つ管制人格には、この程度の脆弱な鎖など障害にはなりえない。

——そのはずであった

「……?! 破壊……できない……!」

だが、その簡単に壊せそうなその鎖に捕らえられた管制人格は身動きすること破壊する事も出来なかった。

「無駄。このAMFチェーンの前では貴方の莫大な魔力も無意味になります」

困惑する管制人格へ冷たい声でアサシンの少女がそう告げた。

「AMFチェーン……?」

「詳しくは伝えられてませんが魔力を封じる鎖です。小型化し過ぎたせいで絡めとった相手にしか効果はないそうですが」

聞き覚えのない言葉にフェイトは疑問を抱き、思わず呟くとアサシンの少女は丁寧に答えを返してきた。こちらの言葉は無視されると思っていたので、面食らってしまう。

「お気付きのようですが改めまして。アサシンのサーヴァント、ハサン・サツバーハと申します。我が主の命によりお嬢様をお守りいたします」

丁寧な挨拶と共にハサンを名乗った少女がペコリと頭を下げる。

「お……お嬢様……」

呼び慣れない呼び名とハサンの様子に戸惑う。目の前のサーヴァントは敵意どころかフェイトに対して敬意を示しているのだが、その理由が全くわからない。

「主が貴女に強く関心を持ち、丁重に迎えたいと考えているからです」
「あなたの主は誰なの？どうして私を……」

「今はまだ。ですがいずれお会いする日が訪れます」

少女のハサンはそう言っただけ口を閉ざす。少なくとも今は自身の主について語るつもりはないようであった。

「フェイトちゃん！」

突然の事態に固まってしまっていたのはがようやく我に返りフェイトの元に駆け寄る。

「大丈夫？」

「うん。この子が助けてくれたから」

「あの、フェイトちゃんを助けてくれてありがとう」

「礼は不要です。我等は意思なき刃。お嬢様をお救いしたのは主の命に従ったまで」

人でも英霊でもなく、心無き物であると。恐ろしいほど無表情でそう返すハサンの少女にフェイトは思わず言葉を失った。

「そんな悲しい事言わないで」

しかし優^{高町}しい少女がその言葉を受け入れるはずはなく、その言葉を否定する。

「それが我等の生き様です。同情など必要ありません」

だがハサンの少女は表情を変えることなく、なのはの言葉を拒絶するかのよう淡々とそう告げる。

「そんな同情なんかじゃ——」

「その問答は後でよかろう」

それでも諦めず話を続けようとしたなのはの言葉を背後からの力強い声が遮る。

なのはとフェイトが振り替えるにやってきたイスカランダルがハサンの少女を威圧感溢れる眼光で見据えている。その隣に立つクロノの表情も険しい。

「それよりも先に確認せねばならぬ事があるであろう」

「ああ、そうだな……。アサシン、ハサン・ザッバーハ。君達は僕らの敵か？」

イスカンドルの言葉を引き継ぐようにクロノがデバイスを突きつけ問い掛ける。

それは今この危機的状況下の中で何よりも明確にしなければならぬ事であった。

「フェイトを助けてくれた事は感謝する。だがそれだけで君達を信用する事ができない」

確かにフェイトの命を救った。

しかしそれでこれまでにハサン・ザッバーハによって管理局が受けた被害、その行動を指示していた背後の人物が不明であるという事。その二点だけでもアサシンを信用できない要素としては充分すぎる要因である。

いくら共闘の意思を示したからと言ってそんな相手をあつさり信用するなど余程の馬鹿か思考を放棄した愚者以外は到底不可能だろう。

だがアサシンを無視して戦うというのも絶対に避けなければならない。

全サーヴァント中最弱ではあってもアサシンはマスター殺しに特化したクラス。

いくら優秀な魔導師であつても人間であるクロノ達には充分すぎる驚異となる。

暗殺者の英霊に背後を晒し、常に奇襲を受ける可能性の中で闇の書を相手にする訳にはいかない。

最悪敵対する事になるならば今この場において管制プログラムより先に撃破しなければならぬ程の危険要素となりえる。

「当然の反応ですね」

クロノとイスカンドルの殺意に全てのハサンは一切の動揺を見せず、その中心に立つ少女はそう答えた。

「我等は『アレ』を破壊する必要があります。しかし我等だけではそれは不可能です。故にお嬢様方に協力したいのです」

「……！」

信頼する必要はない。あくまで利害の一致による共闘を。そう告

げる少女の眼にイスカンドルを除くこの場にいる者達は恐怖を感じた。

悪意も善意もない虚無。暗く冷たいその眼を見ただけで、自身の身体が虚数空間に落ちて行つたかのような錯覚を抱かされる。

「決断を。鎖もまもなく限界ゆえ」

本能が感じる恐怖と時間がないという事実がクロノ達から思考する余裕を奪い、今鎖に囚われているのは自身ではないかと錯覚させる。

——人を縛るものは言葉や暴力その物ではなく、恐怖という感情だ

恐怖は歩みを止めさせ、意思を揺らがせる。それを深く理解している暗殺者はそれを利用し、この場にいる者達を支配しようとしていた。

サーヴァントという未知なる存在の中でも異彩を放つハサン・サツバーハ。

人々に羨望と尊敬の念を向けられる英雄とは真逆の血塗られし暗殺者は眼前に存在するだけで恐怖を与える。

それは無意識であれ意識的であれ周囲にある者達は恐怖を抱く。

それは脳を蝕む毒のようであり、または思考を縛る見えざる鎖となつてその身に絡み付く。

「よかろう。貴様らの進言に乗ってやろうではないか」

その様子を黙って見ていたイスカンドルが自らの乗る神威の車輪を進めてクロノとハサンの間へ入り、宣言した。

その瞬間、クロノ達を恐怖の闇に引きずり込んでいた見えざる鎖は唐突に碎かれ、脳を蝕む毒は消え去り思考がクリアになる。

反英雄が恐怖を与える存在であるならば、万夫不当の勇壮なる英雄は恐怖を打ち払う者。

そしてクロノ達の眼前に立ち、ハサンと対峙せし英雄はマケドニアの征服王。

幾千の英雄を続べ、彼らを鼓舞して率いた王。その背に立つただけで恐怖など忘却し、本来以上の力が沸き上がっていくような感覚が生ま

れる。

リメイクします。

ZEROコラボ復刻で剣デイルが実装された記念にこのSSをFGOの設定を使って書き直したいと思います。

作者は公式設定と違うキャラを書くのがちよつと好きじゃないところがあり、6章でセイバーランスロットが出た時点でこのSSのランスロットと設定が違うからこのまま書くのはなあと思うようになり、書くのを完全に止めるつもりでいました。

でも剣デイルめっちゃかっこよかったのでこのSS書きたいという衝動が復活。

FGOでの設定を踏襲して今までの部分はある程度そのままにしつつ、その後の展開を変えた物を書こうと決めました。

こつちをリメイクするか新しく書くか悩みましたが、せつかくなので一新つてことで新しく

投稿したいと思います。

そういう訳で今度「忠義の騎士の新たな人生—LAP 2—」を投稿したいなと思います。

たぶんお気に入りにしてくださってるからは単純に解除忘れているだけだと思いますが、もしも続きを楽しみにしておられる方がおりましたら、是非リメイクの方を読んでいただけたらな。と思います。

文字数足りないので現時点でリメイクした一話を貼り付けます。

現在の使用だと1000文字以下ダメっぽいので元のプロローグだと文字数足りないんですね。実際に一話書く時にはもうちよつと文字数増やさないといけないっぽいのもうちよつと時間かかりそうです。

——二度目の生の最期は絶望と共に終わった

今度こそ忠義を貫きたいというたった一つ懐いた祈り。そんなさ
さやかな願いは無残にも踏みにじられた。

一体何がいけなかったのだろうか。

我が身に科した誓いなのか。理解してくれなかった主君なのか。
我が身に宿るこの消えない呪いのせいなのか。それとも己自身だっ
たのだろうか。

——聖杯なんて要らなかった

生前に後悔はあれど万能の願望機に願う事などない。召喚に応じ
たのはかつて果たせなかった主への忠節と勝利を捧げたいという想
いからであった。

しかしその結末はあの時と同じように主の目の前でその手によつ
て最期を迎えるというもの。そのあまりにも皮肉な結末にもはや晒
う事しかできない。

——もし三度の生があつたなら、今度こそは……

聖杯の泥の中で己の結末をあざ笑っていたが、やがて思考は鈍り、
心身共に悪意の海へと沈んでいく。

——揺れる——揺れる

聖杯という名の黒く穢れた願望機は騎士の心を呪いの泥の中に沈
めていく。

後悔、憎悪、悲壮……騎士の心に渦巻く負の想いは泥に抗わず流
されていく。すでに自我も希薄であり、ただの聖杯のリソースとして
消費される事を待つだけの存在へとなり果てている。

だが永遠に続くと思われた時間は唐突に終わりを告げる。煌く黄金の輝きと叫びが闇を切り裂き、騎士の心を捕らえていた穢れた泥の檻から解き放つたのだ。

穢れた泥は虚ろな騎士に器を与え、黄金の強い輝きがその穢れを消し去る。

英霊の力を溜めていた聖杯から放たれた膨大な魔力は世界の壁に穴を開け、その身体を次元の狭間を越えた新しい世界に飛ばす。

「俺は……」

偶然起きた第二魔法に近しい奇跡によって三度目の生を与えられた忠義の騎士、デイルムツド・オディナは優しい木漏れ日の中、目覚めを迎えたのであった。